

西 新 町 遺 跡 VIII

－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第20次調査報告書－

福岡県文化財調査報告書 第 218 集

2008

福岡県教育委員会

西 新 町 遺 跡 VIII

－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第20次調査報告書－

福岡県文化財調査報告書 第 218 集



西新町遺跡から海側を望む



古墳時代の竪穴住居跡群



28号竪穴住居跡カマド煙道

序

本書は福岡県立修猷館高等学校校舎改築事業に伴い、福岡県教育委員会が平成18年度に発掘調査を実施した西新町遺跡の調査記録です。

玄界灘に面した福岡市は、古来から中国大陆や朝鮮半島との対外交流の窓口であり、現在でも国内外に向けて文化や情報を発信する国際都市として発展し続けています。その福岡市の古砂丘上に位置する西新町遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての東アジアとの交流を示す遺跡として全国的にも注目を浴びている遺跡です。

福岡県教育委員会では、修猷館高校の改築事業に係る事前の発掘調査を平成10年度から進めています。その結果、全国的にも珍しい形態の竈をもった竪穴式住居跡や朝鮮半島系の土器が多数出土するなど、特に朝鮮半島の人々との深い繋がりを示す往事の姿が次第に明らかになってきています。

今回報告する第20次調査でも、朝鮮半島や近畿・山陰地域など当時の活発な交流を物語る遺構や遺跡が数多く発見され、また、古墳時代の西新町遺跡の範囲を示す状況も確認されました。

本書が、福岡県と東アジアや国内他地域との交流史の研究資料、あるいは学校教育及び生涯学習の資料として広く活用され、文化財愛護思想の普及の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び整理作業、報告書作成に当たって御協力いただきました多くの方々に対し深謝いたします。

平成20年 3 月31日

福岡県教育委員会
教育長 森山 良一

例 言

1. 本書は平成18年度に福岡県教育委員会が県立修猷館高校改築事業に先立って発掘調査を実施した、福岡市早良区6丁目1-10に所在する西新町遺跡第20次調査の報告書である。なお、福岡県教育委員会がこれまでに刊行した西新町遺跡の発掘調査報告書は下記のとおりである。
柳田康雄・赤司善彦1985『西新町遺跡』福岡県文化財調査報告書第72集
重藤輝行・森井啓次・大庭孝夫2000『西新町遺跡』Ⅱ 福岡県文化財調査報告書第154集
重藤輝行・森井啓次・大庭孝夫・唐木田芳文2001『西新町遺跡』Ⅲ 福岡県文化財調査報告書第157集
吉田東明・宮地聡一郎・三辻利一2002『西新町遺跡』Ⅳ 福岡県文化財調査報告書第168集
吉田東明・宮地聡一郎・西中川駿・小山田和央・三辻利一2003『西新町遺跡』Ⅴ 福岡県文化財調査報告書第178集
岡寺未幾・坂元雄紀・岡寺良・岸本圭2005『西新町遺跡』Ⅵ 福岡県文化財調査報告書第200集
重藤輝行・坂本真一2006『西新町遺跡』Ⅶ 福岡県文化財調査報告書第208集
2. 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、空中写真は有限会社空中写真企画に委託した。遺物写真は北岡伸一が撮影した。
3. 掲載した遺構図は調査担当者のほかに、中村理・岡本侑也・高橋幸作・滝尾真理子・田北健三・早川和賀子・本田史佳・本村実季子が作成した。遺物は、土器実測図を重藤輝行・下原幸裕・吉村の他、平田春美・田中典子・棚町陽子・久富美智子・坂田順子・橋之口雅子・堀江圭子・若松三枝子・中村洋子・栗林明美・寺岡和子・荒川妙が、その他は吉村が作成した。
4. 製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓・安永啓子・山田智子・辻清子がこれを補助した。
5. 鉄器の保存処理は九州歴史資料館の加藤和歳が行った。
6. 使用した方位は座標北である。
7. 本書の執筆は第4章を齋藤努が、その他の執筆と編集は吉村が行った。
8. 出土遺物は九州歴史資料館及び福岡県教育庁文化財保護課で管理している。

目 次

巻頭図版

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査・整理報告書作成の組織	5
第2章 西新町遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 既往の調査	10
第3章 調査の内容	11
第1節 調査の概要	11
第2節 古墳時代の遺構と出土遺物	13
(1) 竪穴住居跡と出土土器	13
(2) 土坑と出土土器	112
(3) その他の遺構・層位等出土土器	120
(4) 鉄器	122
(5) 石器・石製品	123
(6) 土製品	125
第3節 近世以降の遺構と出土遺物	125
(1) 井戸	125
(2) 土坑	125
(3) 陶器・磁器	128
(4) 窯道具	132
(5) 青銅製品・土製品・瓦製品	132
第4章 西新町遺跡出土鉛製品の鉛同位体比測定結果	134
第5章 まとめ	136
第6章 おわりに	145

図版目次

- 巻頭図版 1 西新町遺跡より海側を望む
- 巻頭図版 2 上 古墳時代の竪穴住居跡群 下 28号竪穴住居跡カマド煙道
- 図版 1 1. 西区下層遺構全景（南東から・空中写真） 2. 西区上層遺構南半（北東から）
3. 西区上層遺構北半（東から）
- 図版 2 1. 西区上層遺構全景（南から） 2. 東区上層遺構全景（南西から）
3. 東区下層遺構全景（南西から）
- 図版 3 1. 1～3号竪穴住居跡（西から） 2. 1号竪穴住居跡（南西から）
3. 4・5・7号竪穴住居跡（南西から）
- 図版 4 1. 4号竪穴住居跡カマド全景（南から） 2. 4号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 4号竪穴住居跡カマド煙道（南西から）
- 図版 5 1. 4号竪穴住居跡カマド煙道（東から） 2. 5号竪穴住居跡カマド（東から）
3. 11・12号竪穴住居跡（南西から）
- 図版 6 1. 13号竪穴住居跡（南から） 2. 13号竪穴住居跡集石（南東から）
3. 14号竪穴住居跡カマド下層（西から）
- 図版 7 1. 15～18号竪穴住居跡（南西から） 2. 19号竪穴住居跡カマド（南西から）
3. 19号竪穴住居跡カマド（南西から・断ち割り後）
- 図版 8 1. 21・28・46・48号竪穴住居跡（北西から） 2. 23号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 23号竪穴住居跡カマド煙道断ち割り状況（北東から）
- 図版 9 1. 23～25号竪穴住居跡（南東から） 2. 27号竪穴住居跡（南東から）
3. 27号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）
- 図版10 1. 28号竪穴住居跡カマド（南から） 2. 28号竪穴住居跡カマド（南から・完掘後）
3. 28号竪穴住居跡カマド煙道（南から）
- 図版11 1. 16・29・30号竪穴住居跡（南から） 2. 29号竪穴住居跡遺物出土状況（北西から）
3. 30号竪穴住居跡カマド（南西から）
- 図版12 1. 32・33号竪穴住居跡（南から） 2. 32号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 32号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版13 1. 33号竪穴住居跡カマド（東から） 2. 34号竪穴住居跡（東から）
3. 35号竪穴住居跡カマド（北東から）
- 図版14 1. 東区の住居跡群（東から） 2. 36・37号竪穴住居跡（南東から）
3. 39号竪穴住居跡（南から）
- 図版15 1. 41・42号竪穴住居跡（南東から） 2. 41号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 42号竪穴住居跡（南から）
- 図版16 1. 東区の住居跡群 2（南西から） 2. 44・46・48号竪穴住居跡（西から）
3. 44号竪穴住居跡集石（北から）
- 図版17 1. 45号竪穴住居跡（南から） 2. 45号竪穴住居跡カマド（南から）

3. 45号竪穴住居跡カマド煙道断面（東から）
- 図版18 1. 47号竪穴住居跡（南から） 2. 47号竪穴住居跡土坑1遺物出土状況（南から）
3. 53号土坑（東から）
- 図版19 1. 4号井戸（東から） 2. 35号土坑（北西から）
3. 35号土坑遺物出土状況（西から）
- 図版20 1～3号竪穴住居跡出土土器、4号竪穴住居跡出土土器1
- 図版21 4号竪穴住居跡出土土器2、5～8・11～13号竪穴住居跡出土土器
- 図版22 14～17・21・22・24号竪穴住居跡出土土器、27号竪穴住居跡出土土器1
- 図版23 27号竪穴住居跡出土土器2、28～30号竪穴住居跡出土土器
- 図版24 31～34号竪穴住居跡出土土器、35号竪穴住居跡出土土器1
- 図版25 35号竪穴住居跡出土土器2、39・41・42・44～46号竪穴住居跡出土土器、47号竪穴
住居跡出土土器1
- 図版26 47号竪穴住居跡出土土器2、53～56号土坑出土土器
- 図版27 57・113号土坑出土土器、その他の遺構・層位等出土土器
- 図版28 竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器
- 図版29 竪穴住居跡・その他の遺構出土朝鮮半島系土器
- 図版30 古墳時代の鉄器・石器・土製品
- 図版31 近世以降の土師器・陶器
- 図版32 近世以降の陶器・陶磁器
- 図版33 近世以降の窯道具・青銅製品・土製品・瓦製品等

挿図目次

第1図	西新町遺跡の位置……………	2
第2図	西新町遺跡と周辺の遺跡（1/50,000）……………	8
第3図	発掘調査区の位置と周辺調査地（1/4,000）……………	10
第4図	調査区周辺地形図（1/1,500）……………	11
第5図	西新町遺跡遺構配置図（1/400）……………	12
第6図	1～3号竪穴住居跡実測図（1/60）……………	14
第7図	1号竪穴住居跡出土土器実測図1（1/3）……………	15
第8図	1号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/3）……………	17
第9図	1号竪穴住居跡出土土器実測図3（1/3）……………	18
第10図	2・3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……………	19
第11図	4号竪穴住居跡実測図（1/60）……………	20
第12図	4号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……………	20
第13図	4号竪穴住居跡出土土器実測図1（1/3）……………	23
第14図	4号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/3）……………	24

第15図	4号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)	25
第16図	4号竪穴住居跡出土土器実測図4 (1/3)	26
第17図	5号竪穴住居跡実測図 (1/60)	26
第18図	5号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	27
第19図	5号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)	29
第20図	5号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)	30
第21図	6～8・10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	31
第22図	6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	32
第23図	7号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)	33
第24図	7号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)	34
第25図	8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	35
第26図	9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	36
第27図	9号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	36
第28図	9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	36
第29図	11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	37
第30図	11号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	37
第31図	11号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)	38
第32図	11号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)	39
第33図	12～14号竪穴住居跡実測図 (1/60)	40
第34図	12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	41
第35図	13号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)	43
第36図	13号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)	44
第37図	14号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	44
第38図	15号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第39図	15号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	45
第40図	15号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)	46
第41図	15号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)	47
第42図	16～18号竪穴住居跡実測図 (1/60)	49
第43図	16号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	51
第44図	17・18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	52
第45図	19号竪穴住居跡実測図 (1/60)	53
第46図	19号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	53
第47図	19号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	54
第48図	21号竪穴住居跡実測図 (1/60)	55
第49図	21号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	55
第50図	22・23号竪穴住居跡実測図 (1/60)	56
第51図	21・22号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	57

第52図	23号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	58
第53図	23号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	59
第54図	24～27号竪穴住居跡実測図 (1/60)	61
第55図	24・25号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	63
第56図	26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	64
第57図	27号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	66
第58図	27号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	67
第59図	27号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3)	69
第60図	27号竪穴住居跡出土土器実測図 4 (1/3)	71
第61図	27号竪穴住居跡出土土器実測図 5 (1/3)	72
第62図	27号竪穴住居跡出土土器実測図 6 (1/3)	73
第63図	28号竪穴住居跡実測図 (1/60)	73
第64図	28号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	74
第65図	28号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	74
第66図	29・30号竪穴住居跡実測図 (1/60)	75
第67図	30号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	76
第68図	29・30号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	77
第69図	31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)	78
第70図	31号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	79
第71図	32号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	80
第72図	32号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	81
第73図	33号竪穴住居跡実測図 (1/60)	82
第74図	33号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	82
第75図	33号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	84
第76図	33号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	85
第77図	34・35号竪穴住居跡実測図 (1/60)	85
第78図	34号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	86
第79図	35号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	87
第80図	35号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	88
第81図	36・37号竪穴住居跡実測図 (1/60)	89
第82図	36・37号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	90
第83図	39号竪穴住居跡実測図 (1/60)	91
第84図	39号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	92
第85図	39号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	93
第86図	41号竪穴住居跡実測図 (1/60)	94
第87図	41号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	94
第88図	41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	96

第89図	42号竪穴住居跡実測図 (1/60)	97
第90図	42号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	97
第91図	42号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	98
第92図	43・44号竪穴住居跡実測図 (1/60)	99
第93図	44号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	100
第94図	43・44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	101
第95図	45号竪穴住居跡実測図 (1/60)	103
第96図	45号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	103
第97図	45号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	104
第98図	45号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	105
第99図	46号竪穴住居跡実測図 (1/60)	106
第100図	47号竪穴住居跡実測図 (1/60)	106
第101図	46号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	107
第102図	47号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	109
第103図	47号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	110
第104図	48号竪穴住居跡実測図 (1/60)	110
第105図	48号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	112
第106図	48号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	112
第107図	51～53・55～58号土坑実測図 (1/40)	113
第108図	51・53号土坑出土土器実測図 (1/3)	114
第109図	52・55・56号土坑出土土器実測図 (1/3)	115
第110図	57・113号土坑出土土器実測図 (1/3)	116
第111図	その他の遺構出土土器実測図 1 (1/3)	118
第112図	その他の遺構出土土器実測図 2 (1/3)	119
第113図	黄褐色土層・灰色砂層出土土器実測図 (1/3)	122
第114図	鉄器実測図 (1/2)	123
第115図	石器・土製品実測図 (1/2)	124
第116図	近世以降の井戸・土坑実測図 (1/40・1/20)	126
第117図	近世以降の土師器・陶器・陶磁器実測図 1 (1/3)	127
第118図	近世以降の土師器・陶器・陶磁器実測図 2 (1/3)	128
第119図	近世以降の土師器・陶器・陶磁器実測図 3 (1/3)	129
第120図	近世以降の土師器・陶器・陶磁器実測図 4 (1/3)	130
第121図	窯道具実測図 (1/3)	132
第122図	青銅製品・銅銭・土製品・瓦製品実測図 (1/2・2/3・1/3)	133
第123図	西新町遺跡出土鉛製品の鉛同位体比測定結果 (A式図)	135
第124図	西新町遺跡における竪穴住居跡変遷図 (1/2,000)	136
第125図	カマドの構築過程 (1/30)	139

第126図	カマド地業の類別分布図（1/2,000）	140
第127図	煙道断面図（1/30）	140
第128図	外面調整の比率	141
第129図	第20次調査出土半島系土器（1/6）	142
第130図	西新町遺跡出土半島系土器（1/6）	143
付図1	西新町遺跡第20次調査遺構配置図（近世～現代）（1/200）	
付図2	西新町遺跡第20次調査遺構配置図（古墳時代）（1/200）	

表目次

第1表	西新町遺跡調査一覧	9
第2表	1号竪穴住居跡出土土器観察表1	15
第3表	1号竪穴住居跡出土土器観察表2	16
第4表	2・3号竪穴住居跡出土土器観察表	18
第5表	4号竪穴住居跡出土土器観察表1	19
第6表	4号竪穴住居跡出土土器観察表2	21
第7表	4号竪穴住居跡出土土器観察表3	22
第8表	5号竪穴住居跡出土土器観察表	28
第9表	6号竪穴住居跡出土土器観察表	32
第10表	7号竪穴住居跡出土土器観察表	34
第11表	8・9号竪穴住居跡出土土器観察表	35
第12表	11号竪穴住居跡出土土器観察表	39
第13表	12・13号竪穴住居跡出土土器観察表	42
第14表	14・15号竪穴住居跡出土土器観察表	48
第15表	16～18号竪穴住居跡出土土器観察表	50
第16表	19～22号竪穴住居跡出土土器観察表	54
第17表	23号竪穴住居跡出土土器観察表	59
第18表	24～26号竪穴住居跡出土土器観察表	62
第19表	27号竪穴住居跡出土土器観察表1	65
第20表	27号竪穴住居跡出土土器観察表2	68
第21表	27号竪穴住居跡出土土器観察表3	70
第22表	28・29号竪穴住居跡出土土器観察表	75
第23表	30号竪穴住居跡出土土器観察表	76
第24表	31・32号竪穴住居跡出土土器観察表	80
第25表	33号竪穴住居跡出土土器観察表	83
第26表	34・35号竪穴住居跡出土土器観察表	87
第27表	36・37号竪穴住居跡出土土器観察表	91

第28表	39・41号竪穴住居跡出土土器観察表	95
第29表	42・43号竪穴住居跡出土土器観察表	100
第30表	44・45号竪穴住居跡出土土器観察表	102
第31表	46号竪穴住居跡出土土器観察表	108
第32表	47・48号竪穴住居跡出土土器観察表	111
第33表	51～57・113号土坑出土土器観察表	117
第34表	その他の遺構出土土器観察表	121
第35表	黄褐色土層・灰色砂層出土土器観察表	122
第36表	黄褐色土層・灰色砂層近世以降の遺構出土土器類観察表 1	130
第37表	黄褐色土層・灰色砂層近世以降の遺構出土土器類観察表 2	131
第38表	西新町遺跡出土鉛製品の鉛同位体比測定結果	134
第39表	第20次調査の竪穴住居跡一覧表	137

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

県立修猷館高校は周知の埋蔵文化財包蔵地「西新町遺跡」（遺跡番号020240）の中に位置している。西新町遺跡は弥生時代の集落と墓地、それと古墳時代前期の集落からなり、殊に弥生時代終末の土器様式である「西新式」の標識資料が多数出土したことで著名な遺跡である。また、朝鮮半島系土器をはじめとして、畿内・吉備・山陰地域との交流を示す土器が纏まって出土することや、我が国における初期段階のカマドを付設した竪穴住居跡が数多く確認されていることなど学史上重要な位置を占めている。

この西新町遺跡の範囲は東西800m、南北300mほどに及び、修猷館高校の敷地のほぼ全域を含んでいる。そのため、平成10年度から8か年計画で実施されている修猷館高校校舎の全面的な改築事業に伴い、事業者である福岡県教育庁教育企画部施設課との協議を踏まえつつ、福岡県教育庁文化財保護課が、随時事前の発掘調査を実施してきた。こうした中、平成17年9月に施設課と文化財保護課の間で、第5期大規模改築講堂工事（プール解体・講堂建築・旧第二体育館解体）に係る埋蔵文化財の取扱いについての協議を行った。平成18・19年度で高校敷地北東隅部の既設プール（昭和42年建設）を解体した後、講堂の建築工事を行い、旧第二体育館を解体するという事業の概要であった。このうち、平成18年度事業である既設プール解体と講堂建築工事については、予定地の西側隣地（第17年調査）の状況からプールの基礎レベルが遺構面に近いことが想定されたため、基礎解体時における遺構の損壊を回避する目的で、基礎を残し上部構造のみ解体した段階で発掘調査を実施することで合意した。しかしながらその後の建築都市部営繕課との具体的な工事工程の確認段階に至り、発掘調査に先立って基礎部まで完全に撤去するという工程が変更できない事態であることが判明した。平成17年度に施設課と行った協議に先立つ、文化財保護課・営繕課による調整を基にした工事日程がすでに組まれていたためである。そのような理由から文化財保護課としては、基礎解体時の立会に際し遺構に影響を及ぼすことのないように解体業者に対して直接指示をするという条件を付し、やむを得ず営繕課の示す工程について承諾した。基礎解体工事に伴う立会は平成18年7月14日から7月26日まで行った。その結果、既設プール中央部付近はそれ以前に同じ場所に存在した旧プール（昭和3年建設）の基礎によって完全に遺構が削平されているものの、少なくともそれ以外の部分については既設プール建設に起因する損壊がないことを確認した。そして、基礎撤去後、引き続いて西新町遺跡第20次発掘調査に着手することとなった。発掘調査期間は12月初旬の講堂建築工事着手までの約4か月である。調査対象面積は平面積で1,850㎡を測る。

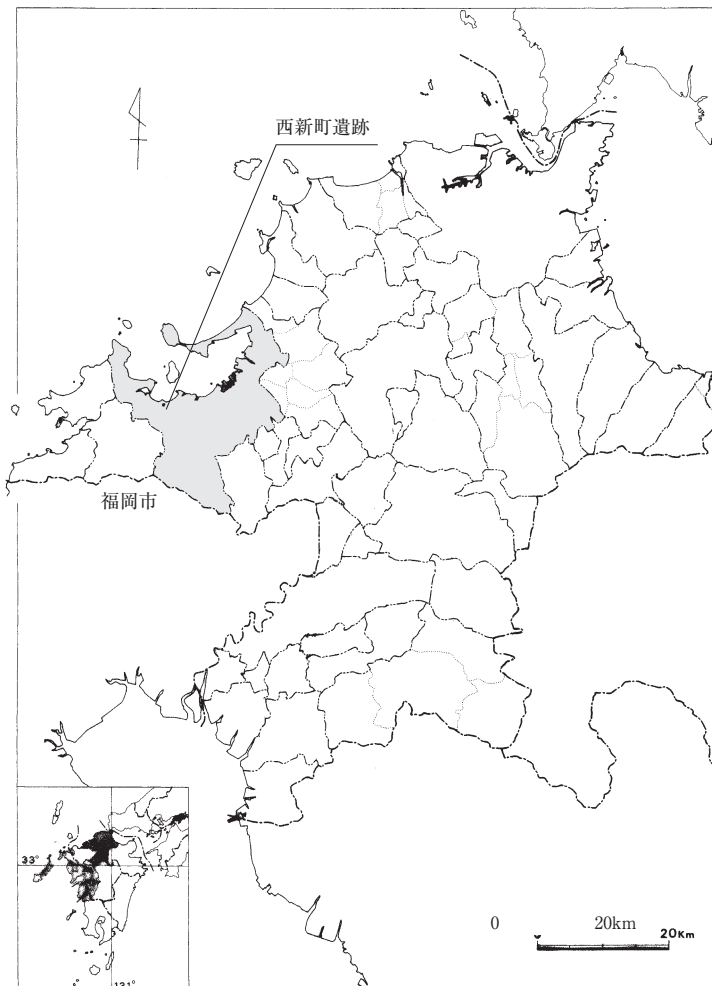


既設プールの解体状況

第2節 調査の経過

平成18年度の発掘調査については、既設プール解体工事に係る機材等の撤収が完了した8月2日から重機を搬入し、南西隅部から表土剥ぎを開始した。廃土置き場のスペースが限られていたため、まず第17次調査区に隣接する西側半分を調査した後に一端埋め戻し、残り東側半分の調査に着手することとした。これまでに実施された西新町遺跡の発掘調査の成果と今回のプール基礎解体時の立会状況から、昭和3年に建設されたプールで損壊を受けている部分を除いて、ほぼ全面に遺構が遺存していることが予想されたため、既設プールおよび講堂建築箇所を包括する部分を調査対象として発掘区の設定を行った。なお、講堂建設により影響を受ける部分は、その一部を平成15年度に第17次調査として調査を実施している。重機による表土剥ぎ開始後、作業の安全上に問題のないスペースを確保した段階の8月7日に文化財保護課甘木事務所から発掘機材を搬入、同日午後から作業員を投入した。

8月8日発掘開始。1名の作業員を除いて発掘調査の経験を有していなかったため、発掘に関わる道具の説明、作業の工程、遺構の掘削方法、安全講習等の事前研修を行い、発掘区周辺整備の後、南側から発掘調査に着手した。近世遺構や近現代の攪乱と同一面で、攪乱埋土とは異なる灰色砂（古墳時代の遺構埋土）の切り合いが視認できたが、古墳時代遺構の検出に先立って少なくとも灰色砂下部の地山面が断面で確認できる深さまでは掘削する必要があったた



第1図 西新町遺跡の位置

め、まずは近世遺構と攪乱（以下、上層とする）の全面掘削を先行させ、その後に古墳時代の遺構検出を行う手順をとった。同日は、高校敷地南東隅に接する脇山口交差点に設置された福岡市4級基準点No.438からのレベル移動を行った。翌8月9日、No.438及び早良口に設置された福岡市2級基準点No.255から国土座標を移設した。

9月14日までには西半部の上層遺構を完掘し、遺構掘削と併行して行っていた図化作業も南西部の別区（埋設された水道管を避けて表土剥ぎを行ったことにより、一部独立した区となっている）を残して終了した。なお、9月7日には修猷館高校OBからなる「西新町遺跡研究会」の8名が体験発掘作業を行った。

翌9月15日に南側の管理棟屋

上から、4×5リバーサル、同モノクロ、35mmリバーサル、同モノクロで西半部全景の写真撮影を行う。その後南西部別区の遺構実測を終え、引き続き下層遺構の検出作業に入った。これと併行し、発掘区の南壁際で下層遺構面を覆っている黄褐色砂質土（厚さ15cmほど）を重機を用いて除去した。西新町遺跡は砂丘上に立地しており、ひとつの遺構を完掘した後即座に写真撮影・図化を行わなければ風雨によって原形を失ってしまうため、遺構単位で一連の過程を完結させる繰り返しとなった。なお、撮影に際しては、崩壊しやすい締まりのない砂でかつ遺構の密集度も高いという状況であったため、安全面を考慮し、基本的には脚立を用いて行った。10月11日までは下層遺構の掘削を終え、翌10月12日に有限会社空中写真企画に委託して、気球による空中写真撮影を実施した。写真撮影終了後、土層観察用のベルト部分の掘り下げとカマドの精査を開始し、10月18日に漸く西半部の調査を終了した。

西半部では特に攪乱が著しかったため、必要最低限の掘削にもかかわらず時間を費やしてしまい、調査遅延の要因となった。ともかくも10月19日からは重機による埋め戻しと東半部の表土剥ぎを行い、10月25日から作業員による遺構検出を再開した。東半部の遺構面については、発掘区の北東部が既設プールと重複する旧プール基礎により大きく削平されている状況であった。また、表土を剥ぐ段階で、この攪乱の北側及び東側には古墳時代の遺構の広がり認められず、近世～現代の遺構に限られることが確認されたため、北東隅部の一部については調査対象から除外している。東半部についても西半部と同じ手順に従って調査を進めた。途中、10月31日と11月7日の両日、「総合的な学習の時間」として2年生を対象に講義と発掘調査体験を行った。11月6日、上層遺構掘削完了後、全体写真清掃と南側管理棟屋上からの写真撮影。翌11月7日から下層遺構の調査を開始した。11月21日までに下層遺構掘削を終え、土層観察用のベルト部分の掘り下げとカマドの精査に移る。11月24日で掘削作業がほぼ終了したため、調査員により引き続きカマドの精査・図化を行う。11月28日には修猷館高校の生徒・教員向けに現地説明会を実施し、70名ほどの参加を得た。その後12月7日までに精査を終え、翌12月8日から重機による埋め戻しを開始する。12月12日に文化財保護課太宰府事務所と甘木事務所に発掘機材を搬出、翌12月13日に現地に残しておいたユニットハウス・トイレ・バリケード等の建機類を撤収した後、修猷館高校・教育庁施設課・福岡市教育委員会埋蔵文化財課に口頭で完了報告を行い、第20次調査を完了した。

なお、発掘調査の記録としては、国土座標に合わせて割り付けた1/20縮尺での図化を基本と



発掘風景



気球写真撮影風景



現地説明会



教育普及関係レジメなど

し、個別遺構は1/10・1/5縮尺で詳細図面を作成している。また、調査日誌に所見を記録した。遺物の取り上げについては、住居を「J」、土坑を「D」、溝を「M」、ピットを「P」とし、各々遺構番号を付して出土遺構を1/100の配置略図に記している。写真記録は、4×5リバーサル、同モノクロ、35mmリバーサル、同モノクロ、デジタルカメラ、空中写真では6×6リバーサル、同モノクロを用いて行った。

以下、西新町遺跡第20次調査に係る事務文書を列挙しておく。

- ・周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（文化財保護法第94条関連）平成18年4月10日 18教施第893号 県教育長あて県教育庁施設課長名通知
- ・周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（文化財保護法第94条関連）平成18年10月11日 18教文第1号-372 県施設課長あて県教育長名勧告
- ・埋蔵文化財発掘調査の報告について（文化財保護法第99条関連）平成18年8月7日 県教育長名報告
- ・埋蔵文化財発見の通知書（文化財保護法第100条2項関連）平成18年12月13日 18教文第262号-15 西警察署長あて県教育長名通知

第3節 調査・整理報告書作成の組織

発掘調査及び整理・報告書作成は福岡県教育庁総務部文化財保護課が同庁教育企画部施設課から執行委任を受けて実施した。

発掘調査

県立修猷館高校講堂新築事業に係る埋蔵文化財発掘調査（西新町遺跡）に要する経費の執行委任手続きについて 平成18年4月1日 18教文第47号-5 県施設課長あて県文化財保護課長名依頼

報告書作成

県立修猷館高校講堂新築事業に係る埋蔵文化財報告書作成（西新町遺跡）に要する経費の執行委任手続きについて 平成19年4月2日 19教文第193号-4 県施設課長あて県文化財保護課長名依頼

発掘調査及び整理・報告書作成の関係者は次のとおりである。

総括		平成18年度	平成19年度
福岡県教育委員会	教育長	森山 良一	森山 良一
	教育次長	清水 圭輔	檜崎 洋二郎
総務部	部長	大島 和寛	大島 和寛
文化財保護課	副理事兼課長	磯村 幸男	磯村 幸男
	副課長	佐々木 隆彦	佐々木 隆彦
	参事	新原 正典	新原 正典
	参事兼課長補佐	安川 正郷	中藺 宏
	参事兼課長技術補佐	池邊 元明	池邊 元明
庶務		小池 史哲	小池 史哲
	管理係長	井手 優二	井手 優二
	主任主事	淵上 大輔	淵上 大輔
教育企画部	部長	檜崎 洋二郎	杉光 誠
施設課	課長	清田 嘉治	今田 義雄
	課長補佐	濱武 文雄	濱武 文雄
	課長技術補佐	奥園 正美	栗山 公典
	施設係長	高山 裕明	高山 裕明
調査・報告書作成			
文化財保護課	参事補佐兼調査第一係長	小田 和利	小田 和利
	技術主査	吉村 靖徳（調査）	吉村 靖徳 （報告書作成、4月）
	主任技師	岸本 圭	
	主任技師	下原 幸裕	
	臨時職員	中村 理（調査）	
	参事補佐兼調査第二係長	飛野 博文	飛野 博文

参事補佐

濱田 信也（整理）

濱田 信也（整理）

主任技師

大庭 孝夫（整理）

新九州歴史資料館対策班

技術主査

吉村 靖徳

（報告書作成、5月～）

発掘作業員

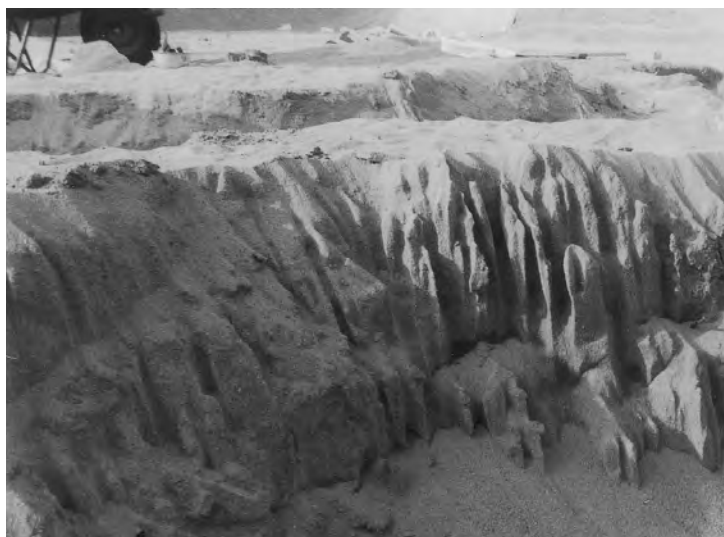
石井清子 伊藤信行 浦徳子 岡本侑也 小野尚美 川島信代 川端秀子 川端絢 古賀昌美 重本昌徳 高橋幸作 滝尾真理子 田北健三 竹川秀次 田代典子 時吉ひとみ 時吉泰治 中村彩 行方礼子 西美由喜 早川和賀子 平江裕子 深溝友春 深溝嘉江 本田史佳 本村実季子 前田陽子 三島佐奈江 三角章夫 三角チエ子 吉澤恵

整理作業員

江上佳子 栗林明美 坂田順子 田中典子 棚町陽子 辻清子 土山真弓美 寺岡和子 豊福弥生 中川真理子 中川陽子 中村洋子 橋之口雅子 原カヨ子 久富美智子 平田春美 堀江圭子 安永啓子 山田智子 若松三枝子

発掘調査に当たり、修猷館高校の中嶋利昭校長・松枝隆生教頭・西村政俊事務長・濱田和雄事務次長に御配慮いただいた。また、発掘作業員の手配等では福岡市教育委員会埋蔵文化財課の山崎龍雄・池崎譲二・井澤洋一・吉留秀敏の各氏のお手を煩わせた。さらに調査期間中には宮本一夫・武末純一・桃崎祐輔・辻田純一郎・亀田修一・植野浩三・藤丸詔一郎・中島達也・秦文生・金武重・小泉恵英・Dr.Fanzal.D.Kakar・山口譲治・宮井善朗・榎本義嗣・久住猛雄・今井隆博（順不同・敬称略）の諸先生方が来訪され、御助言・御指導を賜った。なお、発掘作業員を確保することが困難な状況下、福岡大学・九州大学・西南大学の学生諸氏には本当に助けられた。

そのほか、西新町遺跡第20次調査に関与されたすべての方々に対し、この場を借りて深謝いたします。



僅かな時間で風で侵食を受ける攪乱坑の壁

第2章 西新町遺跡の位置と環境

西新町遺跡の環境についてはこれまでに刊行された報告書で詳述されているので、ここでは早良平野に所在する主な遺跡のうち、古墳時代の西新町遺跡の前史的な意味合いで弥生時代以降の遺跡を羅列的に挙げるにとどめる。詳しくは以下を参照していただきたい。

『西新町遺跡』Ⅱ 福岡県文化財調査報告書第154集 2000 福岡県教育委員会（地理的環境、歴史的環境、古墳時代以前）

『西新町遺跡』Ⅴ 福岡県文化財調査報告書第157集 2003 福岡県教育委員会（歴史時代以降）

『西新町遺跡』Ⅵ 福岡県文化財調査報告書第200集 2005 福岡県教育委員会（韓半島の関連遺跡）

第1節 地理的環境

西新町遺跡が所在する福岡市は福岡県の北西部に位置する。福岡市を擁する福岡平野は玄界灘を挟んでアジア大陸と対峙するという地理的環境に起因して、古来からいち早く大陸文化の影響を受け、同時に地の利を生かして対外交渉の門戸としても繁栄を続けてきた。

西新町遺跡は福岡市西部の早良平野北東端に所在する。早良平野は東を飯倉丘陵、南を背振山系、西は背振山地から北に派生した山塊に囲まれており、北の博多湾に向かって開けている。平野の中央部には室見川が貫流し、東の樋井川、西の十郎川とともに沖積平野を形成している。遺跡は樋井川と室見川に挟まれた昭和末期の旧海岸汀線から400mほど内陸の古砂丘上に立地する。箱崎砂層に属する古砂丘は博多湾に平行して3列存在し、遺跡はこのうち中央の砂丘とその北側の砂丘の間に形成された砂丘間低地に当たる部分に乗っている。この砂丘が形成された時期は約3,000～2,000年前の海退期であると考えられ、弥生時代に入ると砂丘上には墓地や集落が営まれるようになる。遺跡のすぐ北側には博多湾に沿って元寇防塁跡が存在することから、少なくとも中世期には西新町遺跡から海岸線まではさほど隔たっていなかった事が知れる。なお、今回発掘調査を行った第20次調査区は東西800m、南北300mの広がりを持つ遺跡の北側縁辺部に位置し、標高は3.5m前後を測る。

第2節 歴史的環境

早良平野では弥生時代開始前後の時期におけるいくつかの重要な遺跡を挙げる事ができる。まず有田遺跡では刻目突帯文期～板付Ⅱ式期にわたる環濠を巡らせる集落の存在が明らかとなっている。また、拾六町平田遺跡では板付Ⅰ式期まで遡る可能性のある水田跡が発見されている。この時期の墓地としては刻目突帯文期の甕棺墓・土坑墓からなる東入部遺跡や、前期の甕棺墓からなる田村遺跡等をあげることができる。一方、西新町遺跡の近隣では西側に位置する藤崎遺跡で弥生時代早期に属する遺物が採集されていることから、早くもこの時期には箱崎砂丘上に集落・墓地が存在した事を窺わせる。その後、前期末～中期段階に至ると吉武遺跡群のように大規模集落の形成が始まるとともに遺跡数も増大し、西新町遺跡でも甕棺墓が営まれるようになる。この時期、吉武遺跡群高木地区の甕棺墓・木棺墓にみられるように、墳丘を有する特定集団墓も出現する。ここでは多紐細文鏡や細形銅剣等の豊富な青銅器が副葬されていた。また、西新町遺跡や藤崎遺跡と同じ箱崎砂丘上に立地する姪浜遺跡では、中期以降、集落・墓地が形成されはじめる。なお、姪浜遺跡では漢式三角鏃が出土している。西新町遺跡に



- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|------------|------------|
| 1. 西新町遺跡 | 8. 拾六町ツイジ遺跡 | 15. 野方中原遺跡 | 22. 重留遺跡 | 29. 大谷古墳群 |
| 2. 藤崎遺跡 | 9. 橋本一丁目遺跡 | 16. 羽根戸古墳群 | 23. 東入部遺跡 | 30. 倉瀬戸古墳群 |
| 3. 元寇防塁 | 10. 有田遺跡 | 17. 吉武遺跡群 | 24. 重留古墳群 | 31. 鳥越古墳群 |
| 4. 西皿山窯跡推定地 | 11. 原遺跡 | 18. 田村遺跡 | 25. 野芥遺跡 | 32. 能古焼窯跡 |
| 5. 東皿山窯跡推定地 | 12. 飯倉遺跡群 | 19. 金武遺跡群 | 26. 山崎古墳群 | |
| 6. 姫浜遺跡 | 13. 梅林古墳 | 20. 都地遺跡 | 27. クエゾノ遺跡 | |
| 7. 五島山古墳 | 14. 野方久保遺跡 | 21. 四箇遺跡群 | 28. 七隈古墳群 | |

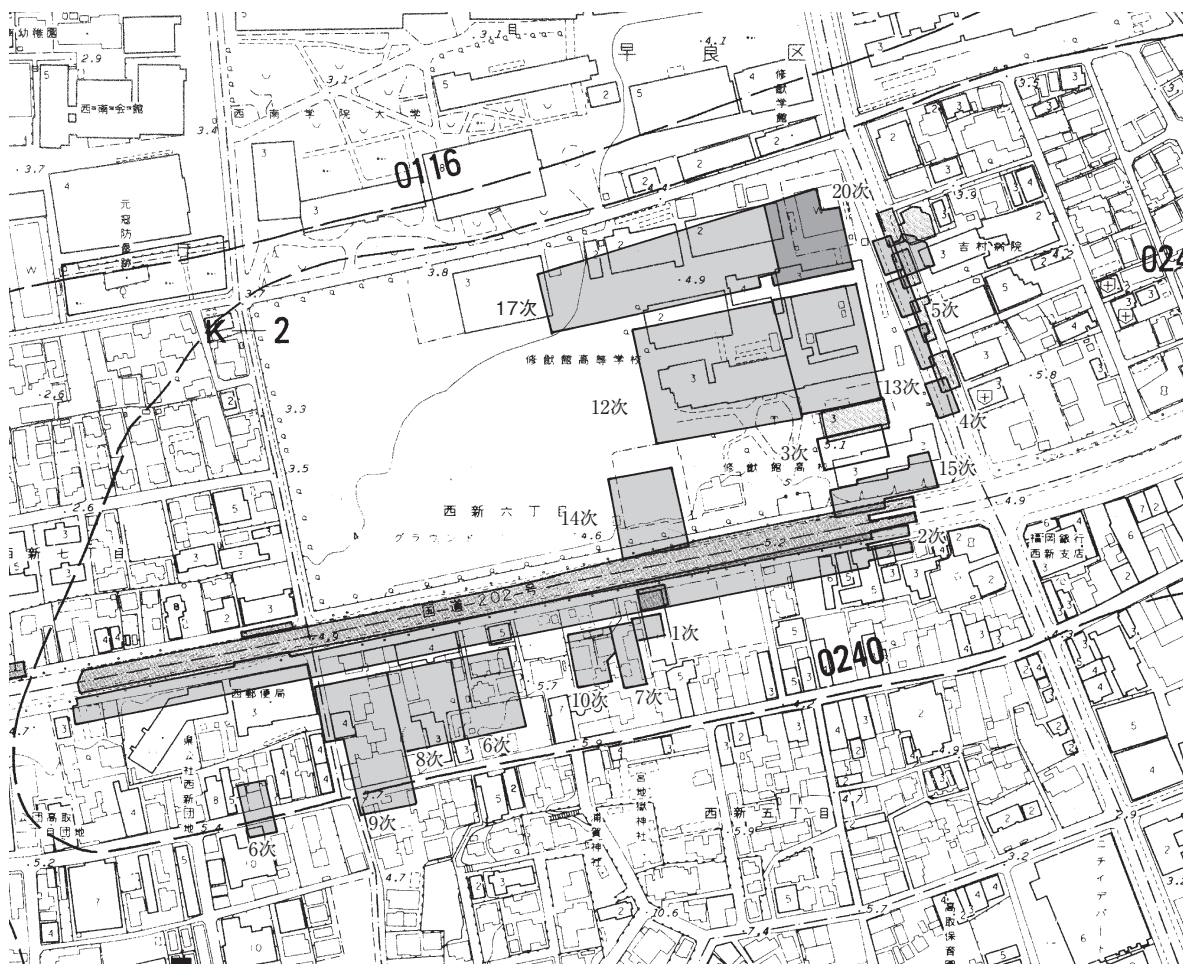
第2図 西新町遺跡と周辺の遺跡（1／50,000）

においてもやはりこの時期から集落・甕棺墓地が造営される。後期では環濠を巡らせる野方中原遺跡が大規模集落として挙げられる。

古墳時代には前期の西新町遺跡をはじめ、中期～後期では有田遺跡や野方久保遺跡など大規模な集落がいくつか存在する。弥生時代中期に砂丘上に出現した姪浜遺跡でも前代に引き続き集落が営まれる。墳墓では集落としての西新町遺跡の墓域と考えられている藤崎遺跡がある。方形周溝墓群からなるこの遺跡では、第6号方形周溝墓の主体部である組合式木棺から三角縁二神二車馬鏡・素環頭大刀が出土し、他の墳墓からも珠文鏡や変形文鏡が出土している。藤崎遺跡に続く時期の墳墓としては三角縁二神二獣鏡2面・銅鏃等が副葬された五島山古墳（円墳／径28m）がある。5世紀初頭前後になると拝塚古墳（全長75m）が突出する規模を誇って出現する。拝塚古墳に後続して吉武樋渡古墳（全長38m）や梅林古墳（全長27m）等の前方後円墳の存在が知られるものの、他地域を凌駕するほどの古墳は見あたらず、また、明確な首長墓系列も認められない。後期に至ると早良平野の南側や東側の平野に面した丘陵上を中心として相当数の群集墳が密集して築造されるが、やはり突出した首長墳は明らかになっていない状況である。なお、古墳時代の早良平野では、吉武遺跡群金武古墳群において陶質土器・鋳造鉄斧・初期馬具等の渡来系遺物の出土が知られている。墓域に対応する集落域からもやはり豊富な渡来系遺物が出土しており、西新町遺跡に続く時期の渡来系遺物が多数存在する遺跡として特記されよう。

調査 回数	所在地（福岡市早良区）	調査原因	調査主体	調査面積 (㎡)	調査年月	報告書	特記事項
1	旧西新町町内	民間開発	福岡市		1974.7		
2	西新6丁目	地下鉄建設	福岡市	6,230	1976.8-1978.4	市第79集	弥生終末～古墳初住居跡57棟
3	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	700	1984.8	県第72集	古墳前期住居跡7棟
4	西新3丁目	道路拡幅	福岡市	800	1986.6-1986.0	市第203集	古墳前期住居跡8棟
5	西新3丁目606-4	病院増築	福岡市	303	1992.11	市第357集	弥生終末～古墳初住居跡9棟
6	西新5丁目643-4他	民間開発	福岡県	1,041	1994.3-1994.6	市第483集	弥生終末～古墳初住居跡2棟
7	西新5丁目638-9	民間開発	福岡市	369	1994.4-1994.5	市第483集	弥生終末～古墳初住居跡9棟
8	西新5丁目644-1・2	民間開発	福岡市	610	1994.9-1994.11	市第683集	弥生終末～古墳初住居跡3棟、弥生時代中期住居跡1棟
9	西新5丁目594他4筆	民間開発	福岡市	920	1995-1995.4	市第505集	弥生終末～古墳初住居跡8棟、弥生時代中期住居跡12棟
10	西新5丁目641-3他	共同住宅建設	福岡市	462	1995.10-1996.2	市第683集	弥生終末～古墳初住居跡7棟
11	西新5丁目632-6	店舗建設	福岡市	52	1997.10.13～15		遺構検出されず
12	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	5,214	1998.4-1998.12	県第154・157集	弥生終末～古墳初住居跡158棟
13	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	2,800	2000.7-2001.2	県第168・178集	弥生終末～古墳初住居跡86棟、井戸1基
14	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	1,110	2001.10-2002.3	県第200集	弥生終末～古墳初住居跡29棟、井戸1基
15	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	1,800	2002.9-2002.10	県第200集	近世遺構
16	高取1丁目105	共同住宅建設	福岡市	395	2003.5-2003.8	市第846集	弥生中期住居22棟・弥生中期ガラストンボ玉
17	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	1,990	2003.8-2004.3	県第208集	弥生終末～古墳前期住居39棟他
18	西新5丁目572他	共同住宅建設	福岡市	345	2005.9-2005.12	市第939集	縄文前期包含層、古墳初住居跡3棟
19	高取1丁目111、112、25	民間開発	福岡市	164	2006.7.12-8.11	市年報21	弥生中期住居跡8棟
20	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	1,850	2006.8.2-12.7	本書	古墳初住居跡45棟
21	西新5丁目572-2	共同住宅建設	福岡市	369	2006.9.11-12.5	市年報21	縄文包含層、弥生～古墳住居跡3棟、井戸2基、古砂丘中にAso 4確認

第1表 西新町遺跡調査一覧



第3図 発掘区の位置と周辺調査地（1 / 4,000）

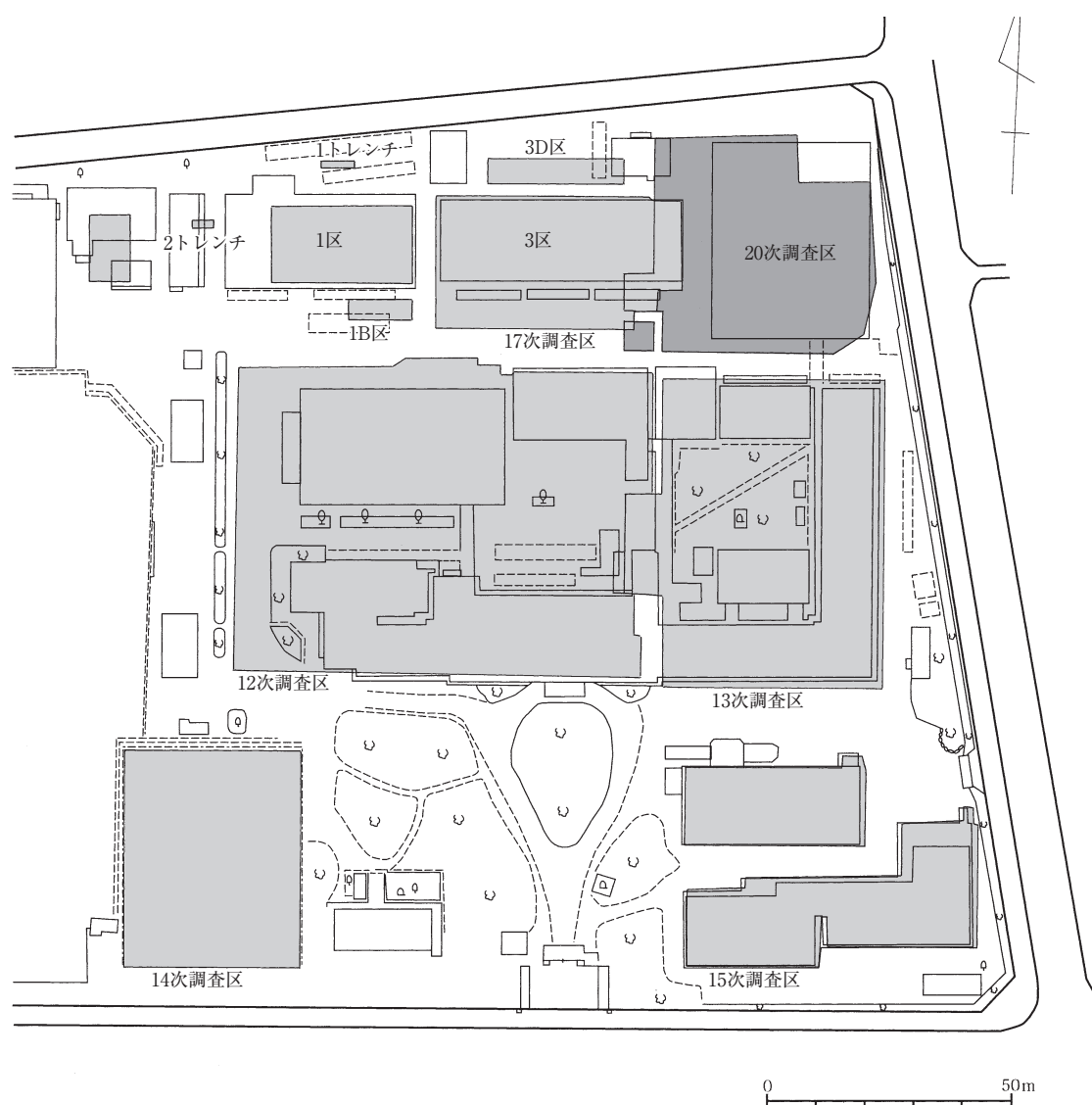
第3節 既往の調査

西新町遺跡ではこれまで都合21次にわたる発掘調査が行われており、その範囲・内容の詳細が明らかになりつつある。遺跡の継続時期は弥生時代中期～後期、弥生時代終末～古墳時代前期、中世、近世、現代と大きく5期に分かれる。このうち、弥生時代の遺構については、中期後半～中期末の集落が遺跡の南半に広がり、中央部付近には中期～後期にかけての甕棺墓群が確認されている。また、弥生時代終末～古墳時代前期の集落の変遷に関しては、弥生時代終末期には遺跡南側に住居跡群が展開し、古墳時代初頭には中央部へ、さらに前期に至ると北東部へ集落の中心が移動するという大まかな様相が明らかになってきており、その背景として海退・陸化という要因があったとも考えられている。ただ一方で、集落北縁付近にも古墳時代初頭頃の住居跡の一群が分村的に存在するような状況も認められる。なお、この時期の墓地については、西新町遺跡西側の砂丘上に立地し、古墳時代の方形周溝墓群からなる藤崎遺跡が西新町集落に対応する墓域とされる。

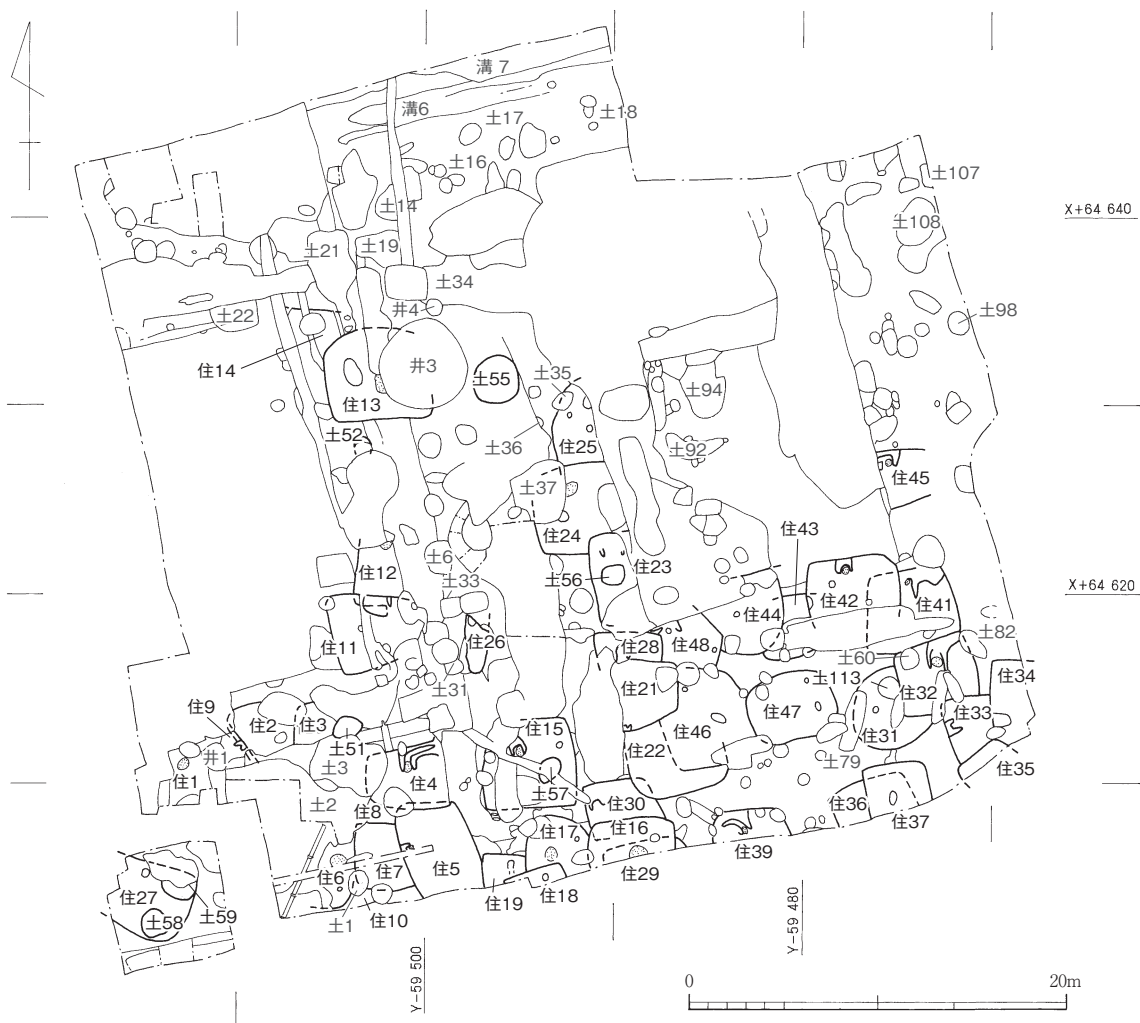
第3章 調査の内容

第1節 調査の概要

今回の発掘調査区は高校敷地北東隅部に位置する。これまでに実施された西側隣地の第17次調査や、南側に近接する第13次調査の結果から当発掘区への集落域の広がりが明らかではあったが、表土除去前は既存プール建設時に大部分が削平されている状況が予想された。しかしながら実際には、遺存状況が極めて悪かったにもかかわらず、古墳時代の竪穴住居跡の面的な広がりを確認することができたことは幸いであった。遺構は古墳時代の竪穴住居跡・土坑、江戸後期の土坑、そして明治～昭和期にかけての修猷館高校の前身に関連するものに分けることが



第4図 調査区周辺地形図 (1/1,500)



第5図 西新町遺跡遺構配置図 (1/400)

できる。遺構検出面としては上部が削平されているため基本的には1面であったが、近世以降の遺構の調査後に再度古墳時代の遺構の調査を行ったため、実際の発掘面積は対象面積の約2倍となる。なお、発掘区南壁際などでは両遺構面の間に無遺物層が存在し部分的に2面となる。

検出した主な遺構は、古墳時代の竪穴住居跡45棟（うちカマドを付設する住居跡は20棟）、土坑7基、それに近世～昭和期の井戸2基・廃棄土坑・溝等である。古墳時代の遺構の平面的な分布については、発掘区のやや北寄りでは検出した13号竪穴住居跡・14号竪穴住居跡を除いて発掘区の南半部に集中する（第5図、付図2）。一方、北半部については古墳時代の遺構としては上述した2棟の竪穴住居跡を除いて皆無である。検出面からは遺物が少量出土するものの、いずれも細片であり、しかも摩滅が著しい状態である。古墳時代の遺構検出面の標高は北西隅部で3.6m、南西隅部3.5m、北東隅部3.4m、南東隅部3.5mほどであり、南西部から北東部に向かって緩く傾斜している。現地表面からは概ね60cmほど下がつて遺構面に至る。

発掘区の基本層序は茶灰色土（表土）→暗灰色土（盛土）→黄白色細砂（地山）となり、地山面が古墳時代の遺構面となる。ただし、発掘区南壁際の東半、及び北東隅部については地山上に厚さ数cm～15cmほどの暗黄茶色砂が存在し、その上面から近世の遺構が切り込まれてい

る。この遺物を含まない暗黄褐色砂層を除去すると古墳時代の遺構面に至る。なお、遺構埋土に関しては、近世以降が茶褐色土ないしは灰～暗灰色粘質土、古墳時代は灰色をベースとした砂となる。

西新町遺跡の古墳時代集落は南西から北東方向に延びる砂丘上に立地し、今回の発掘区が集落の縁辺部に位置することがこれまでの調査成果から想定されていた。特に東側隣地の第17次調査では集落の北側外郭線がほぼ確定されており、今回の調査結果でもそのラインを追認する結果となったことは成果のひとつである。

本書では紙面の都合、あるいは時間的な制約の関係から、古墳時代の遺構と遺物を中心に記載し、近世以降の遺構と遺物についてはサンプル的な記載にとどめる。

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居跡と出土土器

1号竪穴住居跡 (図版3、第6図)

発掘区の南西部、第17次調査区と接する部分に位置する。住居跡の周囲は攪乱や近世の遺構によって大きく損壊を受けている。そのため、平面的に住居壁のラインを確認することはできなかったが、攪乱部分の断面観察で土器を多く含む黒灰色土層が水平に堆積していたため住居跡として掘り下げた。住居壁を検出していないため規模等については詳らかにはし得なかったが、遺存する床面の最大長は3.70mを測る。床面の標高は3.7m。確認した床面の北西部には南西－北東方向に主軸をとる炉跡が存在する。その規模は長軸長87cm×短軸長47cm×深さ10cmを測る。埋土は炭化物粒含む黒色土である。

埋土上層から勾玉用砥石・石錘が出土。

出土遺物 (図版20、第7～9図、第2・3表)

1は在地系の壺。2の外面にはヘラ状工具先端による線刻がみられる。3～7は山陰系二重口縁壺。口縁部が外反するものと、直立するものがある。6は口縁端部を外方につまみだす。7は有軸羽状文を入れる。8・9は小形丸底壺。9は精製。10は畿内系二重口縁壺の頸部。放射状にミガキを施し、頸部突帯下に櫛描波状文を入れる。

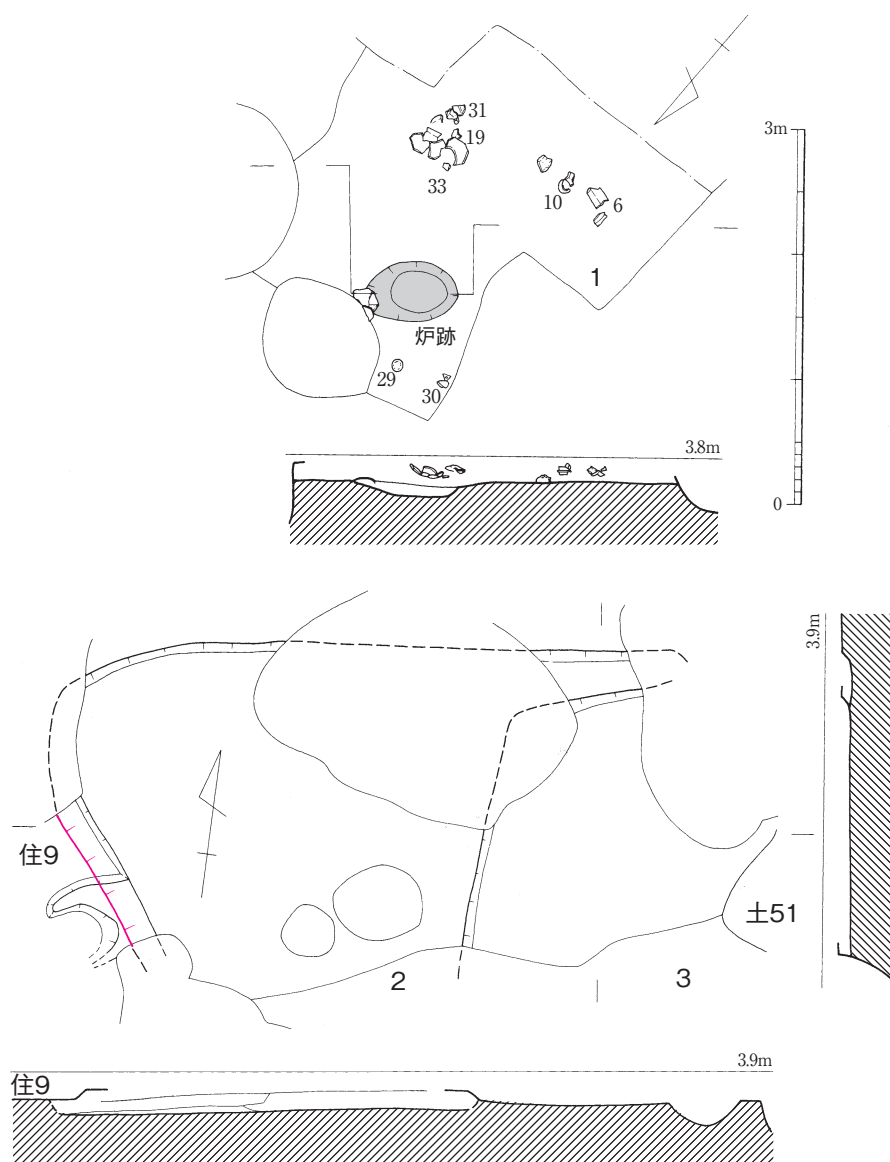
11～19は甕。11は庄内系甕で、口縁端部を上方につまみ上げる。12～19は布留系甕。口縁部内面に段を有する14・17～19とそうでないものがある。口縁部の形状には直線的に延びて端部を外方につまみ出す14や肥厚・内湾させる15～17・19などがある。

21～23は外反口縁鉢。いずれも精製で20は口縁部外面に暗文風のミガキを施す。24は畿内系二重口縁鉢。内面に放射状の暗文を施す。いずれも胎土は精良。25は口縁端部付近が外反気味となる鉢。26の内面にはヘラ状工具先端による木の葉文風の浅い線刻が施される。27のミガキは粗い。28は山陰系二重口縁鉢。器壁が厚い。

29・30は器台。31は山陰系鼓形器台。

32・33は半島系土器。32は肩部に5本の沈線を巡らせる。軟質で土師器に近い。33は斜格子のタタキ。ともに軟質で土師器に近い。

34はタコ壺。口縁端部は面をなす。孔は1方。



第6図 1～3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

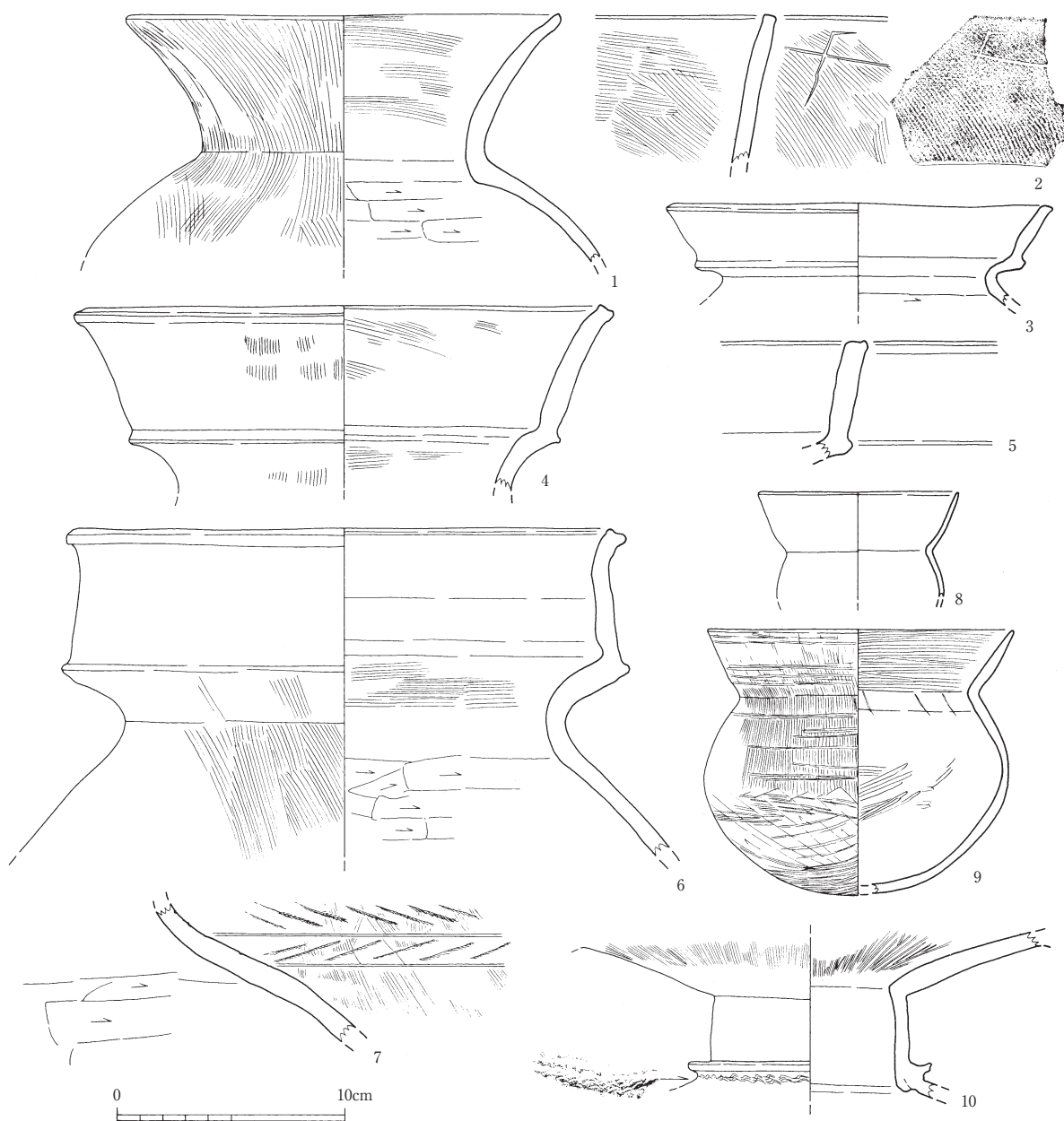
2号竪穴住居跡 (図版3、第6図)

発掘区の南西部、1号竪穴住居跡の東側に位置する。西側を9号竪穴住居跡、東側を3号竪穴住居跡に切れ、南側は攪乱によって損壊している。住居壁は北側と西側の一部を確認した。規模は詳らかではないが、遺存する床面の最大長は4.65mを測る。主軸をN-99°-Wにとるものと考えられる。埋土は暗灰色砂質土である。床面の標高は3.7m。床面では深さ27cmのピットを一つ検出した。

出土遺物 (図版20、第10図、第4表)

1は山陰系二重口縁壺。2の二重口縁壺は東瀬戸内系と思われる。口縁部は斜め上方に伸び、その端部は内側につまみ出されて袋状になり、端部は丸く収める。

3・4は布留系甕。4の櫛描沈線文は5条一対。ともに器壁が薄い。



第7図 1号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
7-13	20	住1 覆土	畿内系直 口壺	口径190	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	黄褐色	口縁緩やかに外反。口縁外縦ハケ、 内横ハケ。胴外縦ハケ後一部縦ミガ キ、内ケズリ。	2／3		8
2		住1 覆土	在地系直 口壺		粘土粗、1～3mm 石英多	良好	黄灰色	内外斜ハケ。	小片	口縁外に線刻	33
3		住1 覆土	山陰系二 重口縁壺	口径168	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄褐色～暗黄褐色	胴内ケズリ。	1／6		14
4		住1 覆土	山陰系二 重口縁壺	口径236	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	黄褐色	外縦ハケ、内横ハケ。	1／6		16
5		住1 覆土	山陰系二 重口縁壺		粘土やや粗、1～ 3mm石英多	良好、黒斑	黄褐色～暗黄褐色	内外横ナデ	小片		15
6	20	住1 No.1	山陰系二 重口縁壺	口径244	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	橙褐色	口縁端部が外方に突出。胴外縦ハ ケ。頸内横ハケ、胴内ケズリ。	1／2		1

第2表 1号竪穴住居跡出土土器観察表1

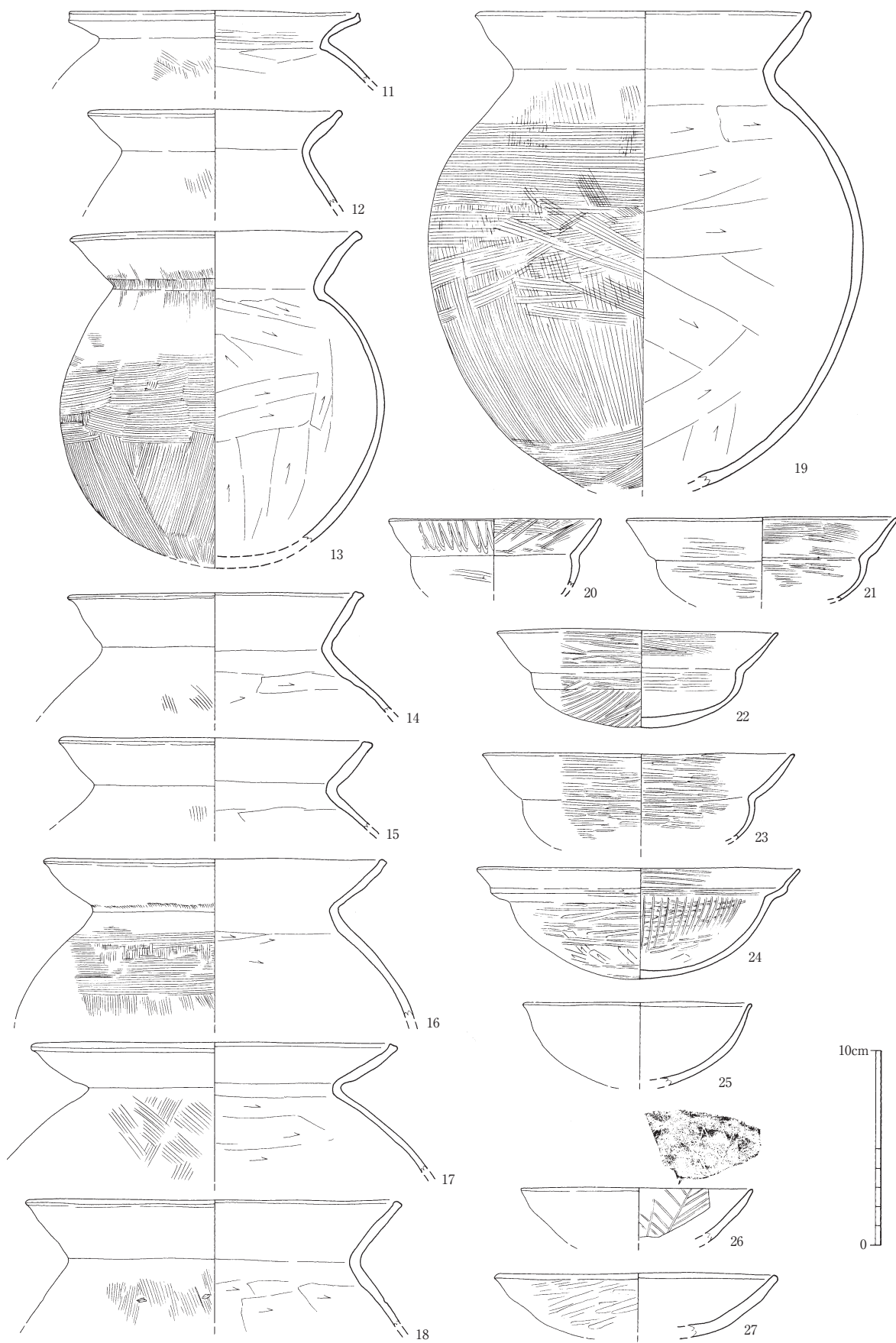
挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
7		住1 覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm 石英少	良好	黄褐色	ハケ状工具の端部による有軸羽状文。内ケズリ、外縦ハケ後ナデ。	小片		12
8		住1 覆土	小形丸底壺	口径88	粘土細、細砂粒少	やや甘い	橙褐色	ナデか？	1／6		31
9	20	住1 覆土	小形丸底壺	口径134、器高116	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好、黒斑	橙褐色	口縁～胴上外縦ハケ後暗文風横ミガキ。胴下外ケズリ後ミガキ。口縁内横ハケ、頸内工具ナデ、胴内ミガキ。	1／2		4
10		住1 No.2	畿内系二重口縁壺	頸径88	粘土やや粗、1～3mm 石英少	良好	黄褐色	口縁外ハケ、内暗文風縦ミガキ。肩外波状文。	頸部全周		13
8-11		住1 覆土	庄内系甕	口径149	粘土やや粗、1～3mm 石英少	良好	黄褐色～茶褐色	口縁端部を上方に摘み上げる。胴外・口縁内一部ハケ。胴内ケズリ。	1／4		20
12		住1 覆土	布留系甕	口径130	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄褐色～黄灰色	口縁端部丸い。胴外縦ハケ、内ケズリ。	1／10	傾きやや不安	23
13	20	住1 覆土	布留系甕	口径149、器高164、胴径173	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	淡橙褐色	胴外縦ハケ後横ハケ、内ケズリ。	底部を除き 完存	煤付着	7
14		住1 覆土	布留系甕	口径152	粘土細、1～3mm 石英少	良好	暗黄褐色	口縁端部外方に摘み出す。胴外縦ハケ、内ケズリ。	1／4		24
15		住1 覆土	布留系甕	口径160	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	暗黄褐色	胴外ハケ、内ケズリ	1／4		21
16		住1 覆土	布留系甕	口径176	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄褐色	胴外ハケ、内ケズリ	1／4		18
17		住1 覆土	布留系甕	口径184	粘土細、1～3mm 石英少	良好	暗黄褐色	胴外ハケ、内ケズリ	1／4		19
18		住1 覆土	布留系甕	口径192	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	暗黄褐色	肩に工具先による刺突文。胴外ハケ、内ケズリ	1／8		22
19	20	住1 No.4	布留系甕	口径173、器高234、胴径224	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	黄白色	胴外ハケ、内ケズリ胴内ケズリ。	胴部下半1／2残、他は完存		3
20		住1 覆土	小形丸底壺	口径109	粘土やや細、1mm 石英少	良好	淡橙褐色	口縁外ミガキ後波状暗文、内ハケ後ミガキ。胴外横ミガキ、内ナデ？	1／6		27
21		住1 覆土	外反口縁鉢	口径140	粘土細、微砂粒少	良好	橙褐色	外ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ミガキ。	1／4		30
22	20	住1 覆土	外反口縁鉢	口径145、器高51	粘土細、微砂粒少	良好	橙褐色	外ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ミガキ。	2／3		11
23		住1 覆土	外反口縁鉢	口径160	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外細かいミガキ、口縁内横ハケ、胴内細かいミガキ。	1／10		28
24	20	住1 覆土	畿内系外反口縁鉢	口径166、器高57	粘土細、微砂粒少	やや甘い	暗橙褐色	胴外下半ケズリ後ミガキ。内ミガキ後胴暗文。	1／3		24
25		住1 覆土	鉢	口径118	粘土細、微砂粒少	やや甘い	黄褐色	ナデか？摩滅著しい。	1／8		26
26		住1 覆土	鉢	口径120	粘土細、微砂粒少	やや甘い	暗黄褐色	内外ナデ。	1／6	内面にヘラ先による線刻。	25
27		住1 覆土	鉢	口径146	粘土細、微砂粒少	良好	暗黄褐色	外ケズリ後粗いミガキ、内ナデ。	1／4		29
9-28		住1 覆土	山陰系二重口縁鉢	口径301	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	黄褐色	胴外横ハケ後縦ハケ。胴内ケズリ後ナデ。	1／6		17
29	20	住1 No.6	器台	口径106	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ。内ミガキ。	受部完存		5
30	20	住1 No.7	器台	口径106	粘土やや粗、石英少	良好	黄褐色	脚部に穿孔。受け部外ミガキ、内ミガキ後放射状暗文。脚部ナデ。	1／2		6
31		住1 No.3	山陰系器台鼓形	口径162	やや粗	良好	黄白色	外ヨコナデ。内上半ミガキ、下半ケズリ。	1／4		32
32		住1 覆土	半島系土器壺	口径178	粘土やや粗、1～3mm 石英少	軟質。土師器に近い	黄灰色	肩に6条の沈線。内外ナデ。内指頭圧痕。	1／2		2
33	28	住1 No.8	半島系土器壺		粘土やや粗	やや甘い	黄灰色	外格子タタキ後丸い工具先による浅い沈線。	小片		1117
34	20	住1 覆土	タコ壺	口径52、器高108	粘土やや細、石英少	良好	橙褐色	内外ナデ。穿孔1ヶ所。	完形		9

第3表 1号竪穴住居跡出土土器観察表2

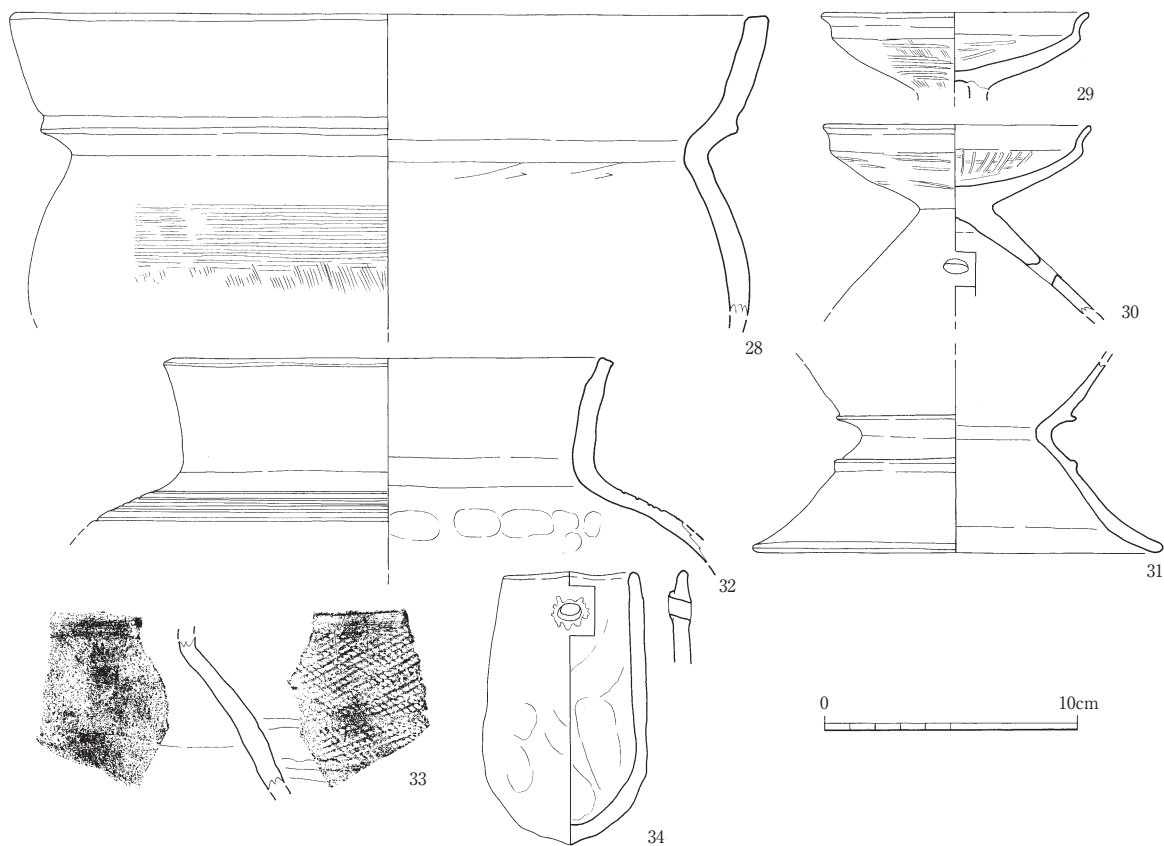
5は精製の脚付鉢になるものと思われ、脚上面に接合のためにヘラ状工具端部で押圧して放射状の刻みをいれる。

6～8はタコ壺。内外に指頭圧痕が顕著に残る。器壁が比較的薄い。

3号竪穴住居跡（図版3、第6図）



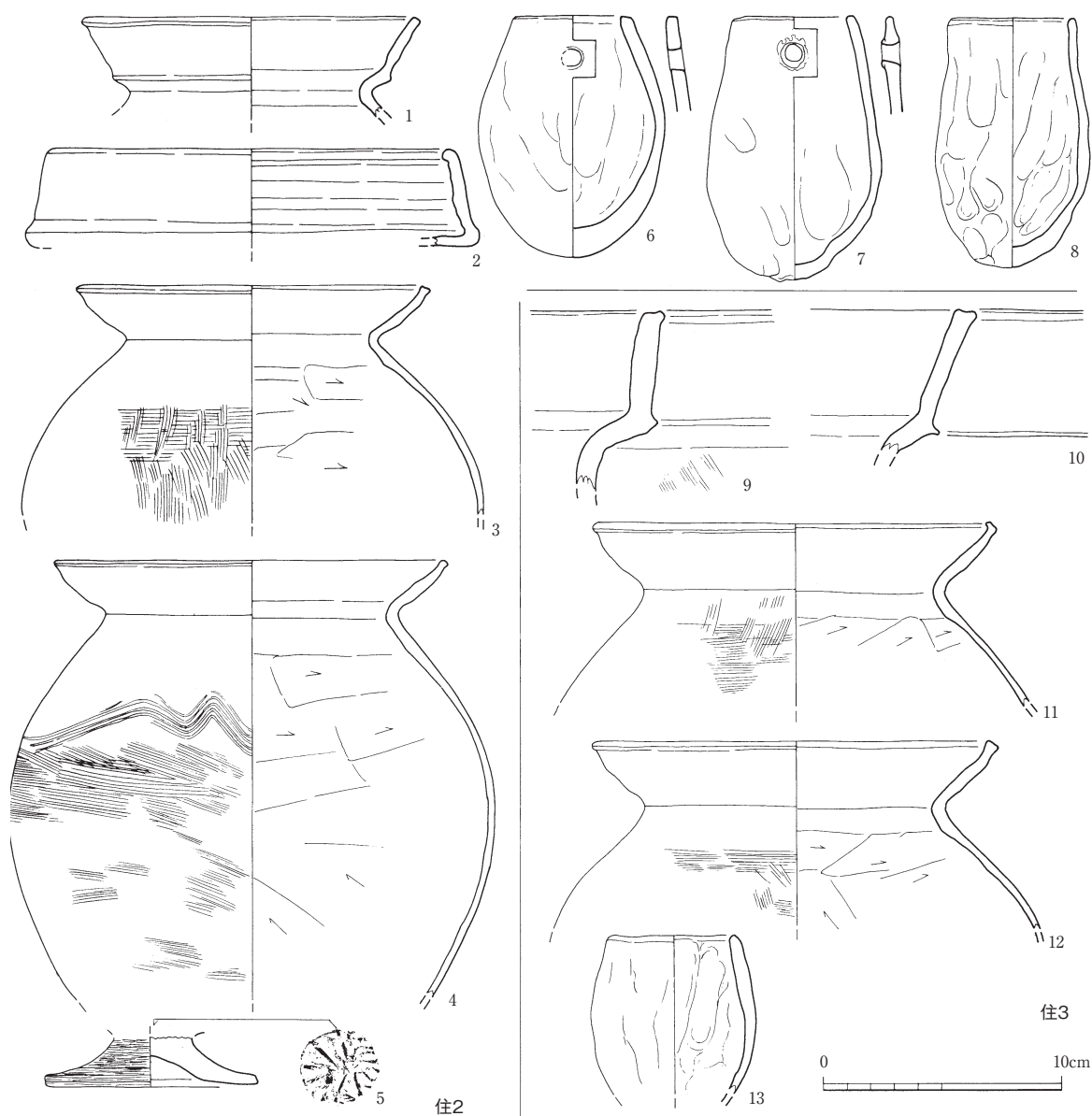
第8图 1号竖穴住居跡出土土器实测图2 (1/3)



第9図 1号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
10-1		住2覆土	山陰系二重口縁壺	口径143	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	胴内ケズリ。	1／8		38
2		住2覆土	東瀬戸内系?二重口縁壺	口径174	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内黄白色	口縁ヨコナデ	1／9		37
3		住2覆土	布留系甕	口径148、胴径192	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	胴外ハケ、内ケズリ。	1／2	器壁が薄い	40
4		住2覆土	布留系甕	口径165、胴径203	粘土やや粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外櫛描波状文。胴外横ハケ、内ケズリ。	1／2		39
5		住2覆土	脚付鉢	脚径89	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	脚上面にヘラ状工具による放射状の刻み。外縦ハケ後ミガキ、内ナデ	1／2		41
6	20	住2覆土	タコ壺	口径50、器高100	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	1／4		34
7	20	住2覆土	タコ壺	口径51、器高110	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	1／2	歪む	35
8		住2覆土	タコ壺	口径52、器高100	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	接合外ナデ、内ナデ上げ。	1／4		36
9		住3覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄歌褐色	外ナメハケ。	小片		4
10		住3覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ヨコナデ。	小片		45
11		住3覆土	布留系甕	口径168	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外黄白色～黄褐色	胴外横ハケ、ナデケズリ。	1／2		42
12		住3覆土	布留系甕	口径69	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	胴外横ハケ、内ケズリ。	1／6		43
13		住3覆土	タコ壺	口径52	粘土粗、1～3mm石英少	良好	暗茶褐色	外ナデ、内ナデアゲ。内ナデ上げ。	1／6		46

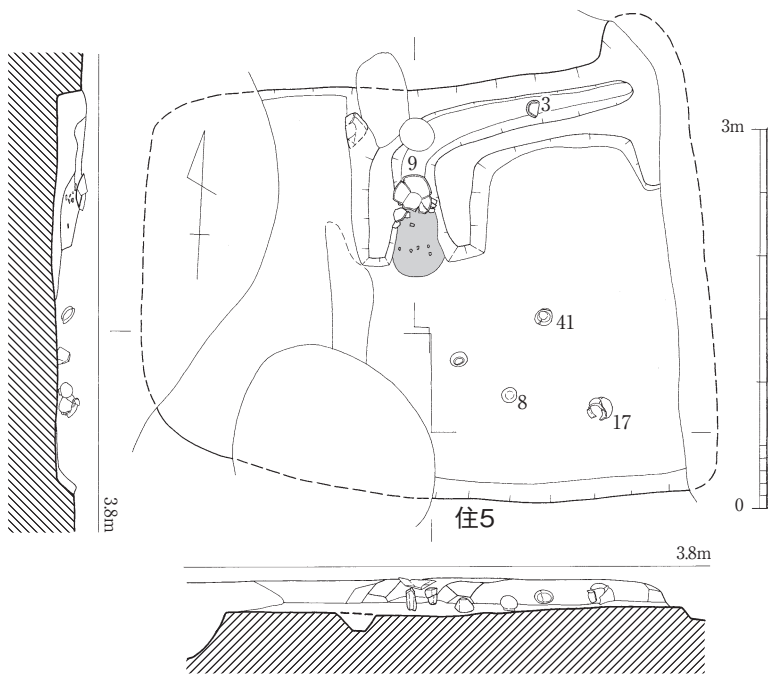
第4表 2・3号竪穴住居跡出土土器観察表



第10図 2・3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
13-1		住4 覆土	直口壺	口径160	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	ヨコナデ	1 / 8	口径不安	81
2		住4 覆土	山陰系二重口縁壺	口径170	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	内外ヨコナデ	1 / 10	口径不安	66
3	20	住4 カマド煙道	山陰系二重口縁壺	口径122、胴径148、器高138	粘土細、1～3mm石英・長石多	良好	黄褐色	外胴縦ハケ→横ハケ、内ケズリ	ほぼ完存	肩部にハケ状工具先による刻み	47
4		住4 覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ	小片		71
5	20	住4 覆土	山陰系二重口縁壺	口径105、胴径138、器高137	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	直口壺。口縁外縦ハケ、胴外縦・斜ハケ→横ハケ。内ケズリ。内胴下半に指頭圧痕顕著。	1 / 2	煤付着	50
6		住4 覆土	直口壺	口径108	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ミガキ	1 / 7		87
7		住4 覆土	直口壺	胴径90	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	外橙褐色、内黄茶食	外上半斜ハケ後ミガキ、下半ケズリ後ミガキ。内ナデ、指頭圧痕残る。	1 / 4		85

第5表 4号竪穴住居跡出土土器観察表 1

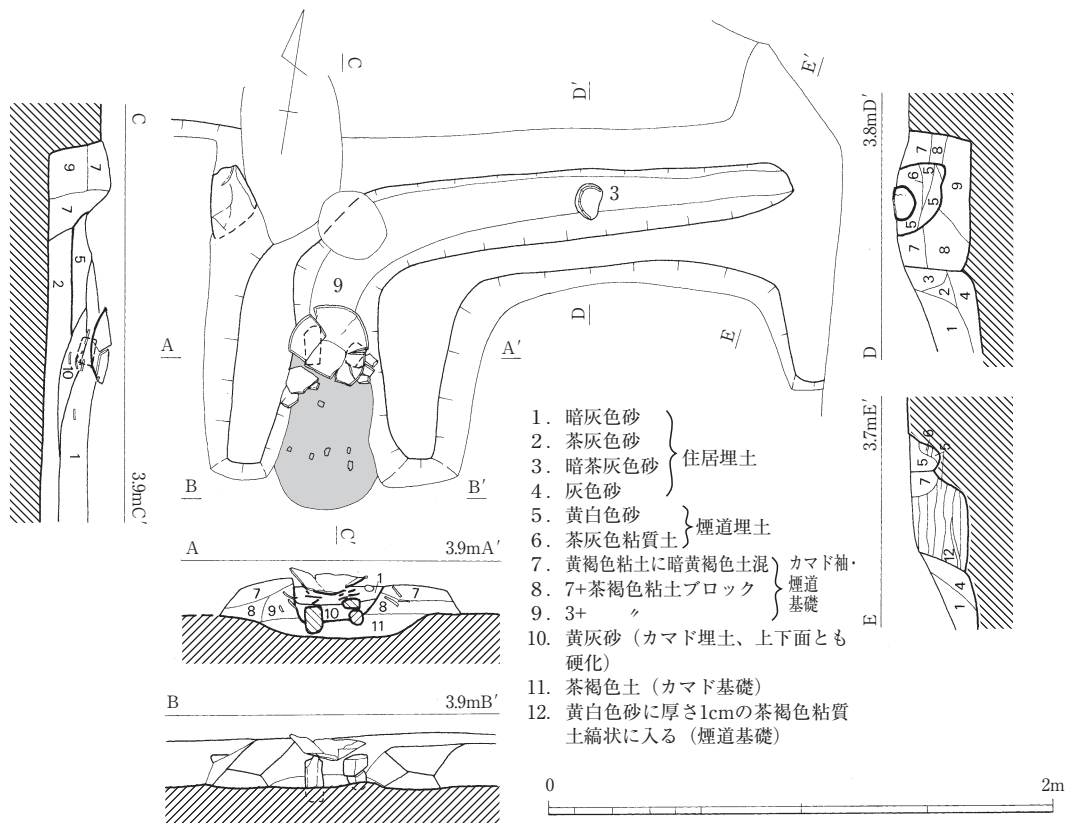


第11図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

発掘区の南西部、2号竪穴住居跡の東側に位置する。2号竪穴住居跡と51号土坑を切り、南側は攪乱によって損壊している。住居壁は北側と西側の一部を確認した。規模は詳らかではなく、遺存する床面の最大長は2.50mを測る。主軸に関しては、確認した二つの壁が直交関係にはないものの、概ね南北ないしは東西方向に軸をとるものと考えられる。床面の標高は3.7m。

出土遺物 (図版20、第10図、第4表)

9・10は山陰系二重口縁壺の小片。11・12は布留系甕で、ともに内湾する。11は口縁端部を内方に長くつまみ出し、内側に明瞭な段をなす。13はタコ壺。内面は指でナデ上げる。



第12図 4号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

4号竪穴住居跡（図版3、第11図）

発掘区の南西部、3号竪穴住居跡の南東側に位置する。5号住居跡と8号竪穴住居を切り、東側と西側は攪乱によって損壊している。平面プランは西側に向かって狭まる長方形で、北辺の東端部に長さ30cmほどの張り出しを有する。住居跡の規模は残存長軸長4.17m、短軸長3.45mを測る。主軸をN-91°-Wにとる。カマドが付設される。住居跡の埋土は暗灰色砂質土である。床面の標高は3.5m。床面を若干掘り下げ過ぎたため、復元して図化している。床直上から纏まって土器が出土している。

カマド（図版4・5、第12図）

住居跡北壁中央部に付設され、煙道が住居壁に沿って東側に伸びる。燃烧部の主軸は壁に直交する。

カマドの構築土は大きく上下2層に分かれる（⑦⑧）。主として黄褐色～茶褐色粘質土に焼土ブロックを混合させて構築し、袖の内側部分についてはこれに土器片を補強材として埋め込んでいる。袖の部分は極めて硬く締まっている。カマド袖の構築に先立って径70cm、深さ10cmの掘込地業を行い（⑪）、茶褐色砂を充填している。住居跡北壁から90cmほどの床面には左右に支脚石を配する。左側は10cm×14cmの直方体、右側は二石を積んで左側の支脚石とレベルを揃える。支脚石の前面は55cm×40cmの範囲で床面が硬化している。なお、この下部でも燃烧部としての硬化面の存在が認められる（⑩下面）。また、支脚石の上部には甕の底部分が据わった状態で遺存していた。

煙道部もカマド袖と一連の作業によって構築され、その土質も基本的には同じである。煙道の底面は燃烧部から緩やかにレベルを上げて傾斜する。立ち上がりについては煙出し部が削平を受けているため確認できていないが、北東部に存在する住居壁の張り出しに対応する可能性も考えられる。煙道の断面形状は径26cmの略円形で、壁際には炉壁様のブロックが詰められ、壁面は凹凸が著しい。煙道の埋土は黄白色砂を主体とする。なお、煙道部の構築土は住居跡北壁から東に延び、住居壁の北東隅部からさらに東壁に沿うように、南に向かって40cmほど張り出している。この部分の土層は黄白色砂と厚さ2～3mmほどの茶褐色粘質土が互層（⑤）になっていて煙道部分とは明らかに異なる構築土である。これは他例のカマド下部地業の土層に似る。

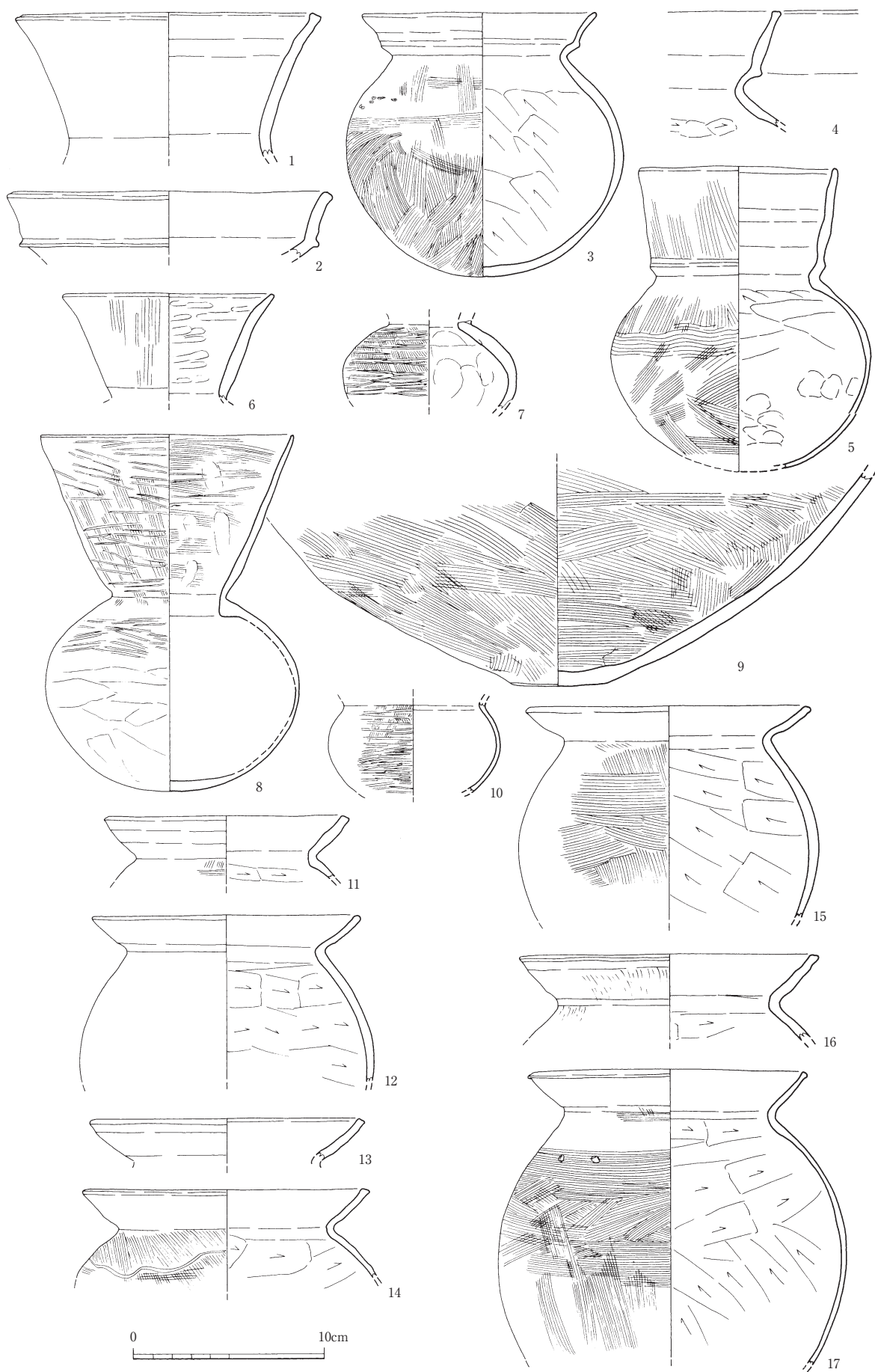
出土遺物（図版20・21図、第13～16図、第6・7表）

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
13-8	20	住4 No.3	直口壺	口径133、胴径136、器高186	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	茶褐色	口縁外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ。胴外上半ミガキ、下半ケズリ後ナデ、内ナデか。	2／3		8
9		住4 覆土	第五様式系壺	底径51	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、黒斑	暗黄褐色	平底。内外横ハケ。	1／3		95
10		住4 覆土	小形丸底壺	胴径90	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外上半縦ハケ後ミガキ、内ナデ。	1／6	煤付着	84
11		住4 覆土	布留系甕	口径130	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁部厚い。外横ハケ、内ケズリ。	1／5		61
12		住4 覆土	布留系甕	口径135	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外面摩滅。内ケズリ。	1／4	煤付着	60
13		住4 覆土	布留系甕	口径140	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗茶褐色	内外ヨコナデ	1／7		70
14		住4 覆土	布留系甕	口径142	粘土やや細、1～3mm石英多	良好	茶褐色	ヘラ描き波状文。外縦ハケ、内ヘラケズリ。	1／10		64

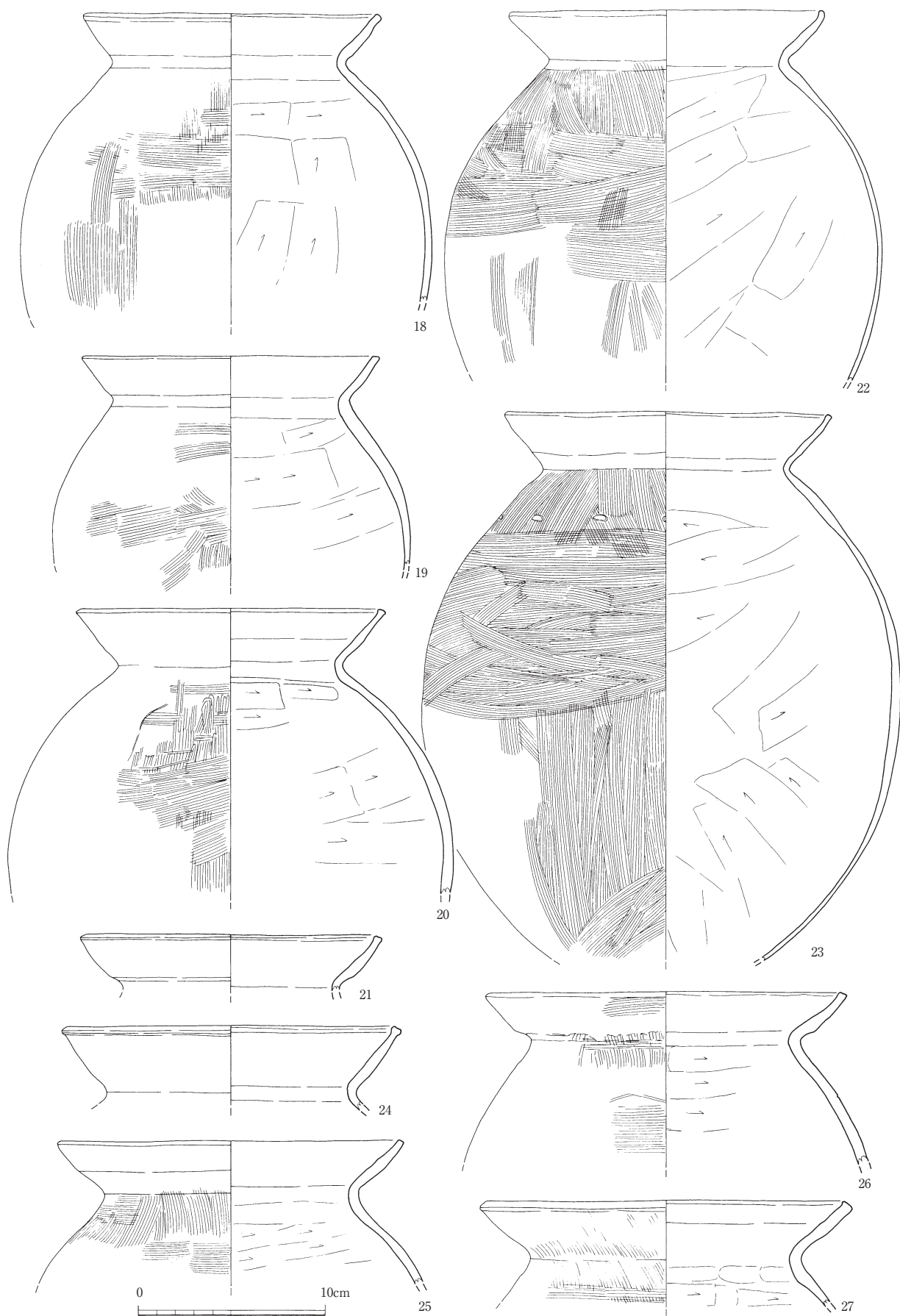
第6表 4号竪穴住居跡出土土器観察表2

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
13-15		住4 覆土	布留系甕	口径144、胴径158	粘土細、1～3mm 石英多	良好	黄灰色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／4	煤付着	59
16		住4 覆土	布留系甕	口径150	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ、内ケズリ。	1／3	煤付着	57
17	20	住4 No2	布留系甕	口径147、胴径186	粘土細、1mm石英 少	良好	茶褐色	肩に竹管文。外上半横ハケ、下半縦ハケ。内ケズリ。	2／3		96
14-18		住4 覆土	布留系甕	口径152、胴径212	粘土やや粗、1～3mm 石英多	良好	黄灰色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ	1／2		56
19		住4 覆土	布留系甕	口径158	粘土やや粗、1～3mm 石英多	良好	黄灰色	口縁端部水平な面をなす。外横ハケ、内ケズリ。	1／2	煤付着	58
20		住4 覆土	布留系甕	口径159、胴径238	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	黄灰色	肩部に浅いヘラ描き沈線。外面ハケの折り返し顕著。縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	1／2		100
21		住4 覆土	布留系甕	口径160	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	橙褐色	内外ヨコナデ。	1／8		69
22	21	住4 覆土	布留系甕	口径168、胴径230	粘土細、1～3mm 石英多	良好	灰褐色	口縁端部内湾。外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／2	煤付着	54
23	21	住4 覆土	布留系甕	口径174、胴径250	粘土細、1～2mm 石英多	良好	茶褐色	長胴で口縁部薄い。肩に竹管文。外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／2	煤付着	55
24		住4 覆土	布留系甕	口径180	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	暗黄褐色	内外ヨコナデ。	1／5		68
25		住4 カマ ド袖内	布留系甕	口径184	粘土やや粗、1～3mm 石英多	良好	黄褐色	口縁端部丸い。外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／4		75
26		住4 覆土	布留系甕	口径185	粘土やや粗、1～3mm 石英少	良好	黄灰色	ヘラ描き波状文。外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／8		77
27		住4 覆土	布留系甕	口径192	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	黄茶色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／4		65
15-28		住4 カマ ド	布留系甕	口径208、胴径238	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	底部欠	煤付着	76
29		住4 カマ ド	布留系甕	口径204	粘土やや粗、1～3mm 石英少	良好	黄茶色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／7	煤付着	73
30		住4 覆土	布留系甕		粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	黄褐色	櫛描き波状文。外横ハケ、内ケズリ。	1／5		79
31		住4 覆土	布留系甕		粘土やや粗、1～3mm 石英多	良好	黄灰色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／5	煤付着	74
32		住4 覆土	布留系甕	胴径262	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	外暗黄褐色、内黄 灰色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／5		72
33		住4 覆土	布留系甕	胴径206	粘土やや細、1～3mm 石英多	良好	黄灰色	ヘラ描き沈線（波状?）。外縦ハケ→横ハケ。内板ケズリ。	1／4		63
34		住4 覆土	布留系甕	胴径180	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	灰褐色	ヘラ描き沈線。外横ハケ、内ケズリ。内頸下指頭圧痕	1／5		67
35		住4 覆土	甕	胴径120	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	黄灰色	外工具ナデ様のミガキ、内板ナデ。	1／10		62
36		住4 覆土	高坏	脚径100	粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内ナデ。2孔。	1／6		92
37		住4 覆土	高坏	脚径110	粘土やや細、1～3mm 石英少	良好	橙褐色	外縦ハケ後ミガキ、内ナデ。焼成前2孔。	1／2		91
38		住4 カマ ド直下	高坏	脚径113	粘土やや細、砂粒をほとん ど含まず	良好	橙褐色～茶褐色	杯外ハケ後ナデか、内放射状暗文。脚内外斜ハケ、内上半ナデ。焼成前2孔。	1／2		93
39		住4 覆土	外反口縁鉢	口径166、胴径130	粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	橙褐色、黒斑	外縦ハケ後ミガキ、内ミガキ。	底部欠		88
40	21	住4 覆土	外反口縁鉢	口径152、胴径112、器高58	粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	橙褐色	外ミガキ、底ケズリ後ミガキ。内ミガキ、下半板ナデ。	1／2		51
16-41	21	住4 No.1	外反口縁鉢	口径162、胴径124、器高60	粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	黄褐色	外ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。	ほぼ完存		48
42		住4 覆土	外反口縁鉢		粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	橙褐色	外ハケ後ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ミガキ。	小片		89
43	21	住4 覆土	鉢	口径130、器高30	粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	橙褐色	内外ミガキ	1／3		53
44		住4 覆土	鉢	口径134	粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	橙褐色	外ミガキ、下半ケズリ後ミガキ。内ミガキ。	1／3		90
45	21	住4 覆土	鉢	口径138、器高34	粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	橙褐色	内外ミガキ。	1／3		52
46		住4 覆土	脚付き鉢	脚径77	粘土やや粗、1～3mm 石英少	良好	黄灰色～橙褐色	内外ナデ。外面に指頭痕跡。	1／2		78
47		住4 覆土	器台	口径86	粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	橙褐色	内外ミガキ。	1／8		86
48		住4 覆土	瓶把手		粘土細、砂粒をほとん ど含まず	良好	茶灰色	手握ね。剥落部分にも成形時の指頭圧痕顕著。	小片		94
49		住4 カマ ド	瓶	口径134	粘土やや粗、1～3mm 石英多	良好	暗黄褐色	外縦ハケ、内ケズリ。	1／6	傾きやや不安。半島系土器か	82

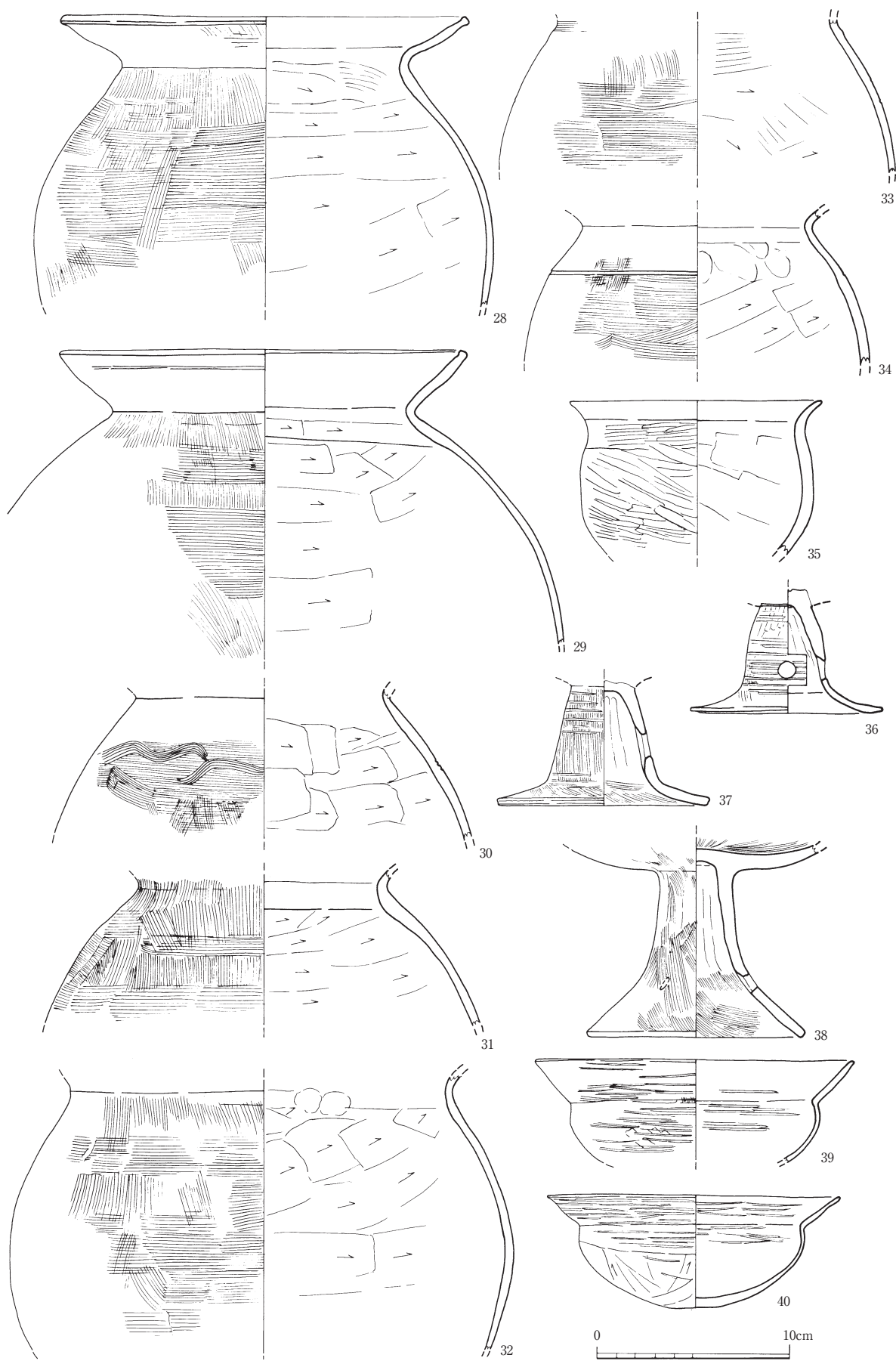
第7表 4号竪穴住居跡出土土器観察表3



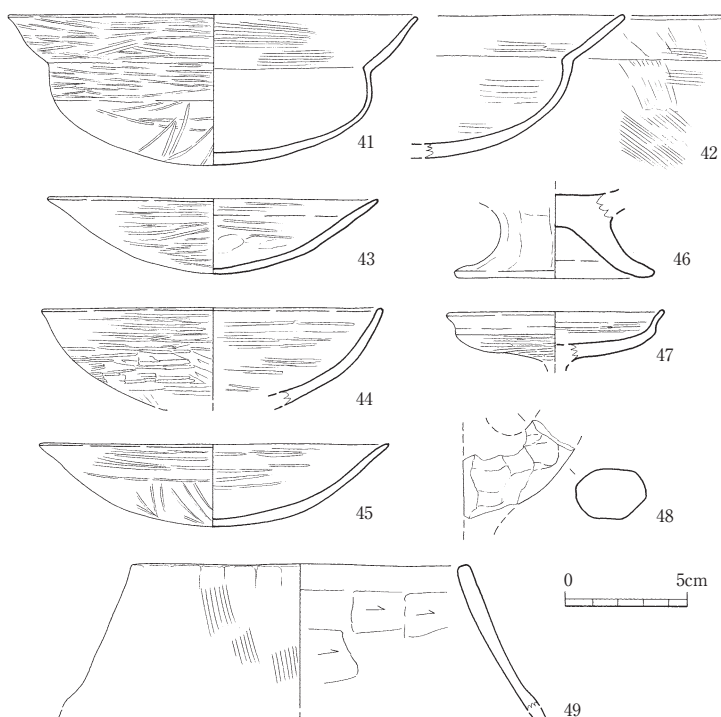
第13图 4号竖穴住居迹出土土器实测图1 (1/3)



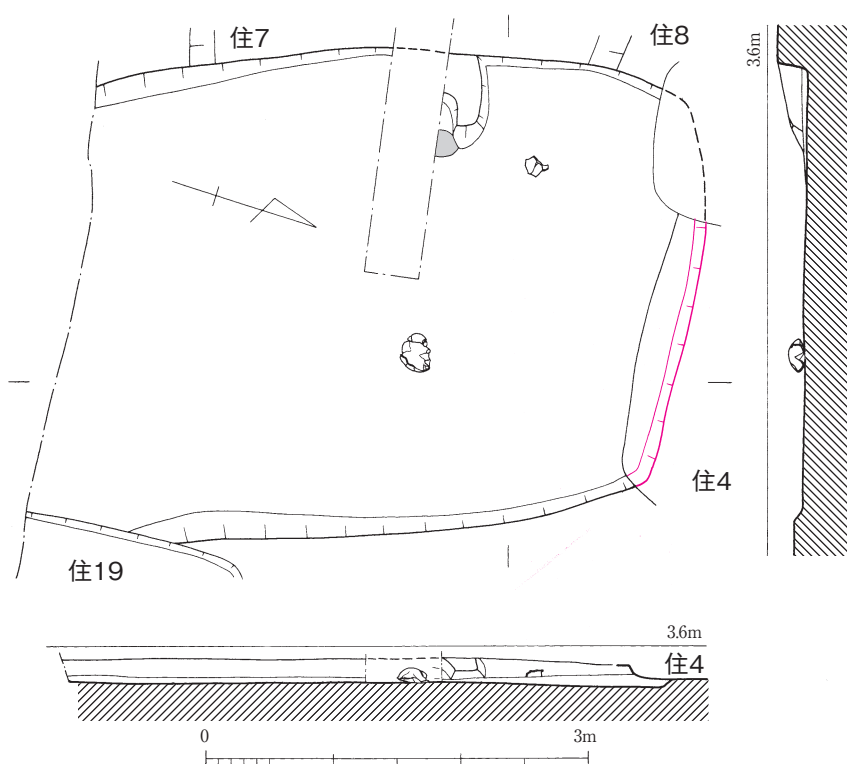
第14图 4号竖穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)



第15图 4号竖穴住居跡出土土器实测图3 (1/3)



第16図 4号竪穴住居跡出土土器実測図4 (1/3)



第17図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1は在地系の直口壺。口縁端部に面をなす。2～4は山陰系二重口縁壺。4は完形。肩部にハケ状工具端部押圧による刻みが入る。5はやはり山陰系と考えられる二重口縁の直口壺。口縁部は直線的に立ち上がり、端部を丸く収める。6～8は畿内系直口壺。7は小形である。9は第五様式系の壺底部。平底。10は小形丸底壺。

11～34は布留系甕。端部内側に段を持つものと持たないものがある。20の肩部外面には縦方向のハケの折り返しの痕跡が顕著に残る。胴部外面の調整は23にみられるように、概して縦ハケの後、胴部中位～上半部のみに横ハケを施すものが多い。23は他の個体に比べて長胴になる。

17・23の肩部には竹管文、14・26の肩部にはヘラ描き波状文、30には櫛描き波状文、34の肩部にはヘラ描き沈線文が施される。35は口縁部が外反する小形の甕で、器形・調整とも特異。外面は工具ナデ様のミガキ、内面は板状工具ナデ。

36～38は高坏。

39～42は外反口縁鉢。43～45は浅い鉢。調整は41の口縁部内面が横ハケのほかは、いずれも横方向のミガキ。46は脚付き鉢。47は小形器台の受け

部。口縁は短く外反する。

48は山陰系甑の把手小片と思われる。49も甑の口縁部小片。半島系の軟質土器の可能性も考えられる。傾きにやや不安を残す。

5号竪穴住居跡（図版3・5、第17図）

発掘区の南辺やや西寄り、4号竪穴住居跡の南側に位置する。北側を4号竪穴住居跡に、南東側を19号竪穴住居跡に切られ、西側で7号竪穴住居跡・8号竪穴住居跡を切る。南側は調査区外となる。平面プランは長方形で、規模は長軸方向で、遺存する床面の最大長5.17m、短軸長3.83mを測る。主軸をN-22°-Wにとる。カマドが付設される。住居跡の埋土は暗灰色砂質土である。床面の標高は3.3m。

埋土中から砥石が出土した。

カマド（図版5、第18図）

住居跡東側中央よりやや北側寄りに付設され、燃烧部の主軸は壁に直交する。カマドの南半は現代構造物のコンクリート基礎の下部にあたるため、東半（右袖）のみの確認にとどまった。

カマドの構築土は黄褐色砂質土と赤褐色粘土ブロック（焼土）を交えた層（②）からなり、その下部にはカマドの袖の範囲に対応した掘り込みがみられる（③）。住居西壁から60cmの位置に、20cm×17cm（+α）の範囲で赤褐色の硬化面が認められる。

出土遺物（図版21、第19・20図、第8表）

1は在地系直口壺。甕になる可能性もある。2～4は山陰系二重口縁壺で器壁が薄い。6・7は小形丸底壺で、7には細かいミガキが施される。

8～18は布留系甕。8・9のように口縁端部を丸く収めるもの、10のように端部を外方につまみ出し平坦面をなすもの、11・14のように端部の内側に段を有するものなどがある。10は水平ないしはやや左上がりのタタキ痕を残す。

19・20は高坏。21～23は鉢。21は体部が直立する。23は低い脚が付く。

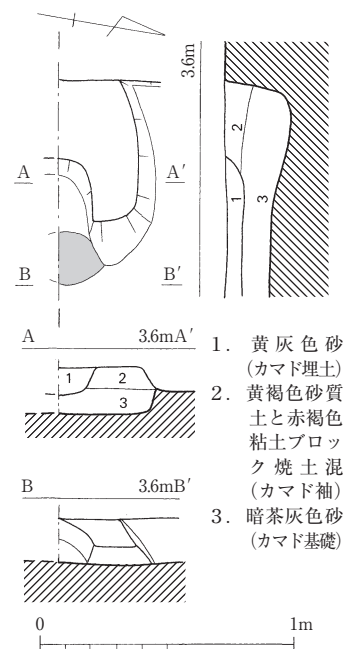
24～26は小形器台。27は山陰系鼓形器台の脚部。

28～30は半島系土器。28は先端が丸い工具先で浅い沈線を施した壺の肩部。頸径は26cmほど。

32～34はタコ壺。31は小形で薄い。穿孔は32以外はいずれも一か所。内外両側から穿孔したものと、外側からのものがある。

6号竪穴住居跡（第21図）

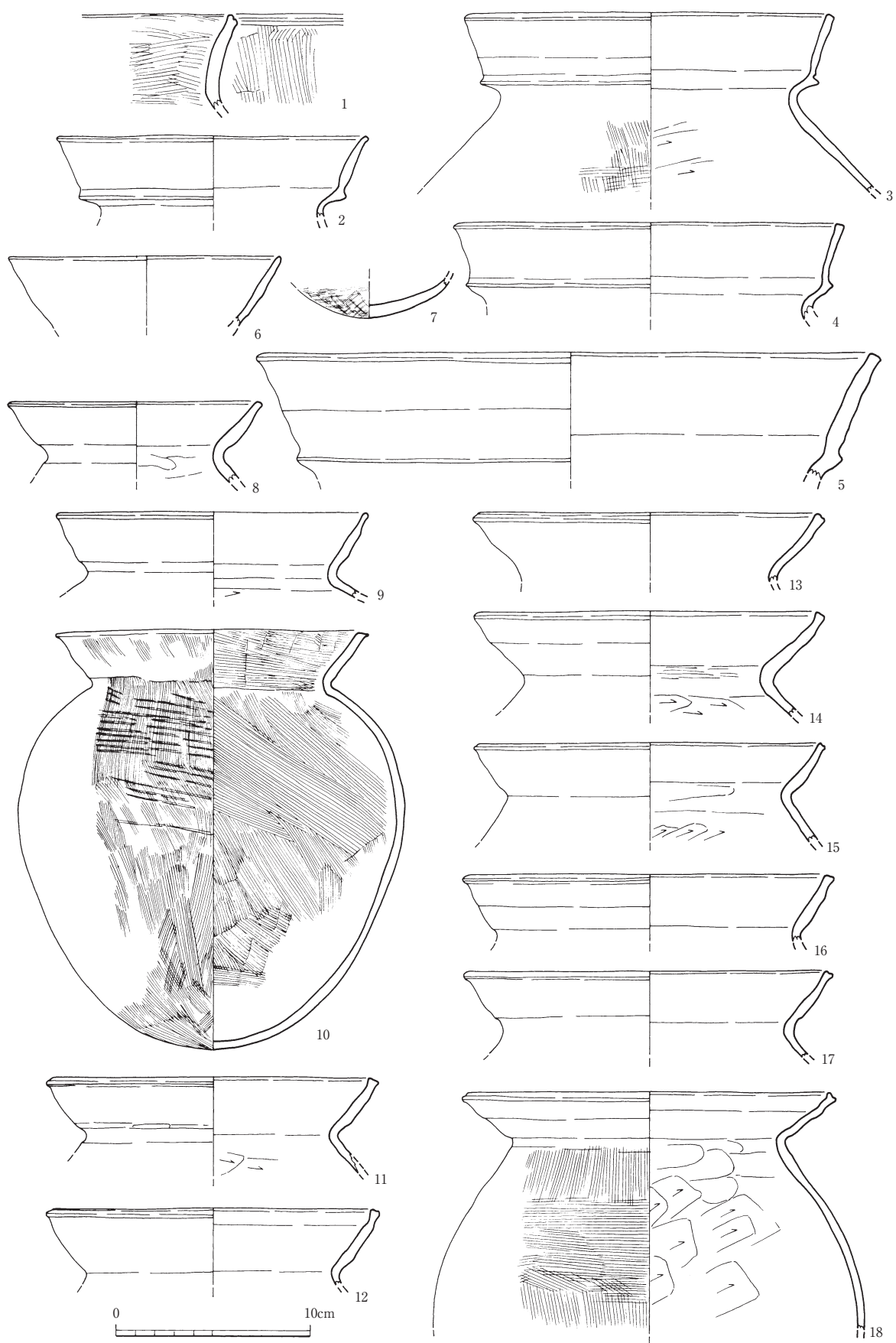
発掘区の南西部、7号竪穴住居跡の西側に位置する。東側と北側は攪乱によって大きく損壊しており、住居壁は南東部のコーナーを確認したのみである。東側は7号竪穴住居跡に切られ、南側で10号竪穴住居跡を切る。規模等については詳らかではないが、遺存する床面の最大長は4.17mを測る。床面の標高は3.6m。確認した床面の北東寄りには略東西方向に主軸をとる炉跡が存在する。現代構造物のコンクリート基礎下部にあたるため北側半分のみしか確認していない。長軸長86cm、深さ14cmを測る。炉跡の埋土は炭化物粒を含む黒色土である。住居跡の南東部コーナー際で柱穴が確認された。



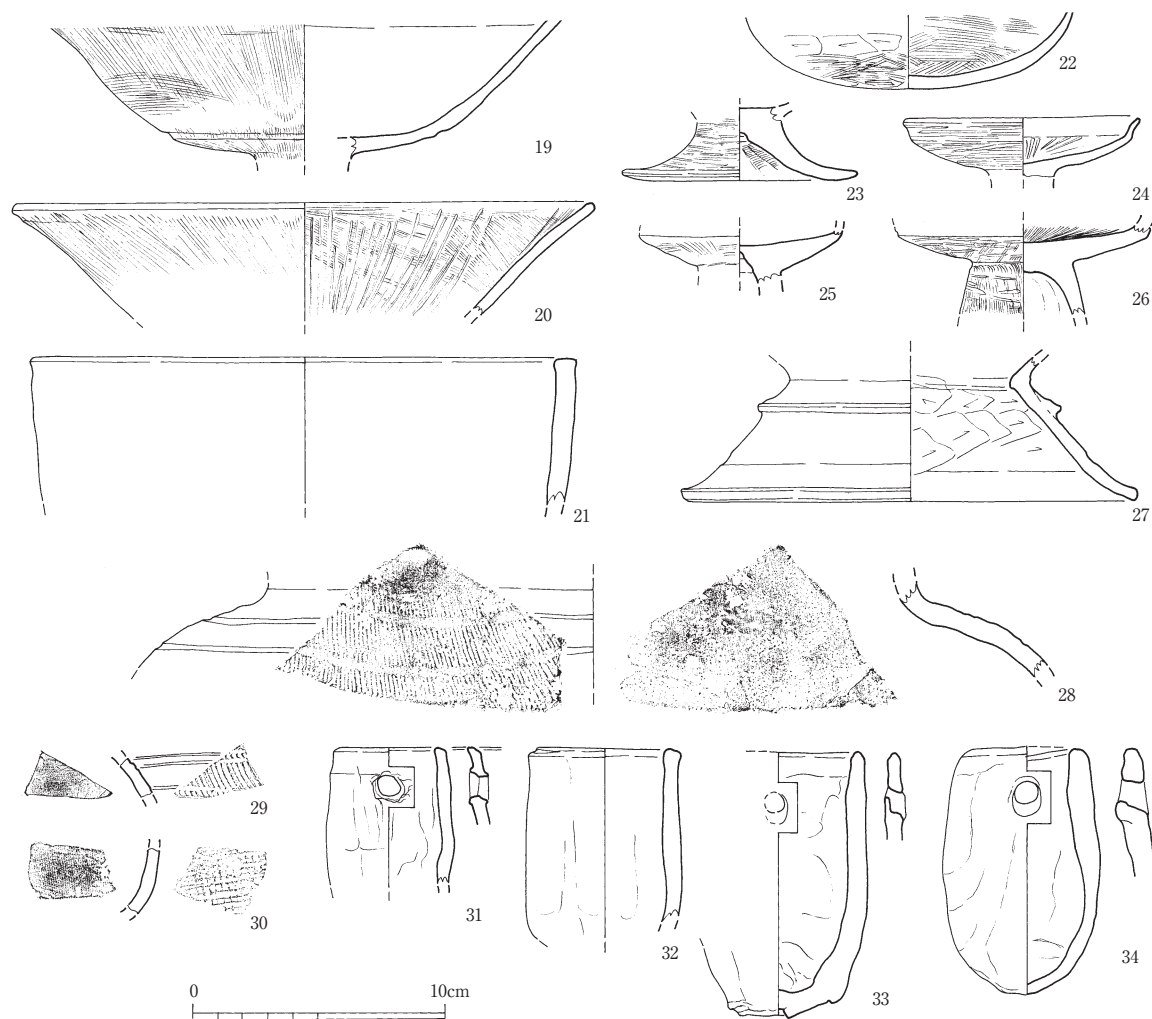
第18図 5号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
19-1		住5 覆土	在地系直口壺		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外縦ハケ、内横ハケ。	小片		103
2		住5 覆土	山陰系二重口縁壺	口径160	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	1／10		110
3		住5 カマド	山陰系二重口縁壺	口径190	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黒灰色	胴外縦ハケ後横ハケ、内ケズリ。	1／6	煤付着。内外に鼠歯形。	117
4		住5 カマド	山陰系二重口縁壺	口径200	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	内外ヨコナデ。	1／8	煤付着	116
5		住5 覆土	山陰系二重口縁壺	口径320	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄茶色	内外ヨコナデ。	1／12		112
6		住5 覆土	小形丸底壺	口径140	粘土細、砂粒をほとんど含まず	やや甘い	橙褐色	内外ヨコナデ。	1／4		123
7		住5 覆土	小形丸底壺		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	暗橙褐色	外ケズリ後細かいミガキ、内ナデ。	底部完存		121
8		住5 覆土	小形丸底壺	口径130	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄茶色	胴内ナデか。	1／8		114
9		住5 覆土	布留系甕	口径162	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外黄白色、内暗灰色	胴内ケズリ。	1／8		111
10	21	住5 カマド	布留系甕	口径160、胴径198、器高215	粘土粗、1～3mm石英多	良好	暗黄褐色	口縁端部に面をなす。口縁外縦ハケ、内横ハケ。胴外タタキ後縦ハケ、内ハケ。底内ナデ。	1／2		97
11		住5 覆土	布留系甕	口径172	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	胴内ケズリ。	1／6		118
12		住5 覆土	布留系甕	口径172	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	内外ヨコナデ。	1／8		109
13		住5 覆土	布留系甕	口径180	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	板状工具によるヨコナデ。	1／8		108
14		住5 覆土	布留系甕	口径180	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	頸内横ハケ。胴内ケズリ。	1／8		106
15		住5 覆土	布留系甕	口径180	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗茶色	胴内ケズリ。	1／8	煤付着	102
16		住5 覆土	布留系甕	口径190	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、一部黒化	茶灰色	内外ヨコナデ。	1／12		105
17		住5 覆土	布留系甕	口径188	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ヨコナデ。	1／12		104
18		住5 覆土	布留系甕	口径192	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	外暗灰色、内橙褐色	頸内ナデ。胴外縦→横ハケ、内ケズリ。	1／5	煤付着	115
20-19		住5 覆土	高坏	口径210	粘土細、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	外縦ハケ、内ナデか。	1／4	内面に鼠歯形。	122
20		住5 覆土	高坏	口径230	粘土細、1～3mm石英多	良好	暗橙褐色	外縦ハケ、内斜ハケ→暗文。	1／4		127
21		住5 覆土	鉢	口径216	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	1／10		107
22		住5 覆土	鉢	口径130、器高13	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外ケズリ後細かいミガキ、内ハケ。	1／6		124
23		住5 覆土	脚付鉢	脚径94	粘土細、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	外ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ミガキ。内ハケ工具ナデ。	1／6		120
24	21	住5 覆土	器台	口径94	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外ミガキ、内放射状ミガキ。	受け部完存		99
25		住5 覆土	器台		粘土細、砂粒をほとんど含まず	やや甘い	暗橙褐色	外ハケ、内ナデ。	1／2	内外面に鼠歯形	125
26		住5 覆土	器台		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	明橙褐色	外縦ハケ後ミガキ。受け内放射状ミガキ。脚内ナデ。	2／3		126
27		住5 覆土	山陰系鼓形器台	脚径180	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	明橙褐色	外ヨコナデ、内ケズリ。	1／4		119
28	28	住5 覆土	半島系土器壺		粘土やや粗、1mm以下石英多	瓦質	黒灰色	2条の浅い沈線。外平行タタキ、内ナデ。	小片		1118
29	28	住5 覆土	半島系土器壺		精良、砂粒をほとんど含まず	陶質、須恵器のよう	灰色	3条の沈線。外平行タタキ、内ナデ。	小片		1119
30	28	住5 覆土	半島系土器		粘土細、微砂粒僅か	瓦質	灰褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		1121
31		住5 覆土	タコ壺	口径45	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	内外ナデ。	1／2		130
32		住5 覆土	タコ壺	口径60	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗橙褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	1／2		128
33		住5 覆土	タコ壺	口径70、器高104	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ナデ。	1／2		129
34	21	住5 覆土	タコ壺	口径50、器高98	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外ナデ、内ナデ上げ。	口縁一部欠		98

第8表 5号竪穴住居跡出土土器観察表



第19图 5号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)



第20図 5号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

出土遺物 (図版21、第22図、第9表)

1は畿内系二重口縁壺。全体に摩滅している。

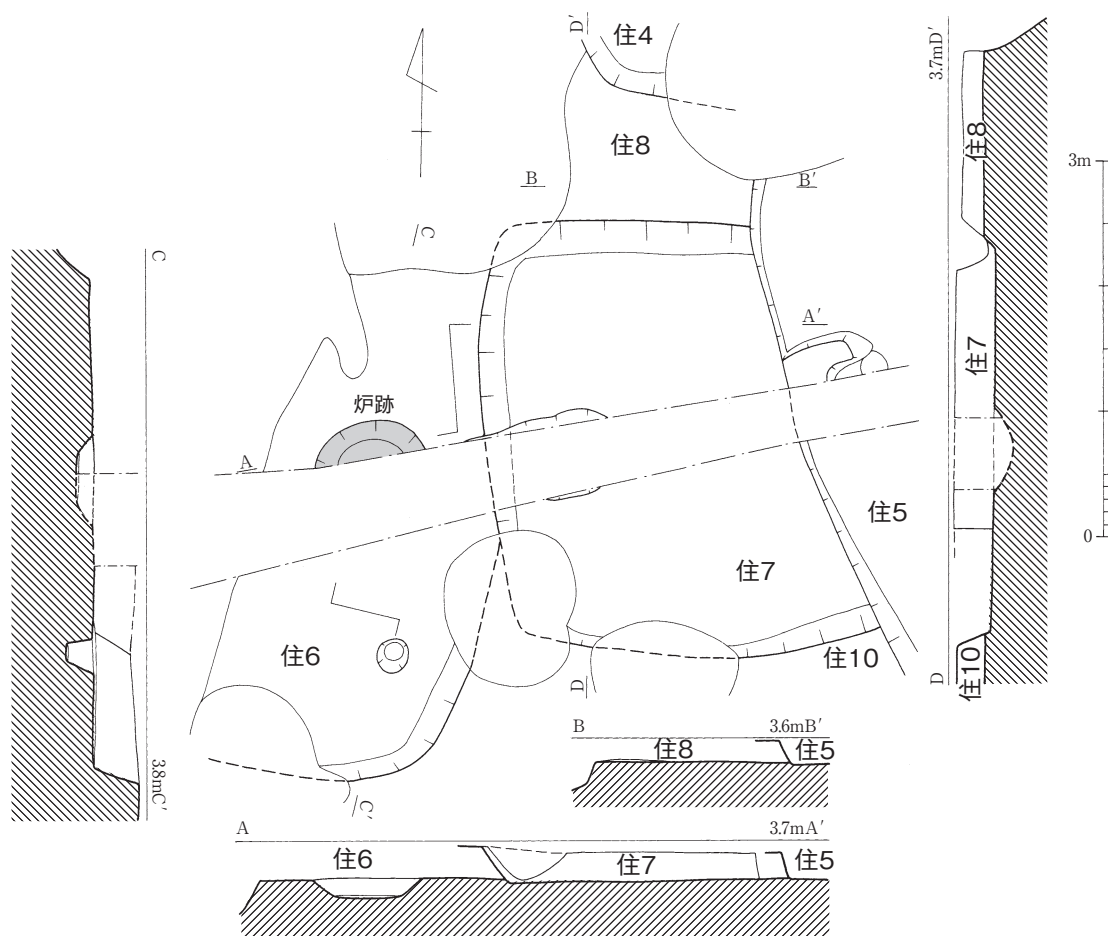
2は甕で口縁端部を外下方に伸ばす。3・4は布留系甕。4はヘラ描波状文を施す。

7号竪穴住居跡 (図版3、第21図)

発掘区の南西部、6号竪穴住居跡の東側に位置する。東側を5号竪穴住居跡に切られ、北側で8号竪穴住居跡、西側で6号竪穴住居跡、南側で10号竪穴住居跡を切る。平面プランは方形と考えられ、規模は南北方向で3.48mを測る。軸はほぼ南北方向にとる。炉跡や柱穴は確認されなかった。

出土遺物 (図版21、第23・24図、第10表)

1は山陰系二重口縁壺。口縁部は直立し、端部は丸く収める。外面調整は縦ハケの後、胴部中位から上半部にかけて横ハケ。2は畿内系二重口縁壺の口縁部小破片。内面には丁寧な放射状のミガキを施す。3・4は直口壺。4は部分的に素地の面が見えるが、外面黒塗り。作りが丁寧である。口縁端部は丸く収める。5は在地系の甕。全面にハケを施す。6・7は布留系甕。6は口縁端部をつまみ上げ、内側に段をもつ。内面調整はケズリのままでなくナデて仕上げる。



第21図 6～8・10号竪穴住居跡実測図 (1/60)

8は高坏の脚柱。9～は外反口縁鉢。12は脚付鉢でミガキは比較的粗い。16は半島系土器。外面には成形時の指頭圧による凹凸がやや顕著である。18のタコ壺は外面調整が棒状工具によるミガキ様の工具ナデ。

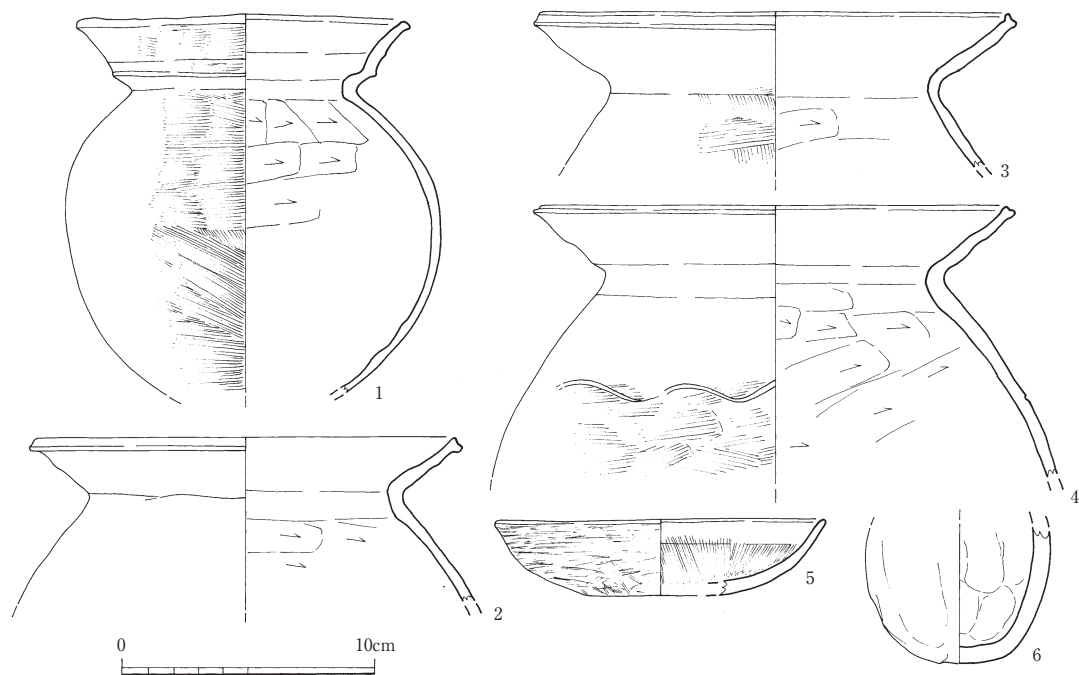
8号竪穴住居跡 (第21図)

発掘区の南西部、4号竪穴住居跡と7号竪穴住居跡に挟まれる部分に位置する。8号竪穴住居跡は4号竪穴住居跡・5号竪穴住居跡・7号竪穴住居跡に切られている。床面レベルは5号竪穴住居跡よりも3cmほど高く、また、7号竪穴住居跡よりも10cmほど高い。この竪穴住居跡は住居壁を検出しておらず、また、確認した床面積もきわめて狭小であるため竪穴住居跡とするには疑問も残るが、他の竪穴住居跡の埋土に酷似した灰色砂質土であり、攪乱坑の断面観察において明確に切り合いを有すること、また、底面がフラットであることから、竪穴住居跡として報告しておく。

埋土中から有孔滑石製品が出土している。

出土遺物 (図版21、第25図、第11表)

1～3は直口壺。2は口縁端部を外方につまみ出す。肩部にヘラ描き沈線を巡らせる。3は口縁部が短く外反し、口縁部～頸部にかけて器壁が厚い。



第22図 6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
22-1	21	住6覆土	畿内系二重口縁壺	口径132、胴径156、残高149	粘土やや細、1～3mm石英多	やや甘い	淡黄褐色	口縁外横ハケ、内ナデ。胴外斜ハケ→横ハケ、内ケズリ。	胴部下半1/2欠	煤付着	169
2		住6覆土	布留系?甕	口径170	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄茶色	外・口縁内板状工具ヨコナデ。胴内ケズリ。	1/4	煤付着	134
3		住6覆土	布留系甕	口径190	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黒灰色	胴外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	1/10		133
4		住6覆土	布留系甕	口径190	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄茶色	ヘラ描波状文。外横ハケ、内ケズリ。	1/8		132
5		住6覆土	鉢	口径130、器高30	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	明橙色	外ケズリ後細かいミガキ。内放射状の密な暗文。	1/2		135
6		住6覆土	タコ壺		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	底部完存		136

第9表 6号竪穴住居跡出土土器観察表

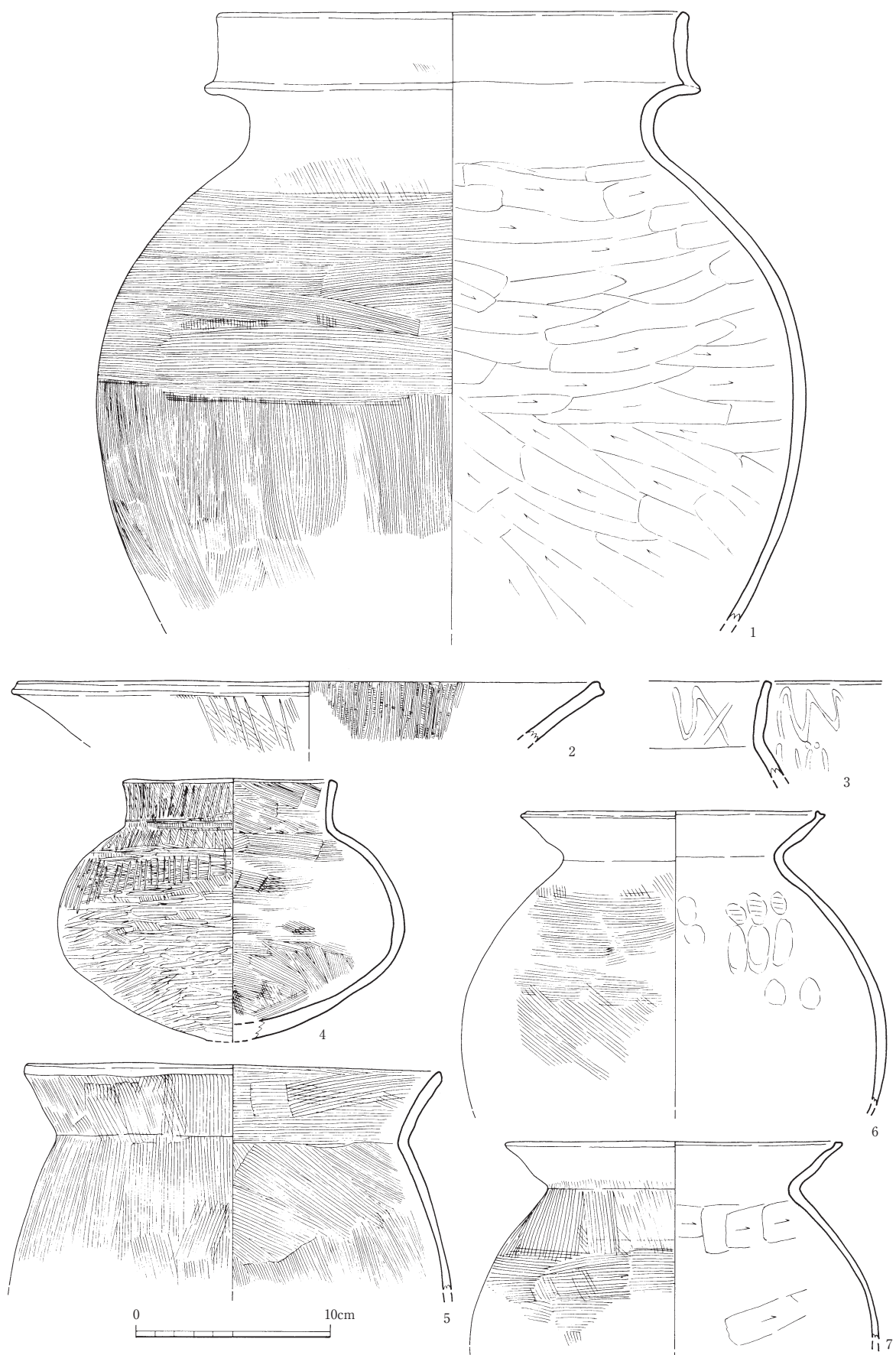
4～6は布留系甕。4は口縁端がややくぼみ、外方につまみ出して丸く収める。6の調整は縦ないしは斜め方向のハケの後、肩部のみ横方向のハケを行う。

9号竪穴住居跡 (第26図)

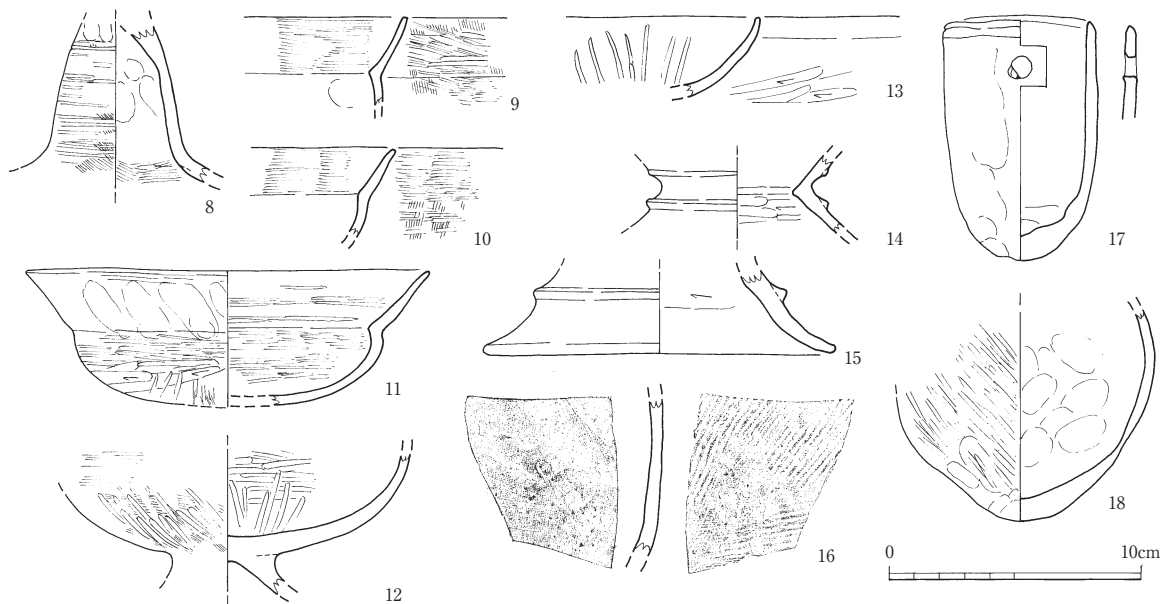
発掘区の南西部、1号竪穴住居跡と2号竪穴住居跡に挟まれて位置する。東側で2号竪穴住居跡を切る。大部分が攪乱によって削平され、床面の一部を確認したのみであるが、カマドを付設するものである。住居跡の主軸は定かではないが、遺存している壁から考えるとN-35°-Wとなる。床面の標高は3.7mを測る。

カマド (第27図)

住居跡北東に面する壁に付設され、その位置は概ね壁中央部付近に位置する。燃烧部は壁に直交する。右袖部は大きく欠失している。



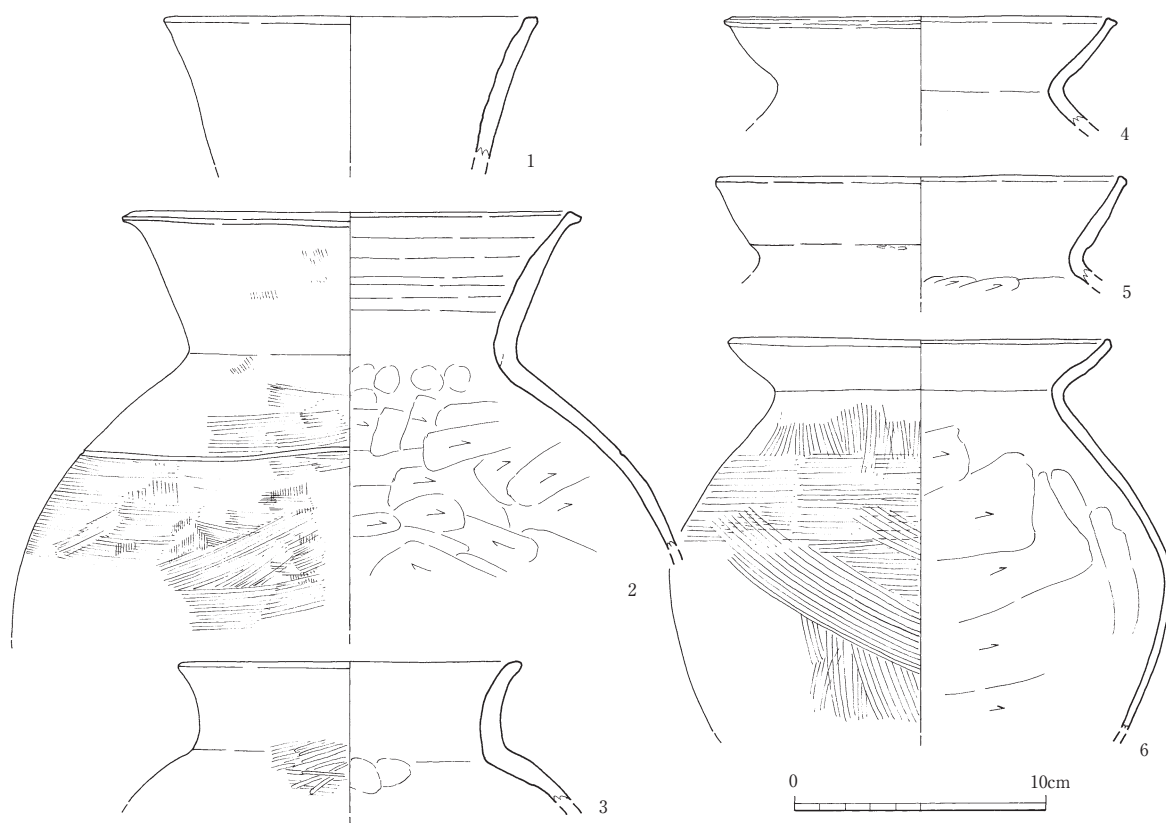
第23图 7号竖穴住居迹出土土器实测图1 (1/3)



第24図 7号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
23-1		住7覆土	山陰系二重口縁壺	口径244、胴径376、残高314	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	外黄白色、内淡黄褐色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	底部欠	煤付着	153
2		住7覆土	畿内系二重口縁壺	口径300	粘土やや細、微砂粒多	良好	茶褐色	口縁外斜ハケ後暗文、内横ハケ後密なミガキ。	小片		152
3		住7覆土	直口壺		粘土細、1～3mm石英少	良好	外明橙色、内橙色	内外に粗いミガキ	小片		151
4	21	住7覆土	直口壺	口径110、胴径178、残高132	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	口縁外斜ハケ後ミガキ、胴上斜ハケ後ミガキ→暗文、胴下ミガキ。内斜～横ハケ。	1/2	外面黒塗り	139
5	21	住7覆土	在地系甕	口径214	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄褐色～茶褐色	外縦ハケ、口縁内横ハケ。胴内縦～斜ハケ。	口縁完存		138
6		住7覆土	布留系甕	口径156、胴径218	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	外黄白色、内黄白色～黄灰色	外斜ハケ→横ハケ、内ケズリ後ナデ。	底部欠		142
7		住7覆土	布留系甕	口径174	粘土やや粗、1～5mm石英少	良好	外黄白色、内黄褐色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ	1/2	煤付着	141
24-8		住7覆土	高坏	残高63	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	明黄褐色	外ハケ後ミガキ、内ナデ	1/2		143
9		住7覆土	外反口縁鉢		粘土やや細、砂粒をほとんど含まず	良好	暗橙褐色	外縦ハケ後ミガキ。口縁内横ハケ、胴ナデ。	小片		147
10		住7覆土	外反口縁鉢		粘土細、1～3mm石英多	良好	赤褐色	外縦ハケ後ミガキ。口縁内横ハケ、胴ナデ。	小片		146
11		住7覆土	外反口縁鉢	口径160、残高54	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	黄褐色	口縁～胴外ミガキ、底ケズリ後ミガキ。内ミガキ。	1/4		145
12		住7覆土	脚付鉢		粘土細、1～5mm石英少	良好	淡黄褐色	杯外横ハケ後ミガキ、内ミガキ。脚内ヨコナデ。	杯部下半存		144
13		住7覆土	鉢		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外ミガキ、下半ケズリ。内暗文。	小片		148
14		住7覆土	山陰系鼓形器台		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄白色	外ヨコナデ。内上半ナデ、下半ケズリ。	小片		150
15		住7覆土	山陰系鼓形器台	脚径140	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡橙色	外ヨコナデ、内ケズリ。内ケズリか。	1/6		149
16	28	住7覆土	半島系土器		粘土細、砂粒をほとんど含まず	陶質、堅緻	灰色	外縄密文タタキ、内ナデ。	小片		1122
17		住7覆土	タコ壺	口径62、器高96	粘土やや細、1～3mm石英多	良好	橙褐色	内外ナデ。	完形		137
18		住7覆土	タコ壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	明黄茶色	外ミガキ様の工具ナデ、内ナデ。	底完存		140

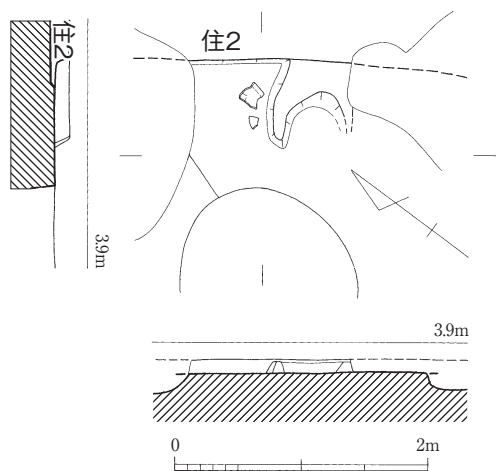
第10表 7号竪穴住居跡出土土器観察表



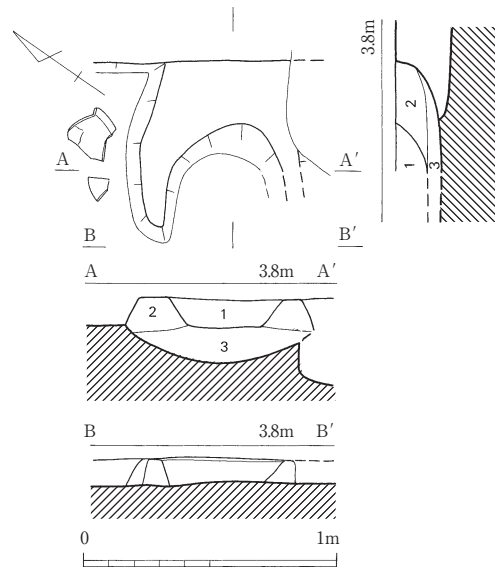
第25図 8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
25-1		住8覆土	直口壺	口径148	粘土粗、1～2mm 石英少	良好	明黄橙色	内外ヨコナデ。	1 / 4		158
2		住8覆土	直口壺	口径182	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端部外方につまみ出す。外縦ハ ケ後横ハケ。内ケズリ、頸内指頭圧 痕。	1 / 3		159
3		住8覆土	直口壺	口径136	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	暗黄褐色～赤褐色	外ミガキ、内ケズリ後ナデ。	1 / 4		157
4		住8覆土	布留系甕	口径156	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	黄白色	内外ヨコナデ。	1 / 4	煤付着	155
5		住8覆土	布留系甕	口径162	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄褐色	内ケズリ。	1 / 4		156
6	21	住8覆土	布留系甕	口径151	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	やや甘い	黄白色	外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	口縁完存、 胴1 / 2	煤付着	154
28-1		住9覆土	山陰系二 重口縁壺	口径302	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	淡褐色	内外ヨコナデ。	1 / 6		163
2		住9覆土	布留系甕	口径150	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	やや甘い	淡褐色	外横ハケ。内口縁横ハケ、胴ケズリ。 波状文。	1 / 3		168
3		住9覆土	布留系甕	口径150	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	外横ハケ。内口縁横ハケ、胴ケズリ。 波状文。	1 / 4	上記と同一個体の可 能性も	161
4		住9覆土	布留系甕	口径170	粘土やや細、1～ 3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	内ケズリ。波状文。	1 / 6		162
5	21	住9覆土	脚付き鉢	脚径206	粘土細、1～3mm 石英少	良好	橙色	外ミガキ、内横ハケ。2孔残（本来 は3方向）。	3 / 4		160
6		住9覆土	山陰系鼓 形器台	口径189	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	淡灰褐色	外ヨコナデ。内口縁下ミガキ、ケズ リ。	1 / 4		165

第11表 8・9号竪穴住居跡出土土器観察表

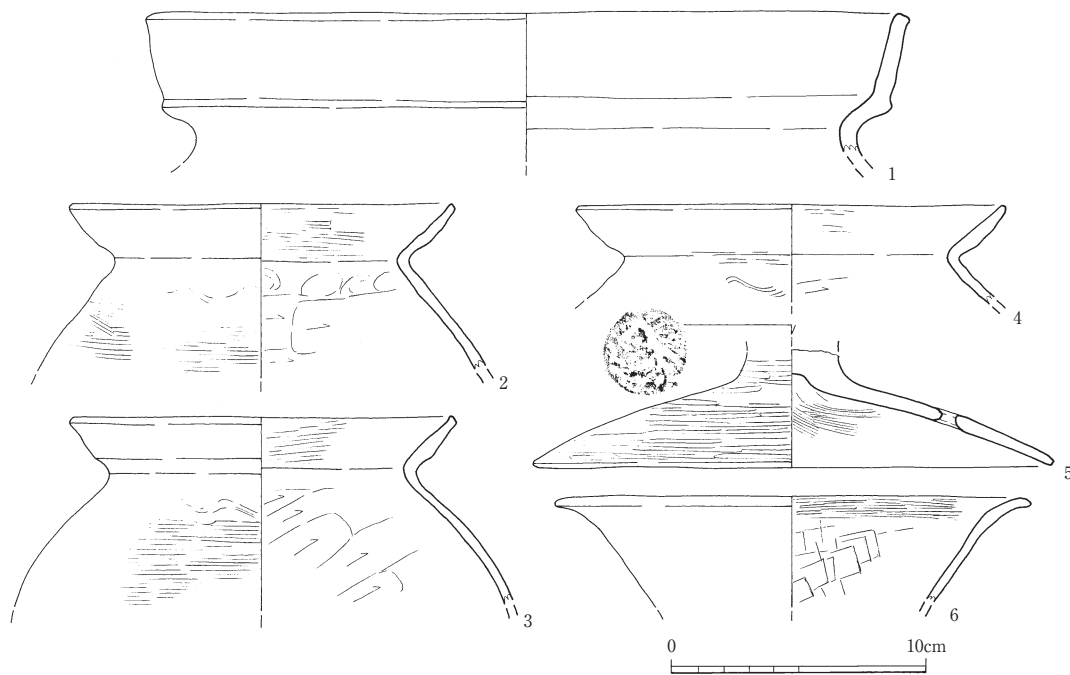


第26図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)



1. 暗黄褐色粘質土に黄白色砂ブロック混 (カマド崩落土)
2. 暗黄褐色粘土に黄白色砂混、固い (カマド袖)
3. 暗灰色砂 (炭混、カマド基礎)

第27図 9号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第28図 9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマドの構築土は暗黄褐色粘質土に黄白色砂 (②) を混じえ、硬く締まっている。カマド袖の構築に先立って径70cm、深さ14cmの掘り込みを行い (③)、炭混じりの締まりのあまりない暗灰色砂で充填している。

出土遺物 (第28図、第11表)

1 は山陰系二重口縁壺。2～4 は布留系甕。いずれも肩部の上位にヘラ描き波状文を巡ら

せる。5は脚付き鉢の脚部。3方向にある孔のうち二つが遺存する。鉢との接合部にヘラ状工具先端の押圧により刻みを入れる。6は山陰系鼓形器台。内面の調整は口縁部下がミガキ、その下部はケズリ。

10号竪穴住居跡（第21図）

発掘区の南辺西寄り、7号竪穴住居跡の南側に位置する。北半部を5号竪穴住居跡・6号竪穴住居跡・7号竪穴住居跡に切れ、南側は発掘区外となる。8号竪穴住居跡と同様、この竪穴住居跡では住居壁を検出していないため竪穴住居跡とするには疑問も残るが、やはりこの遺構と切り合う竪穴住居跡の埋土に酷似した灰色砂質土であり、攪乱坑の断面観察において明確に切り合いを有すること、また、底面がフラットであることから、竪穴住居跡として報告しておく。

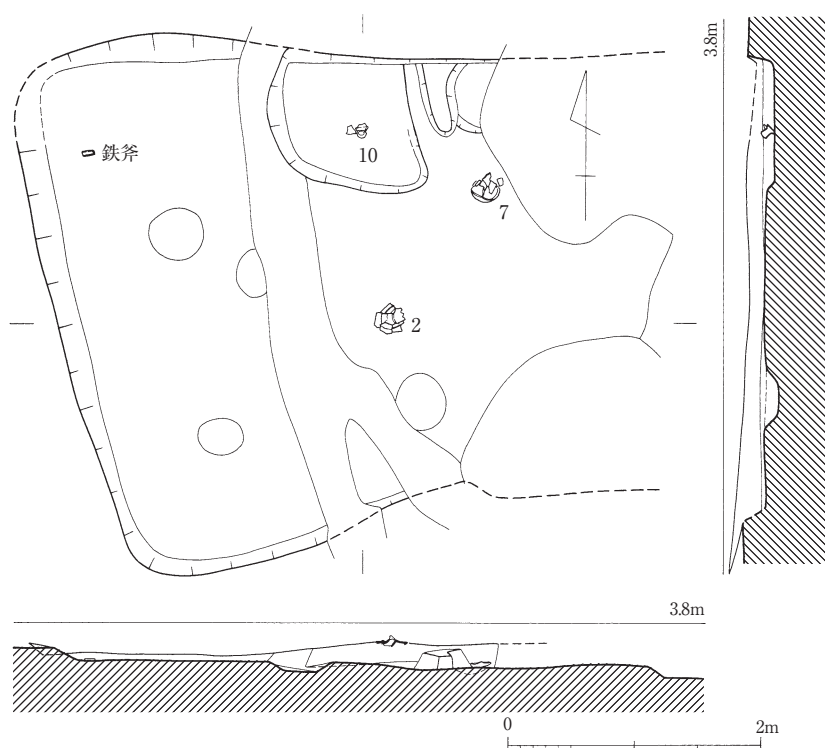
11号竪穴住居跡（図版5、第29図）

発掘区の南西部、3号竪穴住居跡の北東に位置する。北側の12号竪穴住居跡を切る。平面プランは長方形。東側が攪乱によって損壊しているために規模は詳らかではないが、遺存する床面の長軸長4.88m、短軸長4.26mを測る。主軸は概ね東西方向にとる。北壁中央よりやや東側寄りと考えられる位置にカマドが付設され、その西側に接して1.06cm×1.30cm、深さ7cmの浅い土坑状の窪みがある。住居跡の埋土は暗灰色砂質土である。床面の標高は3.5m。ピットを4ヶ所で検出したが、確実に主柱穴であるとは判断できかねる。

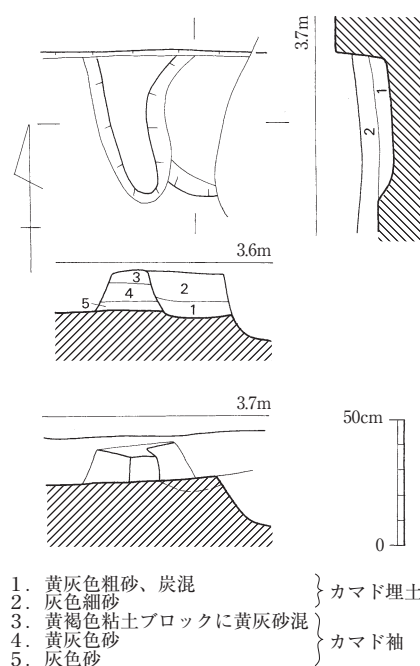
北西隅部の床直上から完形の鍛造鉄斧が出土した。

カマド（図版5、第30図）

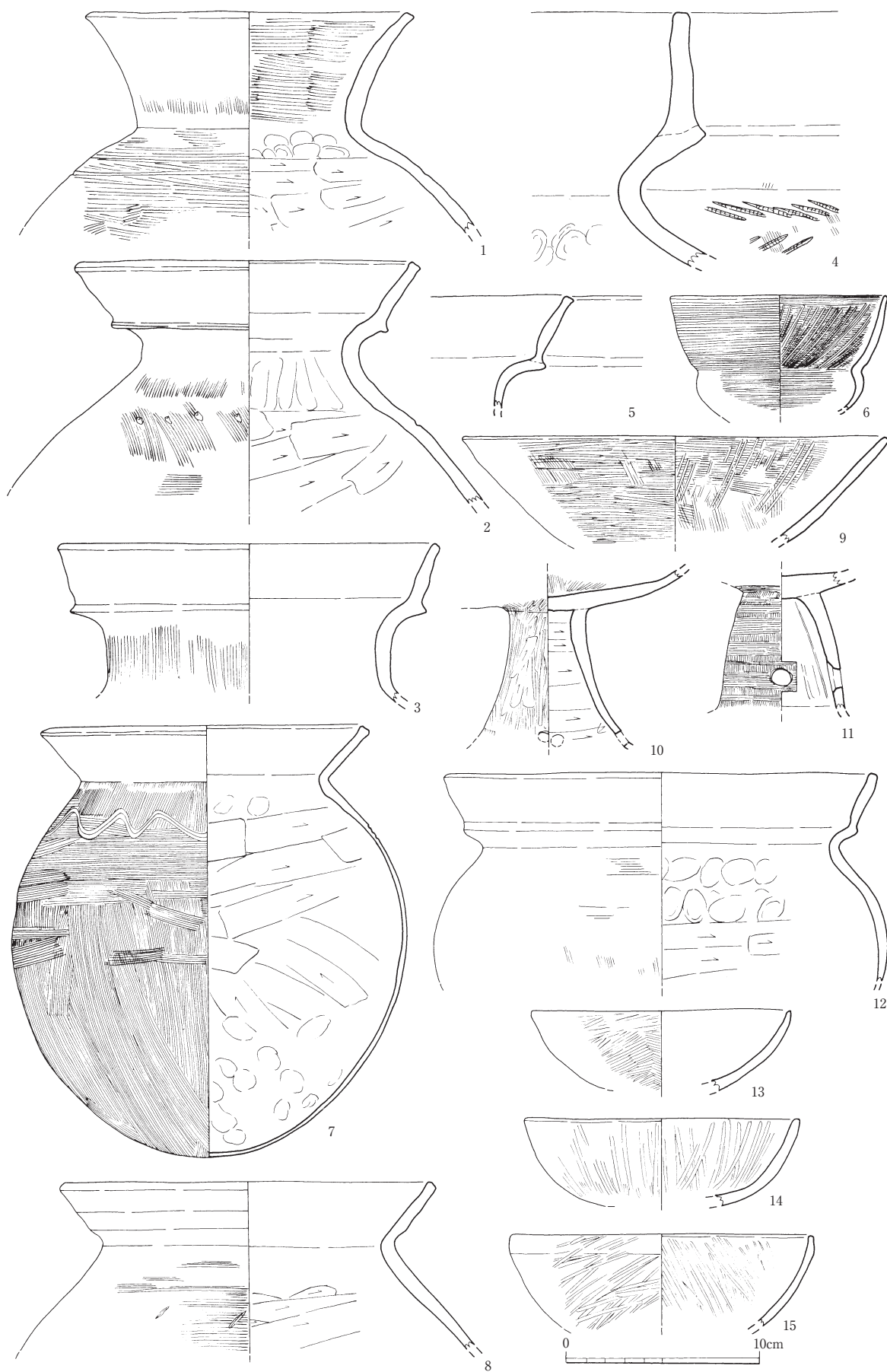
住居跡北壁に付設される。カマドの右袖は攪乱によって削平されている。袖部は壁に直交する。



第29図 11号竪穴住居跡実測図（1/60）



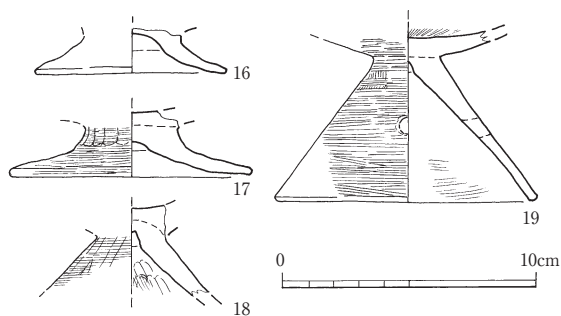
第30図 11号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第31图 11号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
31-1	21	住11覆土	直口壺	口径164	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡褐色	外横ハケ。口縁内横ハケ、胴ケズリ、頸指頭圧痕。	1／3		176
2		住11覆土	山陰系二重口縁壺	口径179	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄白色	外斜ハケ。胴内ケズリ、頸内ナデ上げ。肩部に刺突文。	1／2		167
3		住11覆土	山陰系二重口縁壺	口径192	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、黒斑	外黄灰色、内淡灰色	外縦ハケ。内横ハケ後ヨコナデ。内面器壁剥落著しい	1／2		177
4		住11覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ後ヨコナデ、内ナデ。頸部にハケ状工具押圧による羽状文。	小片		174
5		住11覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ後ヨコナデ。	小片		178
6		住11覆土	小形丸底壺	口径111、胴径86	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	淡黄褐色	内外丁寧なミガキ。口縁内放射状暗文。	1／3		175
7	21	住11覆土	布留系甕	口径168、胴径206、器高222	粘土粗、1～3mm石英多	良好、黒斑	明黄灰色	外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ、頸部・底部に指頭圧痕顕著。	ほぼ完存	煤付着	166
8		住11覆土	布留系甕	口径194	粘土やや粗、1～3mm石英少	やや甘い	黄灰色	外横ハケ、内ケズリ。肩に刺突文。	1／6		172
9		住11覆土	高坏	口径220	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	明橙褐色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ→放射状暗文。	1／4		182
10		住11覆土	高坏		粘土やや粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡灰褐色	杯内外ミガキ、脚縦ハケ後ミガキ。一部ケズリ。内ヨコナデ。円孔4方。	1／2		189
11		住11覆土	高坏		粘土細、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色～明橙褐色	杯内外ミガキ。脚外縦ハケ後ミガキ。内工具ナデ。円孔2方。	1／3		184
12		住11覆土	山陰系二重口縁鉢	口径218	粘土やや粗、1～3mm石英少	やや甘い、黒斑	淡橙褐色	外横ハケ。内胴ケズリ、頸指オサエ。	1／4	煤付着	173
13		住11覆土	鉢	口径132	粘土細、1～3mm石英少	良好、黒斑	明橙褐色	外斜ハケ、内ナデ。	1／4		180
14		住11覆土	鉢	口径140	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色	外縦ハケ後ミガキ、内ミガキ。	1／6		181
15		住11覆土	鉢	口径156	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡灰色～明灰色	内外ミガキ。	1／8	煤付着	179
32-16		住11覆土	脚付き鉢	脚径76	粘土やや粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡褐色	内外ヨコナデ。	1／4		188
17		住11覆土	脚付き鉢	脚径96	粘土細、1～3mm石英少	良好	明橙褐色	鉢内ナデ後ミガキ。脚外ミガキ、内ヨコナデ。	1／2		187
18		住11覆土	小形器台		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	明橙褐色	外ケズリ後ミガキ、内ナデ後ハケ。	1／3		185
19		住11覆土	小形器台	脚径104	粘土細、1～3mm石英少	良好	明橙褐色	鉢内ナデ後ミガキ。脚外ミガキ、内横ハケ。摩滅著しい。	1／3		186

第12表 11号竪穴住居跡出土土器観察表



第32図 11号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

が廻る。頸部内面はナデ上げ。4は大形で口縁が直立する。頸部外面にはヘラ状工具端部の押圧による羽状文が施される。6は小形丸底壺。精製。

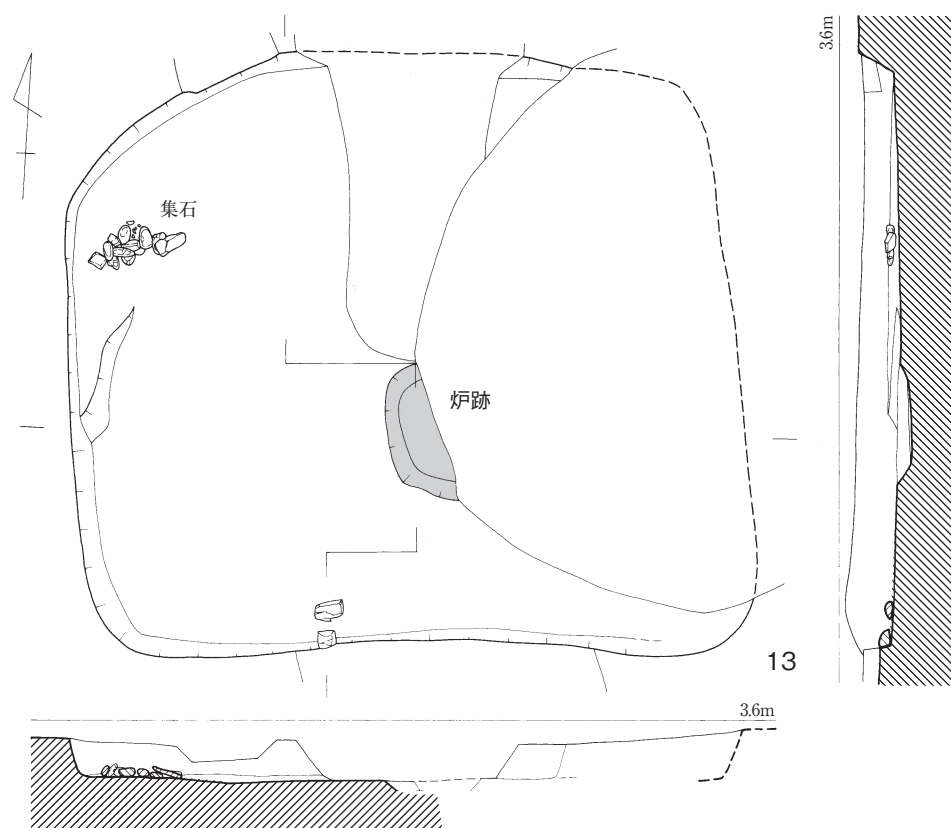
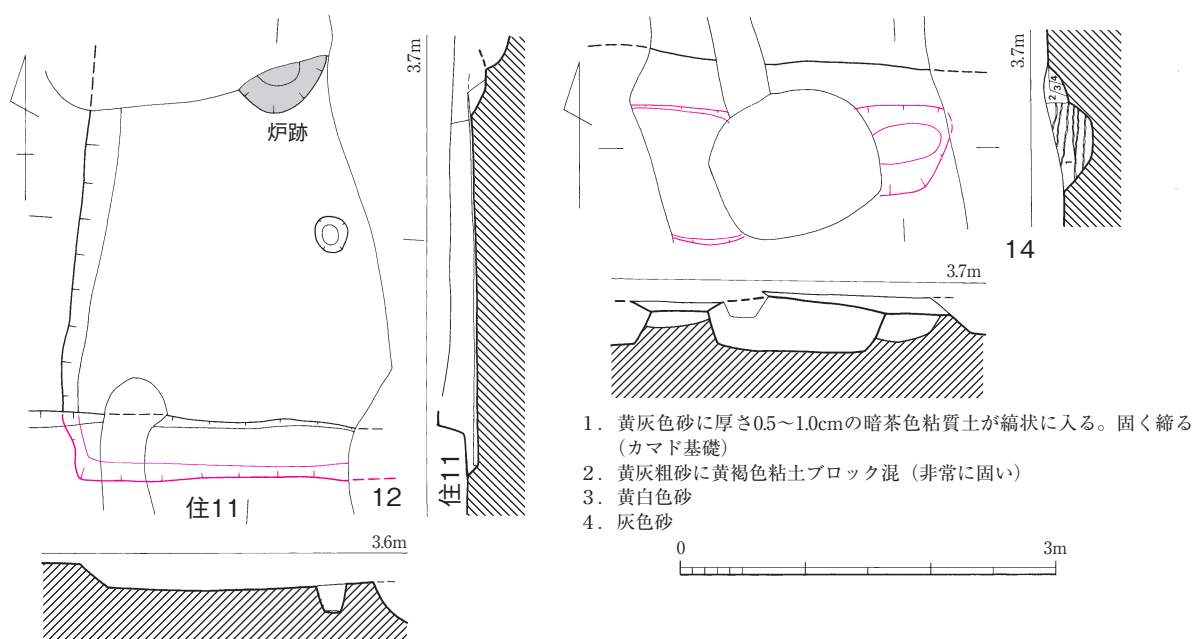
7・8は布留系甕。7はほぼ完存している。口縁端部に面をなし、やや肥厚する。外面の調整は縦ハケのち肩部横ハケで、櫛描き沈線文を巡らせる。底部内面には指頭圧痕が著しい。8は肩部にヘラ状工具先端による刺突文を廻す。

9～11は高坏。10の脚部外面の調整は縦ハケの後、縦方向の粗いミガキを行い、その後に一

カマドの構築土は黄褐色粘土ブロック混じりの黄灰砂(③)、黄灰砂(④)、灰色砂(⑤)の三層からなる。燃烧部は掻き出しのせいか、床面よりも2cmほど低く窪む。

出土遺物(図版21、第31・32図、第12表)

1は直口壺。肩部にヘラ描きによる沈線を巡らせる。頸部内面には指頭圧痕が顕著に残る。2～5は山陰系二重口縁壺。2は外面の肩部に棒状工具先端の押圧による刺突文

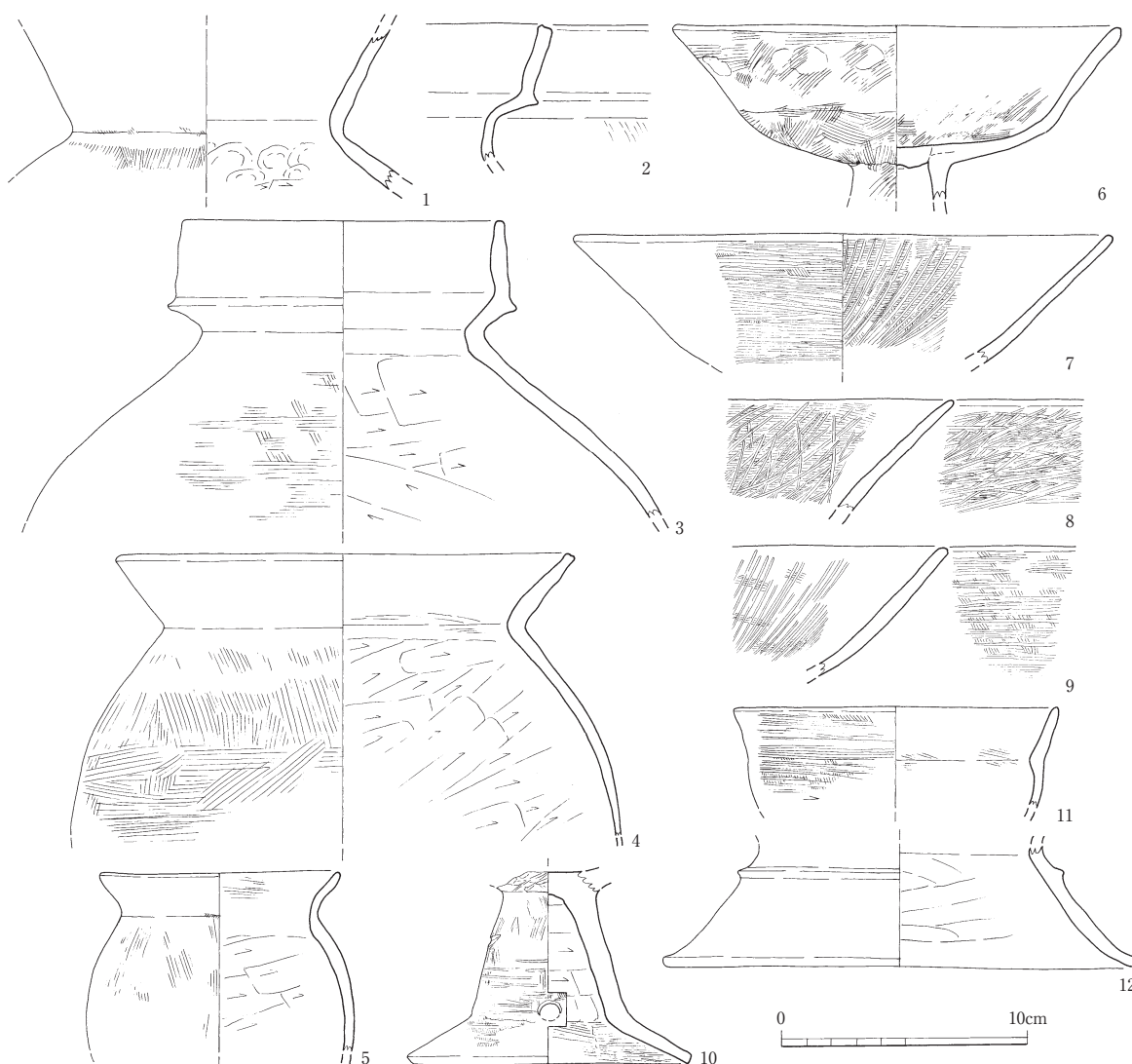


第33図 12~14号竪穴住居跡実測図（1/60）

部ヘラケズリをしている。

12は山陰系二重口縁鉢。頸部内面には指頭圧痕が顕著である。13~15は丸底鉢。16・17は脚付き鉢の脚部。

18・19は小形器台。



第34図 12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

12号竪穴住居跡 (図版3、第33図)

発掘区の南西部、11号竪穴住居跡の北側に位置する。北側と東側を攪乱によって大きく損壊し、住居跡の南西部の一部が遺存している。11号竪穴住居跡に切られる。規模は現状で3.35m×2.44mを測る。主軸は概ね南北方向にとる。住居跡の北壁寄りと考えられる位置で、主軸を南北方向にとる炉跡の南側半分を検出した。炉跡の埋土は炭混じりの黒色土。住居跡の埋土は暗灰色砂質土である。床面の標高は3.3m。床面では深さ22cmのピットを一つ検出した。

出土遺物 (図版21、第34図、第13表)

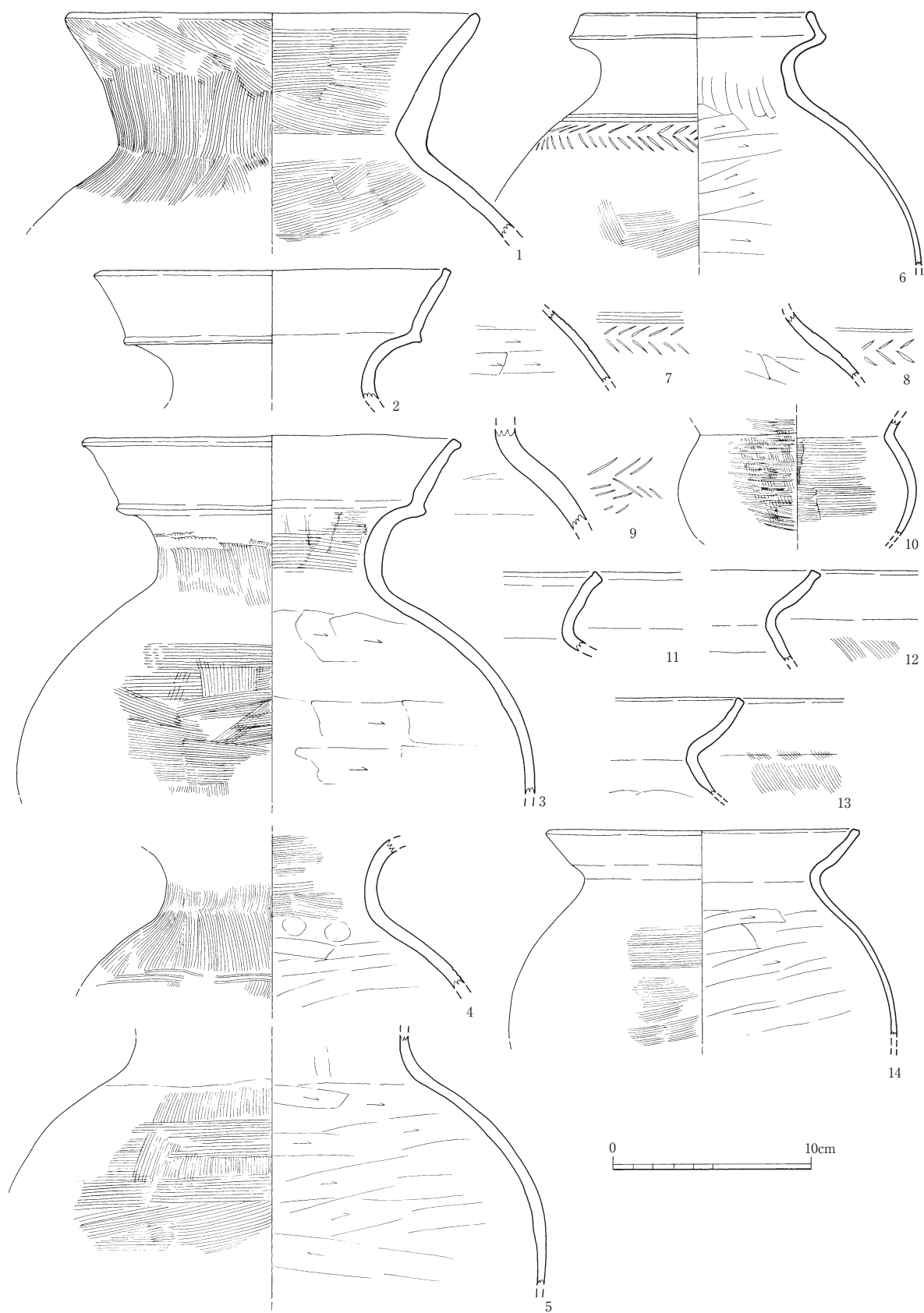
1は直口壺。2・3は山陰系二重口縁壺。3は口縁部が直立し、頸部が締まっている。4は布留系甕。5は小形の甕。口縁部内面は横方向のハケ。

6～10は高坏。6は口縁部が外反し、杯部底から粘土を充填して脚部と接合する。山陰系。7～8の口縁部は直線的に伸びる。

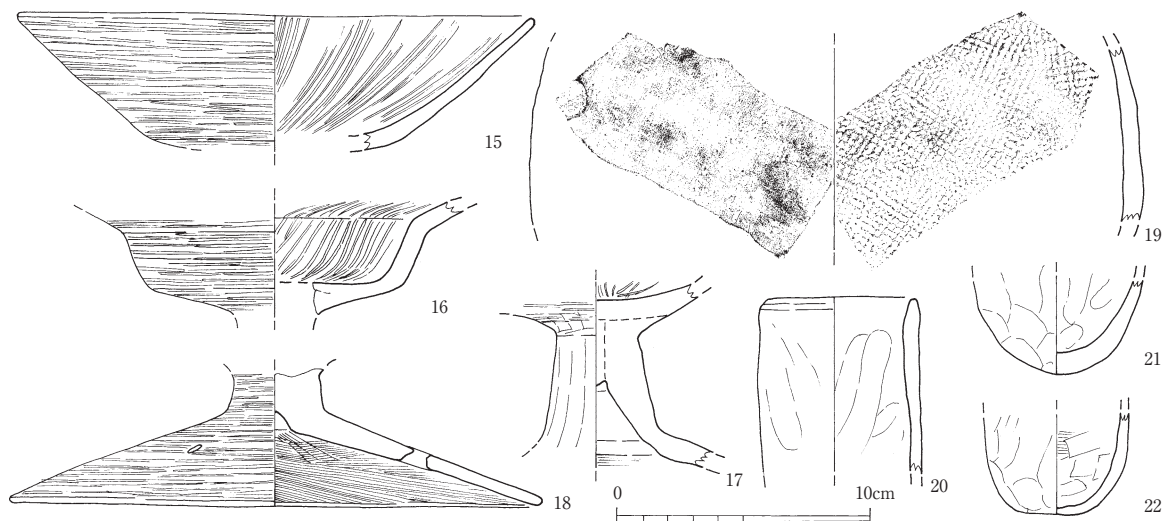
11は外反口縁鉢。12は山陰系鼓形器台の脚部片。

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
34-1		住12覆土	直口壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色～淡褐色	口縁外斜ハケ後ヨコナデ、内ヨコナデ。頸縦ハケ、指頭押圧。	1／4		199
2		住12覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡灰褐色	内外ヨコナデ。頸外縦ハケ。	小片	煤付着	201
3		住12覆土	山陰系二重口縁壺	口径129	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色～淡黄褐色	外縦ハケ後横ハケ。内ケズリ。	1／4		200
4		住12覆土	布留系甕	口径186	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	1／4		197
5		住12覆土	小形甕	口径98、胴径108	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄褐色～灰色	外縦ハケ。口縁内横ハケ、胴ケズリ。	1／4	煤付着	198
6	21	住12覆土	山陰系高坏	口径182	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄褐色～明黄灰色	内外斜ハケ。内ミガキか。背部底に径6mmの孔。	杯部ほぼ完存		190
7		住12覆土	高坏	口径219	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	明赤橙色	外縦ハケ後ミガキ。内横ハケ→暗文。	1／8		194
8		住12覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	明赤橙色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ後ミガキ。	小片		192
9		住12覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	明橙色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ→暗文。	小片		193
10		住12覆土	高坏	脚径116	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	淡褐色～明橙色	外縦ハケ後ミガキ、内板ナデ、裾横ハケ。	2／3		191
11		住12覆土	外反口縁鉢	口径132	粘土細、1～3mm石英少	良好、黒斑	明橙色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ、後ナデ。	1／4		195
12		住12覆土	山陰系鼓形器台	脚径194	粘土やや細、1～3mm石英少	やや甘い	灰褐色～淡褐色	外摩減著しく不明。内ケズリ、口縁部ヨコナデ。	1／6		196
35-1		住13覆土	在地系直口壺	口径210	粘土やや細、1～3mm石英多	良好	外茶褐色、内黄茶色	口縁端部丸い。外斜ハケ後縦ハケ。口縁内横ハケ、胴内斜ハケ。	1／4		208
2		住13覆土	山陰系二重口縁壺	口径180	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	1／2		203
3	21	住13覆土	山陰系二重口縁壺	口径190、胴径262	粘土やや粗、1～3mm石英・長石多	良好	褐色～黄褐色	胴外横ハケ。頸内ナデ後横ハケ。胴内ケズリ。	1／2		202
4		住13覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや細、1～3mm石英多	良好	黄灰色	胴外縦ハケ。頸内横ハケ。胴内ケズリ。	1／2		209
5		住13覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	外黄茶色、内茶灰色	胴外縦ハケ後横ハケ。頸内ナデ。胴内ケズリ。	1／4		210
6		住13覆土	山陰系二重口縁壺	口径117、胴径224	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	工具先刺突による羽状文の上部に浅い2条の沈線。外ヨコナデ、胴下ハケ。頸内ナデ、胴内ケズリ。	1／4	煤付着	204
7		住13覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	工具先刺突による羽状文の上部に浅い2条の沈線。内ケズリ。	小片		206
8		住13覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	工具先刺突による羽状文の上部に浅い沈線。頸内ナデ、胴内ケズリ。	小片		205
9		住13覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	工具先刺突による羽状文。頸内ヨコナデ、胴内ケズリ。	小片		215
10		住13覆土	小形丸底壺	胴径120	粘土細、微砂粒少	良好	橙色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ。	1／4		211
11		住13覆土	布留系甕		粘土細、微砂粒少	良好	外暗茶色、内黄褐色	口縁端部つまみ上げ。内外ヨコナデ。	小片		218
12		住13覆土	布留系甕		粘土細、微砂粒少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。胴外斜ハケ、内ケズリ。	小片		216
13		住13覆土	布留系甕		粘土細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	胴外斜ハケ、胴内ケズリ	小片		217
14		住13覆土	布留系甕	口径156、胴径194	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	胴外横ハケ、胴内ケズリ。	2／3	煤付着	219
36-15		住13覆土	高坏	口径210	粘土細、微砂粒	良好	橙褐色	外ミガキ、内ミガキ後暗文。	1／4		223
16		住13覆土	吉備系高坏		粘土細、1～3mm石英少	良好	茶褐色	杯部に段を持つ。外ミガキ、内放射状の暗文。	1／2		222
17		住13覆土	高坏		粘土やや細、1mm石英多	良好	黄灰色～褐色	杯内外ミガキ。脚外ナデ、内上ナデ、下横ハケ。	1／2		221
18		住13覆土	脚付鉢	脚径212	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	外橙色、内淡橙色	焼成前穿孔3ヶ所。ミガキ、内ハケ。	1／2		220
19	28	住13覆土	半島系土器壺	胴径242	粘土細、砂粒を含まず	瓦質、須恵器生焼けのよう	茶褐色～茶灰色	外格子タタキ、内ナデ。内凹凸著しい。	1／6		1123
20		住13覆土	タコ壺	口径56	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄茶色～茶褐色	外ナデ、内内で上げ。	1／3		214
21		住13覆土	タコ壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	外茶褐色、内橙色	内外ナデ。	底部完存		213
22		住13覆土	タコ壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	外黄茶色、内黒茶色	平底。外ナデ、内ハケ後ナデ。	底部完存		212

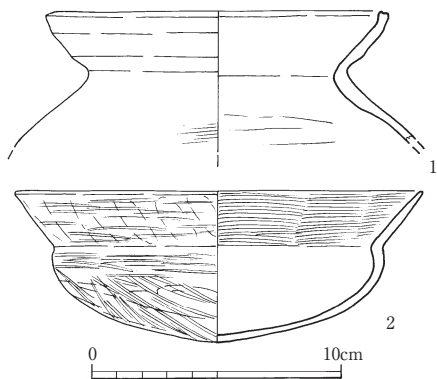
第13表 12・13号竪穴住居跡出土土器観察表



第35图 13号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)



第36図 13号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)



第37図 14号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

13号竪穴住居跡 (図版6、第33図)

発掘区の北西部に位置する。住居跡の東壁は現代の井戸の掘方によって損壊している。規模は4.76m×5.37mを測る。主軸はN-3°-Wにとる。住居跡の中央よりやや南寄り、主軸を南北方向にとる炉跡を検出した。東側半分は新期の井戸の掘方によって削られている。規模は長軸方向で1.15m、深さ10cmを測る。炉跡の埋土は炭混じりの黒色土。住居跡西壁の中央部の床面の一部に周囲よりも8cmほど高くなった部分があり、出入口に関係するものかもしれない。また、そのすぐ北側、住居跡北東隅部の床直上に、10数個から

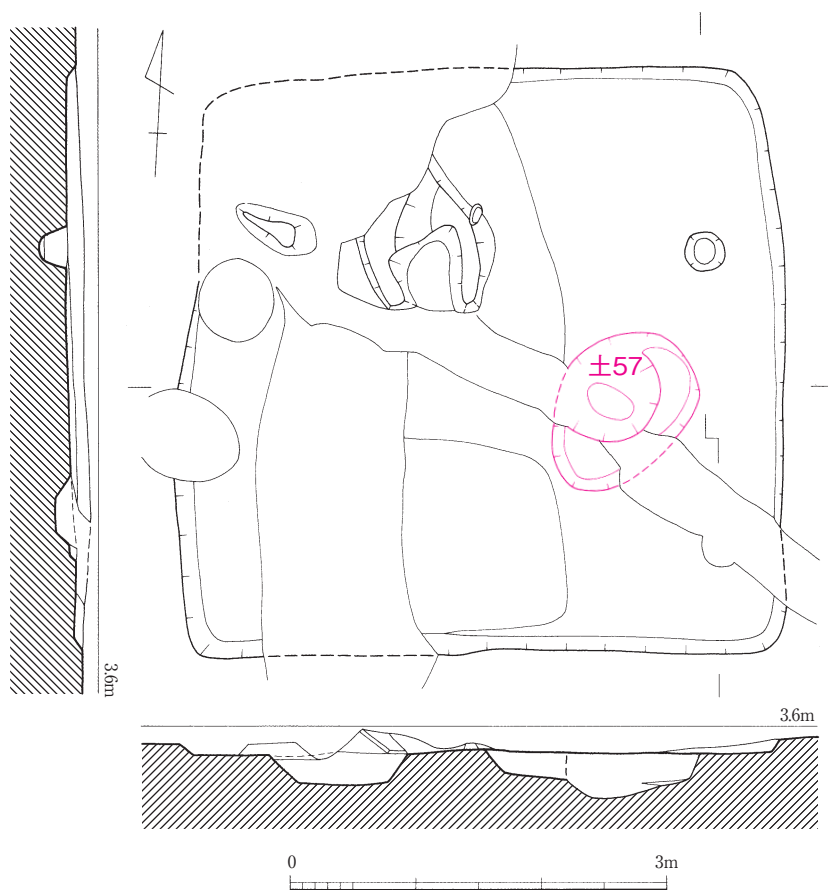
なる集石が確認された。石は長さ12cm～28cmで、支脚によく使用されるタイプの棒状の石材と角礫からなる。いずれも火を受け赤化している。集石際には被熱によって破碎したと考えられる石材の碎片が散乱していた。住居跡の埋土は灰色砂質土である。床面の標高は3.4m。なお、住居跡の検出面で、13号竪穴住居跡を切って破碎した土器が集中する部分があり、53号土坑として遺構番号を付したが、この土坑は13号竪穴住居跡が埋没する最終段階で一括投棄された可能性も残されている。

埋土上層から玉砥石が出土している。

出土遺物 (図版21、第35・36図、第13表)

1は在地系直口壺。器壁が分厚い。2～9は山陰系二重口縁壺。3は口縁端部を外方につまみ出し丸く収める。4は肩部に櫛描の沈線をまわす。6は口縁部が内傾し、袋状口縁のようになる。肩部に工具先端の刺突により羽状文と2条の浅い沈線を巡らせる。7～9も同様の羽状文を施す。10は小形丸底壺。

11～14は布留系甕。



第38図 15号竪穴住居跡実測図 (1/60)

15～17は高坏。16は吉備系高坏で杯部に段を有する。胎土は精良。

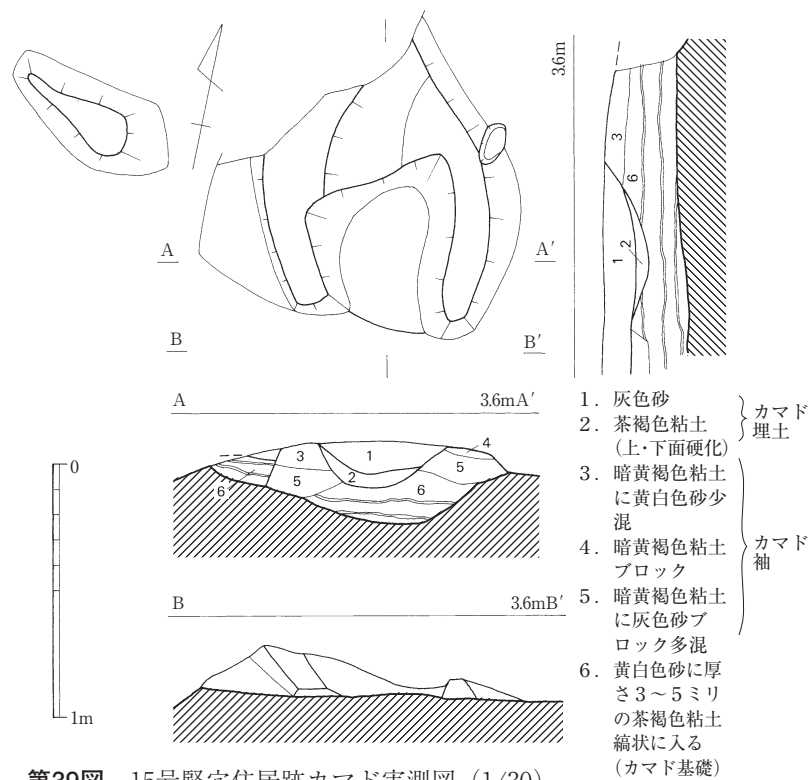
18は脚付鉢の脚部と思われる。

19は半島系土器壺の胴部破片。内面は成形時の指オサエによる凹凸が著しい。

20～22はタコ壺。20の口縁部は丸く収める。22の内面にはハケ状工具による板ナデの痕跡が残る。

14号竪穴住居跡（図版6、第33図）

発掘区の北西部、13号住居跡の北西側に位置する。削平が著しく、北辺部がかろうじて遺存していた。規模は現状で東西方



第39図 15号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第40图 15号竖穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)

向が2.50mを測る。主軸は概ね南北方向にとる。住居の北壁に沿って煙道を持つカマドが付設されていたと考えられる。

カマド（図版6、第33図）

この住居跡ではカマド本体を検出していないものの、住居跡の北壁から30～40cmの距離をおいてカマドの基礎地業と考えられる掘り込みが、中央の攪乱坑を挟んで東西2ヶ所で確認された。意図的に埋められた埋土は厚さ3～10cmの黄灰色砂と、厚さ1cmほどのやや粘性を帯びた暗茶色土の互層である（①）。また、この掘り込みと住居北壁に挟まれる帯状の空間も地山ではなく、黄灰色粗砂に明黄褐色粘土ブロック（②）を含むひじょうに締まった層が存在するため、この上部に煙道が存在したものと考えられる。したがって14号住居跡は、北壁に沿って煙道を持つカマドを付設する住居と考えて差し支えない。この住居跡のカマドの下部構造は後述する19号竪穴住居跡と共通する。

出土遺物（図版22、第37図、第14表）

1は布留系甕。口縁端部に面をなし、端部の内側に段をなす。2は外反口縁鉢。

15号竪穴住居跡（図版7、第38図）

発掘区の南部中央、4号竪穴住居跡の東側に位置する。北西部が攪乱によって損壊している。57号土坑を切る。平面プランはやや東西に長い長方形。規模は4.80m×4.63mを測り、主軸をN-93°-Wにとる。カマドが付設される。住居跡の埋土は黒灰色砂質土である。床面の標高は3.5m。床面では支柱穴とも考えられるピットを二つ検出した。そのうちの一つは径30cm、深さ23cmを測る。

埋土中から勾玉未製品・石錘・軽石加工品が出土している。

カマド（第39図）

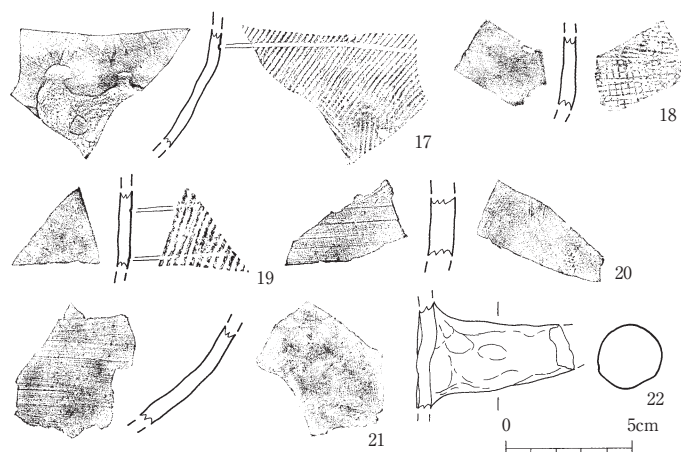
住居跡北壁の中央よりやや西寄りに付設される。燃烧部の主軸は北壁に直交する。煙道部は北壁に沿って西に延び、住居跡の北西隅部で立ち上がるものと考えられるが、攪乱によって完全に損壊している。

カマドの構築土は暗黄褐色粘土に黄白色砂ないしは灰色砂ブロックを含む層（③～⑤）からなる。その下部にはカマドの袖の範囲に対応した掘り込みがみられ、厚さ4～7cmの黄白色砂と、厚さ0.3～0.5cmの茶褐色粘土層が互層に充填されている（⑥）。燃烧部には、住居北壁から180cmほどの位置に、30cm×20cm（+a）の範囲で赤褐色の硬化面が認められる。なお、この下部でも燃烧部とみられる硬化面が認められる（②下面）。

出土遺物（図版22、第40・41図、第14表）

1～3は山陰系二重口縁壺。2は口縁部が内傾する。4は直口壺。5は小形丸底壺の口縁部。

6は在地系甕。外面はタタキの後斜め方向のハケ調整。7～13は布留系甕。7のように口縁端部を丸く収めるもの、10のよう



第41図 15号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/3）

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
37-1		住14覆土	布留甕	口径136	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外横ハケ、内ケズリ。	1／2		224
2	22	住14覆土	外反口縁鉢	口径161、器高60	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	外淡橙褐色、内明黄褐色	外ミガキ、底部ケズリ後ミガキ。口縁内横ハケ、胴内ナデか。	1／2		225
40-1		住15カマド	山陰系二重口縁甕	口径148	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ヨコナデ	1／8		232
2		住15覆土	山陰系二重口縁甕	口径196	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	口縁部が内傾する。内外ヨコナデ。頸部内面器壁剥落。	1／4		238
3		住15覆土	山陰系二重口縁甕	口径224	粘土粗、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	口縁端部を外方につまみ出す。内外ヨコナデ。	1／3		237
4		住15覆土	直口甕	口径142	粘土やや細、1～3mm石英少	やや甘い、黒半	外淡黄褐色、内橙褐色	ヨコナデ?摩滅著しい。	1／8		236
5		住15覆土	小形丸底甕	口径136	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	暗赤褐色	外ミガキ、内ミガキ→暗文。	1／4		243
6		住15覆土	在地系甕	口径220	粘土やや粗、1mm石英多	良好	外橙褐色、内茶褐色	口縁端部に面をなす。口縁外斜ハケ、胴タキ後縦ハケ。口縁内横ハケ、胴斜ハケ。	1／4		230
7		住15覆土	布留系甕	口径128	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	口縁端部丸い。内外ヨコナデ。	1／8		233
8		住15覆土	布留系甕	胴径160	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外横ハケ→波状の撫描文。内ケズリ。	1／3		235
9		住15覆土	布留系甕	口径148	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外黄灰色、内暗黄灰色	外斜ハケ、内ナデ。	1／2		228
10		住15覆土	布留系甕	口径150	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄灰色	口縁端部を内側に大きくつまみ出す。外板ナデ、内ケズリ。	1／6		231
11	22	住15覆土	布留系甕	口径153、胴径206	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁端部に面をなす。外タキ後斜ハケ。上半は横ハケ。内ケズリ、頸部下に指頭圧痕。	1／3	煤付着	227
12	22	住15No1	布留系甕	口径165、胴径199	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端部に面をなす。外胴中縦ハケ後上半横ハケ、底縦ハケ。内ケズリ、底部・頸部に指頭圧痕。	ほぼ完存	肩に文様風の条痕。	226
13		住15覆土	布留系甕	口径184	粘土やや細、1～3mm石英多	良好	外暗茶色、内暗黄褐色	口縁端部に面をなす。外横ハケ、内ケズリ。	1／3		229
14	22	住15覆土	手捏ね鉢	口径46、器高33	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好、黒半	淡褐色	手捏ね。指頭圧痕顕著。	完存		240
15		住15覆土	高坏		粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	橙褐色	穿孔1ヶ所残存。摩滅著しい。	柱部完存		242
16		住15覆土	山陰系鼓形器台	脚径155	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、黒半	淡黄灰色	外粗いミガキ、内ケズリ。	1／3		239
41-17	28	住15覆土	半島系土器壺		粘土細、砂粒を含まず	陶質、堅緻、須恵器のよう	灰色	1条の沈線。外縄席文タタキ、内ナデ。	小片		1127
18	28	住15覆土	半島系土器		粘土細、微砂粒僅か	瓦質	灰褐色	外格子タタキ、内ヨコナデ。	小片		1128
19	28	住15覆土	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	陶質	淡黄褐色	2条の沈線。外平行タタキ、内ナデ。	小片		1129
20	28	住15覆土	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	陶質	灰色	外ナデ、内ヨコナデ。	小片		1125
21	28	住15覆土	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	陶質	灰色	外ナデ、内ヨコナデ。	小片		1126
22	28	住15覆土	半島系土器甕把手		粘土やや粗、1～2mm石英多	軟質、土師器に近い	黄褐色	手捏ね。指頭圧痕顕著。	小片		241

第14表 14・15号竪穴住居跡出土土器観察表

に内側につまみ出すもの、9・11～13のように端部に面をなすものがある。いずれも端部の内側に段をなす。12は底部を除いてほぼ完存する。肩部に3本の浅い条痕を刻む。14は小形の手捏ね鉢。全面に指頭圧痕が顕著である。

15は高坏の脚柱部。

16は山陰系鼓形器台の脚部。

17～21は半島系土器。外面にタタキを残す17～19とナデを施す20・21がある。22は甕把手。

16号 竪穴住居跡（図版7、第42図）

発掘区の南辺中央部、15号竪穴住居跡の南東側に位置する。南半は調査区外となり、また、29号竪穴住居跡に切られる。規模は東西長4.6m、南北方向は現存長2.80mを測る。床面の主軸は概ね南北方向にとる。床面の標高は3.4m。住居跡の埋土は黒灰色砂質土。床面の中央よりも僅かに東寄りに炉跡が存在する。規模は径103cm、深さ5cmを測る。炉跡の埋土は炭化物粒を含む黒色土である。住居跡の北東部コーナー際で、径56cm×44cm、深さ20cmの柱穴が確認された。

出土遺物（図版22、第43図、第15表）

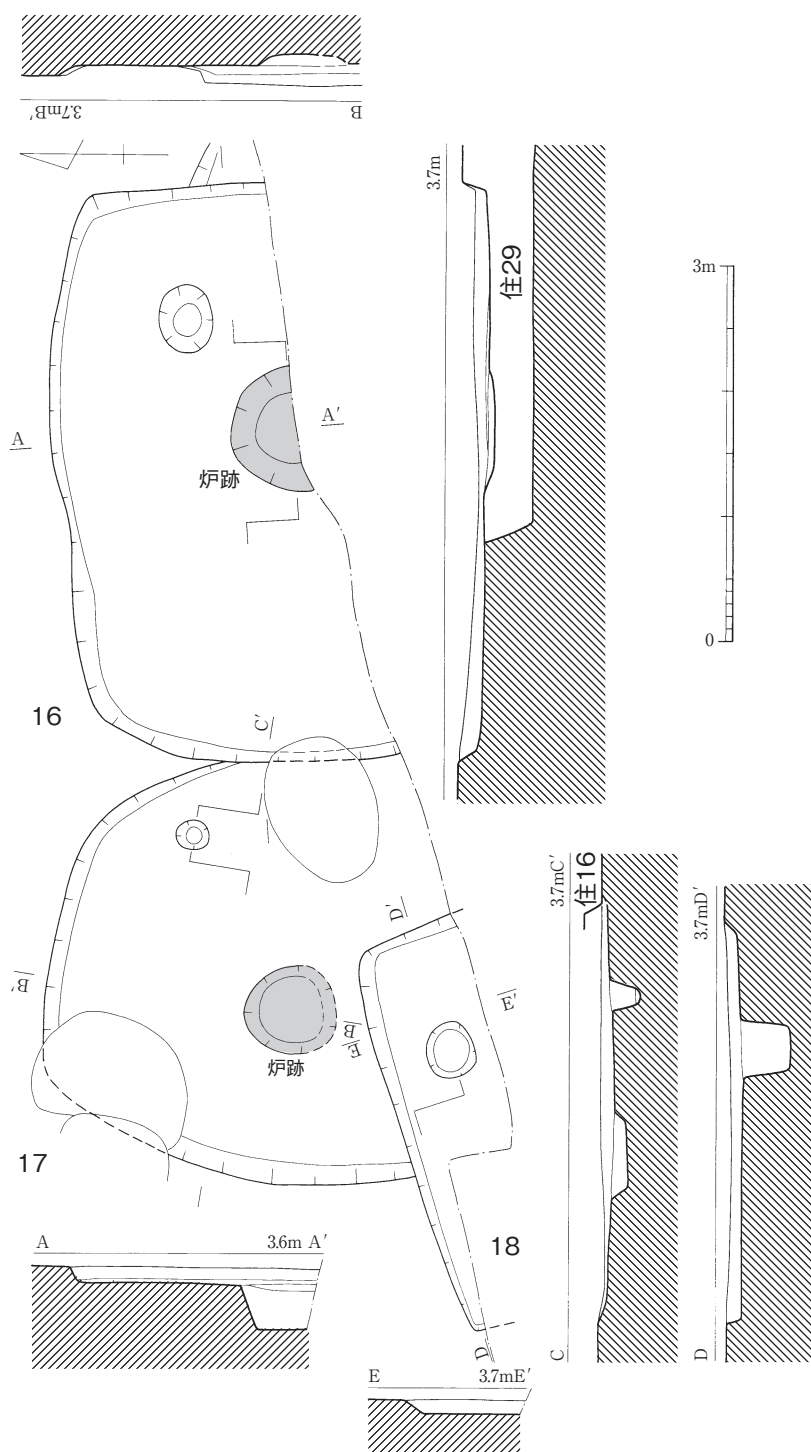
1～6は山陰系二重口縁壺。1は小形で口縁は短く外反する。2・3は口縁端部に面をなす。2は口縁部が大きく外傾している。4は頸部の小片。外面にヘラ状工具で線刻を入れる。5は肩部の小片。ハケ状工具端部押圧による有軸羽状文を

施す。6は口縁部が直立するもの。7は口縁部が内傾する。ひじょうに分厚い。混入品か。8は口縁部が大きく外反する在地系の壺。

9～11は布留系甕。10は肩部にヘラ状工具先による刺突文を巡らせる。

12・13は半島系土器。12は口縁が外反する軟質の鉢で、端部をつまみ上げる。13は瓦質。

14は製塩土器の脚部片。全面に成形時の指頭圧痕が顕著に残る。



第42図 16～18号竪穴住居跡実測図（1/60）

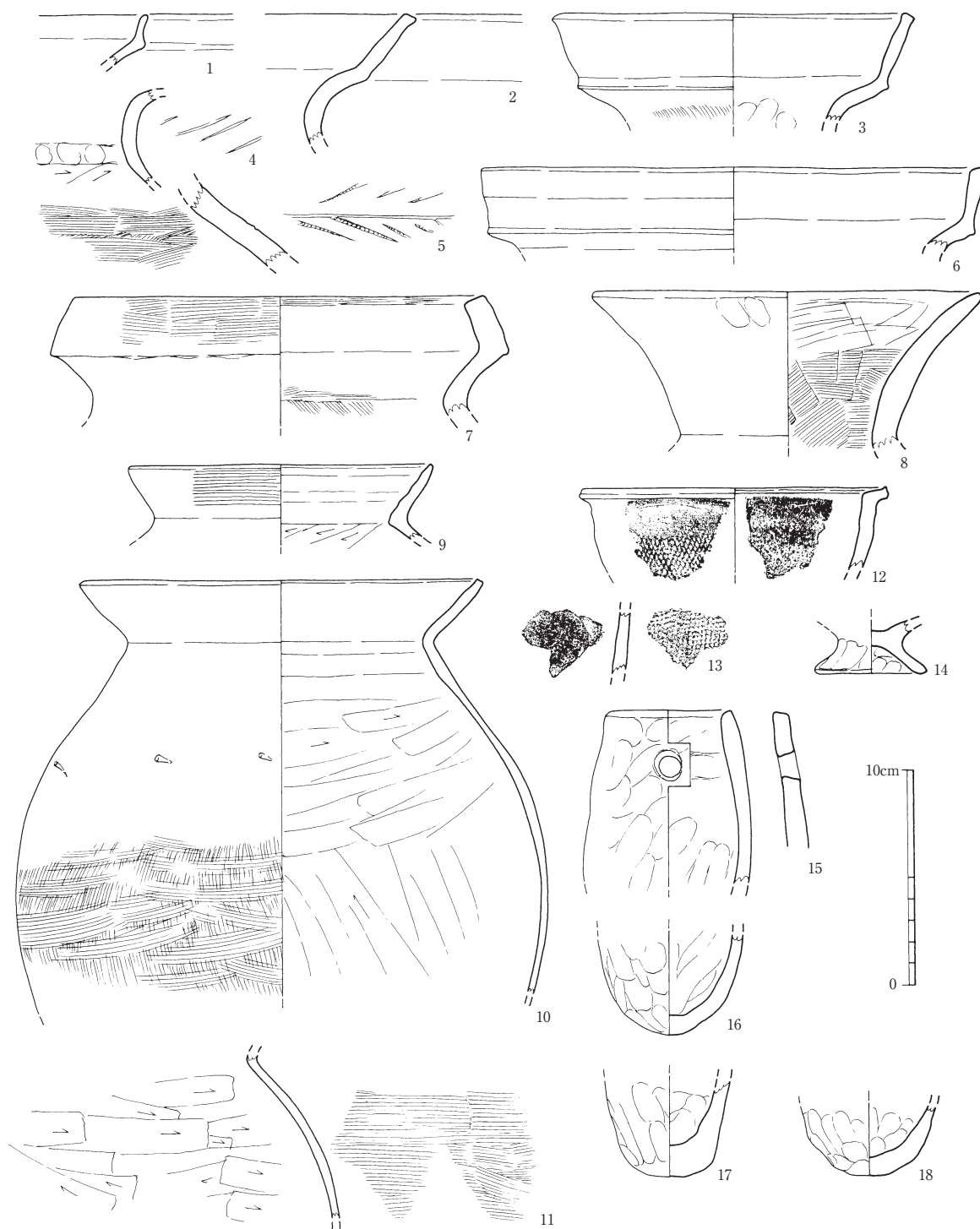
挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
43-1		住16覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	内外ヨコナデ。	小片		250
2		住16覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内外ヨコナデ。	小片		248
3		住16覆土	山陰系二重口縁壺	口径168	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	頸外縦ハケ、内ナデ。	1／5		251
4		住16覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	暗黄褐色	外ヨコナデ後工具先端による刻み。内ケズリ。	小片		245
5		住16覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外ヨコナデ後ハケ状工具端部押圧による有軸羽状文。内横ハケ。	小片		252
6		住16覆土	山陰系二重口縁壺	口径232	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄灰色	口縁部直立。内外ヨコナデ。	1／8		249
7		住16覆土	二重口縁壺	口径190	粘土細、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	口縁部厚く、内傾。外横ハケ、内ナデ。	1／8		247
8		住16覆土	在地系壺	口径180	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡茶褐色	口縁大きく外反。端部丸い。外ヨコナデ、内横ハケ。	1／8	口径やや不安	246
9		住16覆土	布留系甕	口径142	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄白色	口縁内外ヨコナデ。肩内ケズリ。	1／8		253
10	22	住16覆土	布留系甕	口径186、胴径246	粘土やや粗、1～3mm石英多	やや甘い	淡黄褐色	口縁端部に面をなす。肩刺突痕。外縦ハケ後横ハケ、内ケズリ。	1／3		244
11		住16覆土	布留系甕		粘土細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外横ハケ、内ケズリ。内ケズリ。	小片		254
12	28	住16覆土	半島系土器鉢	口径143	粘土やや粗、1～2mm石英少	軟質、土師器に近い	黄褐色	外格子タタキ、内ナデ。	1／8		1130
13	28	住16覆土	半島系土器		粘土粗、1～2mm石英少	瓦質、土師器っぽい	暗黄褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		1131
14		住16覆土	製塩土器	脚径50	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡茶色	外指ナデ、内ナデ。内外指頭圧痕顕著。	1／2		255
15		住16覆土	タコ壺	口径60	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	口縁完存		259
16		住16覆土	タコ壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	底完存		256
17		住16覆土	タコ壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	底完存		257
18		住16覆土	タコ壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	底完存		258
44-1		住17覆土	山陰系二重口縁壺	口径178	粘土粗、1～3mm石英少	良好、黒斑	黄白色	内外ヨコナデ。	1／4		261
2		住17覆土	山陰系二重口縁壺		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	暗黄褐色	口縁外ミガキ、内ヨコナデ	小片		270
3		住17覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、砂粒をほとんど含まず	良好	外黄白色、内茶灰色	内外ヨコナデ。	小片		262
4	22	住17覆土	直口壺	口径128、胴径182	粘土やや粗、1～4mm石英少	やや甘い	外淡黄褐色、内灰褐色	外横ハケ、内ケズリ。	2／3	煤付着	260
5		住17覆土	直口壺		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	淡茶褐色～黄褐色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ→暗文	1／5		271
6		住17覆土	直口壺	胴径150	粘土細、1～3mm石英多	良好	淡茶褐色	外ミガキ、内ケズリ	1／4	傾きやや不安	263
7		住17覆土	小形丸底壺		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外ミガキ、内ナデか	小片		266
8	22	住17覆土	小形丸底壺	口径102、胴径96、器高78	粘土細、1～2mm石英少	良好	暗黄褐色	外縦ハケ後ミガキ、下半ケズリ後ミガキ。内ナデ、底指頭圧痕。	ほぼ完存	煤付着	338
9		住17覆土	布留系甕		粘土細、1～3mm石英少	良好	外暗黄褐色、内橙褐色	内外斜ハケ。	小片		269
10		住17覆土	布留系甕	胴径200	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／8	傾きやや不安	264
11		住17覆土	高坏	口径283	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	口縁端部肥厚。外ミガキ。内横ハケ→放射状暗文。	1／6		268
12		住17覆土	外反口縁鉢	口径134、胴径56	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	暗黄褐色～黄褐色	外縦ハケ後ミガキ、底ケズリ後ミガキ。口縁内ミガキ、胴ナデか。	1／8		265
13		住17覆土	器台	脚径110	粘土細、1～3mm石英少	良好	黒褐色	外ミガキ、内横ハケ。	1／8		267
14		住18覆土	布留系甕	口径172	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄白色	外斜ハケ、内ケズリ。	1／8		272

第15表 16～18号竪穴住居跡出土土器観察表

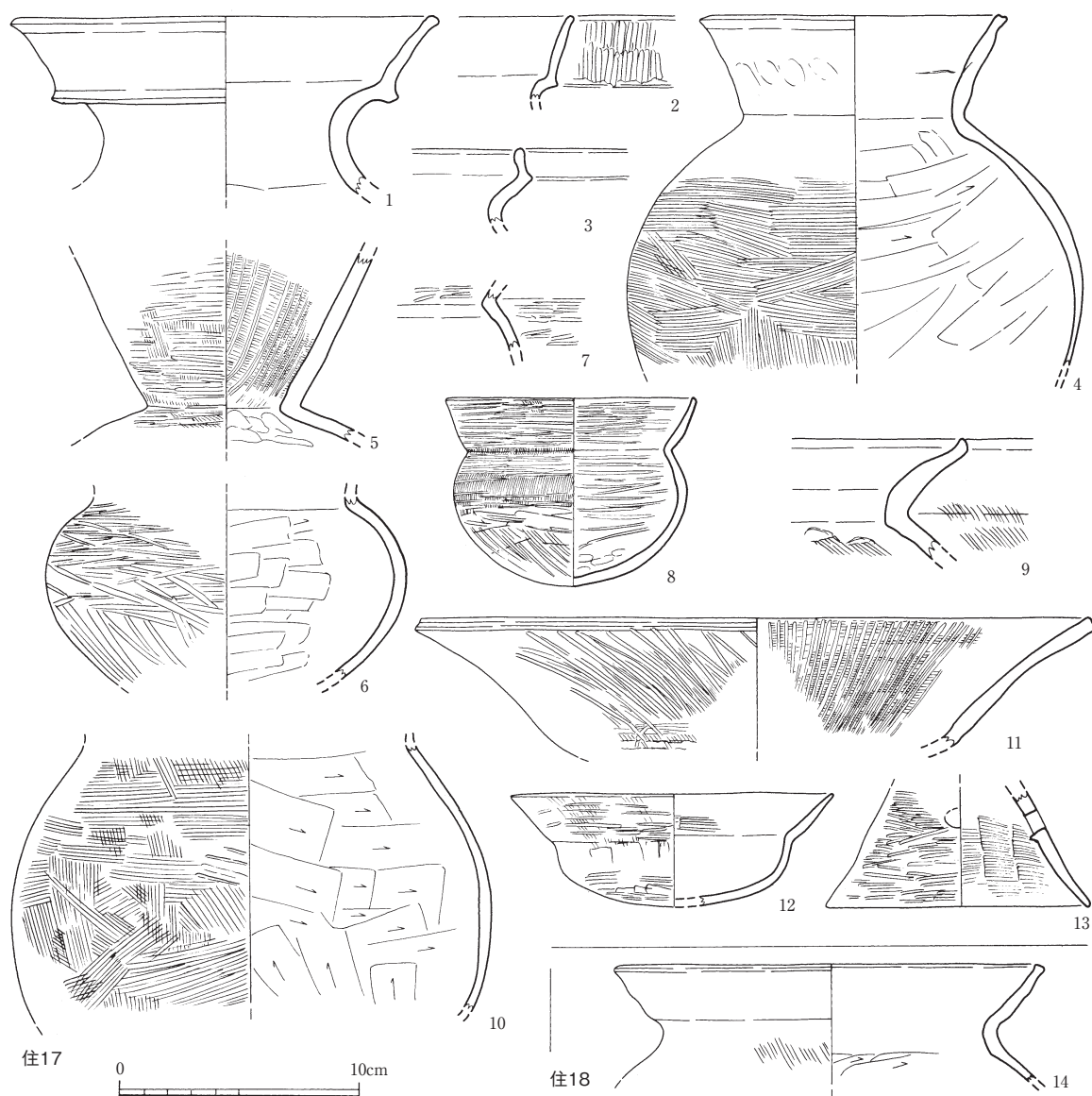
16～18はタコ壺。

17号竪穴住居跡（図版7、第42図）

発掘区の南辺中央部、16号竪穴住居跡の西側に位置する。北西隅は攪乱によって損壊を受けている。住居跡東壁の一部を16号竪穴住居跡に切られ、西壁は19号竪穴住居跡を切っている。



第43図 16号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第44図 17・18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

また、南西部は18号竪穴住居跡に切られている。南半は調査区外となるが、検出した部分での平面プランは各壁の中央部がやや膨らんだ隅丸長方形を呈する。規模は東西長3.32m、遺存する南北長3.15mを測る。主軸は概ね南北方向にとる。床面の標高は3.5m。住居跡の埋土は黒灰色砂質土。床面の中央よりやや西に偏って炉跡が存在する。炉跡の規模は径70cm、深さ5cmを測る。炉跡の埋土は黒色土である。住居跡の北東部コーナー際で、径26cm、深さ23cmの柱穴が確認された。

出土遺物 (図版22、第44図、第15表)

1～3は山陰系二重口縁壺。2は口縁部外面に縦方向のミガキを施す。3は口縁部が短く内傾し、端部は丸く収める。4は直口壺で、口縁端部をわずかに外側につまみ出し、端部下がくぼむ。5は畿内系直口壺。6は口縁部を欠くが直口壺と思われる。7・8は小形丸底壺。8は内面の方までミガキが及ぶ。ほぼ完存。

9・10は布留系甕。9は口縁端部を上方につまみ上げ内側に段を有する。10は傾きにやや不安あり。

11は高坏の杯部破片。口縁端部に面をなし、やや肥厚する。

12は外反口縁鉢。

13は小形器台の脚部。孔が1ヶ所に残存する。

18号竪穴住居跡（図版7、第42図）

発掘区の南辺中央部、17号竪穴住居跡の南西側に位置し、住居跡の北壁を確認したのみである。17号竪穴住居跡を切る。南北長など規模は詳らかではないが、北壁の長さ3.15mを測る。主軸をN-17°-Wにとる。床面の標高は3.4m。住居跡の埋土は黒灰色砂質土である。

出土遺物（第44図、第15表）

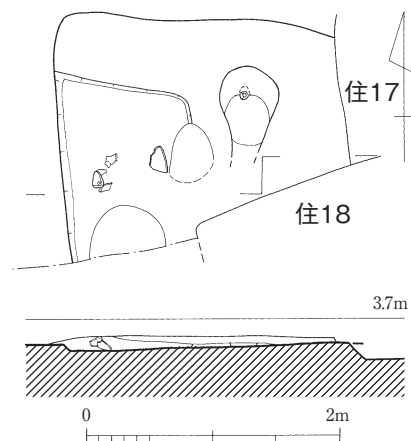
14は布留系甕の口縁部。端部は丸みをもち、やや肥厚する。

19号竪穴住居跡（図版7、第45図）

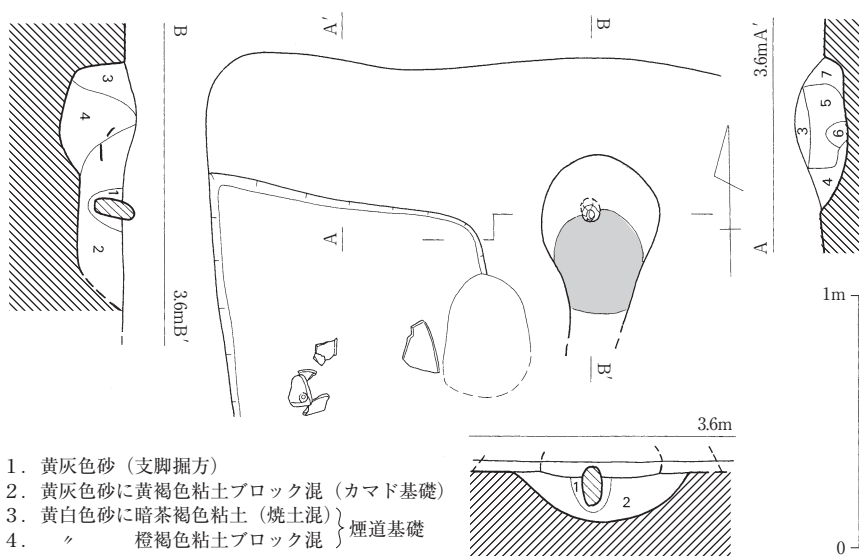
発掘区の南辺中央部、17号竪穴住居跡・18号竪穴住居跡の西側に位置する。東側を17号竪穴住居跡に、南側を18号竪穴住居跡に切られており、北西隅部を確認したのみである。カマドが付設される。床面の標高は3.5m。

カマド（図版7、第46図）

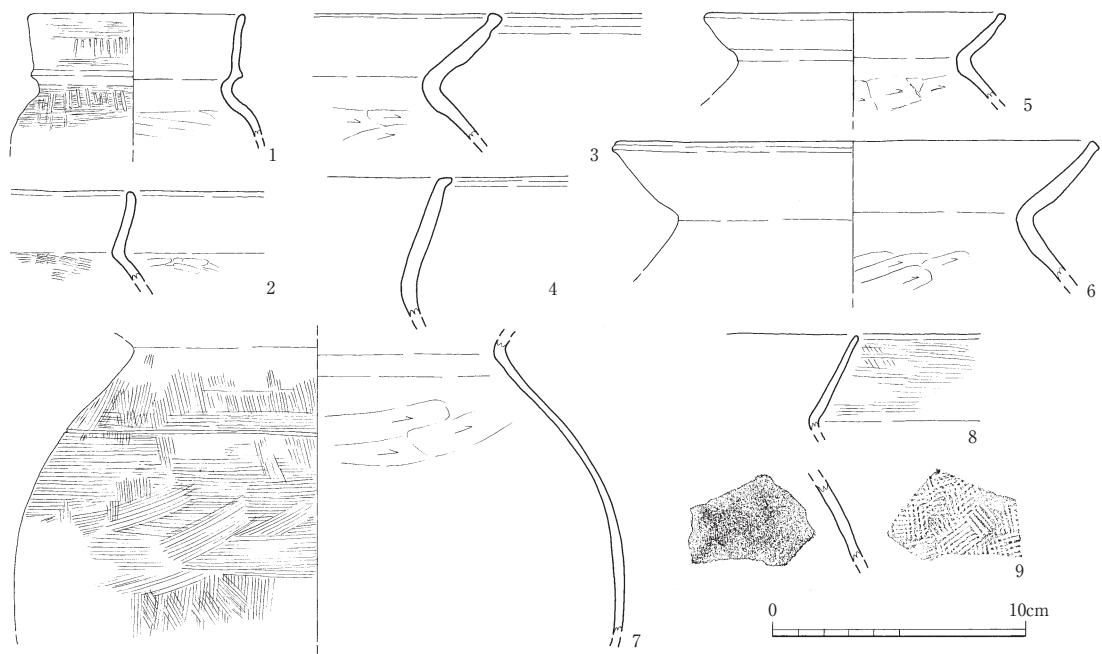
住居跡北壁の概ね中央部に付設され、煙道が住居壁に沿って西側に延びるタイプである。燃焼部の主軸は壁に直交する。



第45図 19号竪穴住居跡実測図（1/60）



第46図 19号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第47図 19号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
47-1		住19カマ ド	山陰系二 重口縁壺	口径86	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄白色	外ミガキ→口縁中位と肩に縦位の暗 文。内ケズリ。	1／5		280
2		住19覆土	直口壺		粘土細、砂粒をほ とんどふくまず	良好	黒色	外ミガキ、内横ハケ。	小片		274
3		住19覆土	布留系甕		粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	黄灰色	内ケズリ。	小片		276
4		住19覆土	布留系甕		粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	小片		279
5		住19覆土	布留系甕	口径118	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄白色	内ケズリ。	1／6		277
6		住19覆土	布留系甕	口径192	粘土粗、1～3mm 石英多い	良好	黄茶色	内ケズリ。	1／6		275
7		住19カマ ド	布留系甕	胴径242	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	淡黄褐色	外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	1／6		273
8		住19覆土	外反口縁 鉢か		粘土やや粗、1～ 3mm石英少	やや甘い	明黄褐色	外ミガキ。摩滅。	小片		278
9	28	住19覆土	半島系土 器		粘土細、砂粒を含 まず	陶質	茶灰色	外網代状タタキ、内ナデ。	小片		1132
50-1	22	住21覆土	タコ壺	口径47、器高85	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄灰色	底部にひび。内外ナデ。	口縁一部欠		281
2		住21カマ ド	山陰系二 重口縁壺	口径192	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	黄灰色	内外ナデ。摩滅著しい。	1／8		282
3	22	住22覆土	直口壺	口径194、胴径 290	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ→肩横ハケ。口縁内横ハ ケ、胴内工具ナデ。	一部欠ほぼ 完存		284
4		住22覆土	山陰系二 重口縁壺	口径110	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄灰色～茶褐色	口縁直立。内外ヨコナデ。	1／4		288
5		住22覆土	山陰系二 重口縁壺	口径180	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	黄褐色	内外ヨコナデ。	1／4		286
6		住22覆土	山陰系二 重口縁壺	口径200	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	黄褐色～茶褐色	口縁直立。頸外縦ハケ、内横ハケ後 ナデ。	1／4		285
7		住22覆土	在地系甕		粘土粗、1～3mm 石英少	良好	黄褐色	口縁「く」字形に外反。端部丸い。 摩滅著しい。	小片		292
8		住22覆土	布留系甕		粘土粗、1～3mm 石英少	良好	黒灰色	内外ヨコナデ。	小片	煤付着	89
9		住22覆土	布留系甕	口径148	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄灰色～黒灰色	内外ヨコナデ。	1／10	煤付着	291
10		住22覆土	甕	口径120	粘土細、1～3mm 石英少	良好	茶褐色	内外横ハケ。	1／8		290
11		住22覆土	器台	口径100	粘土細、1～3mm 石英少	良好	茶褐色	内外ヨコナデ。摩滅著しい。	1／5		293

第16表 19～22号竪穴住居跡出土土器観察表

カマドの構築土は残存していないが、床部分の土色に変化していたことにより、袖の輪郭がかろうじて把握できた。カマド袖の構築に先立って径69cm、深さ19cmの掘り込みを行い(②)、黄褐色砂に茶褐色粘質土を含む土を充填している。住居跡北壁から55cmほどの床面には、長さ16cm×径8cmの棒状の石材を支脚として埋め立てている。支脚石の前面は40cm×33cmの範囲で床面が硬化している。

煙道部もその地業が確認できたのみで、煙道自体は削平により残存していなかった。煙道部分の縦断面の土層では、径32cmほどの上弦状を呈する層(⑤)が観察され、煙道下部のラインとも考えられたが、その埋土が通常の煙道埋土となる砂とは異なる事、燃烧部床面レベルよりも10cm以上も低くなることから、煙道とは判断しなかった。なお、カマドの縦断面土層(第46図左)では、住居壁際の地業を先に行い、その後にカマドの袖が載る部分を掘りくぼめて本体を構築した状況が観察でき、先述した14号竪穴住居跡と共通する。

出土遺物(図版22、第47図、第16表)

1は小形の山陰系二重口縁壺。器壁が薄く丁寧な作りである。口縁部と肩部に短い縦位の暗文を施す。2は直口壺か。3～7は布留系甕。8は外反口縁鉢。9は半島系の陶質土器で、外面に網代状のタタキが残る。

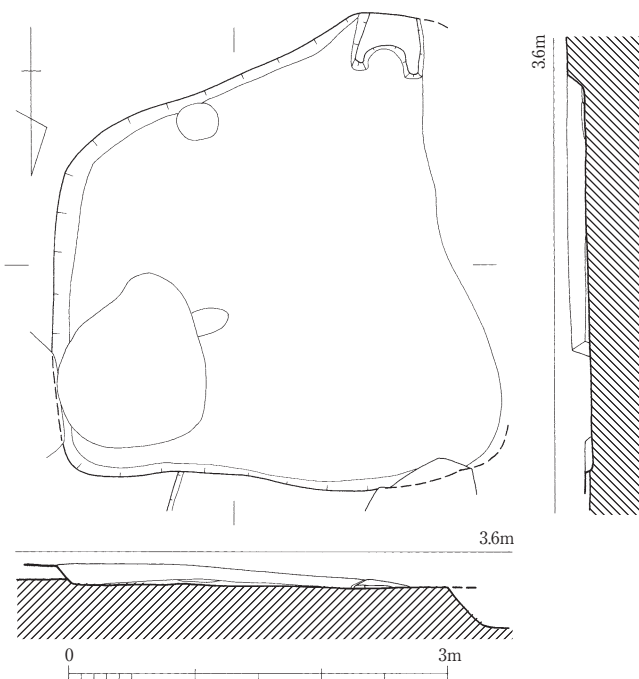
21号竪穴住居跡(図版8、第48図)

発掘区の南東部、15号住居跡の北東側に位置する。北側で28号竪穴住居跡・48号竪穴住居跡を切り、また、南側で46号竪穴住居跡を切る。住居跡の東壁は現代の攪乱によって損壊している。平面プランは西側に向かって広がる不正台形状を呈する。規模は南北長3.76mを測る。主軸は概ね東西方向にとる。カマドが付設される。住居跡の埋土は黒灰色砂である。床面の標高は3.3m。

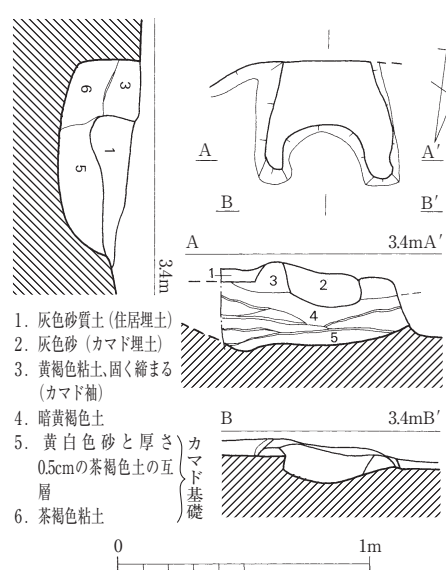
カマド(第49図)

他の住居跡の多くが北壁にカマドを付設する中で、当該住居跡のカマドは南壁西寄りに付設されている。燃烧部は住居南壁に概ね直交する。

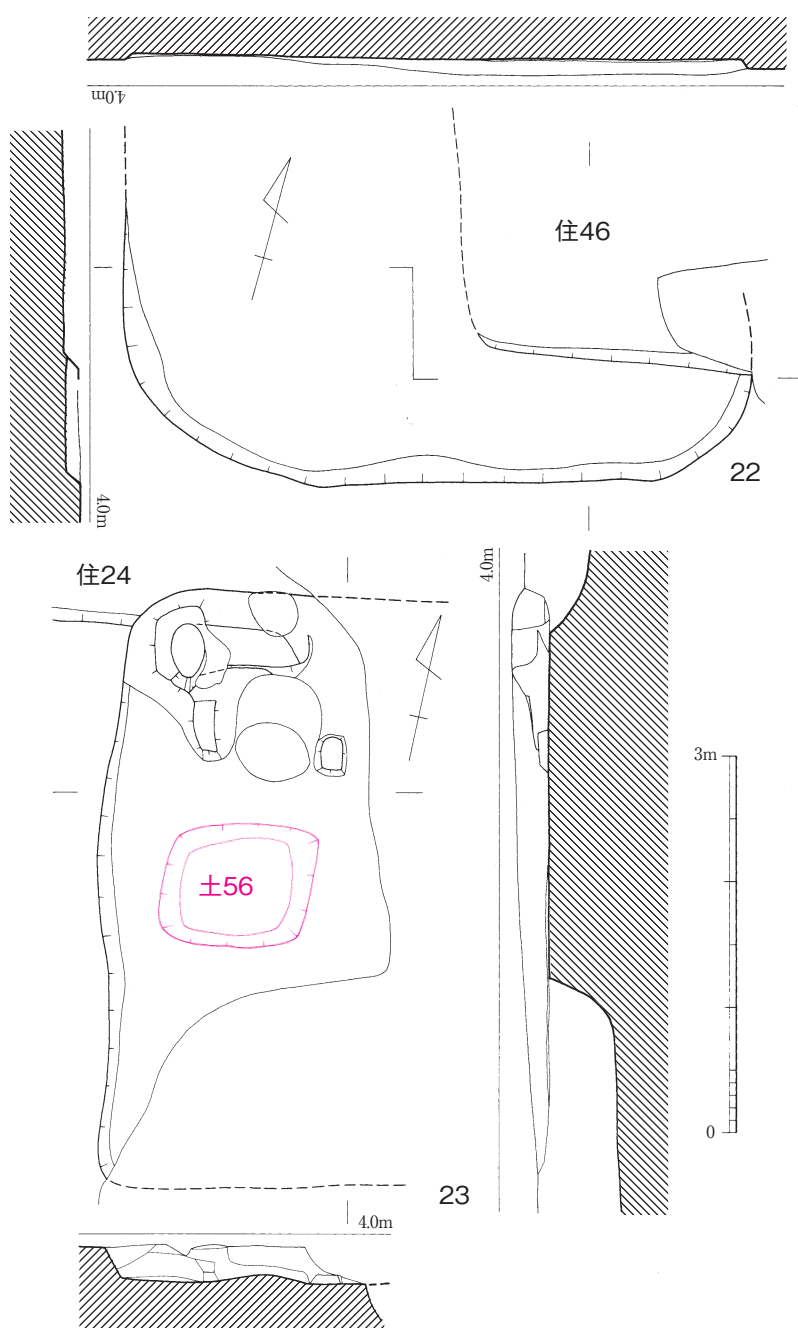
カマドの構築土はひじょうに締めりのある黄褐色粘土(③)からなる。カマド本体の構築に



第48図 21号竪穴住居跡実測図(1/60)



第49図 21号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)



第50図 22・23号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版22、第50図、第16表)

3は直口壺。外面の調整は縦ハケで肩部はその後横ハケを施す。頸部内面にヘラ状工具のアタリのような痕跡が巡る。4～6は山陰系二重口縁壺。4は小形。4・6は口縁部が直立し、5は外反する。

7は甕。口縁がく字形に外反し、端部は丸く収める。8・9は布留系甕の口縁部。

11は小形器台の受け部。口縁部は短く外反する。

22号竪穴住居跡 (図版9、第51図)

発掘区の中央部、21号竪穴住居跡の北側に位置する。竪穴住居跡の北壁の一部と西壁を確認

先立って、深さ16cmの掘り込みを行い、厚さ4～7cmの黄白色砂と、厚さ0.5cmの茶褐色粘質土の互層で充填する。袖の内側は住居床面よりも僅かに低くなっており、また、カマドの床面とともに硬化している。

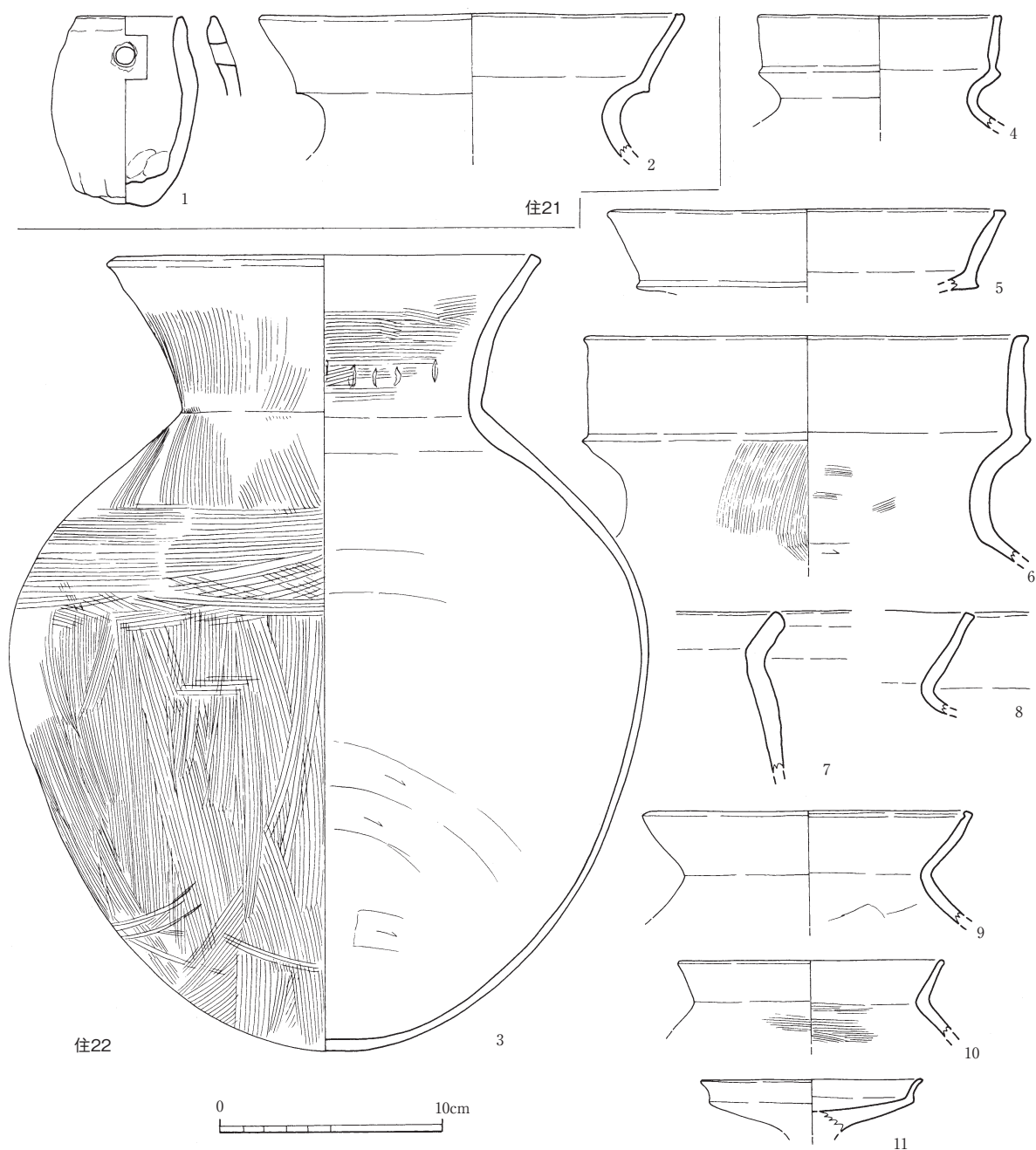
出土遺物 (図版22、第50図、第16表)

1はタコ壺。底部にひびが入る。2は山陰系二重口縁壺。

22号竪穴住居跡 (第51図)

発掘区の南東部、21号竪穴住居跡の南側に位置する。北側と東側を46号竪穴住居跡に切られ、南西隅部で30号竪穴住居跡を切る。削平が著しく、東壁と南壁が僅かに遺存していた状況である。規模は東西方向で4.97mを測る。主軸をN-16°-Wにとる。床面の標高は3.3m。

埋土中から軽石加工品が出土している。



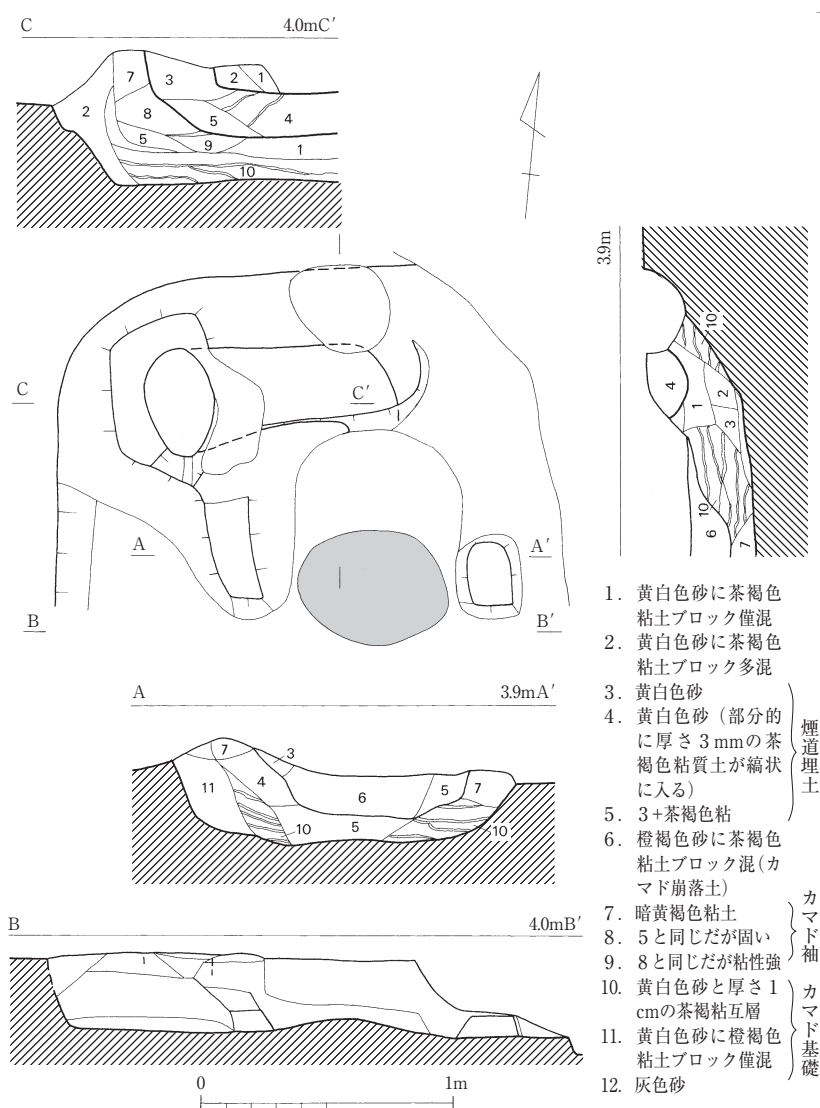
第51図 21・22号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

した。

東側と南側は旧プール建設時の攪乱により損壊している。また、56号土坑を切っている。規模は詳らかではないが、南北長4.75 (+ a) mを測る。主軸をN-10°-Wにとる。床面の標高は3.6m。カマドが付設される。

カマド (図版8、第52図)

住居跡北壁の西壁寄りに付設され、煙道が住居壁に沿って西側に短く延びる。燃烧部の主軸は壁に直交する。



第52図 23号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

カマドの構築土は焼土混じりの暗黄褐色粘質土で硬く締まる (⑦)。北壁から1.05m離れて径60cm×45cmの赤変した箇所があり、その部分の茶褐色粘土ブロックを含む粘質土はひじょうに硬く焼けている。このカマドの燃焼面は住居跡の床面とほぼ同じレベルであるが、その下部の橙褐色砂に茶褐色粘土ブロックを含む層 (⑥) の下層にも硬化面が認められた。カマドの下部には、東西1.35m、深さ25cmの掘り込みがあり、やはり他の事例と同じ土質の厚さ5cmほどの黄白色砂と、厚さ1cmの茶褐色粘土層を互層にして埋め (⑩)、カマド下部の地業としている。大半の住居跡のカマドの基礎地業はこの互層のみからなることが多いが、このカマドの下層の横断面ではさらに④⑤という埋土が

みられる。断面観察からは⑩層を切っているような状況であり、また、縦断面の土層でも同じ状況が観察されたため、同一場所でのカマドの作り替えがあったとも考えられようか。

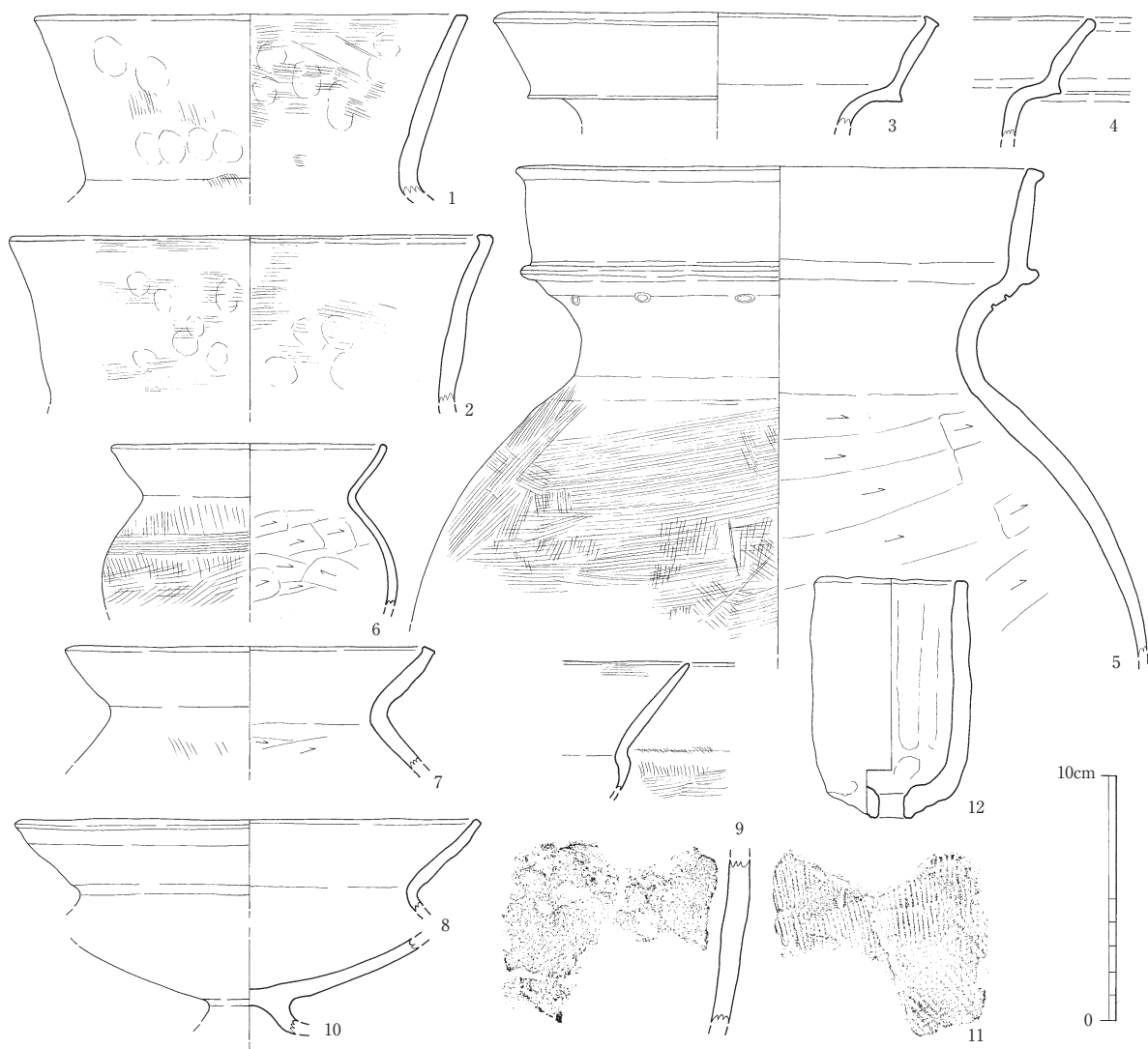
煙道はカマド燃焼部の最奥部から住居北壁に沿って西に延び、住居跡北西隅部（西壁から34cm、北壁から28cm）でほぼ直に立ち上がる。煙道部及びその基礎ともカマド袖と一連の作業によって構築されているようで、また、土質も変わらない。煙道の横断面形は円形で、径は壁に沿って水平に走る部分で18cmを測る。立ち上がり部分では32cm×27cmを測る。煙道の埋土は基本的に砂である。また、煙道の底面とカマド燃焼部のレベルは同じである。

出土遺物 (第53図、第17図)

1・2は直口壺。2の口縁端部は内側につまみ出す。3～5は山陰系二重口縁壺。3は口縁端部に面をなし、4は丸く収める。5は口縁が直立するもので、端部は外方につまみ出す。頸部の上位に竹管文を巡らせる。

6～8は布留系甕の口縁部。いずれも内側に浅い段を持つ。

9は外反口縁鉢の小片。10は脚付き鉢。



第53図 23号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
53-1		住23覆土	直口壺	口径178	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	明黄灰色	外ハケ後ヨコナデ。内ハケ、指頭圧痕残る。	1／6		298
2		住23カマド	直口壺	口径199	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	外黄灰色、内暗橙色	口縁端部を内側につまみ出す。内外横ハケ、指頭圧痕。	1／6		297
3		住23覆土	山陰系二重口縁壺	口径184	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄茶色	口縁端部面両方につまみ出す。内外ヨコナデ。	1／10		300
4		住23覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。摩滅著しい。	小片		299
5		住23覆土	山陰系二重口縁壺	口径236	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外横ハケ、内ケズリ。頭上位に竹管文。	1／3		665
6		住23覆土	布留系甕	口径113、胴径122	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄白色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／5		296
7		住23覆土	布留系甕	口径152	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色～黒灰色	外斜ハケ、内ケズリ。	1／4	煤付着	295
8		住23覆土	布留系甕	口径190	粘土やや細、1～3mm石英多	良好	黄白色	内外ヨコナデ。	1／4		294
9		住23覆土	外反口縁鉢		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ後斜ハケ。口縁内横ハケ。	小片		287
10		住23覆土	脚付き鉢		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	摩滅著しく不明。	1／5		301
11	28	住23覆土	半島系土器		粘土やや粗、1～2mm石英少	瓦質、もろい	黒茶色	外上平行タタキ、下格子タタキ。内ナデ、剥落著しい。	小片		1133

第17表 23号竪穴住居跡出土土器観察表

11は半島系土器壺の胴部片。瓦質で非常に脆い。

12はタコ壺。底部に穿孔を施す。内面の調整はナデ上げ。

24号竪穴住居跡（図版9、第54図）

発掘区の中央部、23号竪穴住居跡の北側に位置する。23号竪穴住居跡に切られ、25号竪穴住居跡を切る。東側と北西側は攪乱により損壊している。平面プランは長方形を呈する。規模は南北長4.32m、遺存する東西長4.40mを測る。主軸はN-11°-Wにとる。中央部よりやや北壁寄りに炉跡が存在する。規模は現存長軸長85cm、短軸長71cm、深さ6cmを測る。炉跡の埋土は黒色土。住居跡の埋土は灰色砂質土である。床面の標高は3.4m。床面で深さ20cmのピットを一つ検出した。

出土遺物（図版22、第55図、第18表）

1・2は山陰系二重口縁壺。1は口縁端部がやや肥厚し、面をなす。

3は第五様式系。口縁端部が直線的に伸びる。4～8は布留系甕。7・8は口縁端部を内側につまみ出し、明瞭な段をなす。8は肩部に3条一対の波状文を施す。

9は高坏。口縁端部に面をなし、端部の内面に浅い沈線を巡らせる。

10～14は外反口縁鉢。12は口縁部が直線的に伸びる。10は外面の調整がヘラケズリ。14は口縁部内面が横ハケ。15は平底の鉢。口縁部は内湾気味で、端部は丸く収める。16は脚付き鉢。

17は小形器台。口縁部は短く外反する。

18～20はタコ壺。18・20の口縁部は内湾し、19は直線的である。

25号竪穴住居跡（図版9、第54図）

発掘区の中央部、24号竪穴住居跡の北側に位置する。住居跡の西壁を確認したのみで、南側は24号竪穴住居跡に切られ、また、東側と北側は攪乱によって損壊している。床面でピットを二つ検出した。床面の標高は3.6m。

埋土中から砥石が出土している。

出土遺物（第55図、第18表）

21は山陰系二重口縁壺。22は直口壺と考えられるが内面はハケ調整である。

23は脚付き鉢。

24は山陰系鼓形器台の下半部。脚部の突帯下に2対の孔を穿つ。

25は半島系陶質土器壺の肩部分の小片。外面は網代状のタタキ。内面はヨコナデ。

26号竪穴住居跡（付図2）

発掘区の南西部、23号住居跡の西側に位置する。周囲の攪乱が著しく、住居跡の床の一部を確認したのみで規模は定かではない。残存長3.4mを測る。床面に65cm×45cmの範囲で変色した部分があり、カマドの袖の痕跡である可能性が高い。この部分の埋め土は茶褐色土に黄白色砂のブロックが混入した土層である。床面の標高は3.5m。

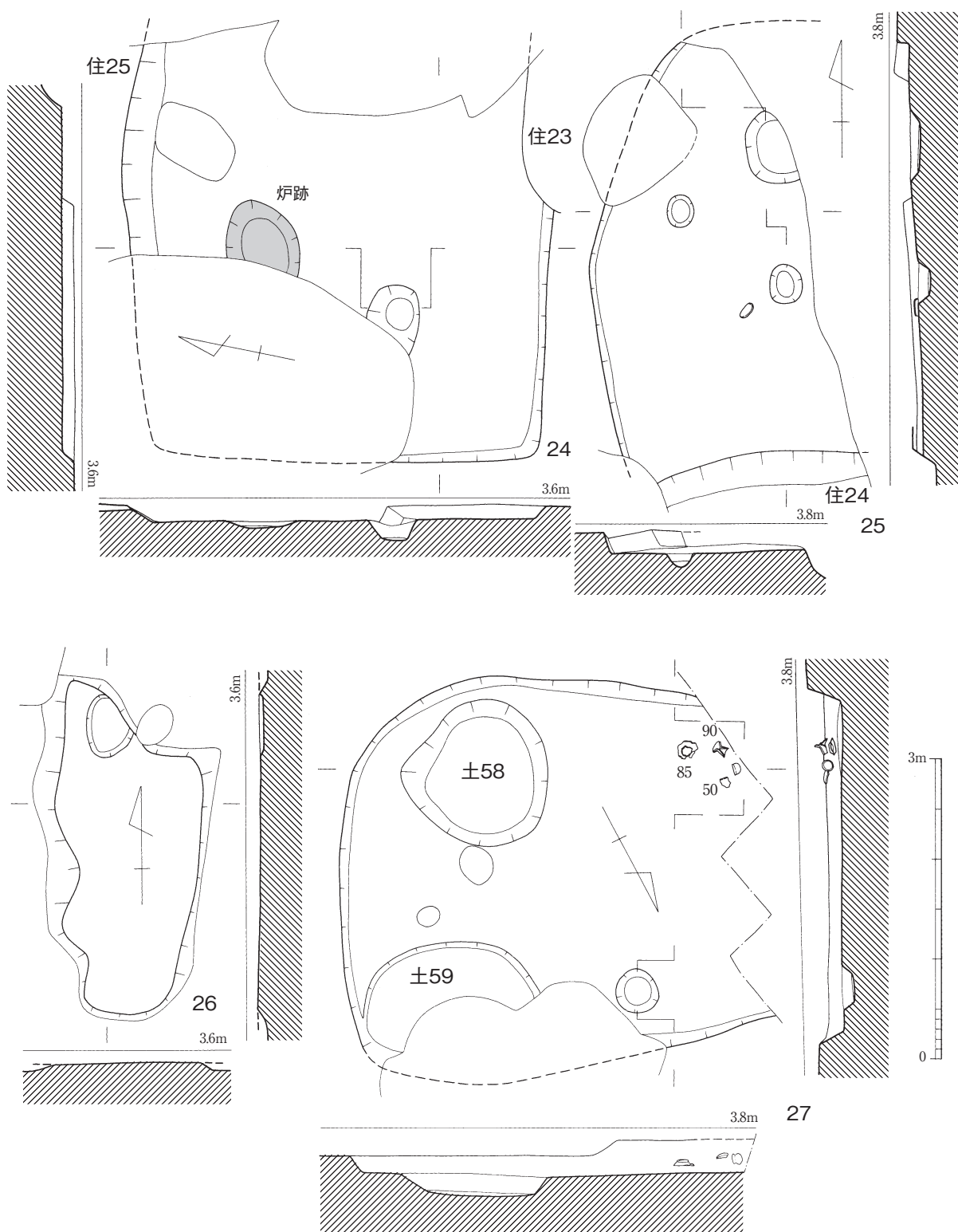
出土遺物（第56図、第18表）

1・2は山陰系二重口縁壺。2は口縁部が直に近い立ち上がり。端部に平坦面をなす。

3～5は布留系甕。4は口縁端部に面をなし、内側につまみ出す。

27号竪穴住居跡（図版9、第54図）

発掘区の南西隅部の別区に位置する。住居跡の西壁は発掘区外となる。58号土坑・59号土坑を切る。平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は3.60m×4.50（+α）mを測る。主軸を



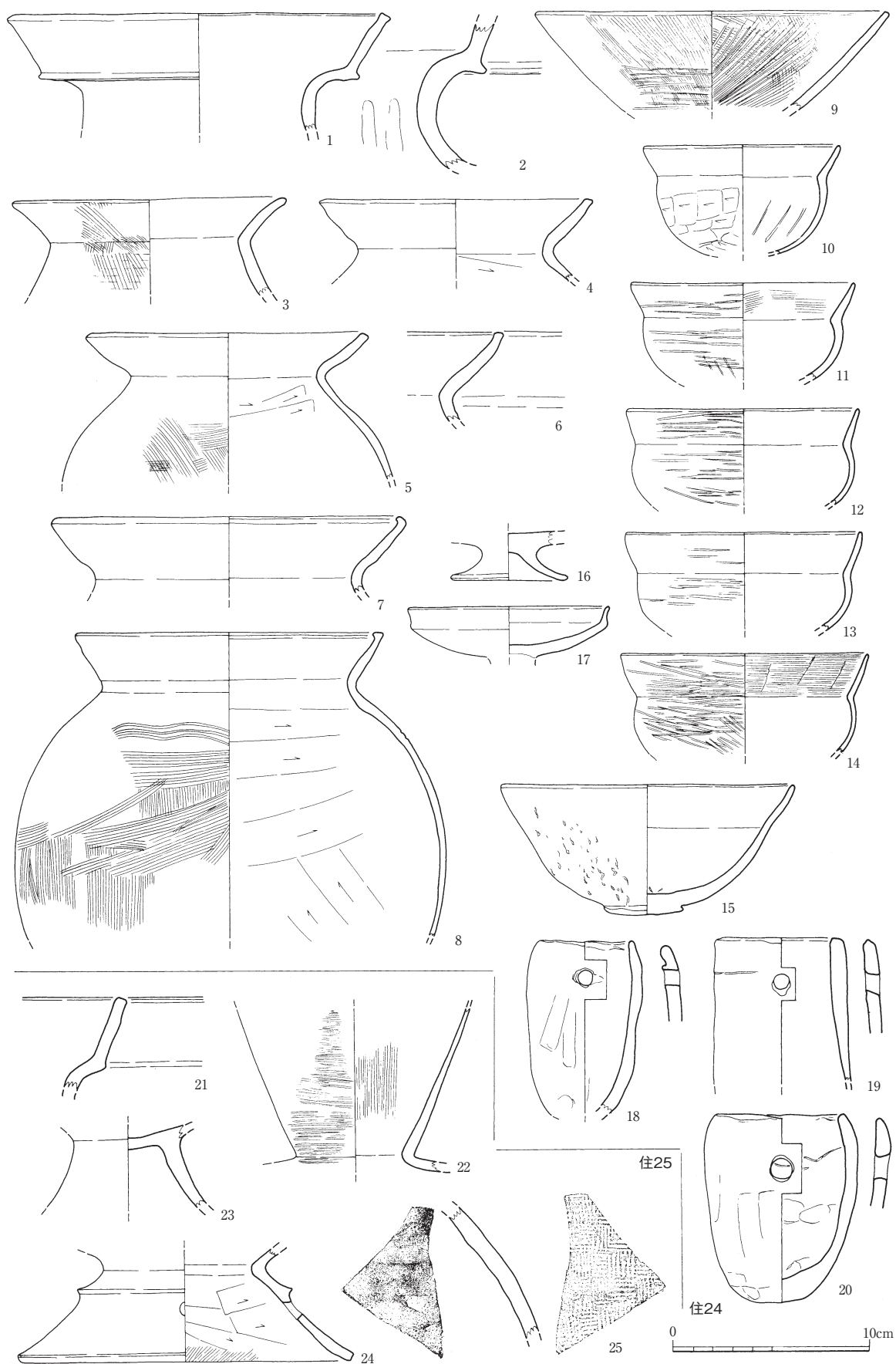
第54図 24～27号竪穴住居跡実測図 (1/60)

N-59° -Wにとる。床面の標高は3.3mを測る。住居跡の埋土は黒色土。床面の3ヶ所でピットを検出したがいずれも浅く、支柱穴になるとは言い難い。

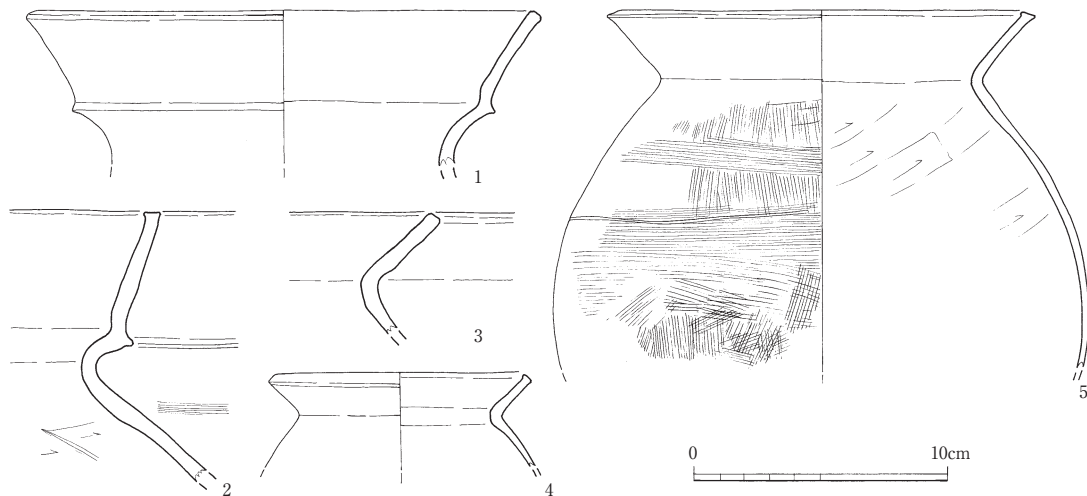
出土遺物 (図版22・23、第57～62図、第20・21表)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
55-1		住24覆土	山陰系二重口縁壺	口径194	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ヨコナデ。	1／5		310
2		住24覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ヨコナデ。内指頭痕。	小片		309
3		住24覆土	甕	口径140	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色～茶褐色	口縁外斜ハケ、胴外横ハケ後縦ハケ。内ケズリ。	1／8		305
4		住24覆土	布留系甕	口径140	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄茶色	口縁内外ヨコナデ。胴内ケズリ。	1／3		307
5		住24覆土	布留系甕	口径144	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄茶色	外斜ハケ、内ケズリ。	2／5		304
6		住24覆土	布留系甕		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ヨコナデ。	小片		306
7		住24覆土	布留系甕	口径180	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ヨコナデ。	1／9		308
8	22	住24覆土	布留系甕	口径156、胴径220	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙灰色	3条一対の櫛描き波状文。縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	1／2	煤付着	303
9		住24覆土	高坏	口径180	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好、黒斑	茶褐色～黄灰色	口縁端部に面をなす。斜ハケ→暗文。	1／8		320
10		住24覆土	外反口縁鉢	口径100、胴径86	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	暗黄茶色	外ケズリ、内板ナデ。	1／8		315
11		住24覆土	外反口縁鉢	口径114、胴径102	粘土やや細、砂粒をほとんど含まず	良好	黄灰色	外ミガキ。口縁内横ハケ、胴ナデ。	1／9		317
12		住24覆土	外反口縁鉢	口径118、胴114	粘土粗、砂粒をほとんど含まず	良好	茶褐色	口縁直線的。外ミガキ、内ナデか。	1／8		319
13		住24覆土	外反口縁鉢	口径120、胴径108	粘土粗、砂粒をほとんど含まず	良好、黒斑	外黄茶色、内茶褐色	外ミガキ、内摩滅著しく不明。	1／8		318
14		住24覆土	外反口縁鉢	口径126、胴径112	粘土粗、砂粒をほとんど含まず	良好	茶褐色	外ミガキ。口縁内横ハケ、胴ナデ。	1／4		316
15	22	住24覆土	鉢	口径149、底径40、器高66	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、黒斑	淡黄褐色	内外ナデ。底部に工具痕。	完存		311
16		住24覆土	脚付き鉢	脚径60	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄白色	摩滅著しく不明。	1／4		323
17		住24覆土	器台	口径102	粘土細、1～3mm石英少	良好	茶褐色	摩滅著しく不明。	1／4		321
18	22	住24覆土	タコ壺	口径47	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄白色～茶灰色	外ナデ、内ナデ上げ。	底部欠		313
19	22	住24覆土	タコ壺	口径65	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	内外ナデ。	1／2		314
20	22	住24覆土	タコ壺	口径66、器高96	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙灰色	内外ナデ。	完存		312
21		住25覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	小片		325
22		住25覆土	直口壺か	頸径60	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外ミガキ	1／5		324
23		住25覆土	脚付き鉢		粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄褐色	内外ナデ。	1／5		326
24		住25覆土	山陰系鼓形器台	脚径170	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	孔2ヶ所。外ヨコナデ、内ケズリ。	1／4		327
25	28	住25覆土	半島系土器壺肩		粘土やや細、砂粒を含まず	陶質	灰色	外網代状タタキ、内ヨコナデ。	小片		1134
56-1		住26覆土	山陰系二重口縁壺	口径204	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	1／8		330
2		住26覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁端面をなし、内側にややつまみ出す。肩外一部横ハケ、内ケズリ。	小片		329
3		住26覆土	布留系甕		粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内ケズリ。	小片		328
4		住26覆土	布留系甕	口径104	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄白色～黄灰色	口縁端部に面をなし、内側につまみ出す。	1／6		332
5		住26覆土	布留系甕	口径170、胴径212	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外茶褐色、内黄灰色	口縁端部ややくほみ、内側につまみ出す。外縦ハケ後横ハケ、内ケズリ。	1／4		331

第18表 24～26号竪穴住居跡出土土器観察表



第55图 24·25号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第56図 26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

1・2は直口壺。2は肩部にヘラ描波状文を巡らせる。3・4は在地系大形壺。ともに断面三角形の突帯に、板状工具端を押圧して刻目を入れる。5～14は山陰系二重口縁壺。5・7・12は口縁部が直立する。6は口縁部から胴部にかけて縦方向のミガキの後、肩部に横方向のミガキを施す。8・14は頸部があまり締まらないため鉢とした方がよい。15は畿内系二重口縁壺。口縁部外面に櫛描き波状文を巡らせ、その下部には円形浮文を貼付する。17は畿内系直口壺。18から25は小形丸底壺。口縁部が直線的に伸びるもの、内湾するもの、口縁端部が外反するものなどがある。

26は大形の甕。口縁部は「く」字形に外反し、屈曲部下には不明瞭でいびつな突帯を巡らせる。29～54は布留系甕。口縁端部の内側に段をもつもの、もたないもの、端部に面をなすもの、丸く収めるもの、端部を外方につまみ出すものなどがある。35は体部が扁球形になる。

55～73は高坏。60～61の杯底部には径2～5mmの円形の窪みが残る。66は2方向、68は4方向、73は3方向に円孔を穿つ。70・71・73の調整は外面が縦位のハケ後粗い縦方向のミガキ、脚内面はいずれも横方向のケズリを行う。山陰系か。

74・75は外反口縁鉢。ともに器壁が非常に薄い。76・77はボール状の鉢。79は浅い樽形を呈する極めて稀な器形。80～85は脚付き鉢。80も器形的に例が少ない。86は脚部の4方向に円孔を穿つ。

87～89は小形器台。90・91は在地系の器台。92・93は山陰系鼓形器台。

95～98は半島系土器。97は壺の肩～胴部にかけての小片で胎土・色調など土師器に近い。98は小形の鉢。調整は内外面ともヨコナデ。内面には底部近くから口縁部下まで、縦方向の浅い線刻が2条ある。陶質土器。

99～102はタコ壺。101は底部に板状工具の圧痕が残る。102の傾きはやや不安。

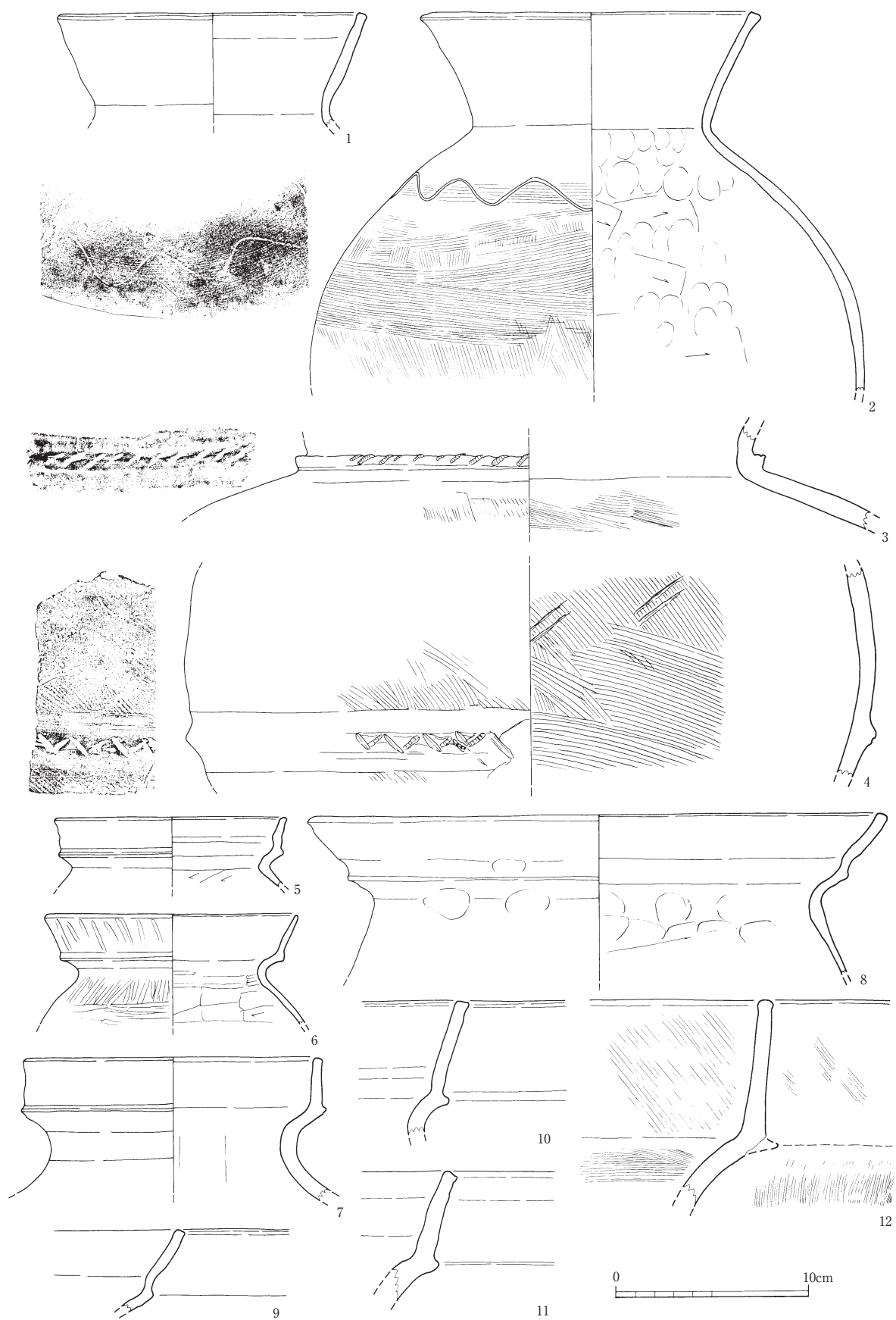
28号竪穴住居跡 (図版10、第63図)

発掘区の南東部、23号竪穴住居跡の南側に位置する。南側を21号竪穴住居跡に切られ、東側で48号竪穴住居跡を切る。平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は東西長3.67mを測る。主軸をN-2°-Eにとる。カマドが付設される。床面の標高は3.4m。

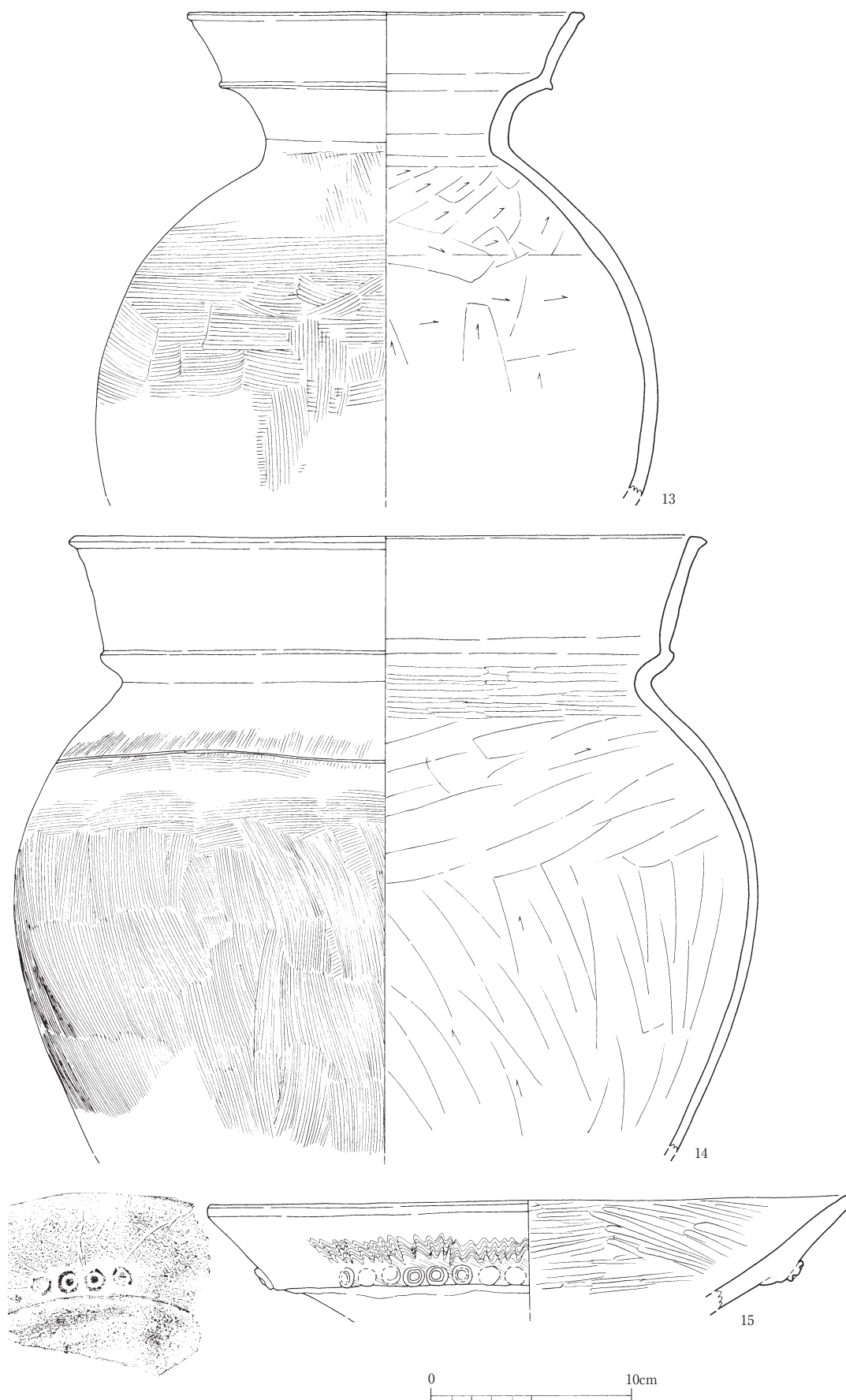
カマド (図版10、第64図)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
57-1		住27覆土	直口壺	口径154	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ	1／5		435
2	22	住27覆土	直口壺	口径176、胴径282	粘土やや細、1～3mm石英多	良好	茶褐色	ヘラ描き波状文。外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。指頭圧痕多い。	3／5		337
3		住27覆土	在地系壺	頸径240	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	橙褐色	頸部に断面三角形の刻目突帯。外縦ハケ、内横ハケ。	1／6		430
4		住27覆土	在地系壺	胴径358	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	橙褐色	胴部下位に断面三角形の刻目突帯。内外斜ハケ。	1／6		429
5		住27覆土	山陰系二重口緑壺	口径118	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁直立。内ケズリ。	1／6		401
6		住27覆土	山陰系二重口緑壺	口径130	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄褐色	口縁外ミガキ、胴外縦ミガキ→横ミガキ、内ケズリ。	1／6		403
7		住27覆土	山陰系二重口緑壺	口径148	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ヨコナデ。	1／6		407
8		住27覆土	山陰系二重口緑壺？鉢？	口径288	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。指頭圧痕残る。	1／8		400
9		住27覆土	山陰系二重口緑壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	小片		405
10		住27覆土	山陰系二重口緑壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	外黄灰色、内暗灰色	内外ヨコナデ。	小片		399
11		住27覆土	山陰系二重口緑壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	小片		406
12		住27覆土	山陰系二重口緑壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	外黄灰色、内橙茶食	口縁内外斜ハケ。頸外縦ハケ、内横ハケ	小片	煤付着	395
58-13	22	住27覆土	山陰系二重口緑壺	口径198、胴径268	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色～暗黄灰色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	2／3		336
14	23	住27覆土	山陰系二重口緑壺？鉢？	口径315、胴径370	粘土粗、1～5mm石英多	良好	淡褐色	肩にヘラ描き沈線。外横ハケ→縦ハケ。内ケズリ。頸内工具ナデ。	2／3		333
15		住27覆土	畿内系二重口緑壺	口径320	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	茶褐色	外櫛描き波状文、円形浮文。内ミガキ。	1／8		396
59-16		住27覆土	壺		粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	暗黄灰色	外縦ハケ、内ケズリ後ナデ。	1／3		439
17		住27覆土	直口壺	口径110	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	暗黄褐色～茶褐色	外ミガキ、内横ハケ。内暗文。	1／3		397
18		住27覆土	小形丸底壺	口径92、胴径89	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙茶色	外ミガキ、胴下ケズリ後ミガキ。内ミガキ。	1／6		380
19	23	住27覆土	小形丸底壺	口径93、胴径90、器高65	粘土細、砂粒をほとんど含まず	やや甘い	橙褐色	外ミガキ、胴下ケズリ後ミガキ。内ミガキ。	1／2		378
20		住27覆土	小形丸底壺	口径106、胴径90	粘土細、砂粒をほとんど含まず	やや甘い	淡橙色	外ミガキ、胴下ケズリ後ミガキ。内ミガキ。	1／5		383
21	23	住27覆土	小形丸底壺	口径110、胴径178、残高132、胴径96	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	茶褐色～黒灰色	外ミガキ。胴内ナデ、指頭圧痕。	1／3		339
22		住27覆土	小形丸底壺	口径114、胴径108	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	茶褐色	内外ミガキ。	1／4		384
23		住27覆土	小形丸底壺	口径114	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙茶色	内外ミガキ。	1／10	口径やや不安	385
24		住27覆土	小形丸底壺	口径124、胴径122	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後ミガキ。口縁内横ハケ、胴内ミガキ。	1／4		379
25		住27覆土	小形丸底壺		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	茶褐色	外縦ハケ後ミガキ。口縁内横ハケ、胴内ミガキ。	小片		386
26		住27覆土	在地系大形甕	口径366	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色～暗茶色	屈曲部に浅く乱れた突帯。外縦ハケ、口縁内斜ハケ。	1／8		432
27		住27覆土	甕	胴径200	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	暗黄灰色～黒茶色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／9	煤付着、傾きやや不安	438
28		住27覆土	甕	口径96	粘土粗、1～3mm石英多	良好	茶褐色～黄灰色	口縁～頸部厚い。外ナデか。内ケズリ。胴にヘラ先のアタリあり。	1／4		434
29	23	住27覆土	布留系甕	口径116、胴径134	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	外横ハケ後縦ハケ、内ケズリ（後ナデか）。	1／2		346
30	23	住27覆土	布留系甕	口径105、胴径150	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	黄褐色	口縁内側下部は強いナデで凹む。外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／2	傾き不安。	335
31		住27覆土	布留系甕	口径116	粘土粗、1～3mm石英少	良好	明黄灰色	口縁端部丸い。外摩減著しい。内ケズリ。	1／5		421
32		住27覆土	布留系甕	口径124	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	暗黄灰色	口縁端部丸い。内外ヨコナデ。	1／5	煤付着。	425
33		住27覆土	布留系甕	口径126	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黒茶色～淡黄灰色	口縁部内湾。外ナデ、内ケズリ。	2／3		411
34		住27覆土	布留系甕	口径132	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	暗黄灰色	肩に3条の浅い櫛描。外横ハケ、内ケズリ。	1／3		415

第19表 27号竪穴住居跡出土土器観察表 1



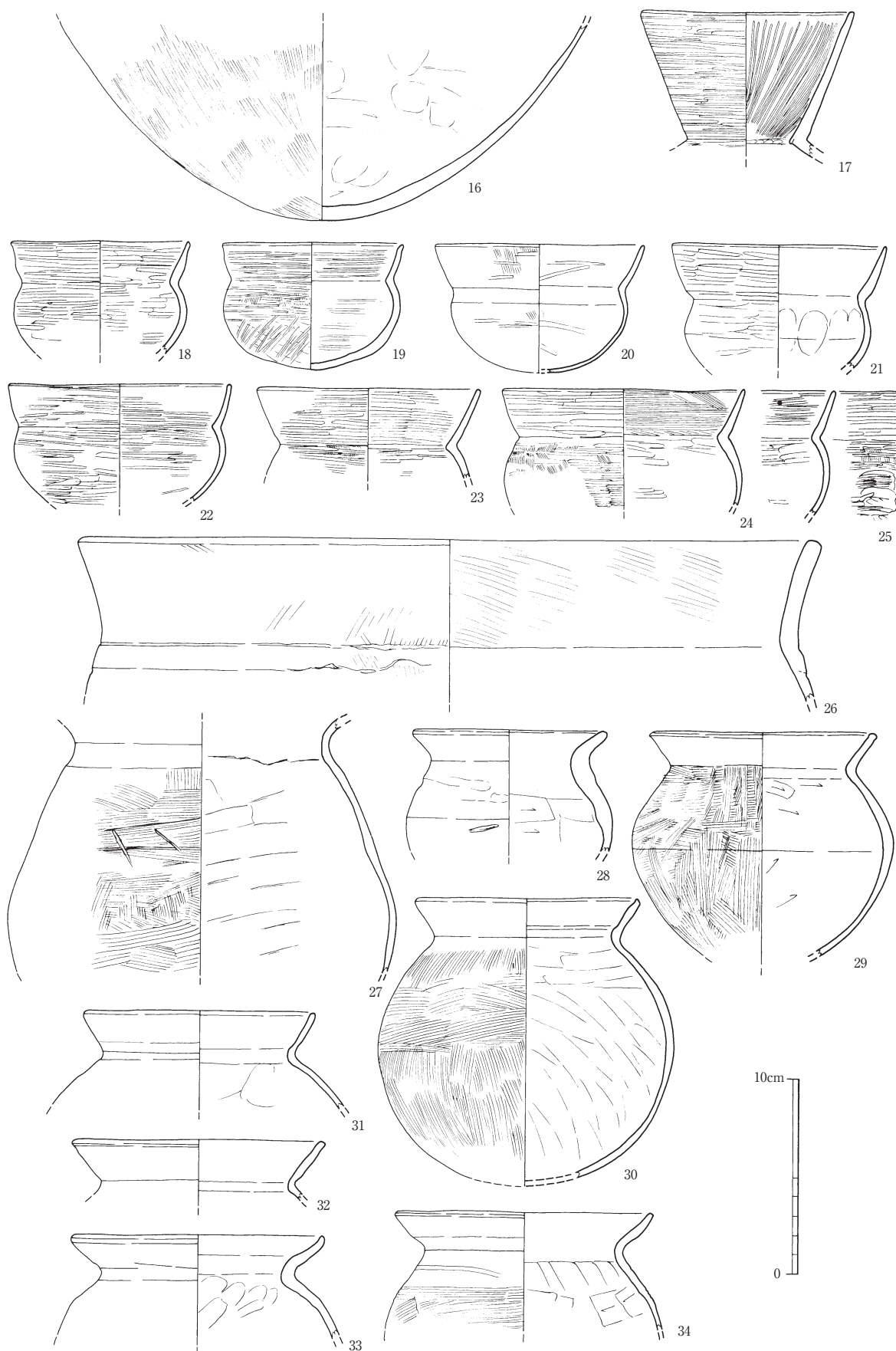
第57图 27号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)



第58图 27号竖穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
60-35		住27覆土	布留系甕	口径124、胴径142	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	胴扁球形。外縦ハケ→横ハケ。内斜めハケ。頸内指頭圧痕。	口縁3／4欠。他は完存	煤付着	334
36		住27覆土	布留系甕	口径128	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄灰色～黒茶色	外摩減著しい。内ケズリ。	1／6		409
37		住27覆土	布留系甕	口径128	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡橙色	外斜ハケ。内縦ハケ後ケズリ。内面粘土接合痕跡残。	1／6		420
38		住27覆土	布留系甕	口径138	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	外縦ハケ、内ケズリ。	1／6		427
39		住27覆土	布留系甕	口径146	粘土細、1～3mm石英少	良好	黒色～黒茶色	口縁端部丸い。内ケズリ。	1／6		426
40		住27覆土	布留系甕	口径146	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端部丸い。内ケズリ。	1／6		414
41		住27覆土	布留系甕	口径156	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁端部面をなす。外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／10		413
42		住27覆土	布留系甕	口径158	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黒茶色～灰色	内外ヨコナデ	1／10	傾きやや不安	416
43		住27覆土	布留系甕	口径164	粘やや細、1～3mm石英少	良好	暗黄灰色～黒茶食	内外ヨコナデ。	1／6		417
44		住27覆土	布留系甕	口径166	粘土細、1～3mm石英多	良好	黒茶色～黄灰色	口縁内湾。外縦ハケ、内ケズリ。	1／6		412
45		住27覆土	布留系甕	口径166	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	茶褐色	口縁端部窪み、内側につまみ出す。外縦ハケ、内ケズリ。	1／4		410
46		住27覆土	布留系甕	口径174	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄灰色～濃茶色	外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ、頸下ナデ、指頭圧痕。	1／4		424
47		住27覆土	布留系甕	口径178	粘土粗、1～3mm石英少	良好	暗茶灰色	内ケズリ。頸内に粘土の亀裂。	1／6		423
48		住27覆土	布留系甕	口径184	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁端部に面をなす。内外ヨコナデ。	1／6		419
49		住27覆土	布留系甕	口径184	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	口縁端部外方につまみ出す。内ケズリ。	1／6		437
50		住27覆土	布留系甕	口径188、胴径246	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁端部くぼむ。外横ハケ、内ケズリ。	1／3		431
51		住27覆土	布留系甕		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	暗茶灰色	口縁端部内側につまみ出す。内ケズリ。	小片		428
52		住27覆土	布留系甕		粘土やや細、1～3mm石英多	良好	暗黄灰色	内外ヨコナデ。	小片	煤付着	418
53		住27覆土	布留系甕		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	黄灰色	内ケズリ。	小片	煤付着	422
54		住27覆土	布留系甕		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	茶褐色	口縁端部丸い。内側に段あり。内外斜ハケ。	小片	煤付着	436
61-55	23	住27覆土	高坏	口径159	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁やや外反。外放射状の暗文。内ミガキ。脚との接合部にハケ。	1／4		343
56		住27覆土	高坏		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄橙色	内外ミガキ	1／4		374
57		住27覆土	高坏	口径170	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好、黒斑	橙褐色	外ミガキ、内斜ハケ後ミガキ。	1／8		367
58		住27覆土	高坏	口径180	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外斜ハケ後ミガキ、内摩減著しい。脚との接合部丁寧なナデ。	1／8		364
59		住27覆土	高坏	口径190	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外ミガキ、内横ハケ後放射状の暗文。	1／10		363
60		住27覆土	高坏		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	杯外ハケ、内ナデ。脚外ハケ後一部ミガキ、内ケズリ後ナデ。杯底部に径6mmの孔。	脚全周残		365
61		住27覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	黄灰色	杯内外ミガキ。脚外ハケ、内ナデ。杯底部に径3mmの孔。	脚全周残		366
62		住27覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	褐色～橙灰色	杯内外ミガキ。脚外ハケ、内ナデ。杯底部に径3mmの孔。	脚全周残		361
63		住27覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	明黄褐色～褐色	杯内外ミガキ。	1／3		362
64		住27覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	褐色	外縦ハケ後ミガキ、内工具ナデ。脚上面にヘラ状工具先端による螺旋状の押圧。	脚全周残		350
65		住27覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	外黄褐色、内淡橙色	杯内放射状ミガキ。脚外縦ハケ後ミガキ、内ナデ。円孔1ヶ所残。	脚全周残		359
66		住27覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙色	外縦ハケ後ミガキ、内ナデ。円孔2方。	脚全周残		354
67		住27覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙茶色	杯内ミガキか。脚外縦ハケ後ミガキ、内ナデ。脚内にシボリ痕。	脚全周残		353
68		住27覆土	高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	やや甘い	黄橙色～橙茶色	杯内・脚外摩減。脚内ケズリ。円孔4方。	脚全周残		351
69	23	住27覆土	高坏	脚径112	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	茶褐色～黄灰色	外縦ハケ。内ナデ、裾横ハケ指頭圧痕顕著。円孔2方。	脚全周残		345
70		住27覆土	山陰系？高坏		粘土やや細、1～3mm石英多	良好	橙茶色	外縦ハケ後粗い縦ミガキ。内ケズリ。	脚全周残		357
71		住27覆土	山陰系？高坏		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙灰色	外縦ハケ後粗い縦ミガキ。内ケズリ。	脚全周残		352

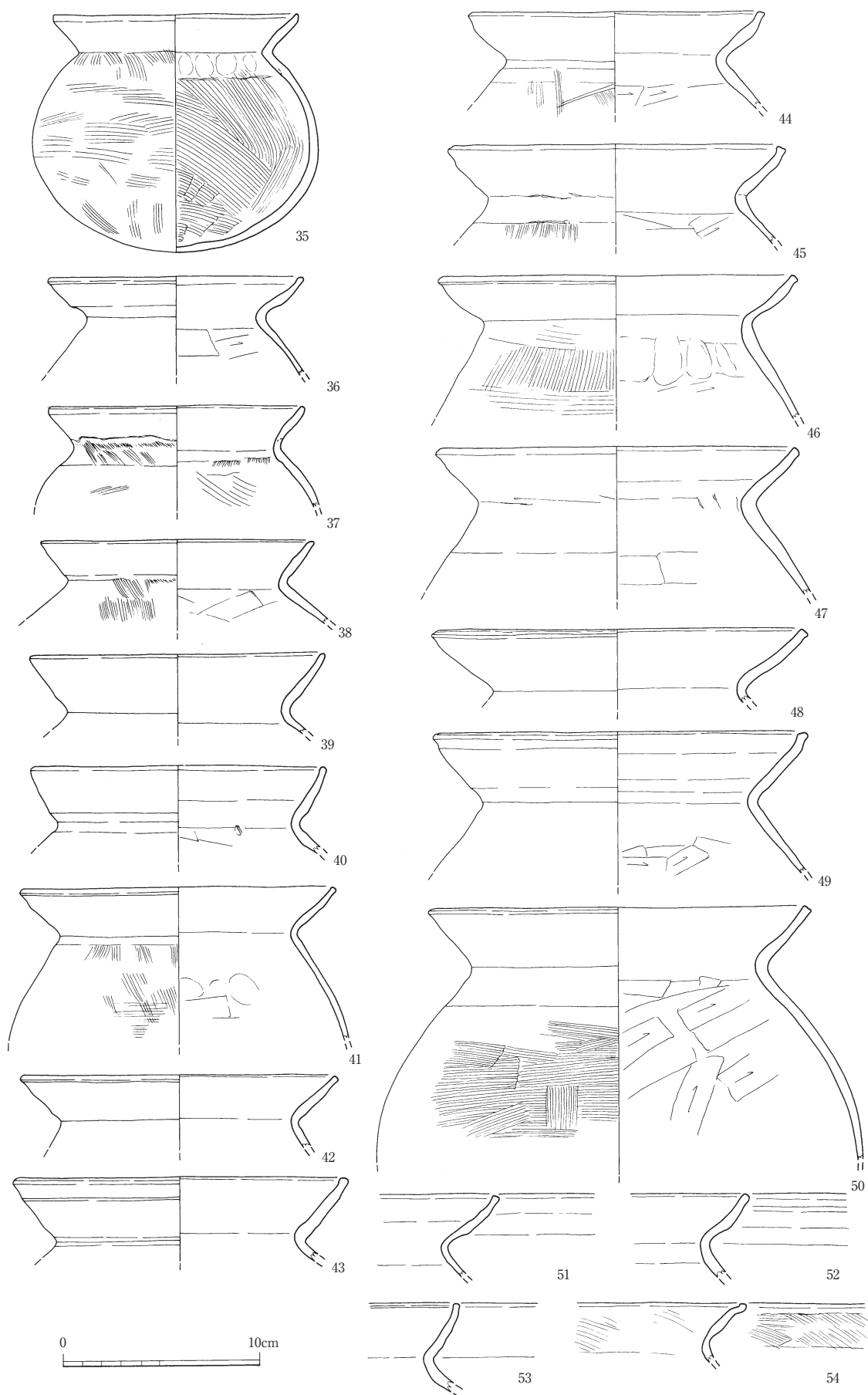
第20表 27号堅穴住居跡出土土器観察表2



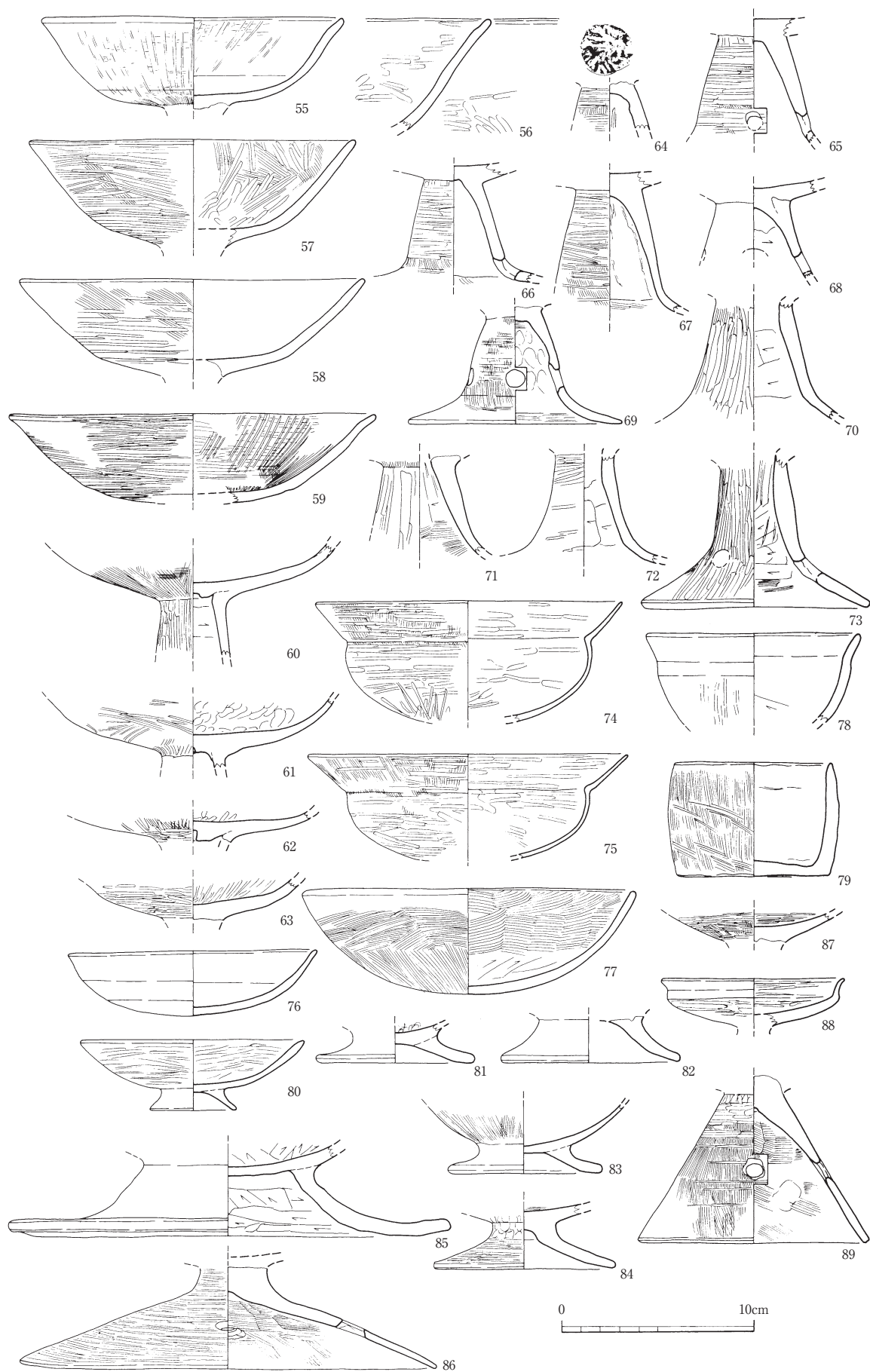
第59图 27号竖穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
72		住27覆土	高坏		粘土細、砂粒を ほとんど含まず	良好	暗褐色	外ミガキ、内ケズリ。	1 / 3		356
73		住27覆土	山陰系？ 高坏	脚径119	粘土細、1～3 mm石英多	良好	淡黄灰色	外縦ハケ後縦方向の粗いミガキ。 内上工具ナデ、中ケズリ、裾横ハ ケ。	脚全周残		355
74		住27覆土	外反口縁 鉢	口径160、胴径 128	粘土細、砂粒を ほとんど含まず	良好	黄橙色～暗灰色	薄い、口縁縦ハケ後ミガキ、胴中 ミガキ、底ケズリ後ミガキ。内ミ ガキ。	1 / 3		381
75		住27覆土	外反口縁 鉢	口径166、胴径 127	粘土細、砂粒を ほとんど含まず	良好	橙色～黄灰色	薄い。口縁縦ハケ後ミガキ、胴中 ミガキ、底ケズリ後ミガキ。内ミ ガキ。	1 / 4		382
76	23	住27覆土	鉢	口径130、器高 34	粘土細、1～3 mm石英少	良好	橙褐色	摩滅著しく不明。	1 / 2		342
77	23	住27覆土	鉢	口径73、器高 54	粘土粗、1～3 mm石英少	良好	淡黄褐色	外横ハケ→斜ハケ。内横ハケ、底 ケズリ。	1 / 2		341
78		住27覆土	鉢	口径110	粘土粗、1～3 mm石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ、内ケズリ。	1 / 4		433
79	23	住27覆土	鉢	口径82、底径 78、器高59	粘土粗、1～5 mm石英少	良好	淡褐色	稀な器形。外縦ハケ→斜ハケ。内 ヨコナデ。底内ハケ後ナデ。底外 ナデ。	1 / 3		376
80		住27覆土	脚付き鉢	口径116、脚径 24、器高37	粘土粗、1～3 mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	稀な器形。鉢内外ミガキ、脚ヨコ ナデ。	脚全周残		340
81	23	住27覆土	脚付き鉢	脚径82	粘土やや粗、1 ～3mm石英少	良好	黄白色	内外ヨコナデ。	1 / 2		372
82		住27覆土	脚付き鉢	脚径94	粘土やや粗、1 ～3mm石英少	良好	黄橙色	内外ヨコナデ。	1 / 2		369
83		住27覆土	脚付き鉢	脚径80	粘土やや粗、1 ～3mm石英多	良好	外淡黄色、内灰 色	鉢外縦ハケ、内ナデ。脚ヨコナデ。	脚全周残		370
84		住27覆土	脚付き鉢	脚径94	粘土細、砂粒を ほとんど含まず	良好	橙色～黄灰色	内外ミガキ。脚内ナデか。	脚全周残		371
85		住27覆土	脚付き鉢	脚径230	粘土やや粗、1 ～3mm石英多	良好	黄褐色～褐色	外ヨコナデ、内ケズリ。	1 / 9		368
86	23	住27覆土	脚付き鉢	脚径201	粘土やや細、1 ～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外ミガキ、内横ハケ。円孔4方。	1 / 2		344
87		住27覆土	器台		粘土細、1～3 mm石英少	良好	茶褐色～橙褐色	外縦ハケ後ミガキ、内ミガキ。	1 / 3		360
88		住27覆土	器台	口径94	粘土細、砂粒を ほとんど含まず	良好	褐色	内外ミガキ。	1 / 5		373
89		住27覆土	器台	脚径120	粘土細、砂粒を ほとんど含まず	良好	黄橙色	外縦ハケ→ミガキ。内斜ハケ、指 頭圧痕残。円孔1ヶ所。	1 / 10		349
62-90		住27No.1	器台	口径135	粘土やや粗、1 ～3mm石英多	良好	暗黄灰色	外縦ハケ。内中ナデ・シボリ痕、 裾横ハケ。	口縁完存		393
91		住27覆土	器台		粘土粗、1～4 mm石英少	良好	外茶灰色、内黄 茶色	口縁肥厚。外縦ハケ。内上斜ハ ケ、中ナデ・シボリ痕、裾横ハケ。	1 / 3		394
92		住27覆土	山陰系鼓 形器台	口径200	粘土細、砂粒を ほとんど含まず	良好	黄灰色	内外ミガキ。	1 / 3		375
93		住27覆土	山陰系鼓 形器台	脚径162	粘土やや細、1 ～3mm石英少	良好	黄灰色	外ミガキ。口縁内横ハケ、胴ナデ。 内受けミガキ、裾ケズリ。	1 / 2		398
94		住27覆土	山陰系鼓 形器台か		粘土やや粗、1 ～3mm石英多	良好	黄灰色	外ミガキ。	小片	傾き不安	408
95	28	住27覆土	半島系土 器		粘土やや細、1 ～4mm石英少	瓦質	淡灰色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		1136
96	28	住27覆土	半島系土 器		粘土やや粗、1 ～3mm微砂粒多	瓦質、堅緻	茶褐色	外網代状平行タタキ、内ナデ。	小片		1135
97	28	住27覆土	半島系土 器壺		粘土細、砂粒を 含まず	瓦質、土師 器っぽい	暗黄褐色	5条の沈線。外平行タタキ、内ナ デ。	小片		1137
98		住27覆土	半島系土 器鉢	口径61、底径 46、器高59	精良、砂粒をほ とんど含まず	陶質	明黄灰色	内外ヨコナデ。内面にヘラ線刻2 条。	1 / 3		379
99	23	住27覆土	タコ壺	口径58、器高 84	粘土粗、1～3 mm石英少	良好	淡褐色	外ナデ、内板ナデ。	完形		348
100		住27覆土	タコ壺	口径117、器高 116	粘土やや細、1 ～3mm石英少	良好	暗茶灰色	外ナデ、内ナデ上げ。	1 / 2		388
101	23	住27覆土	タコ壺	口径117、器高 117	粘土粗、1～3 mm石英少	良好、黒斑	淡黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。外面に細い 線刻。	完形		347
102		住27覆土	タコ壺		粘土やや粗、1 ～3mm石英少	良好、黒斑	黄茶色	外ナデ、内ナデ上げ。	1 / 4		387

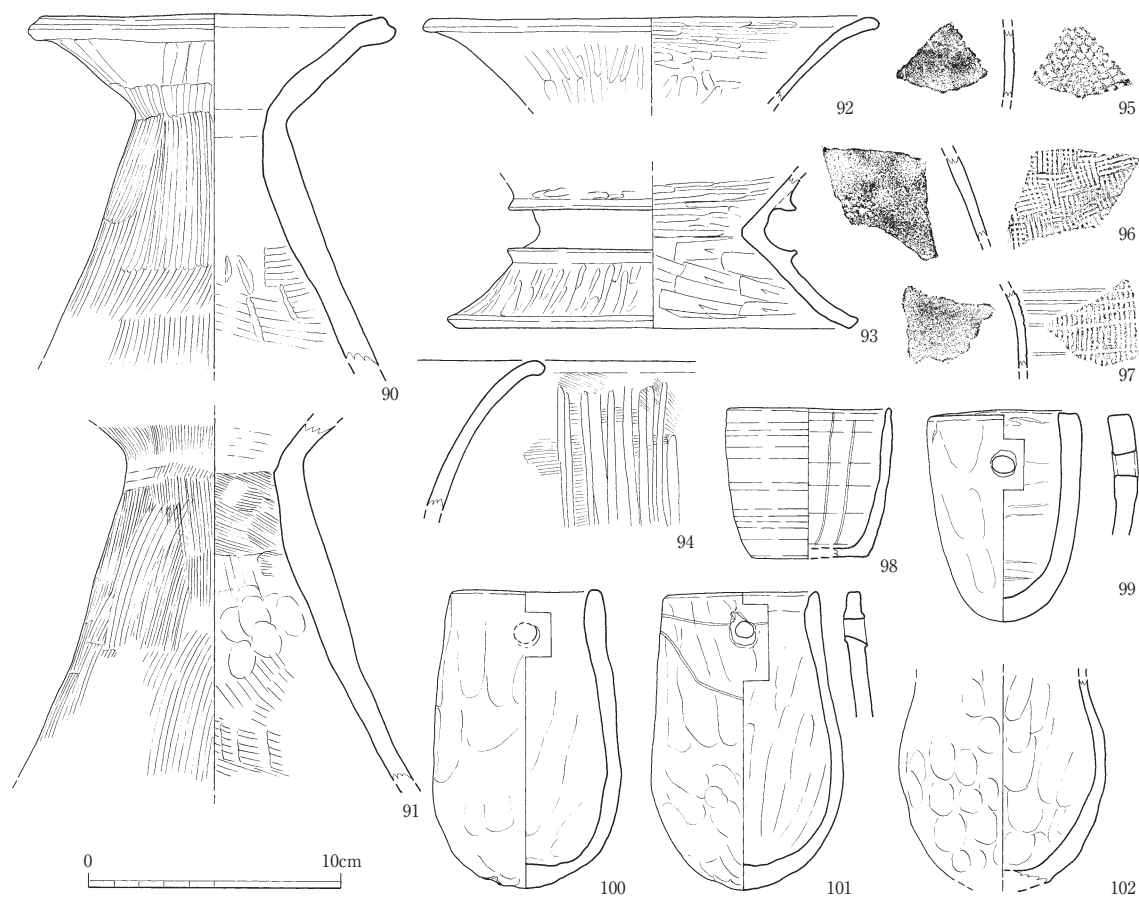
第21表 27号竪穴住居跡出土土器観察表3



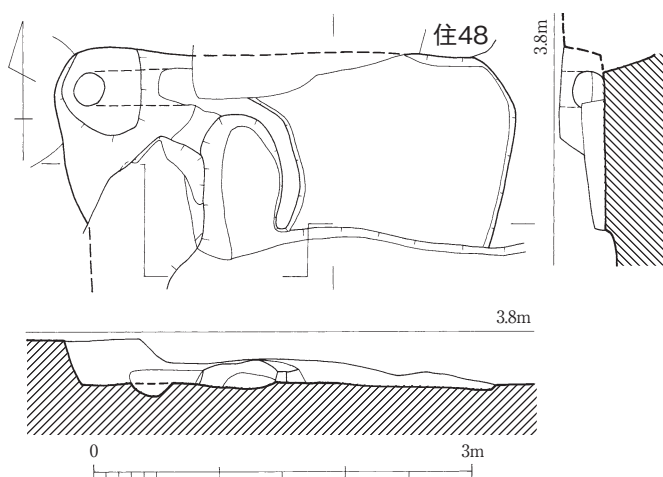
第60図 27号竖穴住居跡出土土器実測図4 (1/3)



第61图 27号竖穴住居跡出土土器实测图5 (1/3)



第62図 27号竪穴住居跡出土土器実測図6 (1/3)

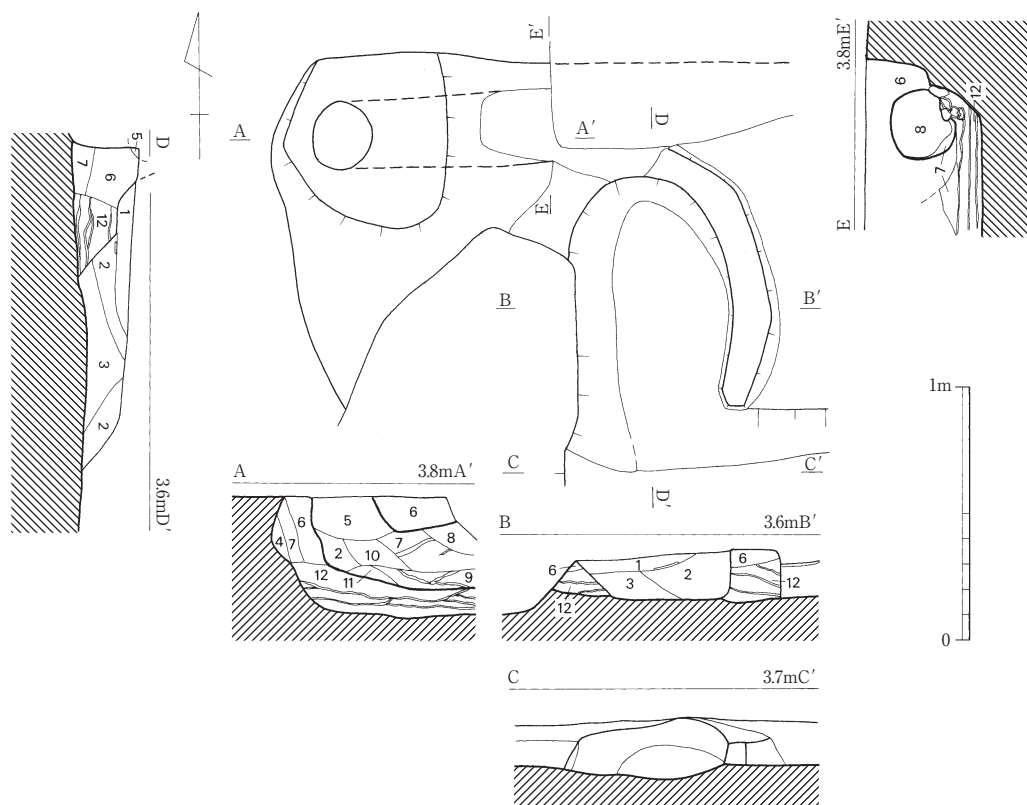


第63図 28号竪穴住居跡実測図 (1/60)

住居跡北壁の西壁寄りに付設され、煙道が住居壁に沿って西側に延びる。燃烧部の主軸は壁に直交する。

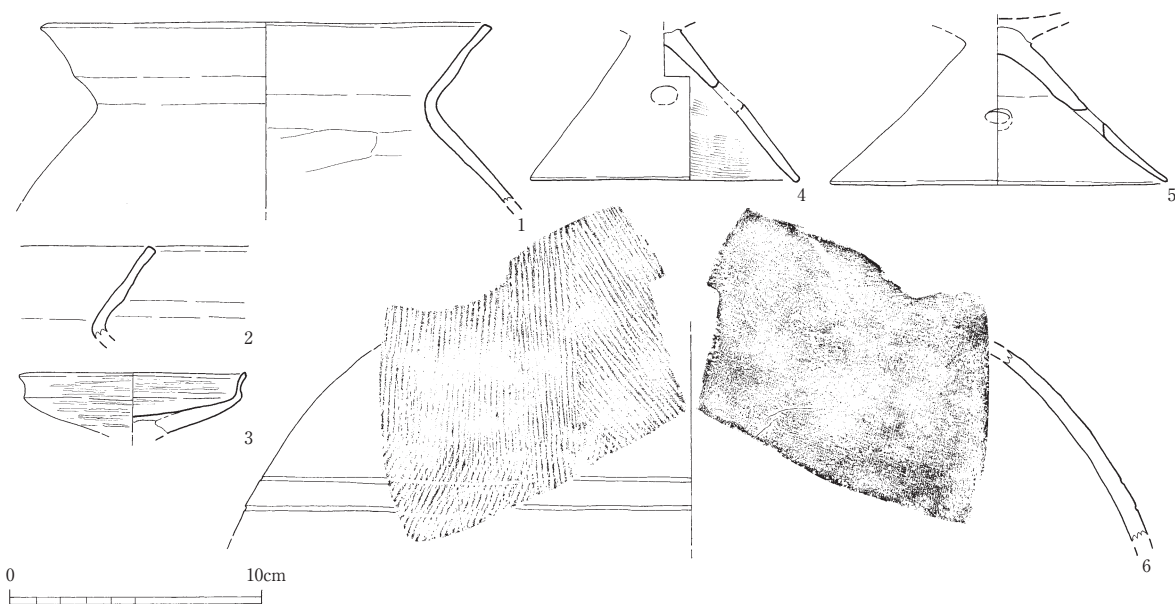
カマドの構築土は焼土混じりの暗黄褐色粘質土で硬く締まる (⑥)。カマドの下部には深さ19cmの掘り込みがあり、やはり他の事例と同じ土質の厚さ5cmほどの黄白色砂と、厚さ1cmの茶褐色粘土層を互層にして埋め (⑫)、カマド下部の地業としている。燃烧部で明確な硬化面は確認できなかったが、燃烧面はカマド下部の掘り込み地業を切る形で、その底面は地山に達している。

煙道については、カマド燃烧部の最奥部から屈曲する部分が攪乱によって損壊していたが、住居北壁に沿って西に延び、住居跡北西隅部 (北壁から18cm、西壁から16cm) でほぼ直に立ち上がる。煙道部の構築土もカマドの袖と同じ土質の暗黄褐色粘質土である (縦断面⑥)。煙道



- | | | | |
|--------------------------|---------|------------------------------|------|
| 1. 茶褐色砂に茶褐色粘含 | カマド袖崩落土 | 7. 黄灰色砂+黄褐色粘土、焼土混 | 煙道埋土 |
| 2. 茶褐色砂に黄白色砂がブロック状に多く混 | | 8. 黄灰色砂に暗黄褐色粘土ブロック少混 | |
| 3. 少混 | | 9. 黄白色砂に厚 0.5~1cmの茶褐色粘土混 | |
| 4. 黄灰色砂に焼土混 | | 10. 黄褐粘質土+黄灰色砂 | |
| 5. 黄灰色砂 (煙道埋土) | | 11. 茶褐色粘質土 | |
| 6. 暗黄褐色粘に焼土混 (固い) (カマド袖) | | 12. 黄白色砂に厚0.5~1cmの茶褐色粘土縞状に含む | |

第64図 28号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第65図 28号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

の横断面形状は径26cmの円形で、立ち上がり付近では径21cmとやや狭くなっている。壁際には炉壁様のブロックが詰め込まれ、壁面は凹凸が著しい。この状況は4号竪穴住居跡の煙道部分と同様である。煙道の埋土は基本的に砂である。また、煙道の底面はカマド燃烧部のレベルよりも4～5cm高い。

出土遺物（図版23、第65図、第22表）

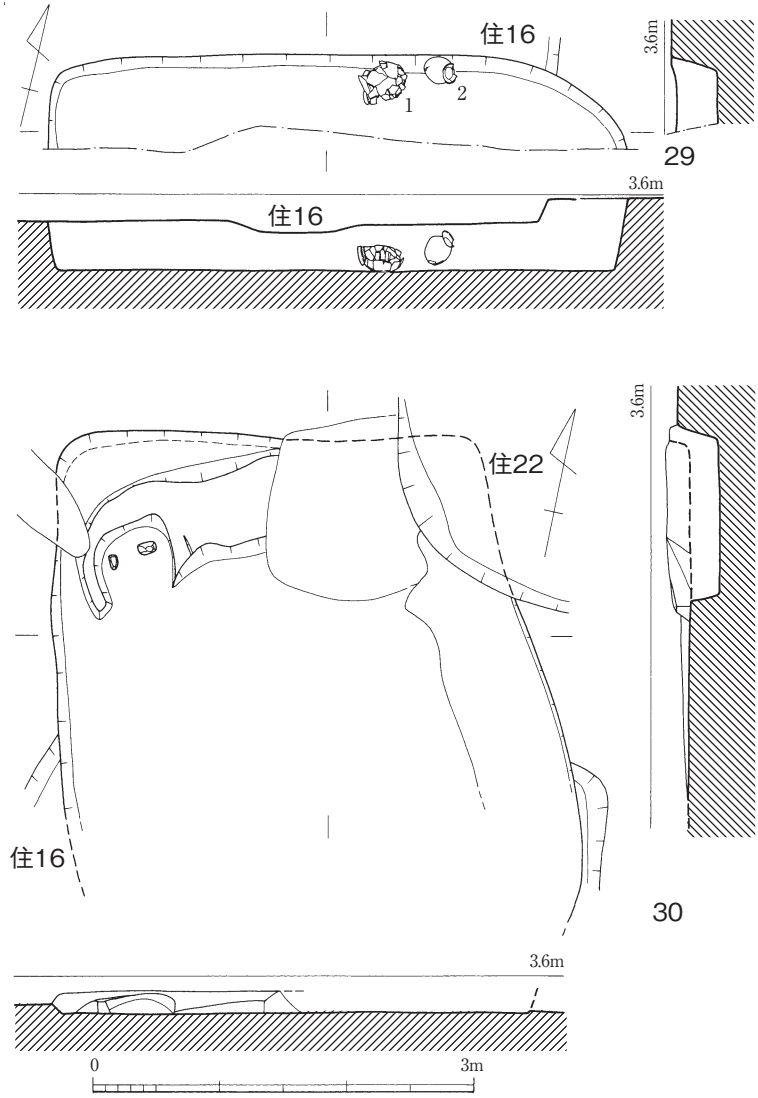
1・2は布留系甕。1は口縁端部に面をなす。

3～5は小形器台。5は脚部に2方向から穿孔を行う。

6は半島系瓦質土器。外面は縄蓆文（平行タタキ）、内面はナデ。

29号竪穴住居跡（図版11、第66図）

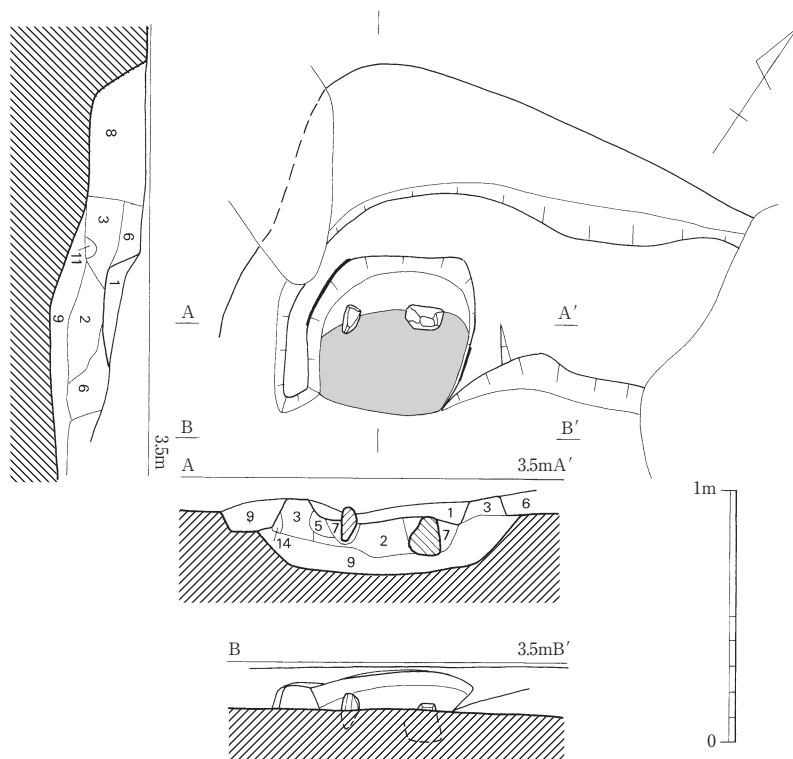
発掘区の南辺中央部、16号竪穴住居跡の南側に位置する。16号竪穴住居跡に切られる。住居跡の北壁のみ確認



第66図 29・30号竪穴住居跡実測図（1/60）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
65-1		住28覆土	布留系甕	口径180	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外摩減著しく不明。内ケズリ。	1／6		443
2		住28覆土	布留系甕		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外ヨコナデ、内摩減著しく不明。	小片		442
3		住28覆土カマド内	器台	口径90	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	内外ミガキ。	1／4		441
4		住29覆土カマド内	器台	脚径106	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	茶褐色	外摩減著しく調整不明。内横ハケ。穿孔。	1／2		322
5	23	住28覆土	器台	脚径133	粘土やや細、1～3mm石英少	やや甘い	外淡褐色、内橙褐色	摩減著しく不明。孔2方。	1／3		440
6	28	住28煙道	半島系土器壺		粘土細、砂粒を含まず	瓦質、須恵器生焼けのよう	黄灰色	外縄蓆文、内ナデ。	小片		1138
68-1	23	住29No.1	山陰系二重口縁壺	口径196、胴径270、器高239	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端部内側につまみ出し丸い。外上半縦ハケ→横ハケ、下半縦ハケ。内ケズリ。	ほぼ完存	歪み大きい、据付着	444
2	23	住29No.2	布留系甕	口径172、胴径224、器高264	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色～黄白色、内黄白色	肩にヘラ描き沈線。外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。頸・底指頭圧痕。底部は穿孔か。	3／4		663

第22表 28・29号竪穴住居跡出土土器観察表



1. 黄灰砂+黄褐色粘土（焼土）ブロック混（カマド崩落土）
2. 暗茶色粘質土
3. 暗茶褐色粘質土（固い）（カマド袖）+4
4. 暗黄褐色粘質土
5. 黄褐色粘土（焼土）ブロックに茶褐色粘質土混
6. 黄褐色粘質土
7. 黄白色砂に茶褐色粘土ブロック混（支脚堀形埋土）
8. 灰色砂
9. 7と同じ（締りなくボクボク）

第67図 30号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

し、南側は発掘区外に延びる。規模は東西方向が4.56mを測る。主軸をN-13°-Wにとる。床面の標高は3.0m。北壁際の床面から甕が2個体出土した。

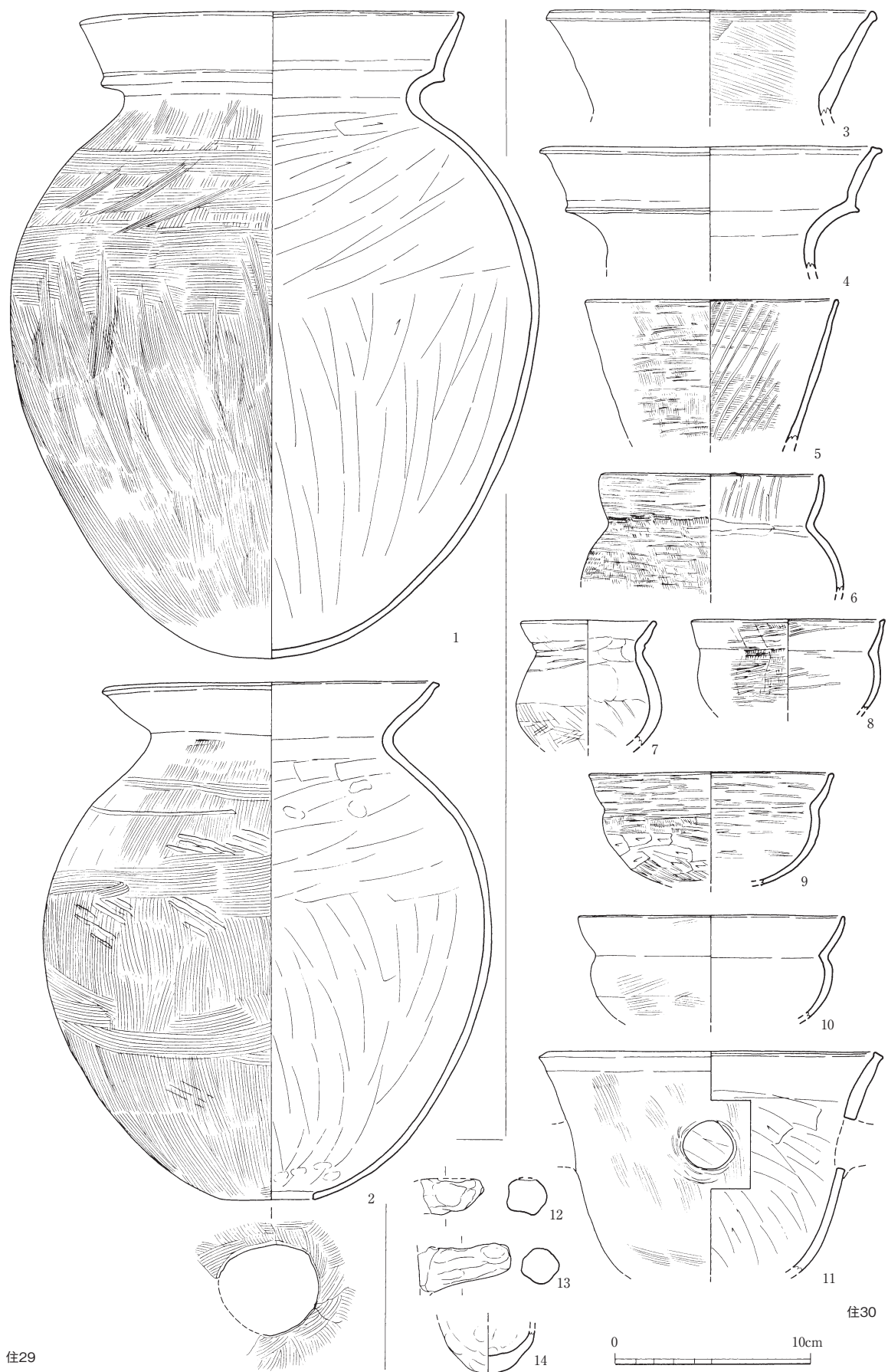
出土遺物（図版23、第68図、第22表）

1は山陰系二重口縁壺。ほぼ完存。口縁端部を内側につまみ出し丸く収める。胴部外面の調整は上半部が縦ハケ後横ハケ、その後に下半部に縦ハケを行う。

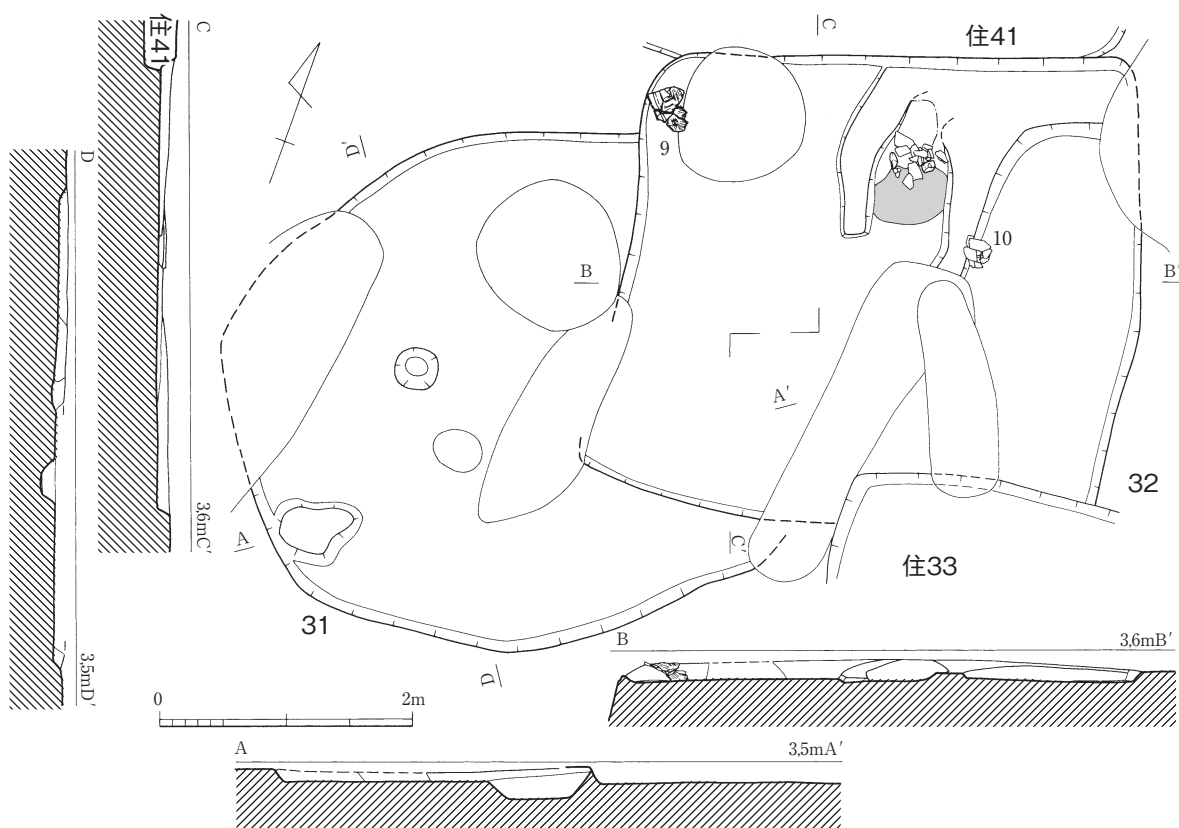
2は布留系甕。口縁端部は面をなし、外方につまみ出す。肩部にヘラ描沈線文を2/3周ほど巡らせる。底部は焼成後穿孔のようにもみえるが、欠損の可能性もある。

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
3		住30覆土	在地系直口壺	口径170	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗橙褐色	外ヨコナデ、内斜ハケ。	1／10		453
4		住30覆土	山陰系二重口縁壺	口径176	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	1／2	口縁部に煤付着。	451
5		住30覆土	直口壺	口径130	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ→暗文。	1／7	内外面に煤付着	452
6		住30覆土	直口壺	口径114、胴径134	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後ミガキ。口縁内ミガキ、胴内ナデ。	1／3		446
7		住30覆土	小形壺	口径70、胴径76	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	黄灰色	外斜ハケ後工具ナデ。内工具ナデ。	1／4	煤付着。	454
8		住30覆土	外反口縁鉢	口径100、胴径94	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	黄橙色	外縦ハケ後ミガキ、内ミガキ。	1／10		447
9		住30覆土	外反口縁鉢	口径126、胴径112	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外上縦ハケ後ミガキ、下ケズリ後ミガキ。内ミガキ。	1／3		448
10		住30覆土	外反口縁鉢	口径138、器胴径124	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄橙色	外横ハケ、内ナデ。	1／8		449
11	23	住30覆土	甕	口径175	粘土粗、1～3mm石英多	甘い	暗灰褐色	外縦ハケ、内ケズリ。孔は把手部分の接合痕跡か。	口縁ほぼ全周	歪み大きい。	445
12	28	住30覆土	半島系土器鉢		粘土粗、1mm以下石英多	瓦質	黒灰色	ナデ。	把手		456
13	28	住30覆土	半島系土器		粘土やや粗、1mm以下石英多	瓦質、やや甘い	黄灰色	ナデ。	把手		455
14		住30覆土	タコ壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ナデ。	底部完存		450

第23表 30号竪穴住居跡出土土器観察表



第68图 29・30号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第69図 31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)

30号竪穴住居跡 (図版11、第66図)

発掘区の南辺中央部、16号竪穴住居跡の北側に位置する。16号竪穴住居跡・22号竪穴住居跡に切られる。平面プランは長方形を呈する。規模は東西長4.00m、南北現存長4.40mを測る。主軸は概ねN-12°-Wにとる。カマドが付設される。床面の標高は3.3m。

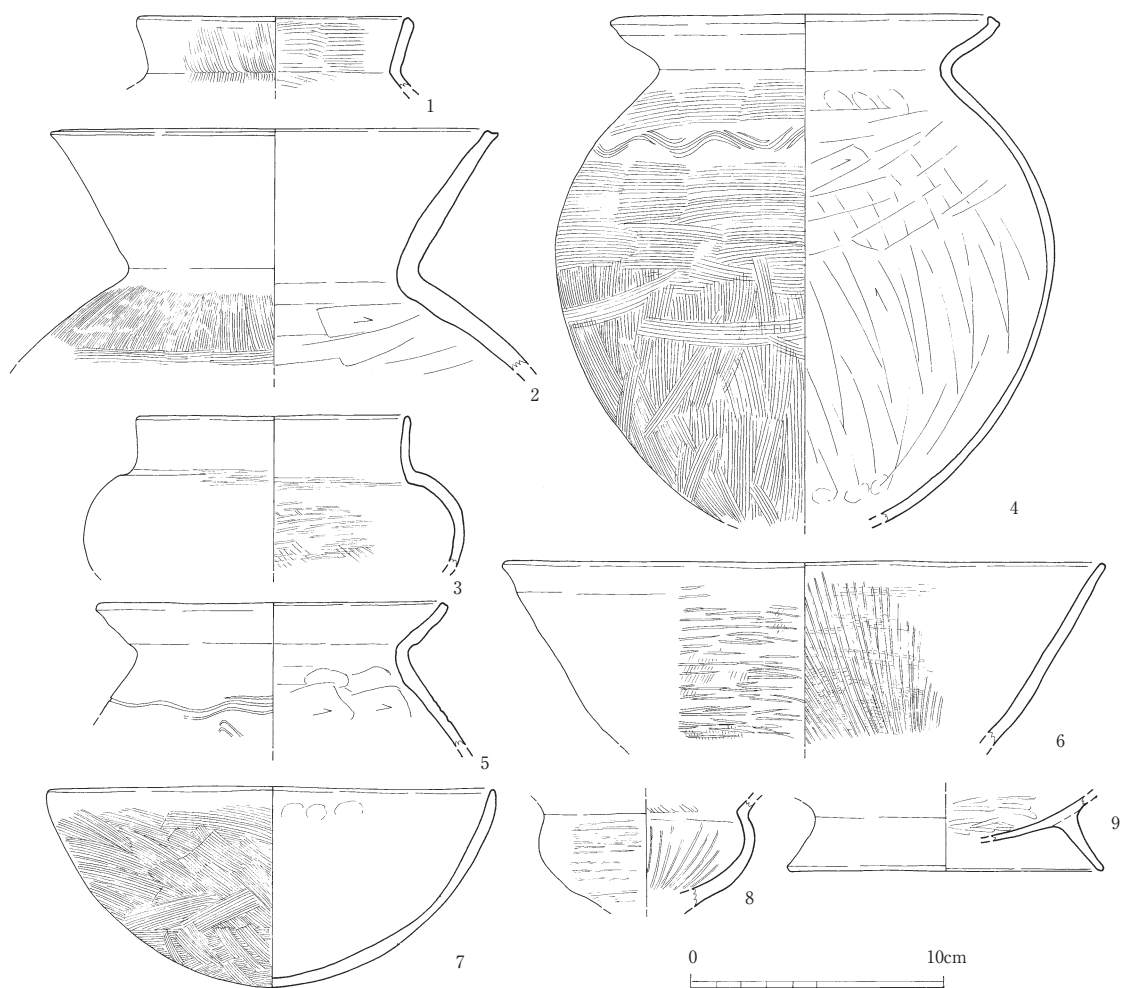
カマド (図版11、第67図)

住居跡の北西隅部に付設される。煙道が住居北壁に沿って東側に延び、北東部で南に折れて、東壁に沿ってL字形に延びるものと考えられる。燃烧部の主軸は壁に直交する。

カマドの構築土は暗黄褐色粘土に暗茶褐色粘土ブロックを混合させたものである (③)。カマド袖の構築に先立って東西104cm、深さ22cmの掘り込みを行い、暗茶褐色粘質土 (②) と、黄褐色砂に茶褐色粘質土を含む土 (⑨) を充填している。住居跡北壁から90cmほどの床面には支脚石が左右に配される。ともに掘り方を有するが西側の支脚石上面のレベルは、東側のそれよりも4cm高い。支脚石の前面は41cm×58cmの範囲で床面が硬化している。なお、袖の内側には厚さ5mmの炉壁が廻る (東側と西側の一部)。

煙道部は、カマド袖と同じ土を用いて築かれた基底部分のみが遺存しており、カマド燃烧部と同レベルにもかかわらず煙道そのものは確認できなかった。そのため、煙道底面はカマド燃烧面よりも若干高くなるものと考えられる。東壁に沿った煙道基底部分の南側の延長については、壁中央近くまでしか遺存していなかった。

出土遺物 (図版23、第68図、第23表)



第70図 31号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

3は在地系の壺。端部がやや肥厚する。4は山陰系二重口縁壺。端部に面をなし、外方につまみ出す。5は畿内系直口壺の口縁部片。6も直口壺で口縁部は短く、内湾する。7は小形の壺。胴部最大径がやや下位にあり、短く外反する口縁が付く。調整は工具ナデ。器壁が分厚い。

8～10は外反口縁鉢。8は口縁端部に面をなす。

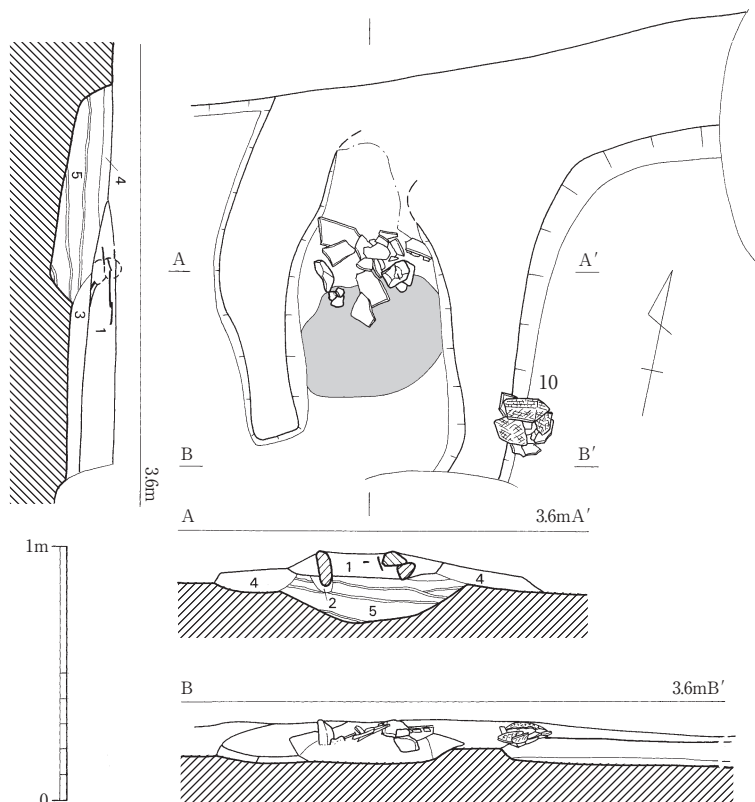
11は甑。口縁端部に面をなす。胴部に穿った円孔に把手を差し込む。

12・13は半島系土器甑の把手。いずれも手捏ね。

14はタコ壺の底部。

31号竪穴住居跡 (第69図)

発掘区の南東部に位置する。東側を32号竪穴住居跡に切られる。平面プランは小判形を呈する。規模は東西長4.04mを測る。床面の標高は3.4m。住居跡の南西部の壁際には、70cm×60cmほどの範囲で、高さ10cmほどの高まりが存在する。この部分は上面のみが硬化しており、その下層の床面までは淡茶灰色粘質土に黄灰色砂がブロック状に混じる人為的な埋め土からなっている。周辺状況からはカマドとは考えがたく、あるいは出入口に関するものであろうか。住居跡の床面では1か所で柱穴を検出した。



1. 茶褐色土に明黄白色粘土ブロック混（カマド埋土）
2. 茶褐色粘（支脚堀方）
3. 黄灰色砂に茶褐色粘土（焼土）ブロック含
4. 茶灰色砂に暗黄褐色粘土少混（カマド袖）
5. 黄白色砂に厚さ0.2～0.5cmの茶褐色粘土縞状に入る（カマド基礎）

第71図 32号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（図版24、第70図、第24表）

1～3は直口壺。1は在地系、2は畿内系。3は短く直口する口縁を持つ短頸壺で内外面を磨いた精製土器。半島系土器の影響を受けたものか。

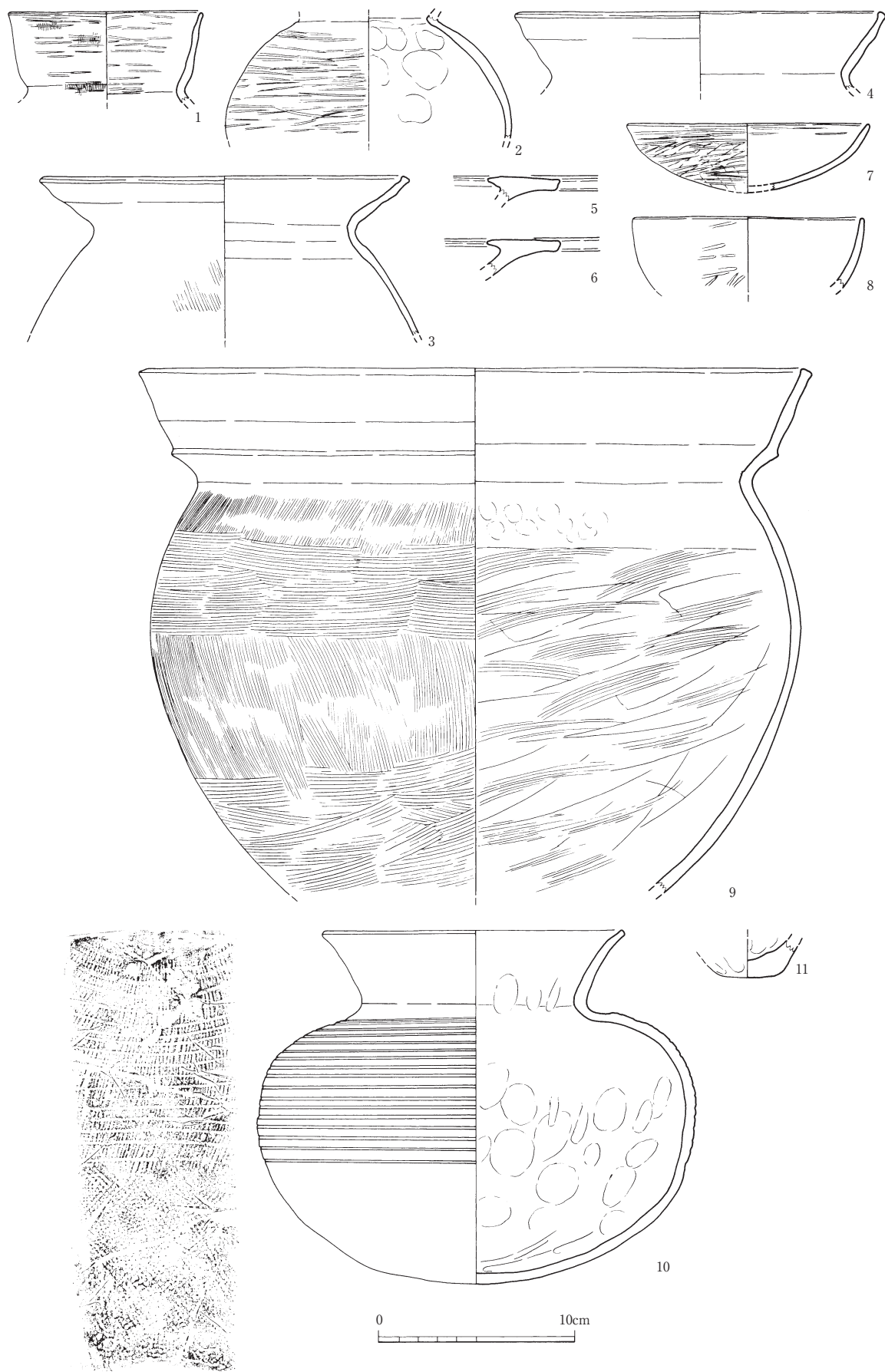
4・5は布留系甕。4は口縁端部に面をなし、内側につまみ出す。4・5の肩部には櫛描き波状文を施す。6は高坏。1/6ほどの破片である。本来もう少し杯部が浅くなるような傾きになるか。

7は丸底の鉢。8は脚付き鉢。小形丸底壺になるかもしれない。胎土は精良。

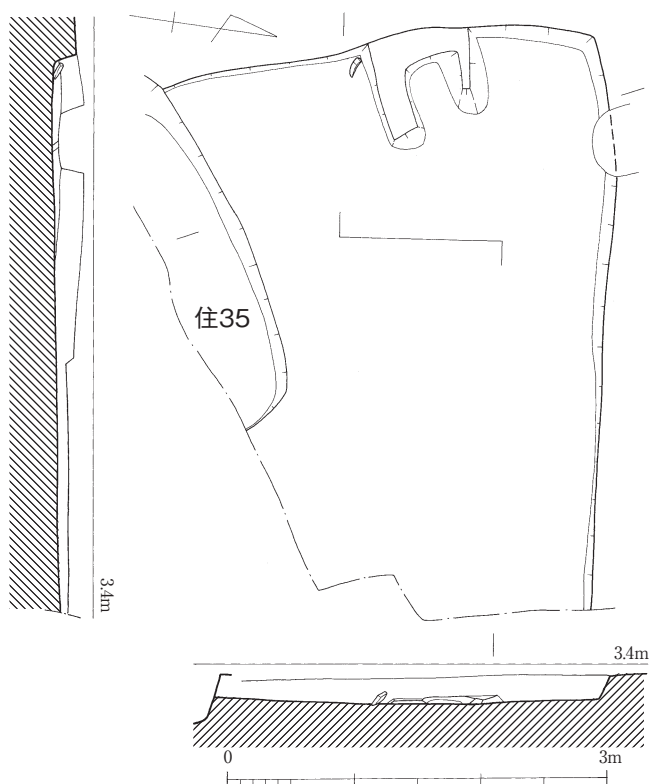
32号竪穴住居跡（図版12、第69図）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
70-1		住31覆土	在地系直口壺	口径110	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄橙色	外縦ハケ、内横ハケ。	1／8		462
2	24	住31覆土	畿内系直口壺	口径176	粘土粗、1～5mm石英多	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	口縁端部に面をなし。外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	1／2		473
3		住31覆土	直口壺	口径110	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁部短く直立。内外ミガキ。器壁剥落。	1／4	半島系の影響？	460
4	24	住31覆土	布留系甕	口径154、胴径198	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内灰褐色	口縁端部面をなし、内側につまみ出す。外縦ハケ→横ハケ。肩に櫛描き波状文。	1／2		666
5		住31覆土	布留系甕	口径140	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗灰色	外方櫛描き波状文、内ケズリ。	1／4	煤附着	667
6		住31覆土	布高坏	口径240	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ→放射状暗文。	1／6	傾き不安	459
7	24	住31覆土	鉢	口径177、器高80	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	外淡灰褐色、内灰白色	外斜ハケ、内ナデ。	1／3		457
8		住31覆土	脚付き鉢	胴径86	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	黄橙色	外縦ハケ後ミガキ、内暗文か。	1／6		461
9		住31覆土	脚付き鉢	脚径126	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内ミガキ、底外ナデ。	1／2		458
72-1		住32覆土	直口壺	口径100	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	黄橙色	口縁端部外反。外縦ハケ後ミガキ、内ミガキ。	1／8		465
2		住32覆土	畿内系二重口縁壺	胴径148	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外ミガキ、内ナデ。	1／3		464
3		住32覆土	布留系甕	口径190	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄橙色	外縦ハケ。内ケズリ。摩滅著しい。	1／10		470
4		住32覆土	布留系甕	口径190	粘土やや細、1～3mm石英多	良好	黄橙色	内外ヨコナデ。摩滅著しい。	1／8		471

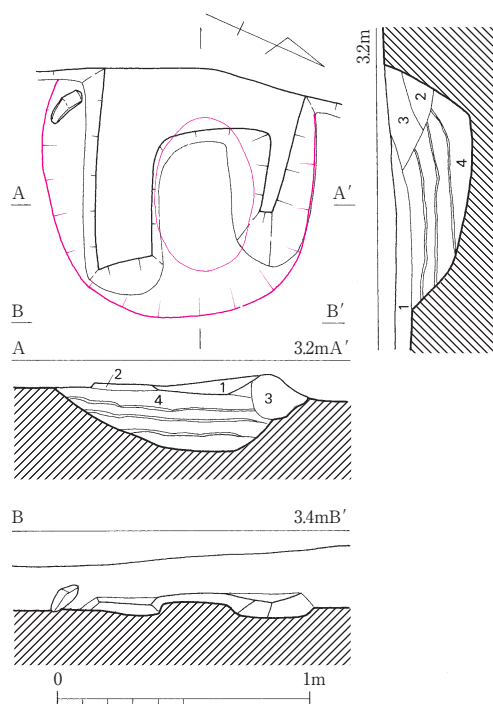
第24表 31・32号竪穴住居跡出土土器観察表



第72図 32号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第73図 33号竪穴住居跡実測図 (1/60)



1. 灰色砂 (カマド埋土)
2. 灰色砂に黄褐色粘土混
3. 黄褐色粘土に灰白色砂少混 (固い)
4. 灰色砂に厚さ0.5cmの茶褐色粘質土が縞状に入る (カマド基礎)

第74図 33号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

発掘区の南東部、31号竪穴住居跡の東側に位置する。西側で31号竪穴住居跡を、北側で41号竪穴住居跡を切り、南東側で33号竪穴住居跡に切られる。平面プランは長方形を呈する。規模は東西長4.08m、南北長3.70mを測る。主軸をN-70°-Eにとる。カマドを付設する。床面の標高は3.4m。

半島系土器が出土した。

カマド (図版12、第71図)

住居跡北壁の中央に付設され、煙道が住居壁に沿って東側に延びる。燃烧部の主軸は壁に直交する。

カマドの構築土は茶灰色砂に暗黄褐色粘土を混ぜた土である (④)。カマド袖の構築に先立って東西73cm、深さ19cmの掘り込みを行い、厚さ3~7cmの黄白色砂と厚さ2~5mmの茶褐色粘土を交互に充填している (⑤)。住居跡北壁から75cmほどの床面には支脚

石が左右に配される。左側は径8cm×長さ14cmの棒状、右側は角礫2石を積んで左側の支脚石とレベルを揃える。その上部には甕の底部が遺存していた。支脚石の前面には厚さ0.5~1.0cmの粘土を貼っており、燃烧部は42cm×55cmの範囲で床面が硬化している。また、燃烧部から煙道に至る部分の底面は焼土混じりの粘質土が焼けて硬化していた。東側のカマド袖の上面から1個体分の半島系土器が出土した。

煙道部は、カマド袖と同じ土を用いて築かれた基底部分のみが遺存しており、カマド燃烧部と同レベルにもかかわらず煙道そのものは確認できなかった。そのため、煙道底面はカマド燃烧面よりも若干高くなるものと考えられる。

出土遺物 (図版24、第72図、第24表)

1は直口壺。口縁部が外反する。2は畿内系二重口縁壺の胴部。

3・4は布留系甕。ともに口縁端部を肥厚させ、内側につまみ出す。

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
75-1		住33覆土	直口壺	口径150	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	淡黄灰色	内外ヨコナデ。	小片	口径やや不安	485
2		住33覆土	山陰系二重口縁壺		粘土細、1～3mm石英少	良好	明黄橙色	口縁ヨコナデ。頸内工具ナデ。	小片		483
3		住33覆土	山陰系二重口縁壺	口径180	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄橙色	口縁ヨコナデ。頸内工具ナデ。	1／8		482
4		住33覆土	山陰系二重口縁壺	口径200	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁ヨコナデ。頸外縦ハケ、内ナデ。肩内ケズリ。	1／4		481
5		住33覆土	山陰系二重口縁壺	口径206	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外茶灰色、内黄灰色	口縁端部丸く肥厚。口縁ヨコナデ、頸内ナデ。	1／4		479
6		住33覆土	山陰系二重口縁壺	口径340	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外黒灰色、内黄灰色～灰色	内外ヨコナデ。	1／8		484
7		住33覆土	小形丸底壺	口径112、胴径99、残高86	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄橙色	外斜めハケ、内ケズリ。	1／4		480
8		住33覆土	布留系甕	口径140	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	明灰色	外縦ハケ、内ケズリ。頸内工具ナデ。	1／6		486
9		住33覆土	布留系甕	口径162	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外縦ハケ。内ケズリ。頸内指頭圧痕。	小片		488
10		住33覆土	布留系甕	口径164	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	外黄褐色、内黄白色	外縦ハケ、内ケズリ。	1／4		489
11		住33覆土	布留系甕	口径170	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	明黄橙色	内外ヨコナデ	1／8		487
12		住33覆土	布留系甕	口径190	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外横ハケ、内ケズリ。上半部はケズリ後ナデ。肩にヘラ描き沈線、全周しない。	1／3		474
13		住33覆土	布留系甕	胴径210	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外明黄橙色、内黄褐色	外縦ハケ後横ハケ。内ケズリ。肩に櫛描き波状文。	1／6	径・傾きやや不安	493
14		住33覆土	鉢	口径130、器高37	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙色	外ナデ、指頭圧痕。内ナデ。底ケズリ。	1／4		478
15	24	住33覆土	鉢	口径143、器高67	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外縦ハケ、口縁下～底ケズリ。内縦ハケ一部ミガキか。	1／2		475
16		住33覆土	鉢	口径147、器高45	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外ケズリ後ミガキ、内ナデ。	1／5	鼠歯形	47
76-17	29	住33覆土	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	硬質、須恵器生焼けのよう	淡灰色	外平行タタキ（縄文）、内ヨコナデ。	小片		1140
18	29	住33覆土	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	陶質、須恵器のよう	淡灰色	外ヨコナデ後ナデ、内板ナデ。	小片		1141
19		住33覆土	タコ壺	口径49、器高83	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ナデ。	1／2		470
20		住33覆土	タコ壺	口径55、器高105	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄褐色～茶褐色	内外ナデ。	1／10		491
21		住33覆土	タコ壺	口径64	粘土やや細、1～3mm石英少	良好、黒斑	橙褐色～褐色	内外ナデ。	1／4		490
22		住33覆土	タコ壺	口径64	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄橙色	内外ナデ。	1／4		492

第25表 33号竪穴住居跡出土土器観察表

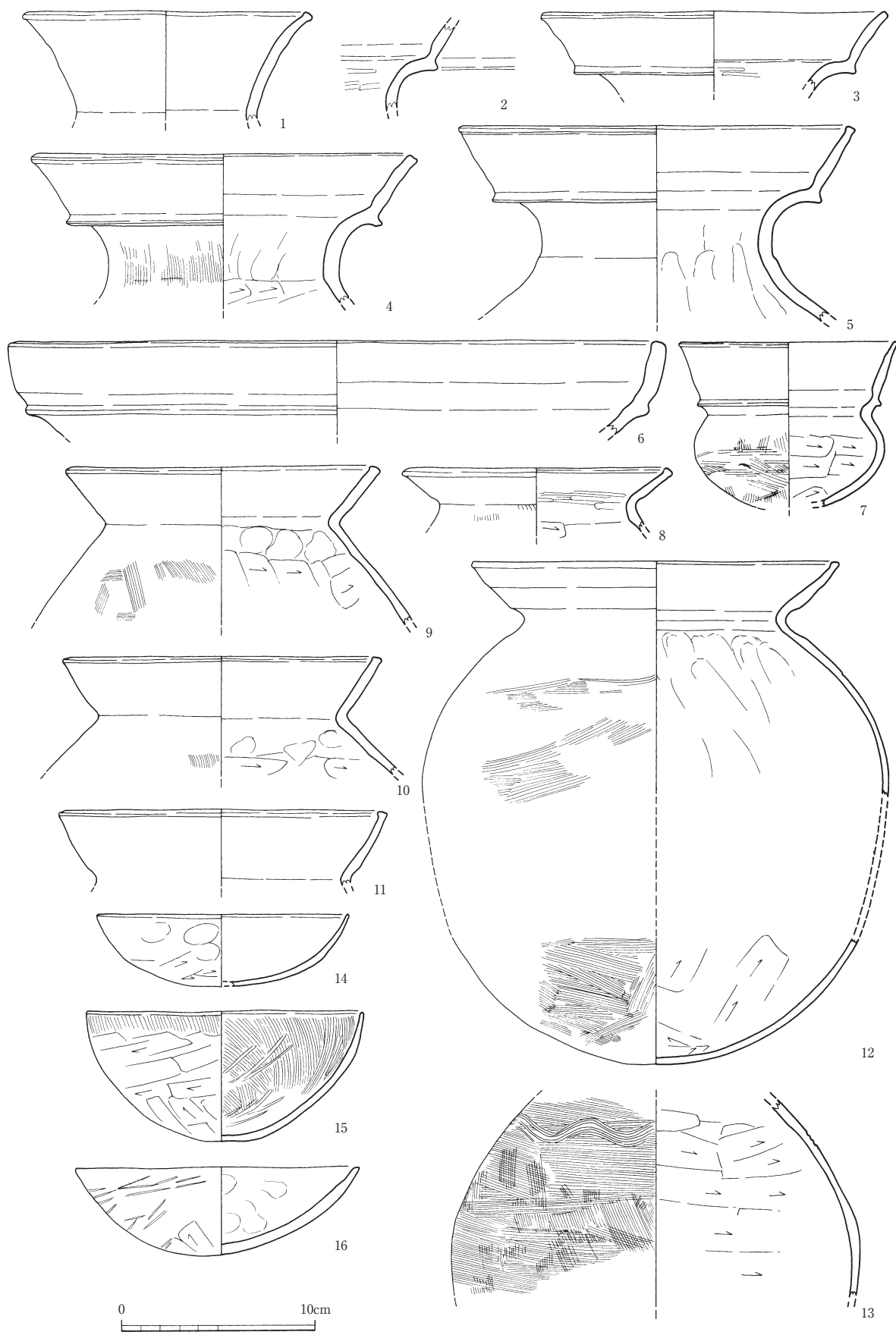
7・8は鉢。9は山陰系二重口縁鉢。外面調整は縦方向ハケの後、肩部と胴部下半に横方向のハを施す。口縁端部は面をなす。内面の調整はケズリの後斜め方向のハケ。頸部内面に指頭圧痕が顕著に残る。

10は半島系瓦質土器壺で、口縁部を1/2ほど欠くものの他はほぼ完存。カマド右袖の上部に据えられていた。外面は胴上半部が平行タタキ後17条の沈線を巡らせ、胴下半部は格子タタキ。内面は胴部中央を中心として成形時の指頭による凹凸が著しく残る。底部付近はヘラ状工具によるナデ。胎土は精良で砂粒をほとんど含んでいない。

11はタコ壺の底部小片。平底。

33号竪穴住居跡（図版13、第73図）

発掘区の南東隅部、32号竪穴住居跡の南側に位置する。32号竪穴住居跡を切り、南側で35号竪穴住居跡に、東側を34号竪穴住居跡に切られる。平面プランは長方形と考えられる。規模は現存東西長4.65mを測る。主軸をN－8°－Wにとる。カマドを付設する。床面の標高は3.1m。



第75图 33号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)

カマド（図版13、第74図）

住居跡西壁の北寄りに付設される。燃焼部の主軸は壁に直交する。

カマドの構築土は灰白色砂と黄褐色粘土ブロックを混合させたものである（②③）。カマド袖の構築に先立って東西98cm、南北86cm、深さ23cmの掘り込みを行い、厚さ4～7cmの灰白色砂と厚さ1～2cmの茶褐色粘土を交互に充填している（④）。燃焼部には明確な硬化面はみられなかった。なお、左袖の壁際から出土した石は支脚石である可能性もあるが、燃焼部では掘方は確認できなかった。

出土遺物（図版24、第75・76図、第25表）

1は外反しながら開く壺。2～6は山陰系二重口縁壺。2・3の頸部内面はミガキ。6は口縁部が直に近く立ち上がり器壁が厚い。7は小形丸底壺。

8～13は布留系甕。いずれも口縁端部を内側につまみ出し、段をなす。12の肩部にはヘラ描き沈線、13は櫛描き波状文を巡らせる。

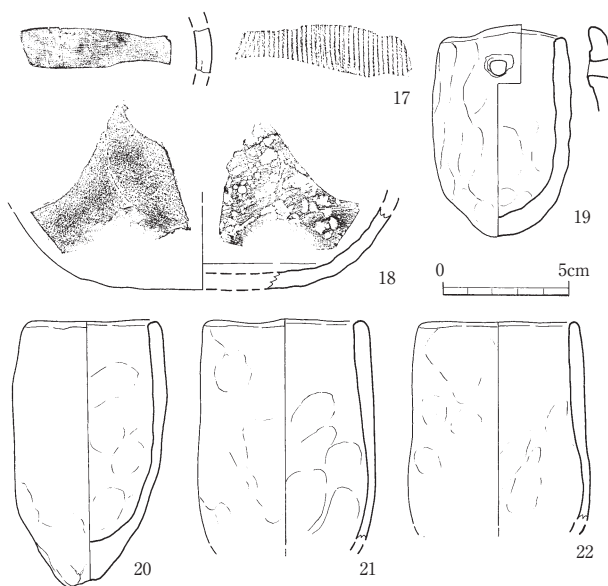
14～16は丸底の鉢。15の外面調整は縦ハケの後、口縁部の直下付近までヘラケズリを行う。

17・18は半島系土器。17は壺の肩部で外面に縄蓆文タタキ、内面はヨコナデ。18は平底気味の壺か鉢の底部。調整は外面がヨコナデ後ナデ、内面は板ナデ。

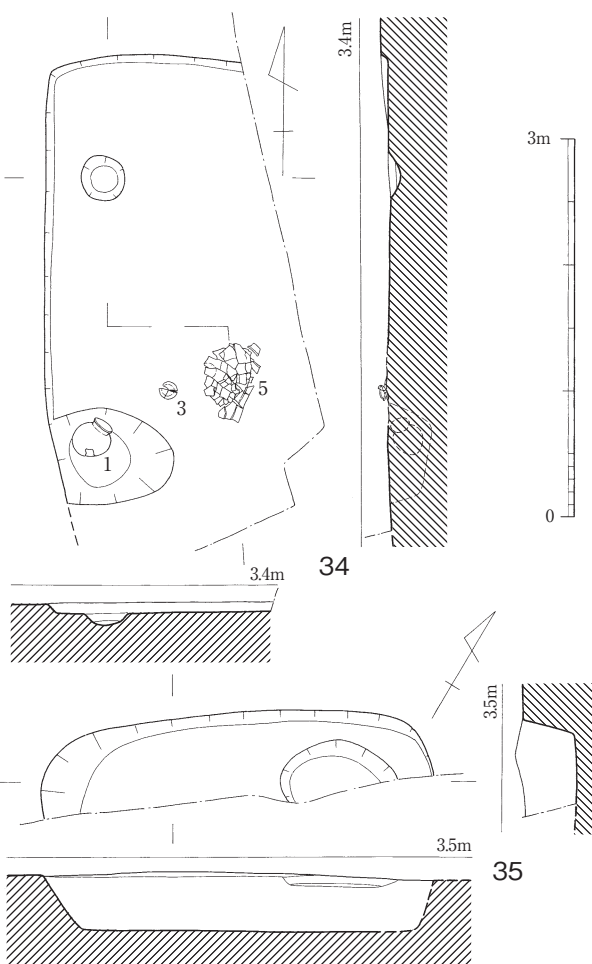
19～22はタコ壺。口縁端部はいずれも丸みを帯びる。

34号竪穴住居跡（図版13、第77図）

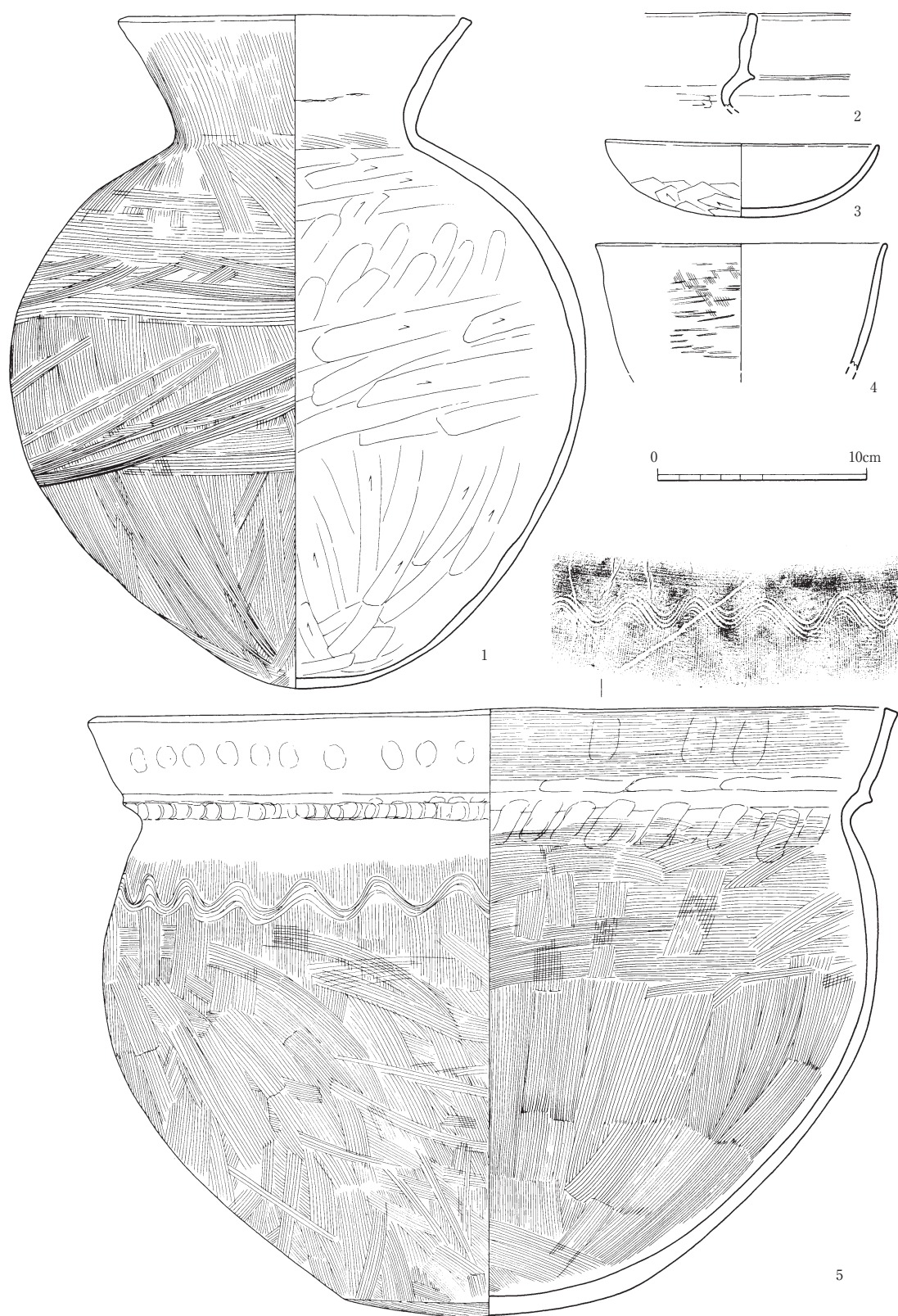
発掘区の南東隅部、33号竪穴住居跡の東側に位置する。33号竪穴住居跡を切り、35号竪穴住居跡に切られる。規模は現存南北長3.9mを測る。主軸をほぼ南北にとる。東側は発掘区外に延びる。カマドや炉跡は発掘区では確認していない。西壁部際には90cm×78cm、深さ35cm



第76図 33号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/3）



第77図 34・35号竪穴住居跡実測図（1/60）

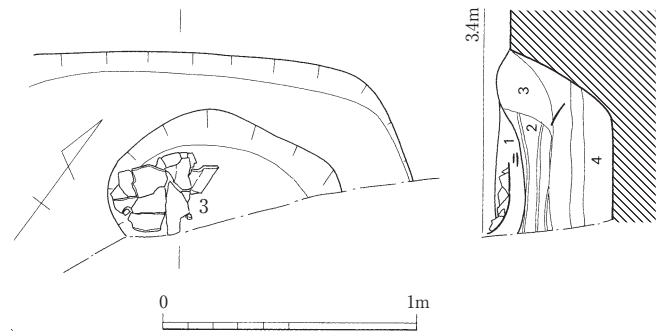


第78图 34号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

の屋内土坑が付設され、完形の甕が出土した。床面ではほかに径35cm、ピットを検出したが深さは9cmと浅く、支柱穴にはなり得ない。なお、床面で1個体分の甕と鉢が押しつぶされた状態で出土した。

出土遺物（図版24、第78図、第26表）

1は畿内系直口壺。口縁は外反し、口縁端部に面をなす。外面の調整は全面縦方向のハケの後、肩部をヨコナデする。内面はケズリで、胴部上半には



1. 灰色砂（カマド埋土）
 2. 黄灰砂に厚さ0.5～1.0cmの茶褐色粘土縞状に入る
 3. 暗黄褐色粘土に灰色砂混。固い。
 4. 暗灰色砂に厚0.5cmの黒茶色粘土が縞状に入る
- } カマド基礎

第79図 35号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

挿図 番号	図版 番号	出土 遺物等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
78-1	24	住34P1	畿内系直口壺	口径170、胴径278、器高320	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、黒斑	黄褐色	口縁外縦ハケ、胴外縦ハケ後肩横ハケ。内ケズリ、肩部ナデ上げ。	ほぼ完存		495
2		住34覆土	山陰系二重口縁壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	暗灰色	口縁内外ヨコナデ。頸内ナデ。	小片		498
3		住34No.1	鉢	口径131、器高36	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙色	外ケズリ、内ナデ。	ほぼ完存		495
4		住34覆土	鉢か	口径140	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄橙色	外縦ハケ後ミガキ、内ナデか。摩滅著しい。	1／6		497
5	24	住34No.2	山陰系二重口縁鉢	口径387、胴径370、器高290	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好、黒斑	黄灰色	外縦ハケ→斜ハケ、突帯指頭押圧。口縁内横ハケ。頸部指頭圧痕、胴縦ハケ→横ハケ。	ほぼ完存		496
80-1		住35覆土	在地系直口壺	口径160	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外ヨコナデ、内横ハケ後ヨコナデ。	1／8		527
2		住35覆土	山陰系二重口縁壺	口径145	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色～黄白色	内外ヨコナデ。	1／8		528
3	24	住35覆土	山陰系二重口縁壺	口径200	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、黒斑	黄茶色	口縁端部外方につまみ出す。外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ、頸に指頭圧痕顕著。	1／2		499
4	24	住35カマド	小形丸底壺	口径106	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色～淡黄灰色	外縦ハケ後ミガキ、底ケズリ。口縁内横ハケ、胴部ナデか。	1／2		526
5	24	住35覆土	小形丸底壺	口径115、胴径104、器高89	粘土粗、1～3mm石英少	良好	灰褐色	粗製。平底。外縦ハケ、下半ナデ、指頭圧痕顕著。口縁内横ハケ、胴板ナデ。	1／2	歪む、内面に炭化物	505
6		住35カマド	小形丸底壺	口径134、胴径104、器高85	粘土粗、1～3mm石英少	良好	暗黄灰色	粗製。外ハケ、内ケズリ。	1／3		525
7	24	住35覆土	布留系甕	口径122、胴径136、器高133	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	灰褐色	外ハケ。内ケズリ、底指頭圧痕。	1／3		502
8	24	住35覆土	布留系甕	口径137	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／2		501
9	24	住35覆土	布留系甕	口径144、胴径184、器高189	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄白色～明茶灰色	外縦ハケ後横ハケ。内ケズリ、底指頭圧痕顕著。	胴一部欠、他は完存		500
10		住35カマド	布留系甕	胴径255	粘土粗、1～3mm石英多	甘い	黄灰色	胴部扁平。外粗縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。摩滅著しい。	1／4		529
11	25	住35覆土	高坏	口径210	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	淡黄褐色	外ミガキ、内ミガキ→暗文。	3／4		503
12		住35覆土	鉢	口径122、器高30	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	明黄褐色	外ミガキ、内摩滅著しく不明。	1／4		532
13	24	住35覆土	山陰系鼓形器台	口径194、脚径180、器高101	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外ヨコナデ。内上半ミガキ、下半ケズリ。内上ミガキ、下ケズリ。	1／4		504
14		住35覆土	タコ壺	口径64	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色～黒茶色	内外ナデ。	1／4		533

第26表 34・35号竪穴住居跡出土土器観察表



第80图 35号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

指頭によるナデ上げの痕跡が明瞭に残る。2は山陰系二重口縁壺の小破片。

3は丸底の鉢。4も鉢と思われるがあるいは壺の口縁になるのかもしれない。5は山陰系二重口縁鉢で、口縁端部に面をなす。肩部に櫛描き波状文を巡らせるが全周はしない。頸部と口縁部の屈曲部分には指頭圧痕が顕著に残る。

35号竪穴住居跡（図版13、第77図）

発掘区の南東隅部、33号竪穴住居跡の南側に位置し、北壁の一端を確認した。33号竪穴住居跡・34号竪穴住居跡を切る。規模は東西長3.10mを測る。カマドを付設する。

カマド（図版13、第79図）

住居跡の北東隅部に付設され、煙道は住居北壁に沿って西側に伸びる。燃烧部の主軸は壁に直交するものと考えられる。

カマドの構築土は暗黄褐色粘土に灰色砂を混合したものである（③）。カマド袖の構築に先立って深さ44cmの掘り込みを行い、厚さ4～11cmの暗灰色砂に、厚さ0.5cmの黒茶色粘質土を交互に充填する（④）。その後壁際に暗黄褐色粘土に灰色砂を混じえた土を貼り、その内側（燃烧部下層）に、厚さ3～6cmの黄褐色砂に、厚さ1cmの茶褐色粘質土を交互に積んで充填する（②）。下層の地盤に起因するのであろうか、カマドの下部に二重の基礎地業を施している。なお、燃烧部床面より5cmほど浮いて甕が遺存していた。

煙道部は、カマド袖と同じ土を用いて築かれた基底部分のみが遺存しており、カマド燃烧部と同レベルにもかかわらず煙道そのものは確認できなかった。そのため、煙道底面はカマド燃烧面よりも若干高くなるものと考えられる。

出土遺物（図版24・25、第80図、第26表）

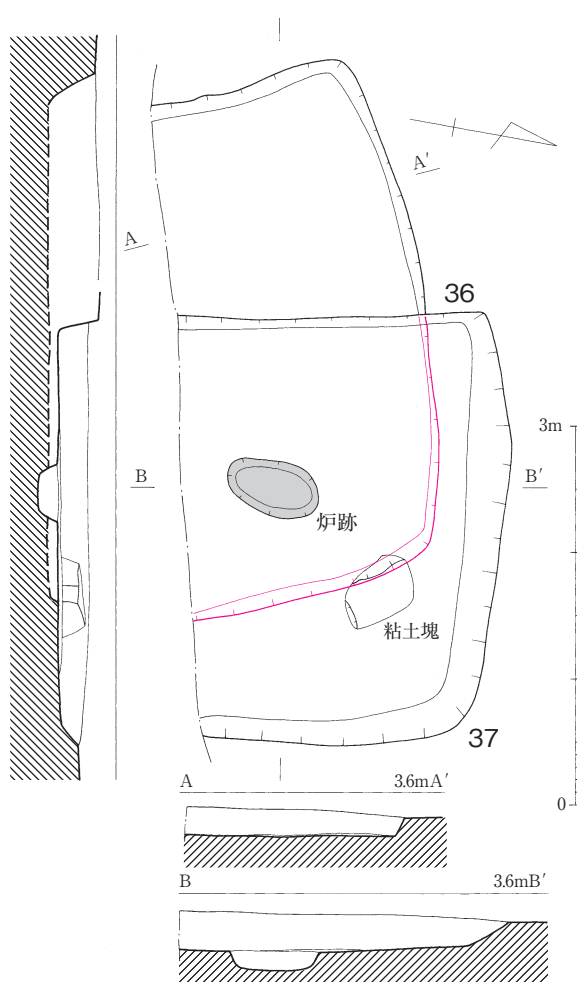
1は直口壺。2・3は山陰系二重口縁壺。1は口縁部が直に近く立ち上がり、口縁端部を外方にややつまみ出す。4～6は小形丸底壺。5は粗製で外面の胴部下半には指頭圧痕が顕著に残る。平底。6も粗製。

7～9は布留系甕。9は口縁部が分厚く、口縁端部内側に段をもたない。10も布留系と思われる。体部中位で屈曲し、扁平気味である。鉢とすべきか。ハケは粗い。

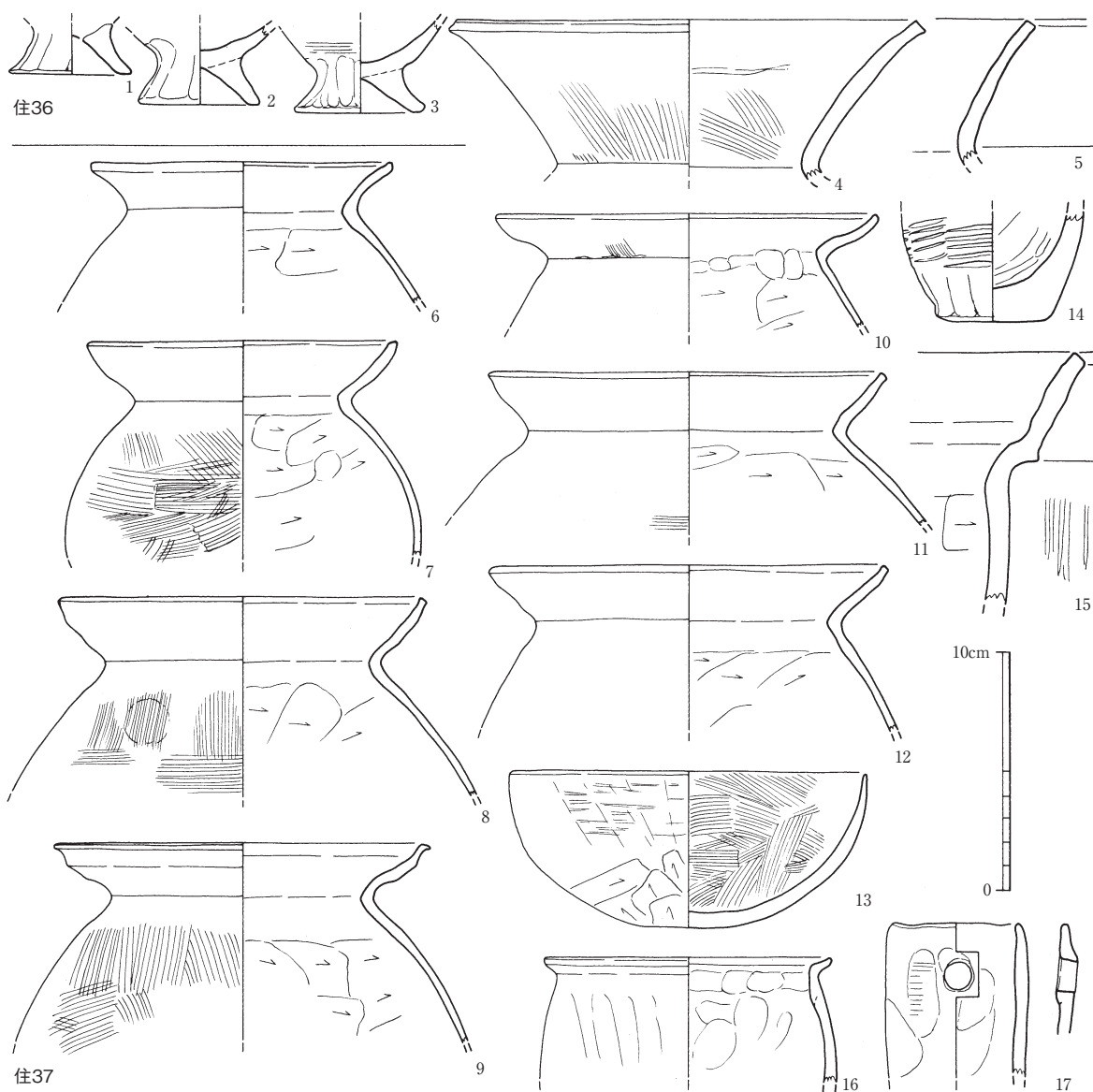
11は高坏。坏部内面に放射状の暗文を施す。

12は丸底の鉢。

13は山陰系鼓形器台。脚の端部を上方に跳ね上げる。



第81図 36・37号竪穴住居跡実測図（1/60）



第82図 36・37号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

14はタコ壺。口縁部の破片。

36号竪穴住居跡 (図版14、第81図)

発掘区の南東隅部、31号竪穴住居跡の南側に位置する。東側を37号住居跡に切られる。平面プランは方形ないしは長方形と考えられる。規模は、東西方向が4.05mを測る。主軸をN-14°-Wにとる。床面の標高は3.3m。

出土遺物 (第82図、第27表)

1～3は製塩土器。外面の調整は指頭によるナデ上げ。3の胴部下半にはタタキ痕が残る。

37号竪穴住居跡 (図版14、第81図)

発掘区の南東隅部、36号竪穴住居跡の東側に位置する。36号竪穴住居跡を切り、南側は発掘区外に延びる。平面プランは長方形と考えられる。規模は東西長3.40m、遺存する南北長は2.65mを測る。主軸をN-8°-Wにとる。床面の標高は3.2m。住居跡の中央よりやや西寄りで

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
82-1		住36覆土	製塩土器	底径51	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	赤褐色	内外ナデ。	1／4		508
2		住36覆土	製塩土器	底径50	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	茶褐色	内外ナデ。接地部分平坦。	底部完存		507
3		住36覆土	製塩土器	底径54	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	暗茶色	内外ナデ。胴部外タタキ。接地部分 平坦。	底部完存		506
4		住37覆土	壺	口径200	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	明黄褐色	内外斜ハケ。	1／8	傾き・口径やや不安	521
5		住37覆土	直口壺		粘土粗、1～3mm 石英多	良好	黄褐色	内外ヨコナデ。	小片		522
6		住37覆土	布留系甕	口径127	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	暗黄褐色	摩滅著しい。内ケズリ。	1／3		513
7		住37覆土	布留系甕	口径130	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	黄褐色	外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	1／4	煤付着	517
8		住37覆土	布留系甕	口径154	粘土粗、1～3mm 石英多	良好、黒斑	黄褐色～黄白色	外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	1／4		512
9		住37覆土	布留系甕	口径158	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	黄褐色	口縁端部大きく外方につまみ出す。 外縦ハケ。内ケズリ。	1／8	煤付着	518
10		住37覆土	布留系甕	口径160	粘土粗、1～3mm 石英多	やや甘い	暗黄灰色	外摩滅著しい。内ケズリ、頸指頭圧 痕顕著。	1／4		516
11		住37覆土	布留系甕	口径166	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	黄褐色	外横ハケ、内ケズリ。	1／3	煤付着	514
12		住37覆土	布留系甕	口径168	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	明黄褐色	内ケズリ。	1／3	煤付着	515
13		住37覆土	鉢	口径150	粘土やや粗、砂粒 をあまり含まない	良好	黄褐色	外上ミガキ、下ケズリ。内斜ハケ。	1／2		520
14		住37覆土	鉢か	底径47	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄褐色	外タタキ、内ナデ上げ。底外ナデ。	底部完存		524
15		住37覆土	山陰系二 重口縁鉢		粘土粗、1～3mm 石英多	やや甘い	明黄褐色	外ミガキか。内ケズリ。	小片		511
16		住37覆土	半島系土 器鉢		粘土粗	軟質	暗茶褐色	口縁外反。胴は張らない。外板ナデ 後ナデ。内ナデ。	1／6		519
17		住37覆土	タコ壺	口径54	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄褐色	内外ナデ。	1／2		523

第27表 36・37号竪穴住居跡出土土器観察表

主軸を南北方向にとる炉跡を検出した。規模は長軸長75cm、短軸長44cm、深さ15cmを測る。住居跡の北東部の床面には60cm×45cm、高さ20cmほどの高まりが存在する。この高まりは住居の埋土である暗灰色砂質土とは異なる硬く焼き締まった明茶褐色粘質土からなる。

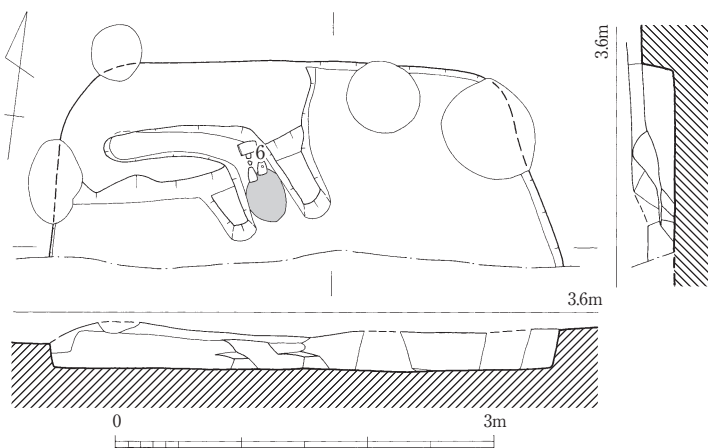
出土遺物（第82図、第27表）

4・5は壺の口縁部。4は小片のため口径に不安がある。

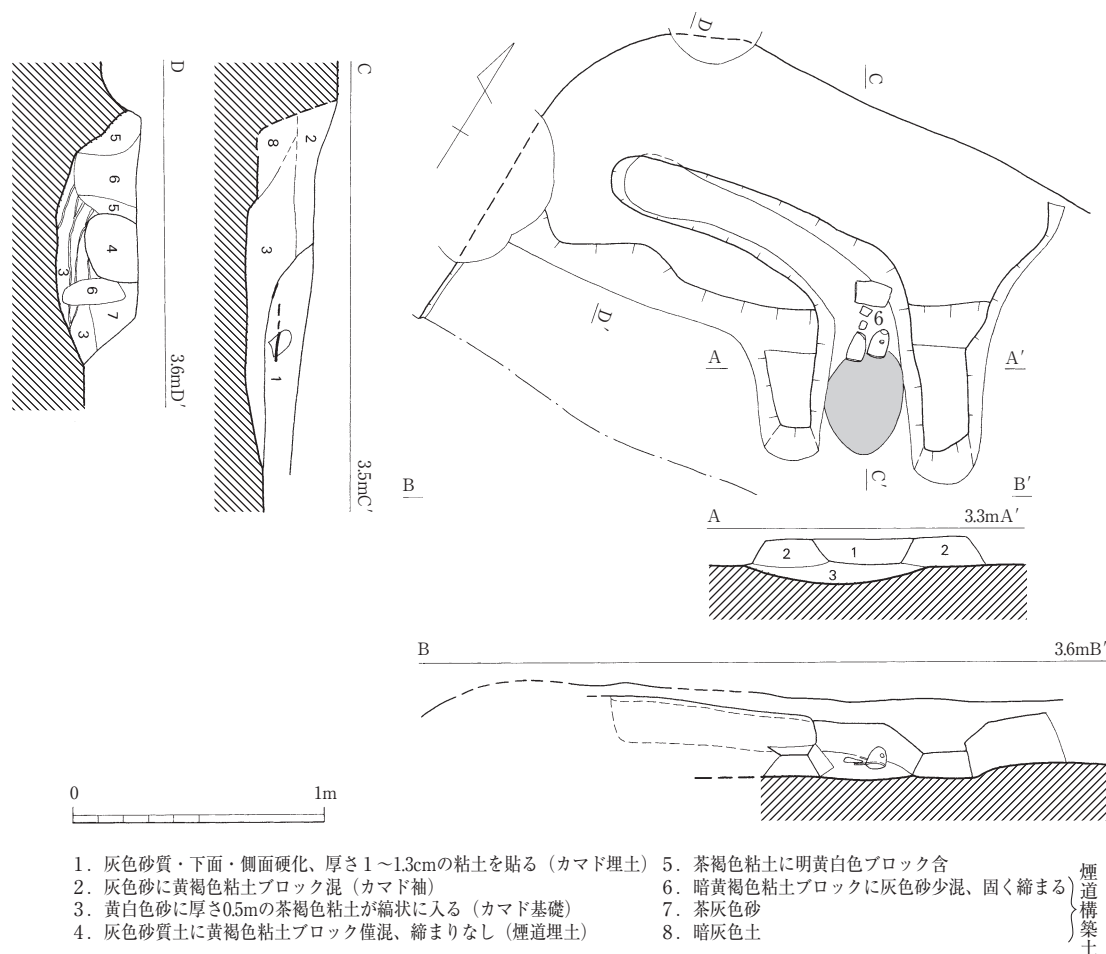
6～12は布留系甕。9は口縁端部を大きく外方につまみ出す。7・9を除いて口縁部の内側に段を持つ。

13は鉢。わずかに平底気味になる。14は全形が知れない。外面にタタキ痕と強いナデの痕跡が明瞭に残り、内面はナデ上げる。15は山陰系二重口縁鉢の少破片。

16は半島系軟質土器の鉢。口縁部が外反し、上面が窪む。調整は外面が板ナデ後ナデ。内面



第83図 39号竪穴住居跡実測図（1/60）



第84図 39号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

はナデで、口縁部下には指頭圧痕が残る。

17はタコ壺。内面の凹凸が著しい。

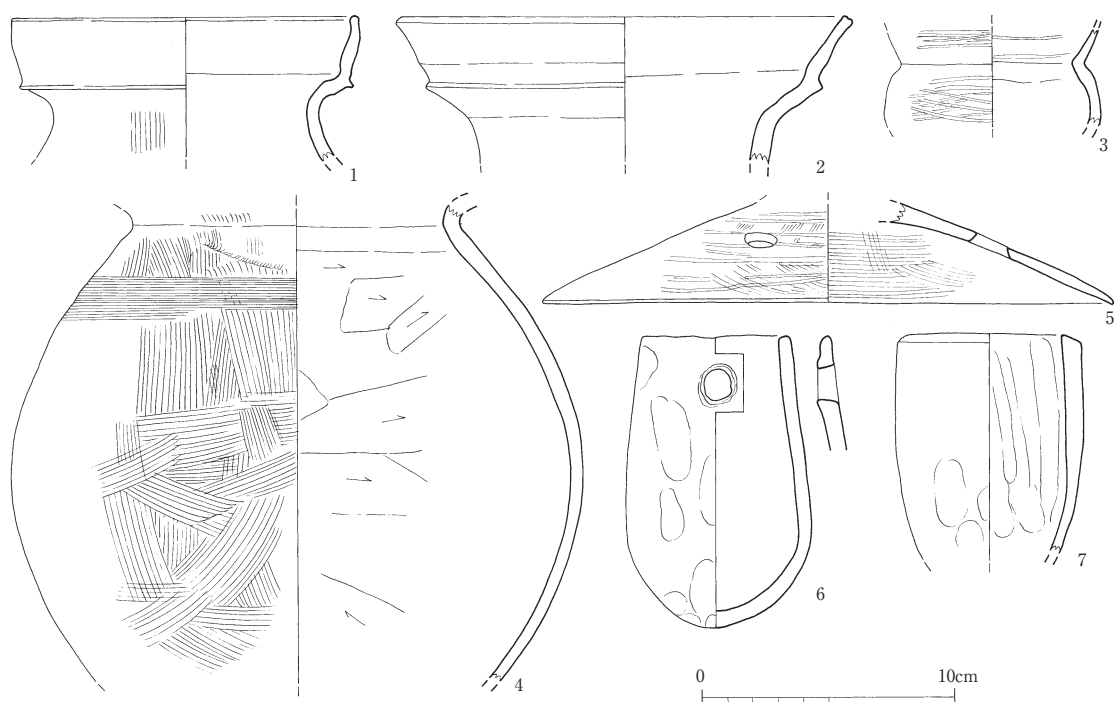
39号竪穴住居跡 (図版14、第83図)

発掘区の南辺部東寄り、36号竪穴住居跡の西側に位置する。住居跡北側の一部を検出し、南側は発掘区外に延びる。平面プランは略隅丸長方形と考えられるが東側の壁が南に向かって広がっている。規模は現存東西長4.08mを測る。主軸をN-7°-Wにとる。床面の標高は3.1m。カマドを付設する。

カマド (図版14、第84図)

住居跡北辺のほぼ中央に付設され、煙道は住居北壁に沿って西側に伸びる。燃焼部の主軸は北壁とは直交せず、それに対して25°ほど西に振れている。

カマドの構築土は灰色砂に黄褐色粘土ブロックを混合したものである (②)。カマド袖の構築に先立って幅73cm、深さ9cmの掘り込みを行い、暗灰色砂にやや粘性を帯びた黒茶色砂質土を混合した土を充填する (③)。住居跡北壁から85cmほどの床面には支脚としての完形のタコ壺が据えられる。この支脚には掘方は伴わず、また、僅かではあるが燃焼部の床面から浮いていることから、構築当初から据えられたものではないようである。支脚の前面は41cm×31cmの範囲の床面の硬化が著しく、断面観察では厚さ1.0~1.3cmの赤褐色粘土を火床として貼っている。



第85図 39号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

ることが確認できた。

煙道は北壁に平行して西に延び、西壁から40cm控えたところで直に立ち上がる。煙道の断面形状は径25cmの円形。煙道部はカマド袖と同じ工程で築かれる。特に住居跡壁寄りの部分は、通常カマド本体部分の下層で行われるような、砂質土と粘質土の互層による下層地業（縦断面③）がしっかりと行われ、その上部に粘土を主体とした硬く締まった土が貼られている。煙道の埋土は灰色砂質土に黄褐色粘土ブロックを含む締まりのない土質である（④）。また、煙道の底面はカマド燃焼部のレベルより15cm前後高くなっている。ただ、燃焼部の最奥部のレベルとはそれほど変わらない。

出土遺物（図版25、第85図、第28表）

1・2は山陰系二重口縁壺。1は口縁が直に近く立ち上がる。

3は小形丸底壺。

4は布留系甕。肩部に櫛描き沈線文を巡らせる。

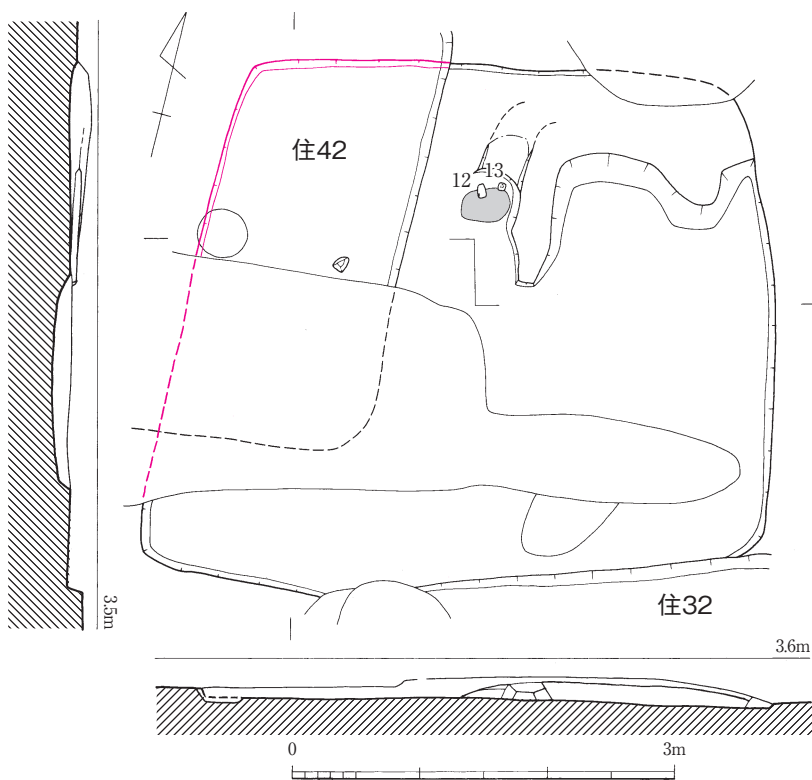
5は脚付き鉢の脚部分。脚の中位に円孔を施す。

6・7はタコ壺。カマドの中央部に支脚として伏せられた状態で据えられており、一面が熱を受けて赤化している。7は口縁端部に面をなす。

41号竪穴住居跡（図版15、第86図）

発掘区の南東部、32号竪穴住居跡の北側に位置する。南側を32号竪穴住居跡に、西側で42号竪穴住居跡に切られる。平面プランは南側に向かってやや幅が広がる略方形である。規模は南北長4.24m、東西長4.40mを測る。主軸をN-76°-Eにとる。床面の標高は3.3m。カマドを付設する。

埋土中から砥石が出土している。

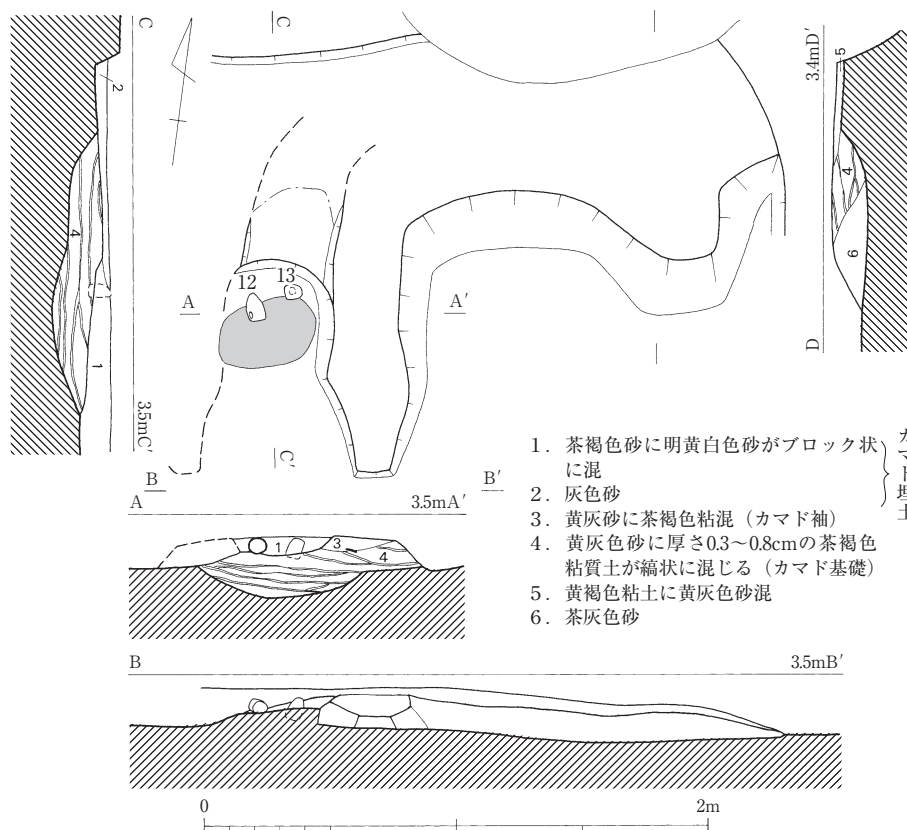


第86図 41号竪穴住居跡実測図 (1/60)

カマド (図版15、第87図)

住居跡北辺のほぼ中央に付設され、煙道は住居北壁に沿って東側に伸びる。燃烧部の主軸は北壁と直交する。

カマドの構築土は灰色砂に黄褐色粘土ブロックを混合させたもので、土器片も材として用いている (③)。カマド袖の構築に先立って幅88cm、深さ19cmの掘り込みを行い、厚さ2～4cmの黄灰色砂に、厚さ0.3～0.8cmほどの茶褐色粘質土を交互に充填する (④)。他の住居跡のカマド下部地盤に比べて丁寧な感を受



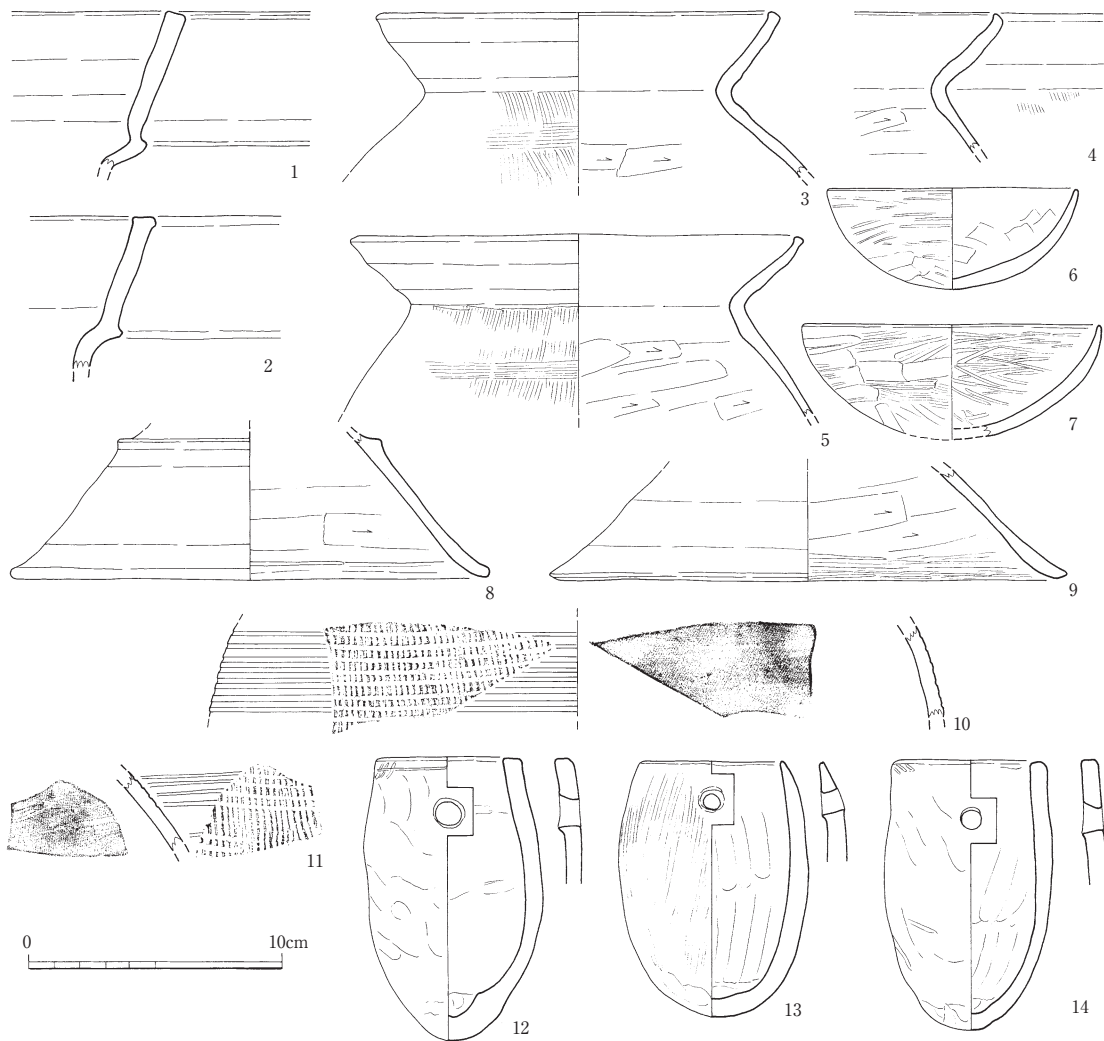
第87図 41号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
85-1		住39覆土	山陰系二重口緑壺	口径138	粘土細、1mm石英少	良好	明黄褐色	外縦ハケ、内ナデか。	1／6		537
2		住39覆土	山陰系二重口緑壺	口径180	粘土粗、1mm石英多	良好	明黄褐色～黄灰色	外不明、内ナデ。	1／8		538
3		住39覆土	小形丸底壺	胴径96	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	暗茶灰色	外ミガキ、内ケズリ後ナデ。	1／5		540
4		住39覆土	布留系甕	胴径226	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外黄褐色、内灰色	肩飾描き沈線。外縦ハケ→下斜ハケ、内ケズリ。	1／8		536
5		住39覆土	脚付き鉢	脚径226	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外斜ハケ後ミガキ、内横ハケ。	1／4		535
6	25	住39カマド	タコ壺(支脚)	口径57、器高115	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄茶色～橙褐色	外ナデ、内ナデ上げ。熱を受け赤化。	ほぼ完存	支脚として転用	542
7		住39覆土	タコ壺	口径72	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	1／4		541
88-1		住41覆土	山陰系二重口緑壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ	小片		594
2		住41覆土	山陰系二重口緑壺		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ	小片		550
3		住41覆土	布留系甕	口径160	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ後横ハケ、内ケズリ。	1／5		552
4		住41覆土	布留系甕		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ、内ケズリ。	小片		553
5		住41覆土	布留系甕	口径180	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色～褐色	外縦ハケ後横ハケ、内ケズリ。	1／5		551
6		住41覆土	鉢	口径100、器高40	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙色～黄褐色	外ミガキ、内板ナデ。	1／4		554
7		住41覆土	鉢	口径120、器高45	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外ケズリ、内ミガキ	1／4		555
8		住41覆土	山陰系鼓形器台	脚径190	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	橙色	外ヨコナデ、内ケズリ	1／4		557
9		住41覆土	山陰系鼓形器台	脚径206	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	橙色	外ヨコナデ、内ケズリ。裾内面ミガキ。			556
10	29	住41覆土	半島系土器壺		粘土細、砂粒を含まず	陶質、須恵器生焼けのよう	淡灰色	外平行タタキ→沈線。内横方向のナデ。	1／6		1143
11	29	住41カマド	半島系土器壺		粘土細、砂粒を含まず	陶質、須恵器生焼けのよう	灰色	外平行タタキ→沈線。内ナデ。	小片		1144
12	25	住41カマドNo.2	タコ壺(支脚)	口径59、器高112	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色～淡橙褐色	外ナデ、内工具ナデか。口縁部に棒状工具のアタリ。	完形	支脚として転用	548
13	25	住41カマドNo.1	タコ壺(支脚)	口径58、器高101	粘土粗、1～3mm石英少	良好、黒斑	淡黄褐色	外縦ハケ、内ナデ上げ。	完形	支脚として転用	546
14	25	住41覆土	タコ壺	口径62、器高106	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	完形		547

第28表 39・41号竪穴住居跡出土土器観察表

ける。住居跡北壁から95cmほどの床面には支脚としての完形のタコ壺が左右に据えられる。左側の支脚タコ壺はカマドの主軸に沿って倒した状態にあり、右側のそれは東側に傾いた状態で倒立している。両者の上面のレベルは揃えられている。右側のタコ壺は掘方を持たず、カマドの基礎地業や本体の構築と一連の作業過程において立てられ、タコ壺の周囲はカマドの床となる粘土でパッキングされた状態にある。支脚前面の燃焼部は27cm×38cmの範囲で床面が硬化している。

煙道部は、カマド袖と同じ土を用いて築かれた基底部分のみが遺存しており、カマド燃焼部と同レベルにもかかわらず煙道そのものは確認できなかった。そのため、煙道底面はカマド燃焼面よりも若干高くなるものと考えられる。なお、煙道部の構築土は住居跡北壁に沿って東に延び、住居北東隅部からさらに東壁に沿うように南に向かって30cmほど張り出している。この部分の土層もカマドの基礎地業にみられるものと同様の互層になっているが、その下層は締まりのない茶灰色砂である(⑥)。



第88図 41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 (図版25、第88図、28表)

1・2は山陰系二重口縁壺。2は口縁部が肥厚する。

3～5は布留系甕。いずれも口縁端部を内側につまみ出す。

6・7は丸底の鉢。7の外側調整は口縁部直下までヘラケズリを行う。

8・9は山陰系鼓形器台。9は裾部内面にヘラケズリを行った後、端部付近にミガキを施す。あるいはこちらが受け部か。

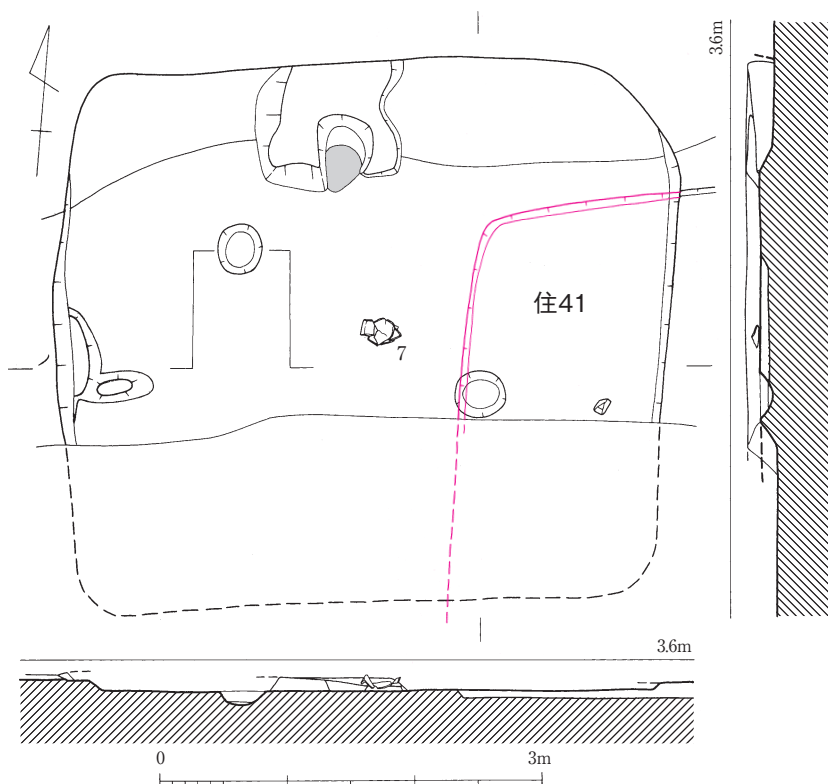
10・11は半島系土器壺肩部。調整などからみて同一個体の可能性がある。

12～14はタコ壺。12は外面にハケ調整を行っている。12・13はカマドの支脚として転用されていたもので、熱を受けて赤化している。

42号竪穴住居跡 (図版15、第89図)

発掘区の南東部、41号竪穴住居跡の西に位置する。41号竪穴住居跡と43号竪穴住居跡を切る。南側半分は現代の攪乱によって損壊している。また、住居跡の北側もプールの基礎によって削平されており、壁は残存していなかった。しかしながら、床下層の土色の变化した部分により、そのラインを確定することができた。平面プランは長方形を呈する。規模は東西長4.83m、残存

南北長2.90mを測る。主軸をN-5°-Wにとる。床面の標高は3.4m。床面の2ヶ所で径35cmと径40cmのピットを二ヶ所で検出したがいずれも浅い。また、住居跡西壁際の中央部に高さ7~20cmほどの高まりが存在する。高まりは茶灰色砂に明黄褐色粘土のブロックを混ぜ込んだ人為的な埋め土からなり、最も高い部分の上面は硬化していた。出入口の痕跡とも考えられる。



第89図 42号竪穴住居跡実測図 (1/60)

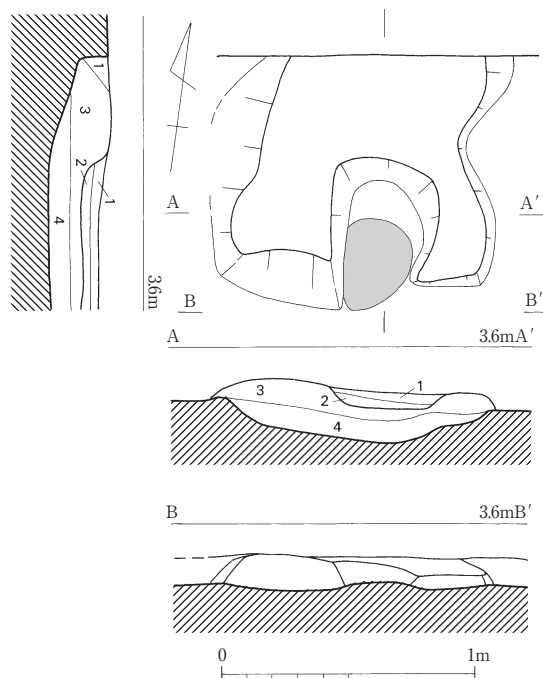
カマド (図版15、第90図)

住居跡北辺の中央に付設される。燃烧部の主軸は北壁と直交する。

カマドの構築土は黄褐色粘土に黒茶色粘土と焼土ブロックを混合させたものである (③)。カマド袖の構築に先立って幅104cm、深さ11cmの掘り込みを行い、やや粘性を帯びた茶褐色土に、黄白色砂をブロック状に混入させた土で埋めている (④)。通常、燃烧部面は下層の地業上面とほぼ一致し、カマドの壁体はその後の過程で独立して構築されることが多いが、この住居跡の場合、袖と燃烧部が同一粘土を用いた一連の作業工程で形成されている。カマド袖に挟まれた燃烧部は36cm×27cmの範囲で床面が硬化している。

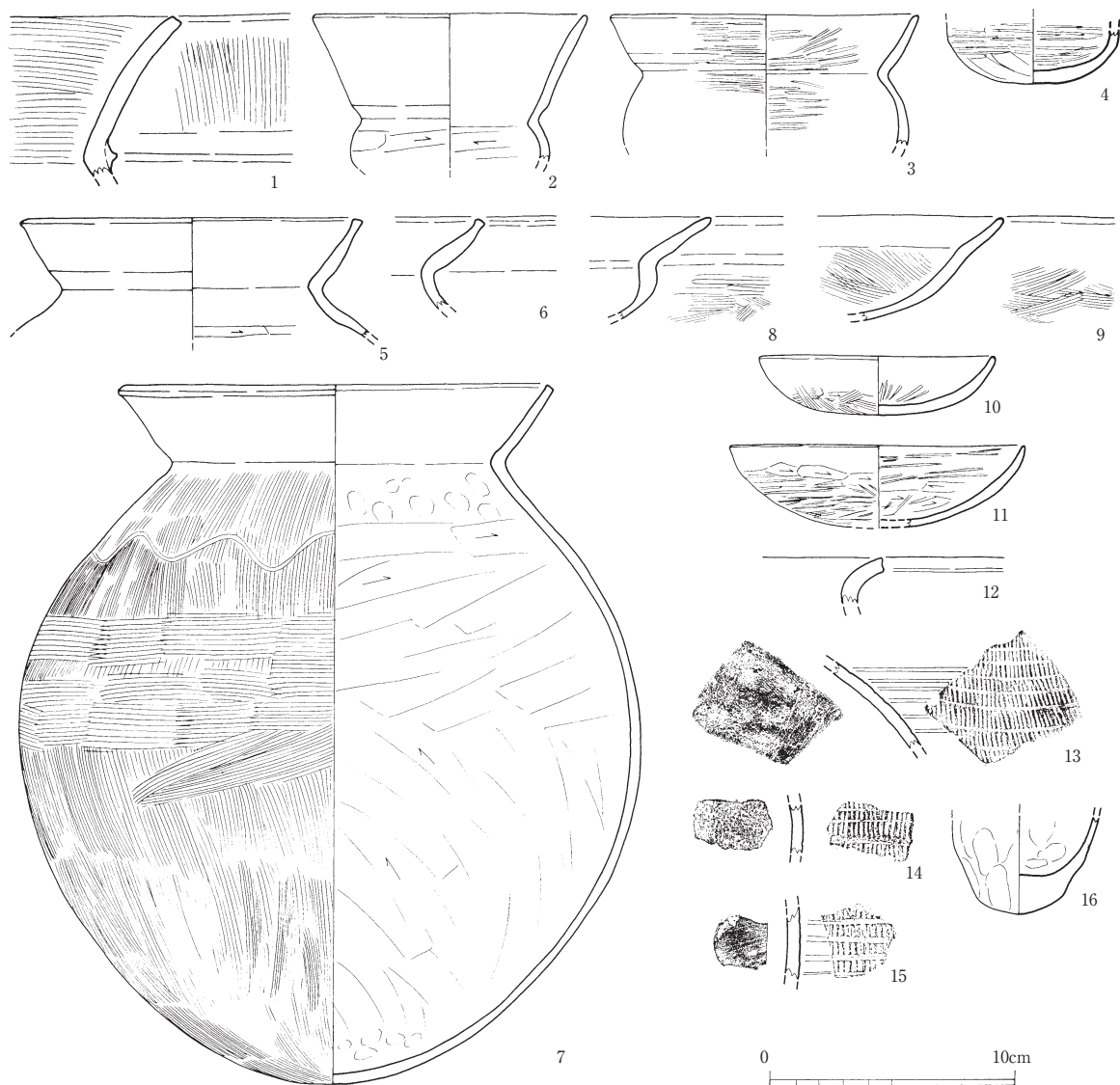
出土遺物 (図版25、第91図、第29表)

1は直口壺。屈曲部に断面三角形の突帯を巡らせる。口縁端部は面をなす。2~4は小形丸底壺。2は粗製。



1. 灰色砂
2. 茶褐色土に明黄白色砂ブロック状に混
3. 黄褐色粘土に黒茶色粘土・黄褐色粘土の焼土ブロック。硬化。(カマド構築土)
4. やや粘性を帯びた茶褐色土に黄白色土ブロック状に混 (カマド基礎)

第90図 42号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第91図 42号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

5～7は布留系甕。6・7は口縁端部を内側につまみ出す。7は口縁部と胴部を一部欠くが完形に近い。外面調整は縦ハケの後、胴部やや上位に横ハケを行い、肩部にヘラ描き波状文を巡らせる。頸部内面と底部内面に指頭圧痕が残る。

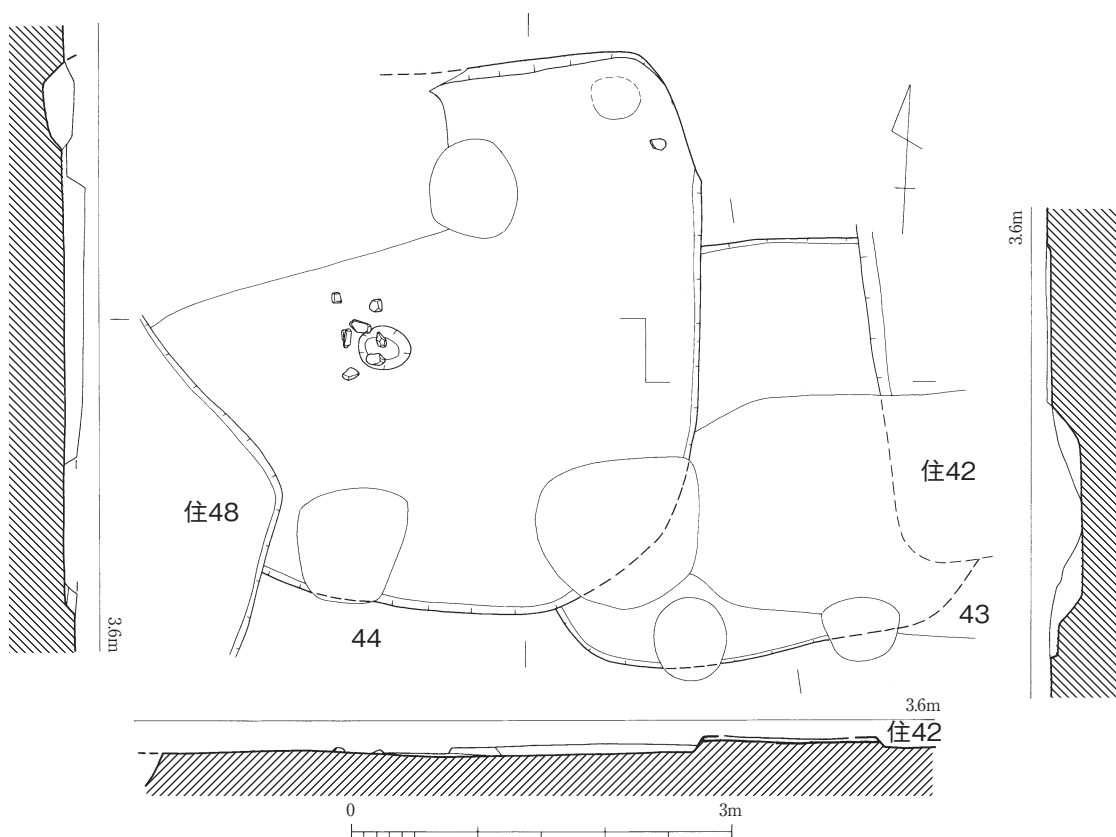
8・9は外反口縁鉢の小片。10・11は丸底の鉢。

12～15は半島系土器。12は鉢ないしは壺の口縁部。口縁端部が凹む。13～15は壺の肩から胴部にかけての小片。外面に縄蓆文タタキを行ない沈線を巡らせる。内面の調整は15がヨコナデ、その他はナデ。

16はタコ壺の底部破片。

43号竪穴住居跡（第92図）

発掘区の南東部、42号竪穴住居跡の西側に位置する。北壁と南壁の一部を確認した。東側を42号竪穴住居跡に、西側を44号竪穴住居跡に切られる。平面プランは隅丸方形を呈する。規模



第92図 43・44号竪穴住居跡実測図 (1/60)

は南北長3.19mを測る。主軸をN-11°-Wにとる。床面の標高は3.4mを測る。壁の残りが非常に悪く、また、炉跡等の付属施設も確認していないため住居跡と認定するには若干の躊躇も覚えるが、整った平面プランと底面がフラットになることから住居跡とした。住居跡の埋土は淡黄灰色土である。

出土遺物 (第94図、第29表)

1・2は小形丸底壺。ともに粗製。3・4は布留系甕口縁部の小片。

5は高坏。坏部内面に放射状の暗文を施す。

44号竪穴住居跡 (図版16、第92図)

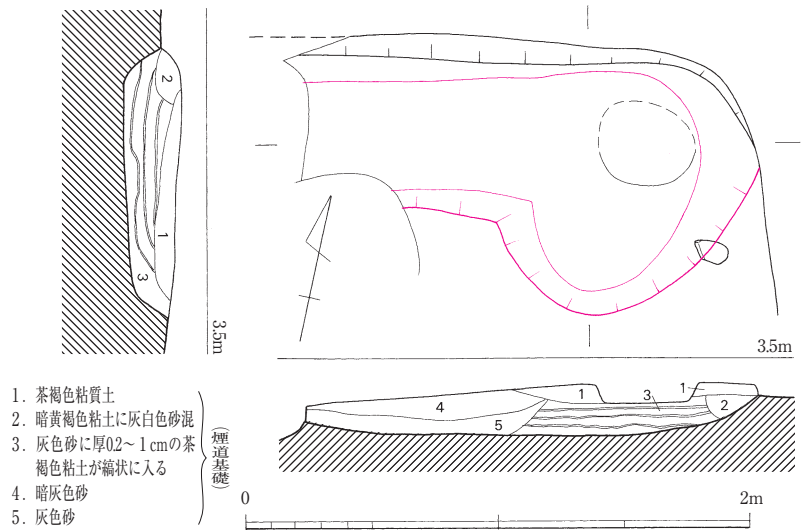
発掘区の南東部、43号竪穴住居跡の西側に位置する。東側で43号竪穴住居跡を切り、西側は48号竪穴住居跡に切られる。北西部はプール基礎によって損壊しているが平面プランは隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は南北長4.43m、現存東西長4.42mを測る。主軸をN-88°-Eにとる。床面の標高は3.3m。カマドを付設する。住居跡ほぼ中央の床直上で、8個の角礫が集中する部分が認められた。いずれも熱を受け赤化していた。また、床面では径40cmのピットを検出した。

カマド (第93図)

本体は確認していないが、住居跡北辺に沿って煙道の基礎地業の痕跡が認められた。おそらくは北辺中央部ないしはやや西寄りに、燃焼部の主軸を北壁と直交させるカマドを付設するものと考えられる。

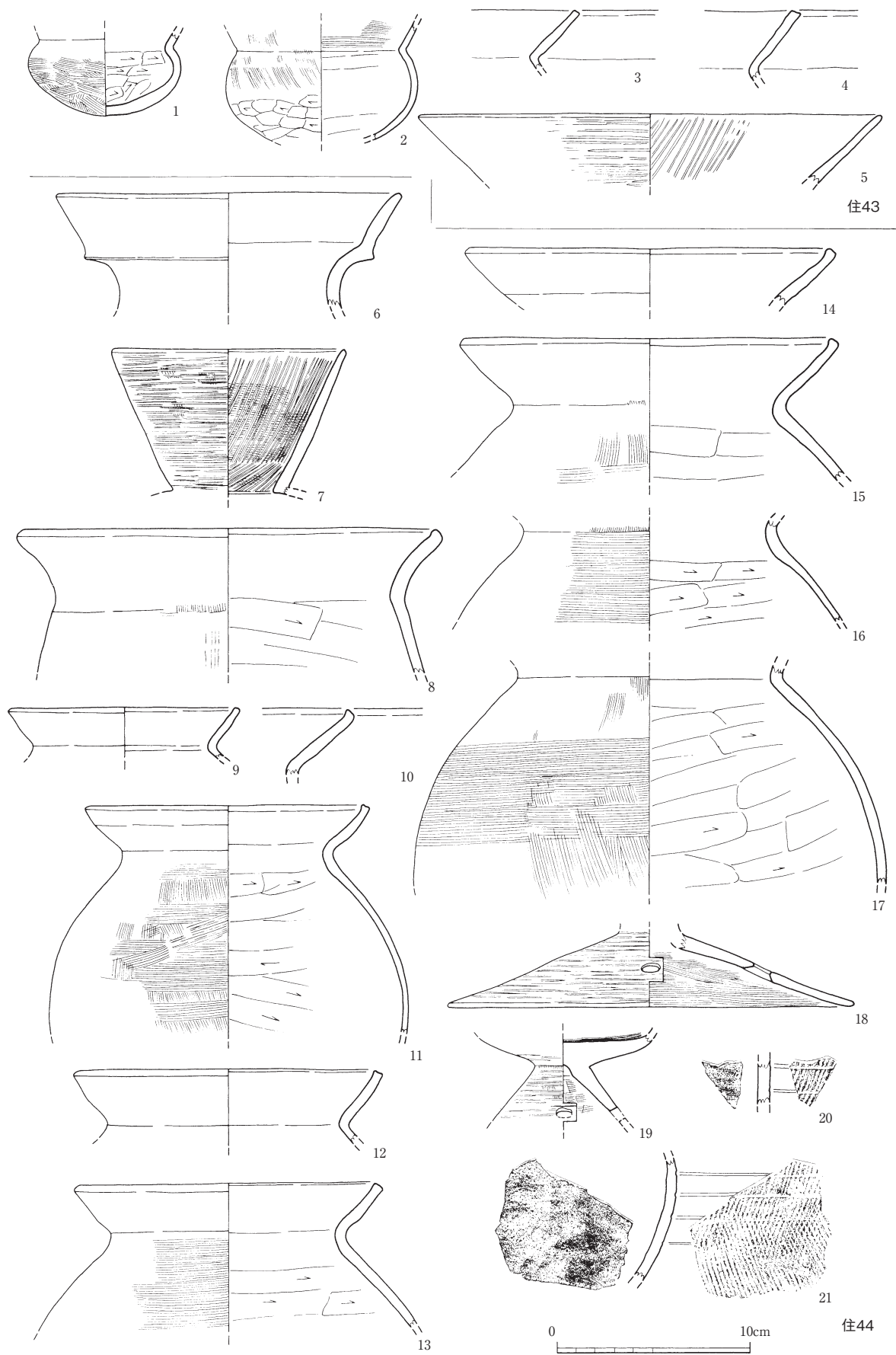
挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
91-1		住42覆土	直口壺		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄茶色	外縦ハケ、内横ハケ。断面三角形突起帯。	小片		560
2		住42覆土	小形丸底壺	口径112、胴径82	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	口縁ヨコナデ、胴内外ケズリ。	1／4		565
3		住42覆土	小形丸底壺	口径127	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙褐色	内外ミガキ。	1／6		564
4		住42覆土	小形丸底壺		粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	橙色	内外ミガキ。	底部のみ		561
5		住42覆土	布留系甕	口径140	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁ヨコナデ、内ケズリ。	1／4		570
6		住42覆土	布留系甕		粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	口縁ヨコナデ、内ケズリ。	小片		568
7	25	住42No.1	布留系甕	口径176、胴径248、器高284	粘土粗、1～3mm石英多	良好、黒斑	外明黄褐色、内暗黄灰色	肩部にヘラ描き波状文。外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。頸内・底内に指頭圧痕。	ほぼ完存		558
8		住42覆土	外反口縁鉢		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	斜めハケ→ミガキ。内ナデ。	小片		569
9		住42カマド袖	外反口縁鉢		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄茶色	内外斜ハケ。	小片		565
10		住42覆土	鉢	口径96、器高24	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外斜ハケ、内ミガキ。	1／4		562
11		住42覆土	鉢	口径121	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙色	内外ケズリ後ミガキ。	1／4		563
12		住42覆土	半島系土器壺肩		粘土細、1～3mm石英少	硬質、堅緻	濃灰色	ヨコナデ。	小片		567
13	29	住42覆土	半島系土器壺		粘土細、砂粒を含まず	瓦質、須恵器生焼けのよう	暗黄灰色	外平行タタキ→沈線。内ナデ。	小片		1145
14	29	住42覆土	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	瓦質、土師器っぽい	暗黄灰色	外平行タタキ→沈線。内ナデ。	小片		1146
15	29	住42覆土	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	硬質	茶灰色	外縄席文タタキ→沈線。内ヨコナデ。	小片		1147
16		住42覆土	タコ壺		粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外ナデ、内ナデ上げ。	底部のみ		566
94-1		住43覆土	小形丸底壺	胴径78	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄茶色	外斜ハケ、内ケズリ後部分的にナデ。	1／3		571
2		住43覆土	小形丸底壺	胴径100	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外縦ハケ、胴下はケズリ。口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／4		572
3		住43覆土	布留系甕		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	小片		574
4		住43覆土	布留系甕		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗黄茶色	内外ヨコナデ。	小片		575
5		住43覆土	高坏	口径239	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	黄橙色	外ミガキ、内暗文。	1／8		573

第29表 42・43号竪穴住居跡出土土器観察表



第93図 44号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

煙道部の基礎地業は他例と同様、厚さ2～4cmの灰色砂に、厚さ0.2～1cmの茶褐色粘土を交互に充填している（③）。ただ、横断面で見ると東側半分はこの層が存在するものの、西半部がそれとは全く異なる土質となっている。土層④⑤についてはその上部を煙道下部の積み土と考えられる茶褐色粘質土（①）が覆っているため、カマドに伴う一連



第94図 42・43号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
6		住44カマ ド下層	山陰系二 重口緑壺	口径180	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	1／5		585
7	25	住44覆土	直口壺	口径120	粘土細、砂粒をほ んど含まず	良好	淡橙褐色	外ミガキ、内横ハケ→暗文。	口縁全周		577
8		住44覆土	在地系甕	口径220	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	橙色	外縦ハケ、内ケズリ。	1／5		579
9		住44カマ ド下層	布留系甕	口径100	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	橙色～黄灰色	内ケズリ。	1／6		584
10		住44覆土	布留系甕		粘土やや細、1～ 3mm石英・長石少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ	小片		583
11		住44覆土	布留系甕	口径146、胴径 184	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄橙色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／3		590
12		住44覆土	布留系甕	口径160	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	1／2		589
13		住44覆土	布留系甕	口径160	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄灰色	外横ハケ、内ケズリ。	1／4		580
14		住44覆土	布留系甕	口径190	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	1／4		582
15		住44覆土	布留系甕	口径195	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄橙色～黄灰色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／3		581
16		住44覆土	布留系甕		粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄灰色～灰色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／4		578
17		住44覆土	布留系甕	胴径242	粘土やや細、1～ 3mm石英・長石少	良好	外黄灰色、内黄茶 色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。	1／2		588
18		住44覆土	脚付き鉢	脚径210	粘土細、砂粒をほ んど含まず	良好	黄橙色～橙褐色	外ミガキ、内横ハケ。孔あり。	1／4		587
19		住44覆土	器台		粘土粗、1～3mm 石英少	良好	暗茶褐色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ。孔1 つ。	1／3		586
20	29	住44カマ ド下層	半島系土 器		粘土細、砂粒を含 まず	陶質	灰色	外縄席文タタキ→沈線。内ヨコナ デ。	小片		1149
21	29	住44覆土	半島系土 器壺		粘土細、砂粒を含 まず	陶質	淡灰色（断面明黄 褐色）	外縄席文タタキ→沈線。内ヨコナ デ。	小片		1148
97-1		住45カマ ド袖下層	直口壺	口径193	粘土細、1mm石英 少	良好	黄褐色	外ヨコナデ、内ハケ後ヨコナデ。	1／7	傾きやや不安。	597
2	25	住45覆土	山陰系二 重口緑壺	口径197	粘土粗、1mm石英 多	良好	黄褐色	頸外縦ハケ後ヨコナデ、胴ミガキ。 胴内ケズリ・	3／4		593
3	25	住45カマ ドNo.3	山陰系二 重口緑壺	口径136、胴径 150、脚径116、 器高134	粘土やや細、1～ 3mm石英多	良好	黄褐色	全体的に薄く丁寧な作り。胴外縦ミ ガキ→中位横ミガキ、内ケズリ。脚 内外ヨコナデ。	口縁1／2 欠、他は完 存		591
4	25	住45覆土	小形丸底 壺	口径102、胴径 80、器高63	粘土細、砂粒をほ んど含まず	良好	淡橙褐色	口縁外縦ハケ後ミガキ、胴下ケズリ 後ミガキ、胴上ミガキ。口縁内ミガ キ、胴ケズリ後ミガキ。	1／2		594
5		住45覆土	小形丸底 壺	口径130、胴径 110	粘土細、砂粒をほ んど含まず	やや甘い	黄褐色	外縦ハケ後ミガキ。口縁内横ハケの ちナデ、胴内ナデ。	1／5	鼠歯形。	595
6		住45覆土	布留系甕	口径121、胴径 138	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	明黄褐色	甕との区別困難。胴外縦ハケ、内ケ ズリ。底内指オサエ。	1／2	煤付着	605
7		住45覆土	布留系甕	口径130、胴径 140	粘土やや粗、1～ 3mm石英多	良好	明黄褐色～茶褐色	胴外縦ハケ→中位は横ハケ、内ケズ リ。口縁内横ハケ。	1／2	煤付着	604
8		住45覆土	布留系甕	口径184	粘土細、1mm石英 多	良好	淡黄褐色	胴内ケズリ。	1／2		607
9	25	住45カマ ド袖下層	布留系甕	口径197	粘土やや粗、1～ 3mm石英多	良好	明黄褐色	胴外縦ハケ→中位は横ハケ、内ケズ リ。底内指オサエ。	1／2		592
10		住45カマ ド袖下層	布留系甕	胴径230	粘土細、1～3mm 石英多	良好	淡黄褐色～黄褐色	外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ。	1／3		603
11		住45覆土	布留系甕		粘土粗、1～3mm 石英多	良好	黄白色	4本一対の櫛描波状文。	小片		611
12		住45カマ ドNo.1	高坏（支 脚）	最大径70、器高 95	粘土細、砂粒をほ んど含まず	良好、二次 加熱で黄灰 ～灰変	黄褐色～黄灰色	外シボリ痕。	脚柱のみ残	カマド支脚に転用。	599
13		住45カマ ド袖下層	畿内系二 重口緑鉢		粘土細、砂粒をほ んど含まず	良好	茶褐色	極めて薄い。外ミガキ、内ミガキ→ 放射状暗文。	小片		600
14		住45カマ ド袖	外反口縁 鉢	口径161	粘土細、砂粒をほ んど含まず	やや甘い	黄褐色	口縁～胴外摩滅で不明。底ケズリ。 内ミガキ。	小片		601
98-15		住45覆土	山陰系二 重口緑鉢	口径296	粘土やや粗、1～ 3mm石英多	良好	黄褐色～黄白色	胴内ケズリ。	1／3		608
16	29	住45カマ ドNo.4	半島系土 器壺	胴径265、残高 208	粘土細、砂粒ほと んど含まず	瓦質、やや 甘い	黄褐色～灰色	胴上半9条以上の沈線。外平行タタ キ、内ナデ。底部内付近にハケ一部 残。	1／3		1152
17	29	住45覆土	半島系土 器		粘土細、砂粒ほと んど含まず	瓦質、須恵 器生焼けの よう	淡灰色	外平行タタキ、内ナデ。	小片		1151
18	29	住45覆土	半島系土 器壺		粘土細、砂粒ほと んど含まず	瓦質、須恵 器生焼けの よう	灰色、断面橙褐色	3条以上の沈線。外平行タタキ、内 ナデ。	小片		1150
19		住45覆土	タコ壺		粘土やや細、1mm 石英多	やや甘い	淡黄褐色	外ナデ、内まで上げ。	底完存		602

第30表 44・45号竪穴住居跡出土土器観察表

の層位と考えると問題ないだろう。当該住居跡の煙道は住居跡北壁から北東隅部に延び、そこからさらに東壁に沿うように南に向かって45cmほど張り出している。このような形状は4号竪穴住居跡や41号竪穴住居跡にみられ、上述した張り出し部分の層位の在り方は4号竪穴住居跡に通じるところがある。

出土遺物（図版25、第94図、第30表）

6は山陰系二重口縁壺。端部は丸く収める。

7は直口壺。調整は丁寧で、胎土も精良。

8は在地系の甕。口縁端部を内側にややつまみ出し丸く収める。9～17は布留系甕。9のように口縁端部を丸く収めるものや面をなすものがある。

18は脚付き鉢の脚部分。円孔が1ヶ所に残る。19は小形器台。円孔が1ヶ所に残る。

20・21は半島系土器の小片。ともに陶質で、調整は外面が縄蓆文タタキで、内面調整は20がヨコナデ、21がナデ。

45号竪穴住居跡（図版17、第95図）

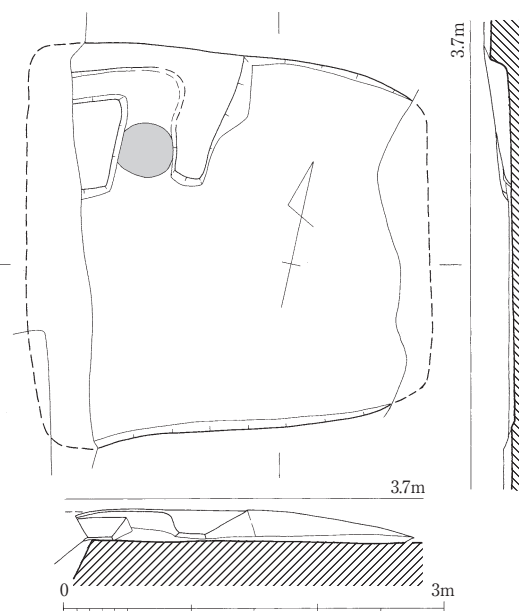
調査区の中央部東壁寄り、41号竪穴住居跡の北側に位置する。西壁はプール基礎によって損壊し、また、東側は削平を受けて壁は遺存していない。平面プランは西側に向かってやや幅が広がる略方形を呈する。規模は南北長3.20mを測る。主軸をN-12°-Wにとる。カマドを付設する。床面の標高は3.4m。

埋土中から小形の砥石が出土している。

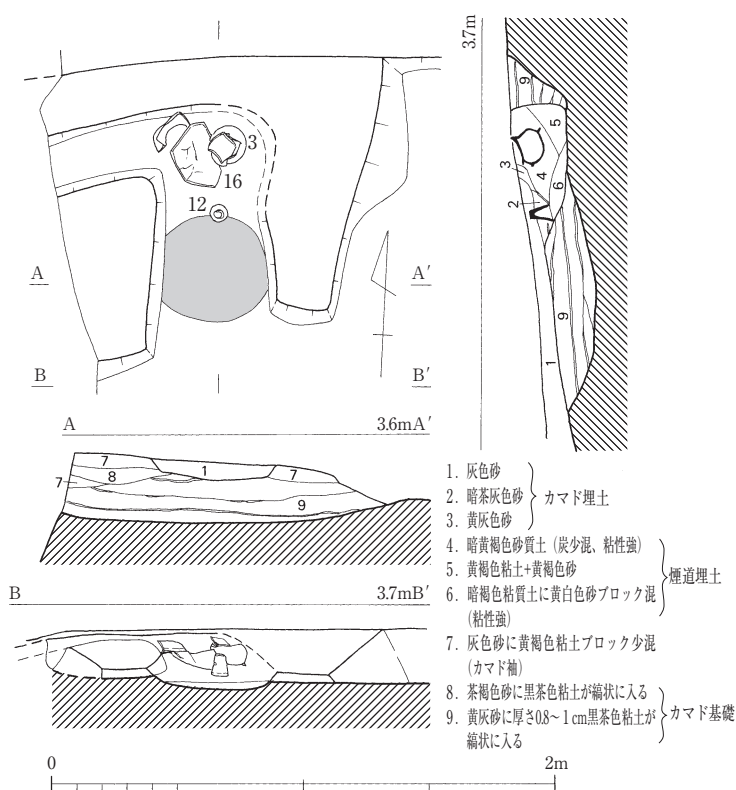
カマド（図版17、第96図）

住居跡北辺の西に偏って付設される。燃烧部の主軸は北壁と直交する。

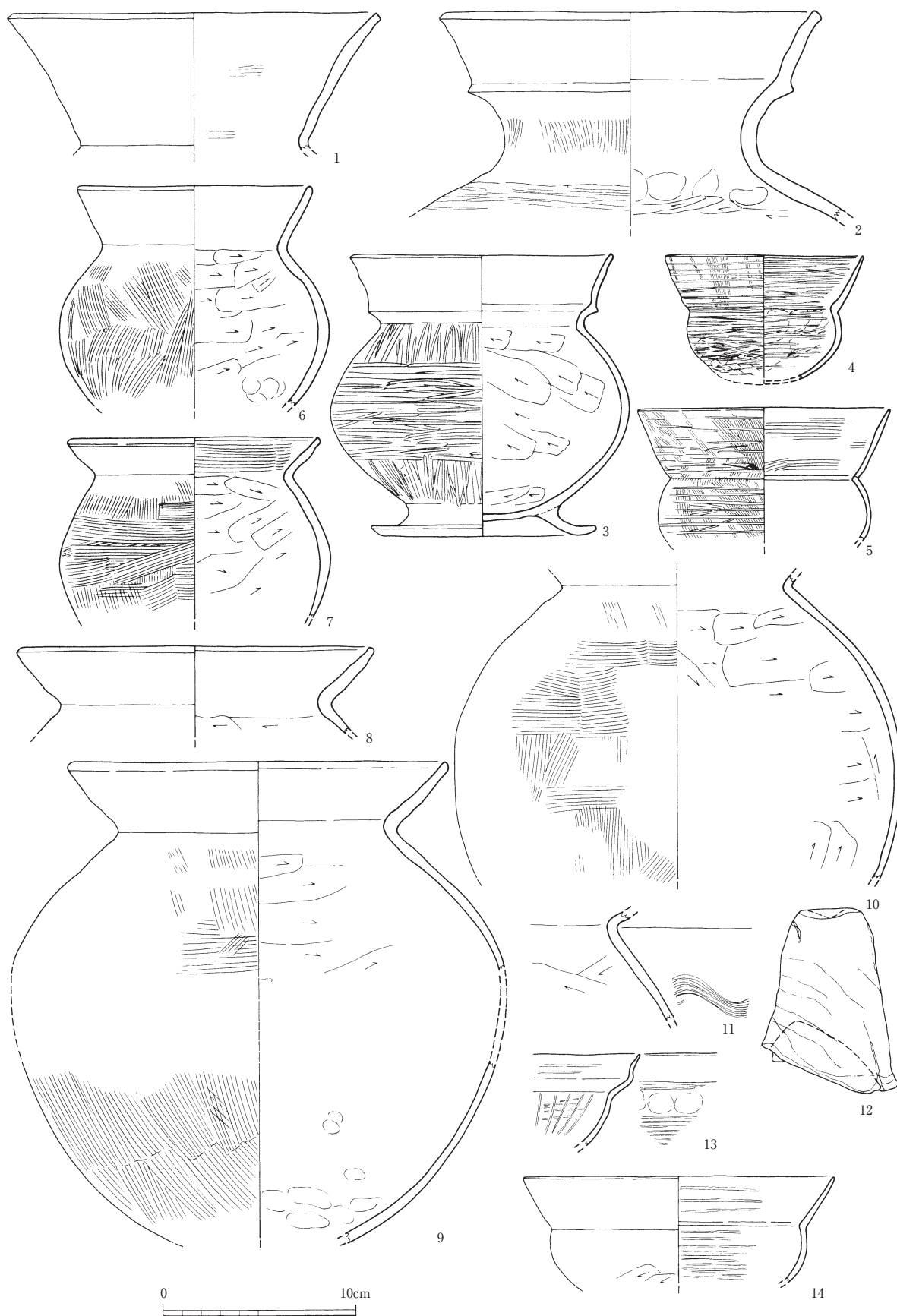
カマドの構築土は灰色砂に黄褐色粘土ブロック土（⑦）と、茶褐色砂に黒茶色粘土が縞状に入る土（⑧）からなる。カマド袖の構築に先立って深さ17cmの掘り込みを行い、厚さ3～7cmの黄灰色砂に、厚さ0.8～1.0cmの黒茶焼土を交互に充填している（⑨）。住居跡北壁から60cmほどの床面に支脚として転用された高坏の脚部が配される。支脚の前面は41cm×



第95図 45号竪穴住居跡実測図（1/60）



第96図 45号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第97图 45号竖穴住居迹出土土器实测图1 (1/3)

42cmの範囲で床面が硬化している。

煙道はカマド燃焼部の最奥部で屈曲し、住居北壁に沿って西に延びる。縦断面で観察されるように、煙道部の基礎はカマドの基礎地業と一連の作業によって構築されている(⑨)。煙道は上半部が失われているが、径24cmほどになる。煙道の底面レベルは西に向かって僅かに高くなり、燃焼部とのレベルとも著しい差はないが、カマドの最奥部は燃焼部よりも一段低くなっている。縦断面の土層では、煙道の埋土である⑤⑥層堆積後に支脚を据えた状況が観察されるため、検出された支脚は当初のものではない。なお、煙道埋土中より半島系土器がまとまって出土した。

出土遺物 (図版25、第97・98図、第30表)

1は壺で口縁端部は面をなす。2・3は山陰系二重口縁壺。3は脚付で全体的に薄く丁寧な作りである。外面は縦位のミガキの後、中位のみ横位のミガキを施している。煙道から出土。4・5の小形丸底壺も器壁が薄く丁寧な作り。6は外反する長めの口縁をもつもの。端部は丸く収める。壺として報告するが、甕との種別が困難な個体である。

7~11は布留系甕。7~10は口縁端部を丸く収め、内側にわずかに段をもつ。

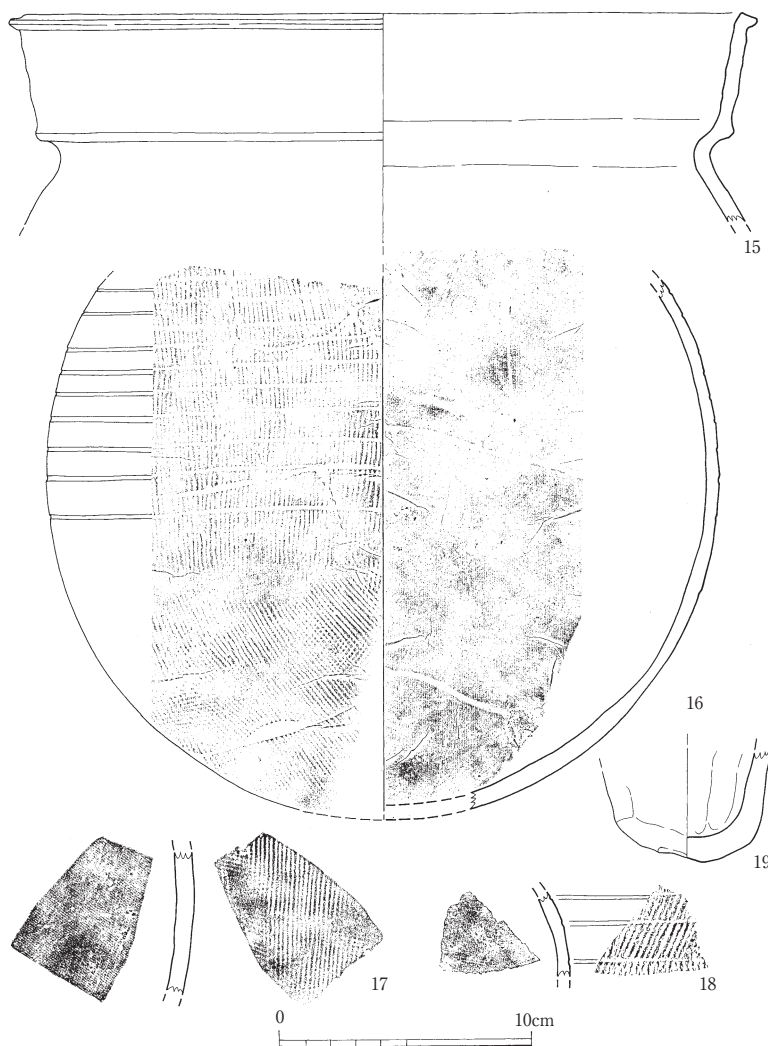
12は高坏の裾部を傾斜をつけて打ち欠き支脚として転用したもの。ほぼ図示した傾きでカマドに据えられていたもので、図面の右側が焚口側(前)になる。支脚の下部が同じ幅で強い熱を受け、灰色に変化・硬化している。

13は畿内系二重口縁鉢で極めて薄く仕上げられる。14は外反口縁鉢。15は山陰系二重口縁鉢で、口縁端部は外方に長くつまみ出される。

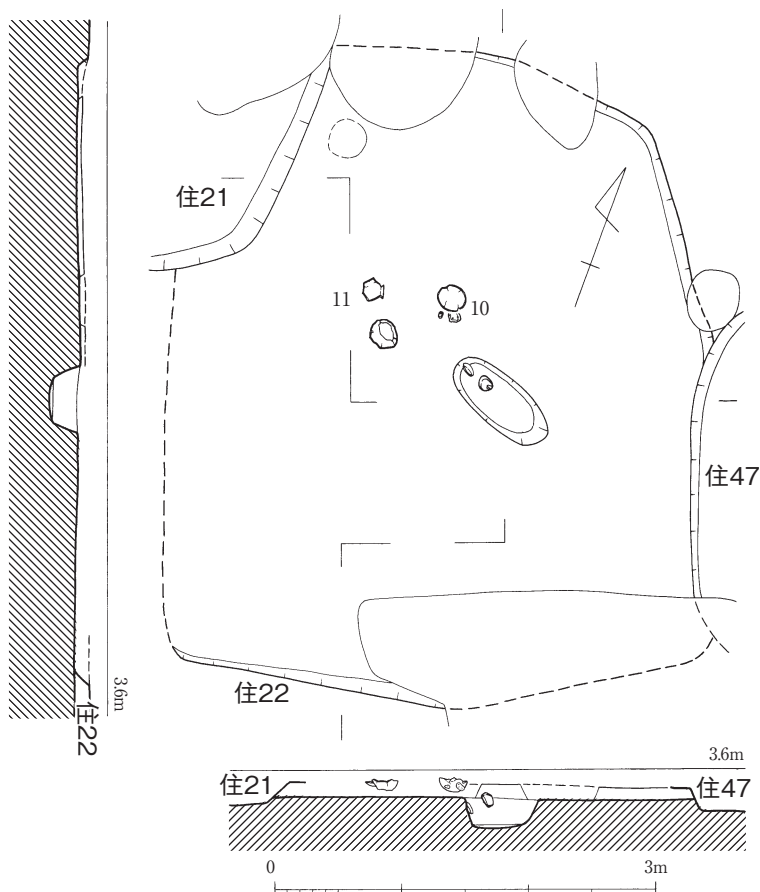
16~18は半島系土器。煙道から出土。底部内面に部分的にハケが残る。18は壺の肩部にあたる小片で、外面は縄蓆文タタキ。

19はタコ壺の破片。

46号竪穴住居跡 (図版16、第99図)



第98図 45号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)



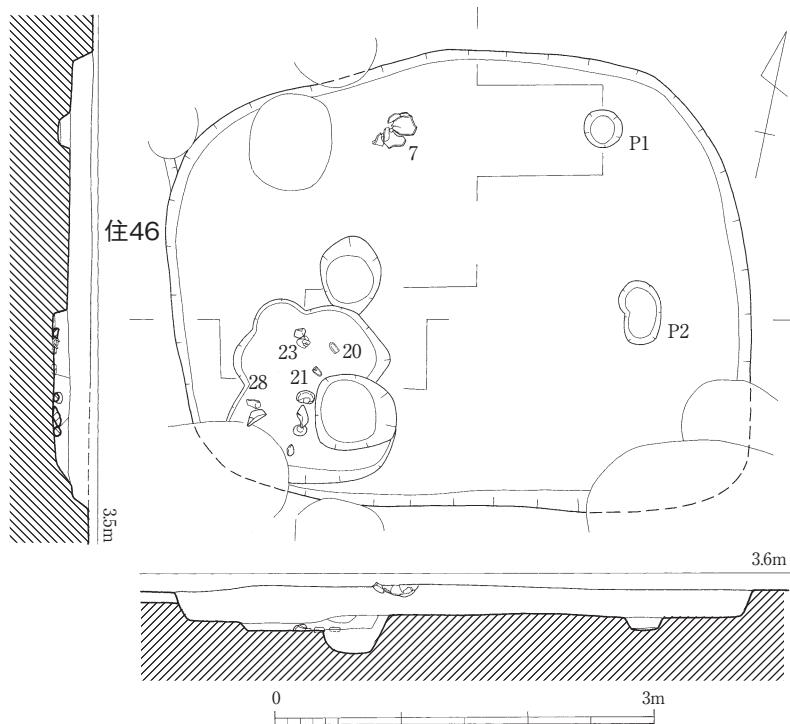
第99図 46号竪穴住居跡実測図 (1/60)

発掘区の南東部、21号竪穴住居跡の東側に位置する。西壁は削平を受け遺存していない。21号竪穴住居跡に切られ、22号竪穴住居跡・48号竪穴住居跡を切っている。検出時には47号竪穴住居跡が46号竪穴住居跡よりも新しいとの判断をしたが、出土遺物からみると明らかに47号竪穴住居跡の方が古相を示す。規模は東西長5.20m、現存南北長4.20mを測る。主軸をN-20°-Wにとる。床面の標高は3.4m。住居跡の中央部よりやや東寄りで長円形の土坑(D1)を検出した。規模は長軸長89cm、短軸長37cm、深さ22cmを測る。埋土中に炭化物を含んでおらず、また、通有の炉跡に比べて深い。床面で他に径29cmの柱穴をひとつ検出したが深さ7cmと浅い。

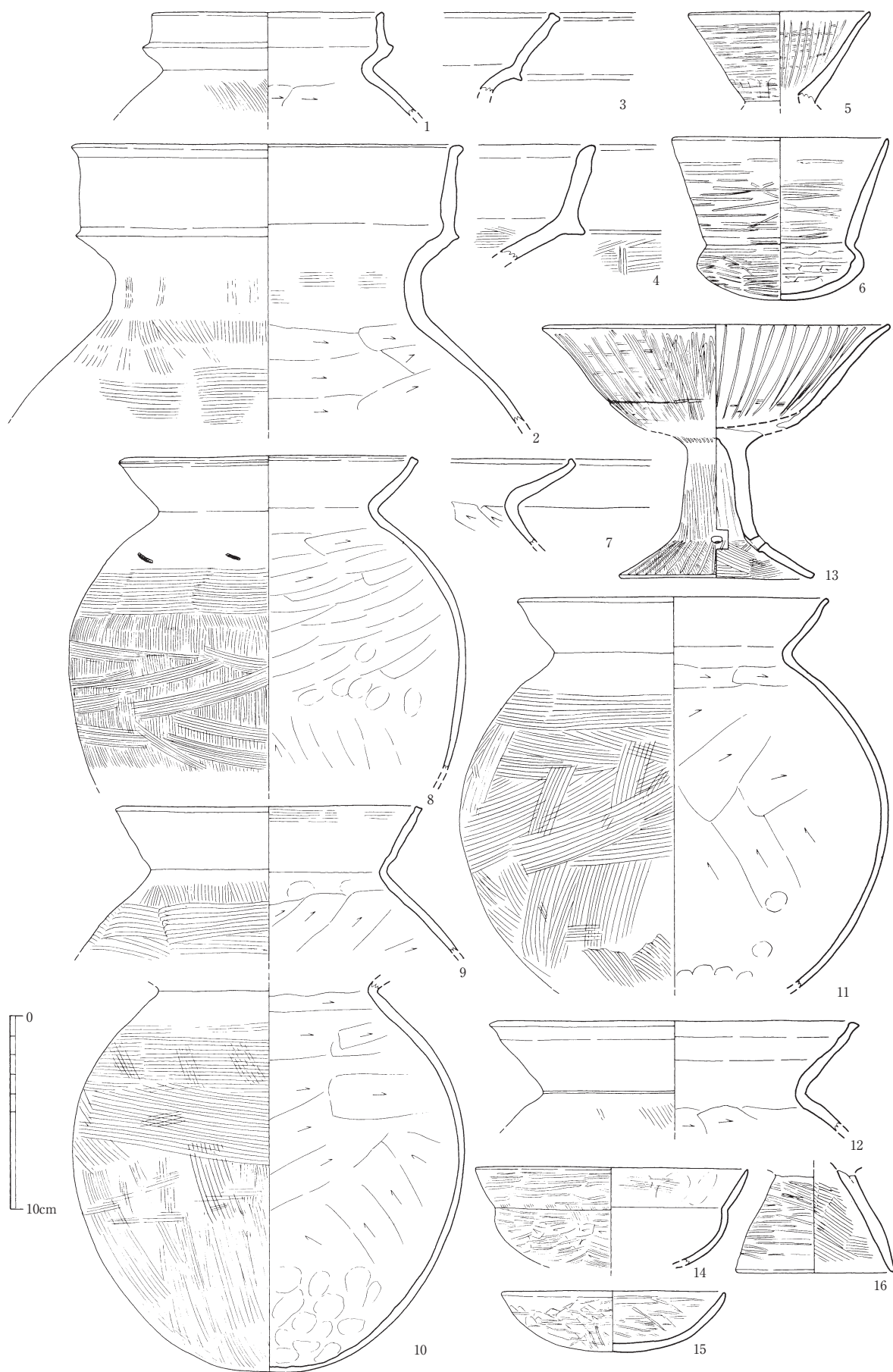
出土遺物 (図版25、第100図、第31表)

1～4は山陰系二重口縁壺。1は口縁部が短く直立する。4は屈曲部が外方に大きく張り出す。5・6は小形丸底壺。5は胴部の径が小さくなることから他の器種を考えた方がよい。6は口縁部が長く伸び、胴部高が低くなる比較的新しい時期に属するタイプ。

7～12は布留系甕。7は口縁端部がしっかりと面をなすもので、内側の段も明瞭である。10・11の底部内面には指頭圧痕が顕



第100図 47号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第101图 46号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
100-1		住46覆土	山陰系二重口縁壺	口径120	粘土細、1～3mm石英多	良好	淡黄白色	口縁直立。外斜ハケ、内ケズリ。	1／4		620
2		住46覆土	山陰系二重口縁壺	口径204	粘土粗、1mm石英・長石多	良好	黄褐色	外縦ハケ→横ハケ。頸内横ハケ後ヨコナデ。胴ケズリ。	1／3		619
3		住46覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄褐色～黄灰色	内外ヨコナデ	小片		621
4		住46覆土	山陰系二重口縁壺		粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	暗黄褐色	口縁屈曲部が外方に長く突出。外横ハケ→暗文、内横ハケ。	小片		622
5		住46覆土	直口壺	口径94	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	外黒茶色、内暗黄褐色	外ミガキ、内ミガキ→放射状の暗文。	1／3		624
6	25	住46覆土	小形丸底壺	口径112、胴径87、器高83	粘土粗、1mm石英・長石多	やや甘い	外黄褐色～灰色、内灰色	口縁が長く、胴部が浅い。外・口縁内粗いミガキ、胴内ケズリ後ナデ。	1／2		613
7		住46覆土	布留系甕		粘土粗、1mm石英少	やや甘い	淡黄灰色	端部が面をなす。胴内ケズリ。	小片	煤付着	617
8		住46覆土	布留系甕	口径154、胴径204	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄白色	肩にハケ工具端押圧文。外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。指オサエ痕跡。	1／2	煤付着	576
9		住46覆土	布留系甕	口径158	粘土粗、1～3mm石英多	良好	明黄褐色	外縦ハケ→横ハケ。口縁内ハケ後ヨコナデ。胴内ケズリ。	1／4		615
10	25	住46No.3	布留系甕	胴径202、残高197	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄褐色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。底内指頭圧痕多。	口縁以外完存	煤付着	612
11		住46覆土	布留系甕	口径161、胴径222	粘土粗、1mm石英多	良好	黄褐色～黒茶色	外縦ハケ→横ハケ、内ケズリ。底内指頭圧痕多。	1／3		618
12		住46下層	布留系甕	口径191	粘土細、1mm石英少	良好	黄白色	口縁薄い。端部外方つまみ出す。外斜ハケ、内ケズリ。	1／5		616
13		住46P-1	高坏	口径180、脚径54、器高約130	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	杯部沈線。杯外横ハケ→縦ハケ→暗文、内ヨコナデ→放射状暗文。脚外斜ハケ→暗文、内ハケ。柱外縦ハケ、内板ナデか。	1／2		626
14		住46覆土	外反口縁鉢	口径141、残高50	粘土細、砂粒をほとんどふくまず	やや甘い	明黄褐色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ後ナデ。底外ケズリ後ミガキ。	1／4		623
15	25	住46-P1	鉢	口径115、器高31	粘土細、1mm石英少	良好	黄褐色～黒灰色	外ケズリ後ミガキ、内ミガキ。	完形		614
16		住46覆土	器台	脚径83	粘土細、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	外ミガキ、内斜ハケ。	1／3		625

第31表 46号竪穴住居跡出土土器観察表

著に残る。12は口縁端部を外方につまみ出すもの。

14は外反口縁鉢。

47号竪穴住居跡（図版18、第101図）

発掘区の南東部、46号竪穴住居跡の東側に位置し、これより古い。平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は東西長4.59m、南北長3.61mを測る。主軸をN－12°－Wにとる。床面の標高は3.3m。4ヶ所で柱穴を検出したが、主柱穴となるかどうかについては判断しがたい。また、住居跡の南西部で不整形の土坑を検出した。床面はフラットで、タコ壺4個体と円礫・角礫6個が出土した。なお、P1・P2からもタコ壺が出土している。

出土遺物（図版25・26、第102・103図、第32表）

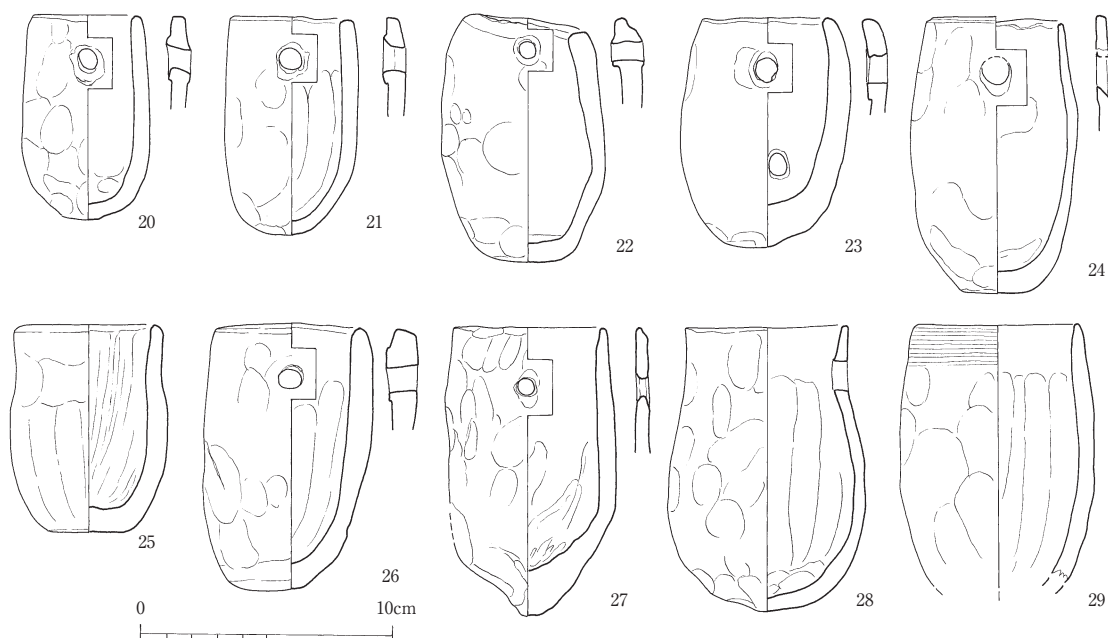
1～3は山陰系二重口縁壺。4は第五様式系の壺の底部で平底となる。

5は在地系甕で口縁部は緩く外反する。6の口縁は短く直線的に伸び、端部は先細っている。外面の調整はやや左上がりの粗い平行タタキの後、底部に極めて粗いミガキ風の工具ナデを行う。7は第五様式系の甕。倒卵形の体部に短く外反する口縁が付く。口縁端部は面をなしている。底部は平底気味である。底部外面にはタタキの痕跡がかすかに残る。8は布留系甕。

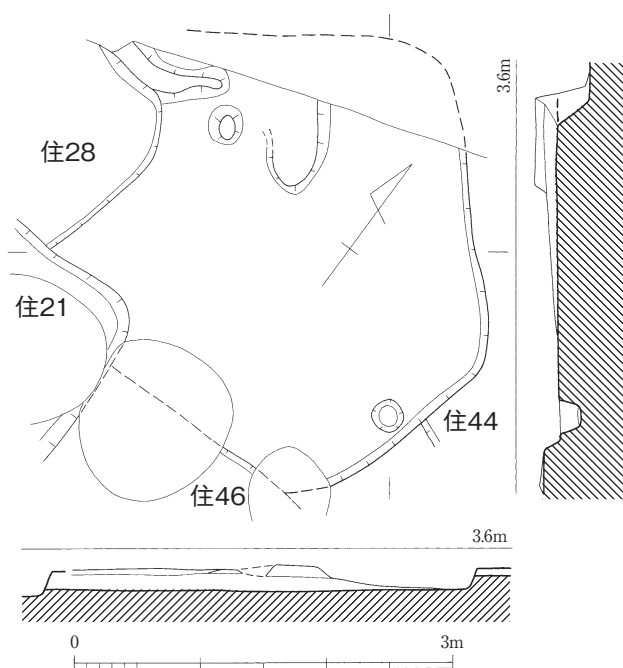
9～14は高坏。やや内湾しながら直線気味に延びるもの、口縁部が外反しながら長く延びる



第102图 47号竖穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第103図 47号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)



第104図 48号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ものなどがある。11は吉備系の高坏杯部で、杯部に段を持つ。

15～17は鉢。15は短く外反する口縁を持つ。

19は半島系土器の壺の小片。調整は外面が網代状の平行タタキ、内面はヨコナデで指頭圧による凹凸が著しい。

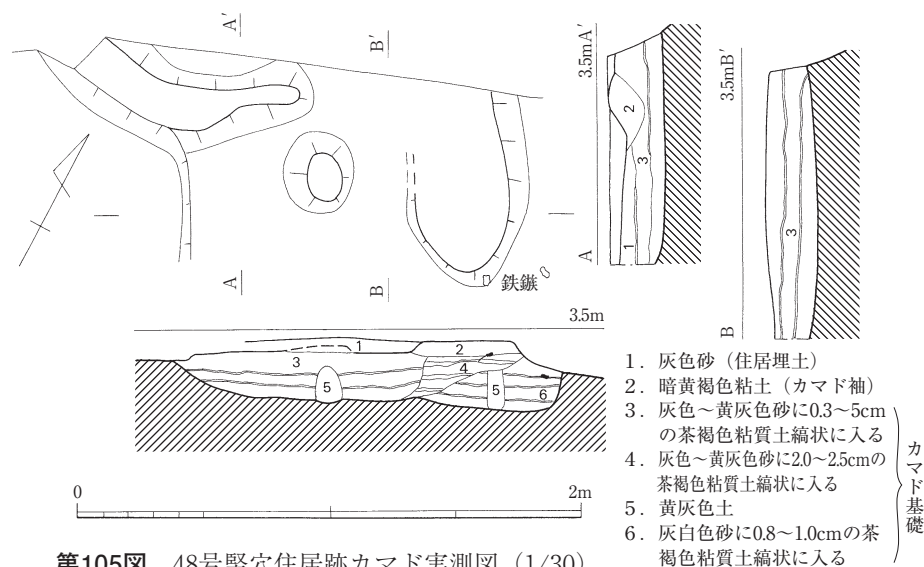
20～29はタコ壺。口径4.8～6.6cm、器高8.0～11.4cmを測る。底部形状は24～26が平底、27が尖底となる。27を除き、いずれも外側から穿孔する。23は2方に穿孔を行う。27は底部付近が2次加熱を受けて器面が部分的に剥落している。28は口縁部下でややすぼまる形状で、器壁が薄い。29の口縁部外面はハケ状工具によるヨコナデ調整。

48号竪穴住居跡 (第104図)

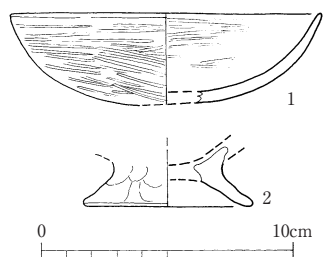
発掘区の南東部、46号竪穴住居跡の北側に位置する。44号竪穴住居跡を切り、21号竪穴住居跡・28号竪穴住居跡・46号竪穴住居跡に切られる。北側はプールの基礎によって削平されている。平面プランについては壁の一部しか確認しておらず、また、この検出した2壁が鈍角に折れるため、このライン自体についても今ひとつ確信が持てない。ただ、想定される住居跡の北辺部においてカマドを付設することが確認された。

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
102-1		住47D-1	山陰系二重口縁壺	口径180	粘土粗、1mm石英多	良好	黄褐色	内ケズリ後ヨコナデ。	1／5		649
2		住47D-1	山陰系二重口縁壺	頸径100	粘土細、1～3mm石英多	良好	黄褐色	口縁内ハケ後ナデ。胴内ケズリ。	1／2		650
3		住47覆土	山陰系二重口縁壺		粘土細、1～3mm石英多	良好	黄灰色	内外ヨコナデ。	小片		648
4		住47D-1	第五様式系壺	底系34～39	粘土細、1mm石英多	良好	暗黄褐色	平底。内外ナデ。指頭圧痕顕著。	底部完存		658
5		住47覆土	在地系甕	口径142	粘土粗、1～3mm石英多	良好	明黄褐色	口縁緩く外反。外縦ハケ。口縁内横ハケ。胴内ケズリ。	1／4		645
6	26	住47覆土	在地系甕	口径129、胴径140、器高145	粘土粗、1～3mm石英多	良好	明黄褐色	外粗いタタキ、底粗いミガキ。口縁内～頸内ミガキ、胴内斜ハケ。	口縁～胴一部欠	煤付着	637
7	25	住47覆土	第五様式系甕	口径185、胴径250、器高185	粘土粗、1mm多	良好	外黄白色、内灰褐色	口縁端部面をなす。外斜～縦ハケ、内ケズリ。外底左上がりタタキ後ハケ。	口縁1／2欠		638
8	26	住47覆土	庄内系甕	口径146、胴径164	粘土粗、1～3mm石英多	良好	暗茶色～黄褐色	外ハケ、内ケズリ	1／3		642
9		住47覆土	高坏	口径222	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	明黄褐色	外ハケ後下半ミガキ、内ミガキ→放射状暗文。	1／4		655
10	25	住47覆土	高坏	口径154	粘土細、微砂粒少	良好	橙褐色	口縁部緩く外反。外ハケ→暗文、内ミガキ。	4／5		635
11		住47覆土	吉備系高坏	口径248	粘土細、微砂粒少	やや甘い	黄褐色	外ミガキ、内ミガキ	1／3	鼠歯形	656
12	26	住47覆土	高坏	脚径132	粘土やや細、1石英少	良好	外淡橙褐色、内黄褐色	孔3方。外縦ハケ後ミガキ。柱内板ナデ、脚内横ハケ。	脚裾1／3欠		634
13		住47覆土	高坏	脚径108	粘土細、微砂粒少	やや甘い	淡黄褐色	外ミガキ、内ヨコナデ。	1／2		657
14	26	住47覆土	高坏か	脚径140	粘土粗、1mm石英多	良好	黄褐色～茶灰色	内外ナデ。底指頭圧痕。	1／2		651
15		住47覆土	外反口縁鉢	口径120、残高35	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	赤褐色	内外ミガキ。	1／3		654
16	26	住47覆土	鉢	口径119、残高34	粘土細、1mm石英少	良好	淡橙褐色	外ミガキ、内ミガキ→放射状暗文。	1／2		652
17		住47覆土	鉢	口径124、残高38	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	黄褐色	外ケズリ後ミガキ、内ミガキ。	1／5		653
18	26	住47覆土	器台	脚径112、残高61	粘土細、1～3mm石英少	良好	明黄褐色	孔2方。外横ミガキ、内斜ハケ。	脚部完存		636
19	29	住47覆土	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	陶質、堅緻	茶～灰色	外網代状平行タタキ。内ヨコナデ、凹凸著しい。	小片		1153
103-20	26	住47D-1	タコ壺	口径48、器高80	粘土やや細	良好	黄白色	外ナデ、内ヨコナデ。	完形		628
21	26	住47D-1、No.2	タコ壺	口径48、器高85	粘土やや粗	良好	黄褐色～黄白色	外ナデ、内ナデ上げ。	完形		625
22	26	住47覆土	タコ壺	口径48、器高98	粘土やや粗	良好、黒斑	黄褐色	内外ナデ。	完形	歪み著しい	631
23	26	住47D-1No.3	タコ壺	口径50、器高91	粘土やや細、1～3mm石英多	やや甘い	明黄褐色～橙褐色	孔上下2方。内外ナデ。	ほぼ完形		630
24	26	住47P2	タコ壺	口径55、器高109	粘土やや細	やや甘い	黄褐色	平底。内外ナデ。	完形		627
25		住47覆土	タコ壺	口径58、底径32、器高81	粘土細	良好	淡黄褐色	平底。丁寧な作り。外ナデ、内ナデ上げ。	完形		640
26		住47覆土	タコ壺	口径58、器高105	粘土やや粗	良好、黒斑	黄灰色	平底気味。外ナデ、内ナデ上げ。	完形		632
27		住47P1	タコ壺	口径60、器高114	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	橙褐色	尖底。外ナデ、内ナデ上げ。	口縁一部欠	熱を受け器面剥落。	633
28		住47D-1	タコ壺	口径64、胴径78、器高113	粘土細	良好、黒斑	明黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	完形		639
29		住47覆土	タコ壺	口径66、残高102	粘土細、1～3mm石英多	良好、黒斑	明黄褐色	口縁ハケ状工具ヨコナデ。外ナデ、内ナデ上げ。	1／2		641
106-1		住48覆土	鉢	口径123、器高35	粘土細い、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ミガキ。	1／4		660
2		住48覆土	製塩土器	脚径67	粘土細い	良好	黄褐色	内外ナデ。成形時の指オサエ痕明瞭。	1／2		601

第32表 47・48号竪穴住居跡出土土器観察表



第105図 48号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第106図 48号竪穴住居跡出土
土器実測図 (1/3)

カマド (第105図)

住居跡の北辺に沿って付設される。カマド本体部分については右袖の基底部が辛うじて遺存していたのみであるが、燃焼部の主軸は北壁と概ね直交するものと考えられる。

カマドの構築土は暗黄褐色粘土 (②) からなる。カマド袖の構築に先立って深さ35cmの掘り込みを行う。そこに厚さ1～2cmの灰白色砂に、厚さ0.8～2.5cmの茶褐色粘質土を交互に充填しており、互層積みにされた埋土

は大きく3層に分かれる (③④⑥)。下層地業の上面 (袖積み土の下面) と下層埋め土中 (⑥) から鉄鏝が出土した。

出土遺物 (第106図、第32表)

1は鉢。2は製塩土器。

(2) 土坑と出土土器

51号土坑 (第107図)

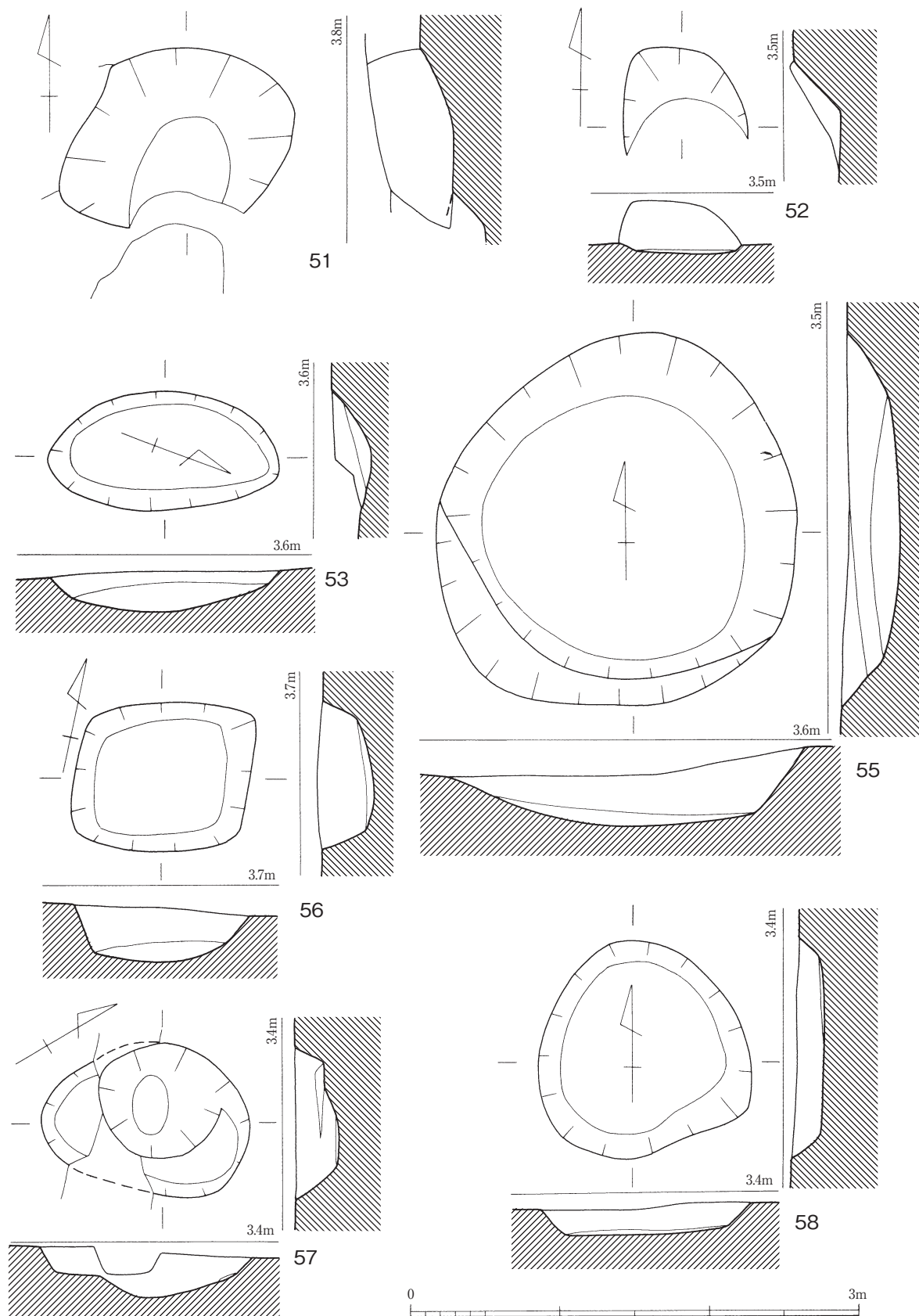
発掘区の南西部、3号竪穴住居跡の東側に位置する。南半は攪乱によって大きく削られ、また、3号竪穴住居跡に切られる。平面プランは円形を呈するものと思われ、規模は現状で径1.65m、深さ0.60mを測る。

出土遺物 (第108図、33表)

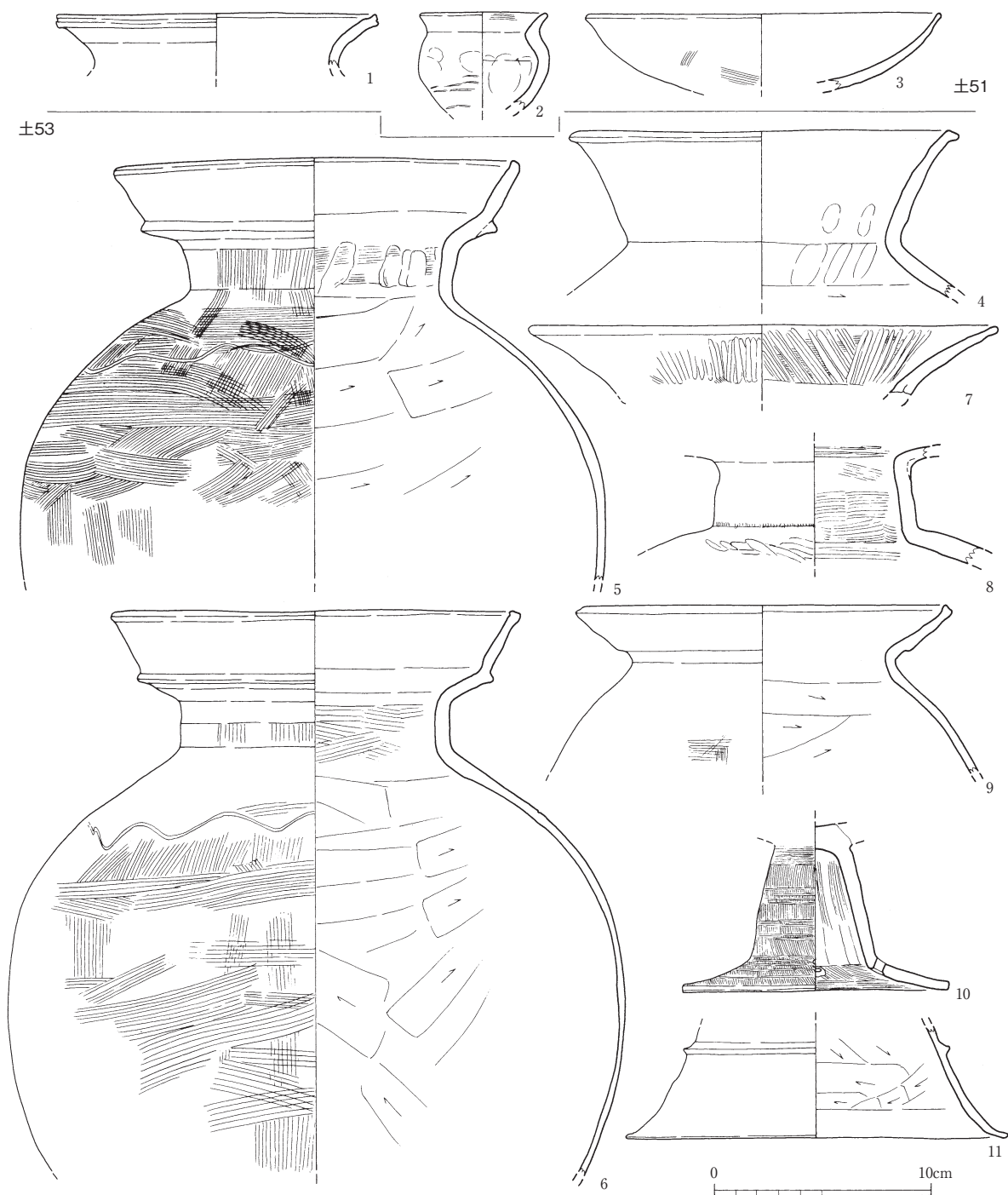
1は布留系甕の口縁部破片。2は小形の甕。外面下半の調整は板状工具オサエ。3は丸底の鉢。

52号土坑 (第107図)

発掘区の中央部西寄り、13号竪穴住居跡の南側に位置する。大半が攪乱によって損壊しているが、北半部が辛うじて遺存していた。現状で長軸長0.70m、深さ0.34mを測る。



第107图 51~53·55~58号土坑实测图 (1/40)



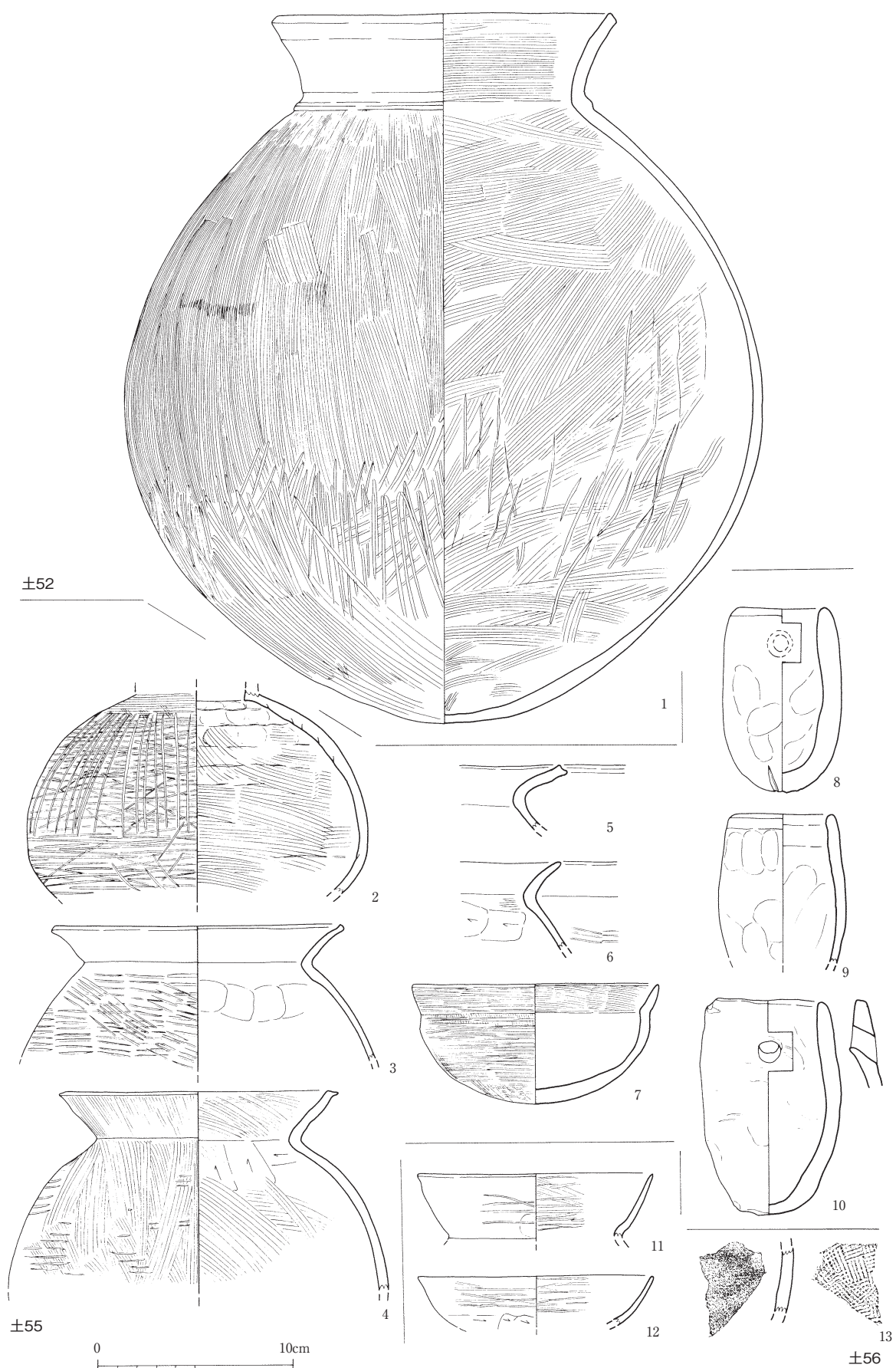
第108図 51・53号土坑出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第109図、第33表）

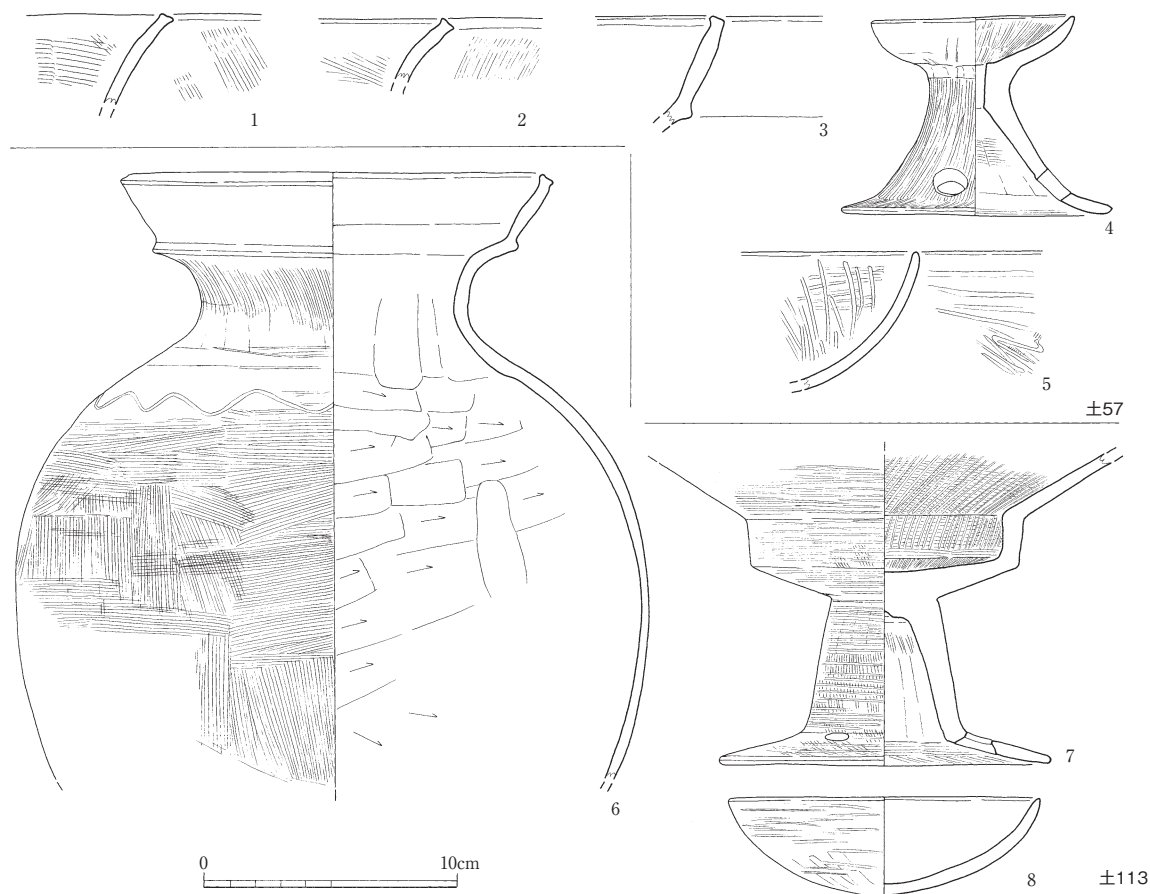
1は畿内系直口壺。口縁部は短く外反し、端部に面をなす。頸部に低い断面三角形の突帯を巡らせる。外面調整は縦方向のハケで、下半部は粗いハケの後部分的にミガキを施す。

53号土坑（第107図）

発掘区の中央部西寄りに位置する。13号竪穴住居跡の検出面で確認した。埋土は黒茶色土で13号竪穴住居跡のそれと似る。すり鉢状に窪み、床面がフラットにならないことや埋土を考え



第109图 52·55·56号土坑出土土器实测图 (1/3)



第110図 57・113号土坑出土土器実測図 (1/3)

ると、あるいは13号竪穴住居跡の最終埋没段階に土器が一括投棄された、住居と一連の土坑とも考えられる。

出土遺物 (図版26、第108図、第33表)

4は直口壺。口縁端部は外方に長くつまみ出す。5・6は山陰系二重口縁壺。ともに肩部にヘラ描き波状文を廻す。7・8は畿内系二重口縁壺。

9は布留系甕。10は高坏。11は山陰系鼓形器台。

55号土坑 (第107図)

発掘区の中央部、13号竪穴住居跡の東側で検出した。平面プランは円形を呈する。規模は2.48m×2.43m、深さ3.3mを測る。底面はフラットに近いが中央部がやや窪む。

出土遺物 (図版26、第109図、第33表)

2は畿内系二重口縁壺の胴部片。胴部のやや下位に最大径がくる。

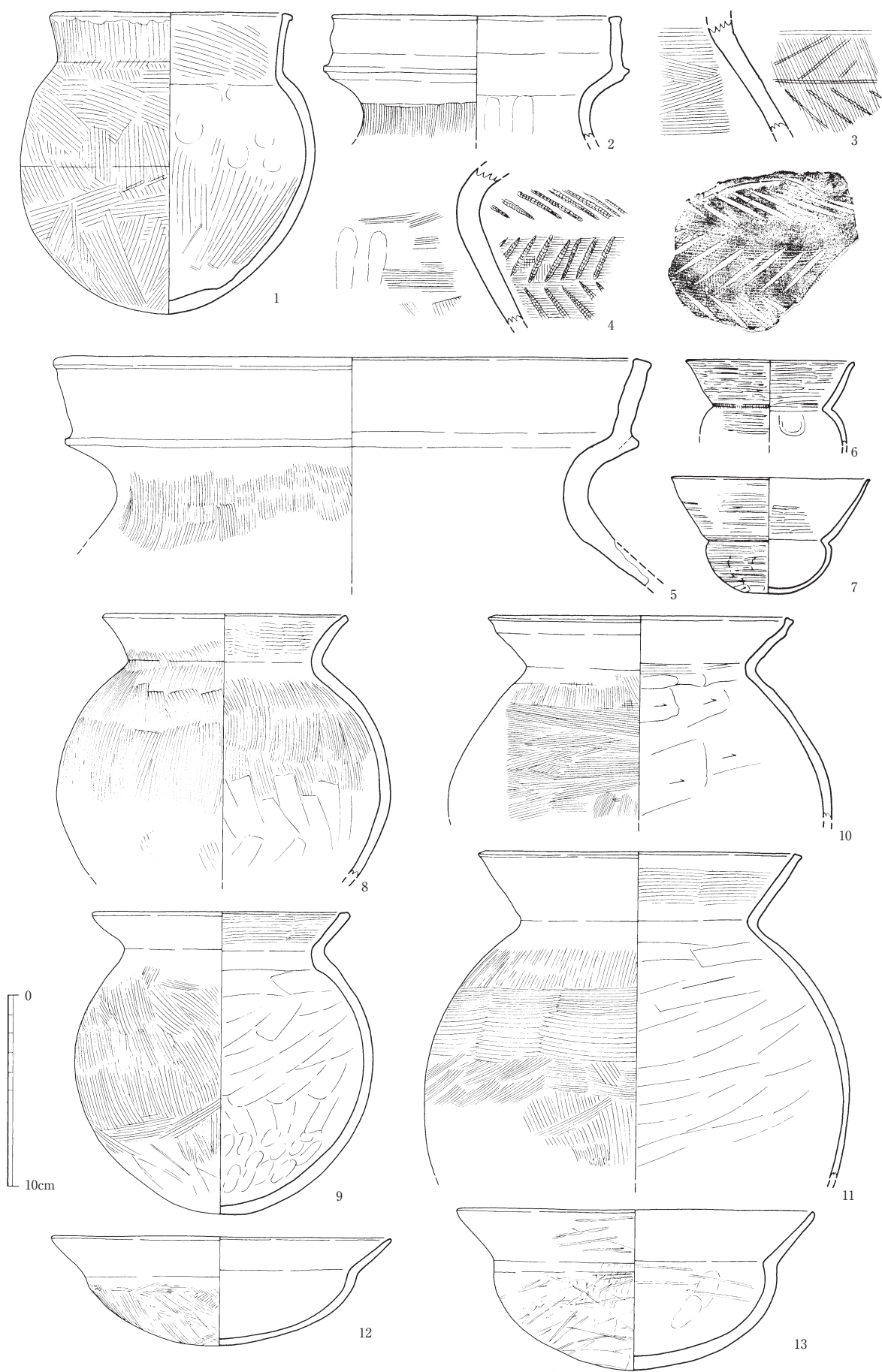
3は庄内系甕。外面に水平な平行タタキ・左上がりのタタキ痕が顕著に残る。口縁端部は丸く収め、内側に浅い段をもつ。4は布留系甕。外面には水平な平行タタキ痕が残る。口縁端部は外方に長くつまみ出す。5は小片であるが器形からみて庄内系甕か。

7は短く外反する口縁を持つ鉢。

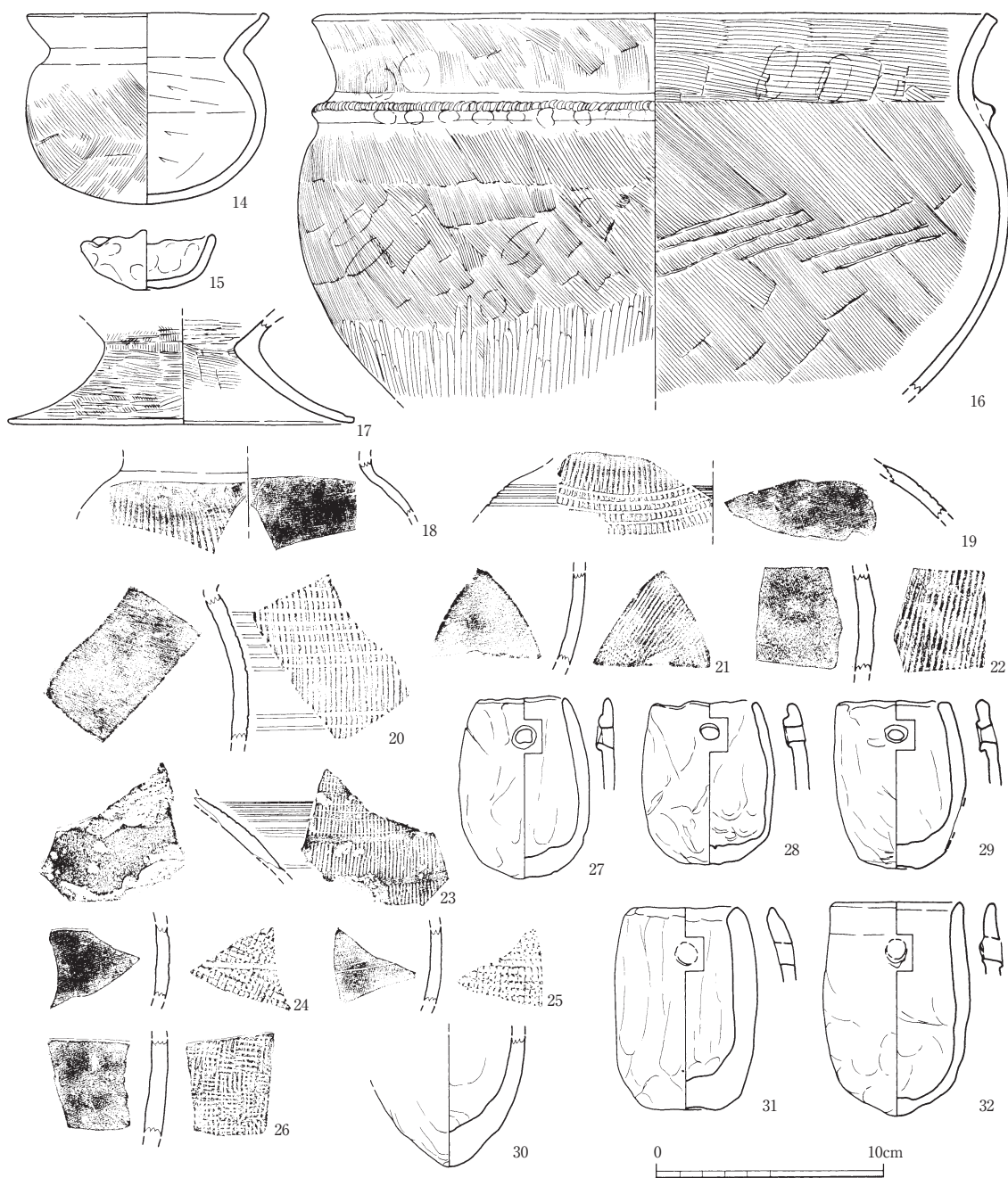
8～10はタコ壺。8の底部にはヘラ状工具端による線刻が残る。

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
108-1		土51覆土	布留系甕	口径148	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	淡黄褐色	内外ヨコナデ	1／6		801
2		土51覆土	小形甕	口径58、胴径60	粘土細、1～3mm 石英少	良好	茶褐色	内外ナデ。外胴下板オサエ。	1／4	煤付着	803
3		土51覆土	鉢	口径164	粘土やや細、1～ 3mm石英多	良好	明黄褐色	外ハケ後ナデか。内ミガキか。摩滅 著しい。	1／6		802
4		土53覆土	直口壺	口径180	粘土粗、1mm石英 多	良好	淡黄褐色	口縁端部外方につまみ出す。口縁内 外ヨコナデ、胴内ケズリ。	1／4		806
5	26	土53覆土	山陰系二 重口緑壺	口径188、胴径 266	粘土粗、1～3mm 石英多	良好	灰褐色	外縦ハケ→横ハケ、ヘラ描き波状文。 胴内ケズリ、頸内指オサエ後横ハケ。 歪み。	3／4		812
6	26	土53覆土	山陰系二 重口緑壺	口径190、胴径 284	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ→横ハケ、ヘラ描き波状文。 胴内ケズリ、頸内ケズリ。	1／3		813
7		土53覆土	畿内系二 重口緑壺	口径216	粘土細、砂粒をほ んど含まず	良好	橙褐色	外縦ミガキ、内横ハケ後ミガキ。	1／2		808
8		土53覆土	畿内系二 重口緑壺		粘土やや細、1～ 3mm石英多	良好	暗黄褐色	外ミガキ、内横ハケ。	1／2		809
9		土53覆土	布留系甕	口径174	粘土やや粗、1～ 3mm石英多	良好	外黄灰色、内黄褐 色	外横ハケ、内ケズリ。	1／6	煤付着	805
10	26	土53覆土	高坏	脚径122	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	淡橙褐色	外縦ハケ→ミガキ。孔2方。	脚完存		811
11		土53覆土	山陰系鼓 形器台	脚径176	粘土やや細、1～ 3mm石英多	良好	黄白色	外ヨコナデ、内ケズリ。	1／6		807
109-1	26	土54覆土	畿内系直 口壺	口径176、胴径 324、器高363	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好、黒斑	黄灰色	外縦ハケ、下半タタキ後粗いハケ後 ミガキ。内口縁横ハケ、胴斜ハケ。	下半部完存		804
2	26	土52覆土	畿内系二 重口緑壺	胴径174	粘土細、砂粒をほ んど含まず	良好	外褐色、内黄褐色	外ミガキ後上半暗文。内斜ハケ、頸 内指頭圧痕、粘土接合痕明瞭。	1／2		821
3		土55覆土	庄内系甕	口径130	粘土細、1～3mm 石英少	良好	明黄褐色	外タタキ、内ケズリ。	1／3		816
4		土55覆土	布留系甕	口径142	粘土細、1～3mm 石英少	良好	外茶褐色、内茶褐 色～黄褐色	外タタキ後縦ハケ。口縁内斜ハケ、 胴内ケズリ後斜ハケ。	1／2	煤付着	815
5		土55覆土	庄内系甕		粘土粗、1～3mm 石英多	良好	明黄褐色	内ケズリ。	小片		817
6		土55覆土	布留系甕		粘土やや粗、1～ 3mm石英多	やや甘い	明黄褐色	口縁端部丸く収める。外タタキ、内 ヘラケズリ。	小片		819
7		土55覆土	外反口縁 鉢	口径126、胴径 116、器高61	粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	橙褐色	外縦ハケ後ミガキ。口縁内横ハケ、 胴内ナデ。	1／2		814
8		土55覆土	タコ壺	口径32、器高94	粘土粗、1～3mm 石英少	良好	橙褐色	器壁厚い。内外ナデ。底部にヘラ状 工具による線刻。	1／2		822
9		土55覆土	タコ壺	口径54	粘土細、1～3mm 石英少	良好	暗黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	1／2		823
10	26	土55覆土	タコ壺	口径58、器高 111	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	ほぼ完形		824
11		土56覆土	小形丸底 壺	口径120	粘土細、1～3mm 石英少	良好	黄褐色	外ミガキ、内斜ハケ後ミガキ。	1／3		826
12		土56覆土	鉢	口径120	粘土細、砂粒をほ んど含まず	良好	黄褐色	外ミガキ、下半ケズリ。内ミガキ。	1／5		827
13		土56覆土	半島系土 器			瓦質、堅緻	茶灰色	外網代状の平行タタキ、内ナデ。	小片		1156
110-1		土57覆土	直口壺		粘土やや粗、1～ 3mm石英少	良好	黄褐色	外斜めハケ、内横ハケ。	小片		830
2		土57覆土	直口壺		粘土やや細、1～ 4mm石英少	良好	黄褐色	端部に面をなしつつまみ上げる。外縦 ハケ、内斜ハケ。	小片		829
3		土57覆土	山陰系二 重口緑壺		粘土粗、1～2mm 石英少	良好	黄白色	口縁端部を内側にややつまみ出す。 内外ヨコナデ。	小片		828
4	27	土57覆土	東海系小 形器台	口径78、脚径 108、器高78	粘土やや粗、1～ 2mm石英少	良好、黒斑	外面赤褐色、内面 黄褐色	中央部に貫通孔あり。脚の穿孔は3 方。杯外ナデ、内ミガキ。脚外板ナ デ後ミガキ、内横ハケ、下半板ナデ。	脚1／4欠 他は完存	赤彩	833
5		土57覆土	鉢		粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	黄褐色～茶灰色	内外ミガキ。	小片		831
6	27	土113覆 土	山陰系二 重口緑壺	口径241、胴径 250	粘土やや粗、1～ 5mm石英多	良好、黒斑	茶褐色	外縦ハケ→横ハケ。肩にヘラ描き波 状文。内ケズリ。頸内ナデ上げ。	口縁完存		922
7	27	土113覆 土	吉備系高 坏	脚径130	粘土やや粗、1～ 2mm石英少	良好	淡黄褐色	外縦ハケ後ミガキ。杯内横ハケ→暗 文、脚内ナデ・ハケ。	1／3		923
8	27	土113覆 土	鉢	口径122	粘土やや細、1～ 3mm石英少	良好	淡黄褐色	外ミガキ、下半ケズリ後ミガキ。内 ナデ。	口縁一部欠 他は完存		924

第33表 51～57・113号土坑出土土器観察表



第111図 その他の遺構出土土器実測図1 (1/3)



第112図 その他の遺構出土土器実測図2 (1/3)

56号土坑 (第107図)

発掘区の中央部やや南寄りに位置する。23号竪穴住居跡の床面で検出した。平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は長軸長1.17m、短軸長10.0m、深さ0.39mを測る。

出土遺物 (図版26、第109図、第33表)

11は小形丸底壺の破片。12は鉢。13は半島系土器の小片で、外面に網代状の平行タタキが残る。内面調整はナデ。

57号土坑 (第107図)

発掘区の南部中央に位置する。15号竪穴住居跡の床面で検出した。中央を攪乱溝によって切

られる。平面プランは卵形を呈する。規模は長軸長1.40m、短軸長1.04m、深さ0.34mを測る。東側から南側にかけてテラスを有する。

出土遺物（図版27、第110図、第33表）

1・2は直口壺の小片。調整は内外ともハケ。3は山陰系二重口縁壺。4は東海系の小形器台。受け部は浅い丸底で、調整は外面が板ナデ、内面が縦方向のミガキ。脚部は外面が板ナデ後縦方向のミガキ、内面は中位がナデ、その上下は横方向のハケ。受け部中央から下方に向けて径1.15cmの円孔が貫通する。裾部には同径の円孔が3方向にあげられる。5は丸底の鉢。

58号土坑（第107図）

発掘の南西隅部の別区に位置する。27号竪穴住居跡の床面で検出した。平面プランは略円形を呈する。規模は径1.48m、深さ0.20mを測る。底面はフラットである。

59号土坑

発掘の南西隅部の別区に位置する。27号竪穴住居跡の床面で検出した。北側を攪乱によって損壊するが、平面プランは楕円形を呈するものと考えられる。規模は長軸長1.73m、深さ0.07mを測る。底面はフラットである。

113号土坑

発掘区の南東部に位置する。31号竪穴住居跡を切る。径1.15m、深さ50cmを測る。埋土は黒灰色土。

出土遺物（図版27、第110図、第33図）

6は山陰系二重口縁壺。外面調整は縦方向のハケ後上半部横ハケ。肩部にはヘラ描き波状文を巡らせる。頸部内面はナデ上げで、指頭痕が明瞭に残る。7は吉備系の高坏。受け部が明瞭な段をなして二段になる。調整は外面が縦方向のハケ後横位のミガキ。内面は受部が横方向のハケ後密な暗文。坏部は放射状のミガキを施す。裾部の孔は3方向。8は丸底の鉢。底部はケズリ後ミガキ。

（3） その他の遺構、層位等出土土器

その他の遺構出土土器（図版27・29、第111・112図、第34表）

1は直口壺。口縁は短く直立し、端部は肥厚する。2～5は山陰系二重口縁壺。2は口縁部が直立するもの。3・4は壺の肩部の小片で、工具黄圧による羽状文を入れる。6・7は小形丸底壺。

8～11は布留系甕。1は口縁端部に面をなす。8・11は頸が締まる形態。9は全体的に器壁が分厚い。底部内面に指頭圧痕が顕著である。

12・13は外反口縁鉢。14は小形の甕。全体的に器壁が厚く、特に頸部は分厚い。15は手捏ねの鉢。全体に指頭圧痕が残る。16は大形の鉢。外面調整は斜め方向のハケ後、下半部に縦方向のミガキを施す。

18～26は半島系土器。18～20・23は壺の肩部小片。18～23は平行タタキ、24・25は格子タタキ、26は網代状の平行タタキ。

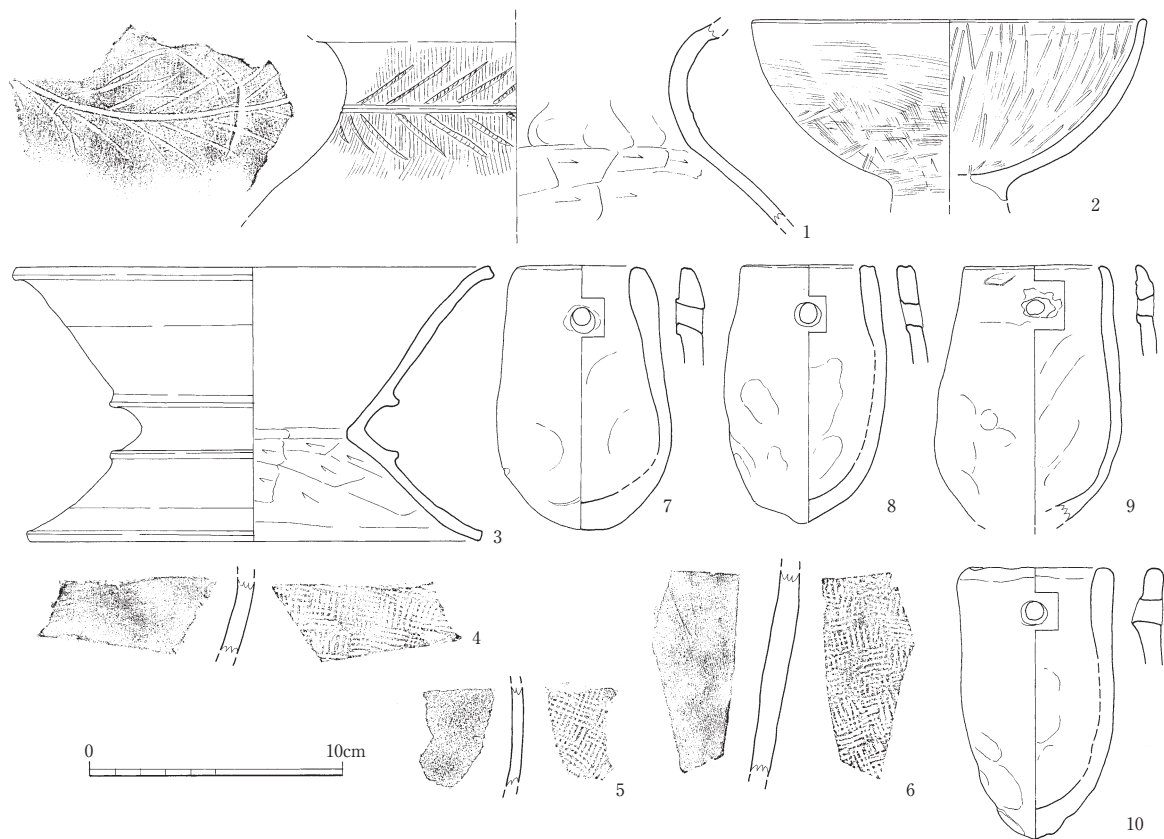
27～32はタコ壺。28は器壁が薄い。31は平底。器壁が厚い。

黄褐色土層、灰色砂層出土土器（図版27、第113図、第35表）

1は山陰系二重口縁壺の頸部から肩部にかけての破片。ハケ状工具押圧による有軸羽状文を

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
111-1	27	A5区検出時	直口壺	口径128、胴径152、器高156	粘土やや細、1～3mm石英少	良好、黒斑	黄灰色	口縁外縦ハケ、内斜ハケ。胴外斜ハケ、内縦ハケ、指頭圧痕。底内ナデ、厚い。	下半部完存		982
2		D5区検出時	山陰系二重口縁壺	口径152	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	口縁内外横ナデ。頸部外縦ハケ、内ナデ上げ。	1／2		1072
3		D5区検出時	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	暗黄褐色	外斜ハケ→工具端押圧による有軸羽状文。内斜めハケ。	小片		1084
4		D5区検出時	山陰系二重口縁壺		粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	暗黄褐色	外横ハケ→ハケ状工具端押圧による無軸羽状文。内ナデ上げ後ハケ。	小片		1085
5		土34覆土	山陰系二重口縁壺	口径312	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄橙色	器壁厚い。外縦ハケ、内ケズリ。	1／4		752
6	27	C4区検出時	小形丸底壺	口径888	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好	外暗茶褐色、内茶褐色	外縦ハケ後ミガキ。口縁内ミガキ、胴内ナデ。	1／4		1061
7	27	溝10覆土	小形丸底壺	口径104、胴径66、器高60	粘土細、砂粒をほとんど含まず	良好、黒斑	暗黄褐色	外ミガキ、胴下半ケズリ後ミガキ。口縁内ミガキ、胴内ナデ。	口縁1/8残、他は完存		951
8	27	土103覆土	布留系甕	口径128、胴径174	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	黄褐色	外縦ハケ。内口縁横ハケ、胴上縦ハケ、胴下ケズリ。	1／2		905
9	27	土103覆土	布留系甕	口径154、胴径156、器高157	粘土やや粗、1～5mm石英少	良好	淡褐色	器壁分厚い。外縦ハケ。内口縁横ハケ、胴上縦ハケ、胴下ケズリ。	ほぼ完形	煤付着	902
10		A6区攪乱	布留系甕	口径150、胴径	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄茶色	外縦ハケ→横ハケ。内ケズリ、頸部横ハケ。	1／4		1003
11	27	土103	布留系甕	口径168、胴径220	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外縦ハケ→横ハケ。内口縁横ハケ、胴ケズリ。	1／3		906
12	27	C4区検出時	外反口縁鉢	口径177、器高56	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄白色	外斜めハケ。その他摩滅著しく不明。	1／3		1060
13		土91覆土	外反口縁鉢	口径186、胴径器高82	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	暗茶灰色	外縦ハケ後ミガキ。内ナデか。	1／4		880
112-14	27	検出時	小形甕	口径106、胴径104、器高83	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	茶灰色	外斜ハケ、内ケズリ、底内ナデ。	1／2	煤付着	1103
15	27	A5区検出時	手捏ね鉢	口径58、器高26	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	茶褐色	指頭圧痕顕著。	完形	煤付着	987
16		土102	鉢	口径302、胴径312	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄茶色	口縁短く外反、刻目突帯。外斜ハケ、下半ミガキ。口縁内横ハケ、胴斜めハケ。	1／2		896
17	27	A5区検出時	山陰系鼓形器台	脚径152	粘土細、1～3mm石英少	良好	暗黄褐色	外縦ハケ後ミガキ、内横ハケ後→ミガキ。	1／4	煤付着	984
18	29	D5区検出時	半島系土器壺		粘土細、砂粒を含まず	陶質、堅緻、須恵器のよう	灰色	外平行タタキ、内ナデ。肩部に耳が着く。	小片		1164
19	29	溝10	半島系土器壺		粘土細、砂粒を含まず	陶質	灰色	外平行タタキ、沈線。内ヨコナデ。	小片		1167
20	29	土68	半島系土器壺		粘土細、砂粒を含まず	瓦質、須恵器生焼けのよう	淡灰色	外平行タタキ、沈線。内ヨコナデ	小片		1157
21	29	土103	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	瓦質、須恵器生焼けのよう	灰色	外平行タタキ、内ナデか。摩滅著しい。	小片		1158
22	29	C4区検出時	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	瓦質、須恵器生焼けのよう	淡黄褐色、断面淡橙褐色	外平行タタキ、内ナデ。	小片		1160
23	29	D6区検出時	半島系土器壺		粘土細、砂粒を含まず	軟質	橙褐色	外平行タタキ、内ナデ。	小片		1166
24	29	D5区検出時	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	陶質	茶灰色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		1165
25	29	土46	半島系土器		粘土細、砂粒を含まず	陶質	灰色	外格子タタキ、内ヨコナデ。	小片		1155
26	29	C4区検出時	半島系土器		粘土細、1ミリ以下砂粒少	陶質	暗灰色	外網代状の平行タタキ、内ナデ・ヨコナデ。	小片		1161
27	27	土34覆土	タコ壺	口径52、器高79	粘土やや細、1～3mm石英少	良好、黒斑	黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	ほぼ完存		690
28	27	土34覆土	タコ壺	口径49、器高71	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	器壁薄い。外ナデ、内ナデ上げ。	ほぼ完存		687
29	27	土34覆土	タコ壺	口径50、器高73	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、黒斑	黄褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	ほぼ完存		688
30		A7区検出時	タコ壺		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外ナデ、内ナデ上げ。	底部のみ		1031
31		土2	タコ壺	口径46、器高88	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、黒斑	黄褐色	平底。外ナデ、内ナデ上げ。	1／2		683
32		A7区検出時	タコ壺	口径60、器高93	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外ナデ、内ナデ上げ。	1／2		1030

第34表 その他の遺構出土土器出土土器観察表



第113図 黄褐色土層・灰色砂層出土土器実測図（1/3）

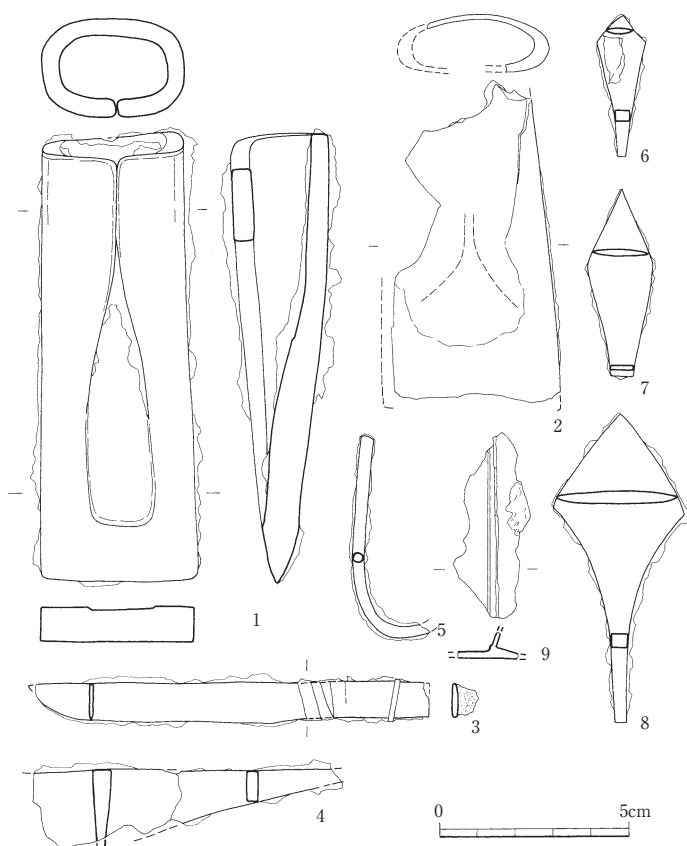
挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録 番号
113-1		A7区黄褐色土層	山陰系二重口縁壺		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	外縦ハケ→ハケ状工具黄圧による有軸羽状文。内ケズリ。	1／5		1026
2		A7区黄褐色土層	脚付き鉢		粘土細、1～3mm石英少	良好	暗橙色	外斜ハケ、下半ケズリ後ハケ後ミガキ。内ミガキ。	1／3		1033
3		A6区灰色砂層	山陰系鼓形器台		粘土やや細、1～3mm石英少	良好	明橙褐色	外ヨコナデ。内下半ケズリ、ナデか。	1／3		1015
4		C6区灰色砂層	半島系土器		粘土細、1～3mm石英少	陶質、やや甘	灰色	外網代状の平行タタキ、内ナデ。	小片		1162
5		A6区灰色砂層	半島系土器		粘土細、1～3mm石英少	陶質	灰色	外網代状の平行タタキ、内ナデ。	小片		1159
6		C6区灰色砂層	半島系土器		粘土やや細、1～3mm石英少	陶質	灰色	外網代状の平行タタキ、内ナデ。歪み。	小片		1163
7		B6区灰色砂層	タコ壺	口径50、器高104	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	茶褐色	内外ナデ。	完形		1041
8		A7区黄褐色土層	タコ壺	口径52、器高102	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ナデ。	完形		1029
9		A7区黄褐色土層	タコ壺	口径58	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	茶褐色	外ナデ、内ナデ上げ。	3／4		1027
10		A7区黄褐色土層	タコ壺	口径62、器高107	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	黄灰色	内外ナデ。	1／2	煤付着	1028

第35表 黄褐色土層・灰色砂層出土土器観察表

施す。2は脚付き鉢。3は山陰系鼓形器台。4～6は半島系土器。外面に網代状の平行タタキの痕跡を残す。7～10はタコ壺。

(4) 鉄器 (図版30、第114図)

1・2は袋状鉄斧。1の形状は基部幅よりも刃部幅がやや広くなる。基部は素材の両端を袋状に折り返して密着させ、その断面形は長方形気味の楕円形を呈する。長さ12.0cm、刃部幅4.1cm、基部幅3.7cm、基部の厚さ0.9cmを測る。重量302g。完存品。11号堅穴住居跡の床面よりやや浮いた状態で出土した。2は刃部・基部・側縁部を欠損している。1に比べて薄く仕上げられる。残存長8.4cm、残存幅4.3cm、厚さ0.2~0.4cm。重量は65g。27号堅穴住居跡出土。3・4は刀子。3は基部と切先をわずかに欠失する。関は明瞭な段差をもたず、緩いカーブを描いて刃に至る。茎の関寄りの部分には幅0.35cmほどの皮のような有機物が巻き付けてある。その部分には



第114図 鉄器実測図 (1/2)

木質も残っているが、柄を装着する部分には木質は見られない。残存長10.4cm、残存幅1.2cm、厚さ0.2cm。重量は11g。13号堅穴住居跡出土。4は刀子の基部から身にかけての部分と思われる。関は茎からなだらかに延びて刃部に至る。残存長8.2cm、残存幅2.0cm、厚さ0.4cmを測る。48号堅穴住居跡カマド袖構築土の下部からやや距離をおいて出土した2個体が接合した。5は釣り針で針先は欠失する。身は断面形状が円形で、径0.3cmを測る。鉤元はやや太くなる。残存長5.3cmを測る。重量は3g。1号堅穴住居跡から出土した。6~8は鉄鏃。6は有茎の圭頭鏃。長さ3.2cm、最大幅1.3cm、厚さ0.3cmと実用品としては小形である。41号堅穴住居跡出土。7は柳葉鏃。長さ5.0cm、幅1.7cm、厚さ0.2cmを測る。重量は6g。5号堅穴住居跡出土。8も圭頭鏃で、長さ8.1cm、最大幅3.5cm、厚さ0.35cmを測る。5号堅穴住居跡から出土した。9は用途不明の鉄製品。薄い板を折り返し、片面側に直立するようにさらに折り曲げているようである。本来の面はすべて欠失している。厚さ0.2cmを測る。11号堅穴住居跡から出土した。

(5) 石器・石製品 (図版30、第115図)

1~5は砥石。1は平面形が菱形を呈する。表裏と側面の計4面に使用による横断面U字形、縦断面弧状の溝状の凹みがある。凹みの上端は幅0.5cm~1.5cmを測る。形状から考えて勾玉用の仕上げに使用された砥石と考えられる。長さ5.5cm、幅3.9cm、厚さ2.4cmを測る。重量は26g。砂岩製。1号堅穴住居跡埋土上層出土。2は手持ちの砥石。下半部は断面四角形となり、基部のようにも見える。全面を使用しているが下半部の右側の面のみはそれほど摩滅して

いない。長さ5.2cm、幅1.0cm、最大厚0.7cmを測る。重量は4 g。粘板岩製。45号竪穴住居跡出土。3は裾が広がった直方体を呈する。使用面は上端部・下端部を除く4面である。部分的に幅5 mmほどの溝状の使用痕が残る。長さ7.1cm、幅3.8cm、厚さ3.6cmを測る。重量124 g。砂岩製。5号竪穴住居跡出土。4は上端部と下端部を欠損する。使用面は4面。表面の中央部には幅9 mmほどの溝状の凹みが残る。現存長13.3cm、現存幅7.7cm、厚さ6.2cmを測る。重量は829 g。砂岩製。41号竪穴住居跡出土。5は欠損品。長さ11.3cm、幅3.4cm、厚さ2.8cmを測る。重量は77 g。25号竪穴住居跡出土。粘板岩製。6は勾玉の未製品。側縁部に面取りの跡が残る。長さ3.4cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmを測る。重量は7 g。色調は緑味を帯びる。蛇紋岩製。15号竪穴住居跡出土。7・8は石錘。7は十字に紐かけ用の溝が切られている。先端部のみが残る。長さ3.1cm、



第115図 石器・土製品実測図 (1/2)

幅2.6cm、厚さ1.8cmを測る。重量は22 g。1号竪穴住居跡上層出土。8は未製品と考えられる。砲弾形を呈し、縦方向に面取りを行っている。長さ4.5cm、径2.1cmを測る。重量は27 g。15号竪穴住居跡出土。7・8ともに滑石製。9・10は板状の滑石に孔を穿ったもの。9は円形に復元できようか。孔は貫通しているものの、孔下端部には穿孔具先端の丸味が残っている。長さ3.7cm、幅1.7cm、厚さ1.4cmを測る。重量は10 g。13号竪穴住居跡出土。10は径0.7cmの孔が穿たれている。長さ5.3cm、幅5.8cm、厚さ1.3cmを測る。重量は52 g。発掘区南西部の遺構検出面から出土。11・12は軽石に加工を施したもの。11は側縁部の二面に自然石面を残し、その他の部位は擦って平滑になっている。そのうち一側縁には刃物状の鋭利な工具痕が筋状に刻まれている。長さ6.1cm、幅5.6cm、厚さ3.5cmを測る。重量は24 g。15号竪穴住居跡出土。12は全面を擦って平滑にしている。長さ3.6cm、幅3.4cm、厚さ3.2cmを測る。重量は6 g。22号竪穴住居跡出土。

(6) 土製品 (図版30、第115図)

13は土錘。上端部・下端部は欠損する。指頭圧痕が残る。中央部に径0.9cmの孔を設ける。長さ5.0cm、径2.7cmを測る。重量は30 g。色調は暗黄褐色で径1 mmほどの砂粒を含む。28号土坑出土。

第3節 近世以降の遺構と出土遺物

(1) 井戸

井戸は4基検出した。このうち1号井戸と2号井戸が瓦積みの井戸枳をもつ。他の2基はコンクリート製の井戸枳である。

1号井戸

発掘区の南西部に位置する。1号住居跡・9号住居跡を切る。井戸枳は12枚の燻された平瓦を円形に並べ、縦位に積み上げた構造で径85cmを測る。枳の外側はコンクリートで補強されている。掘方の径は1.52mを測る。

(2) 土坑

17号土坑 (第116図)

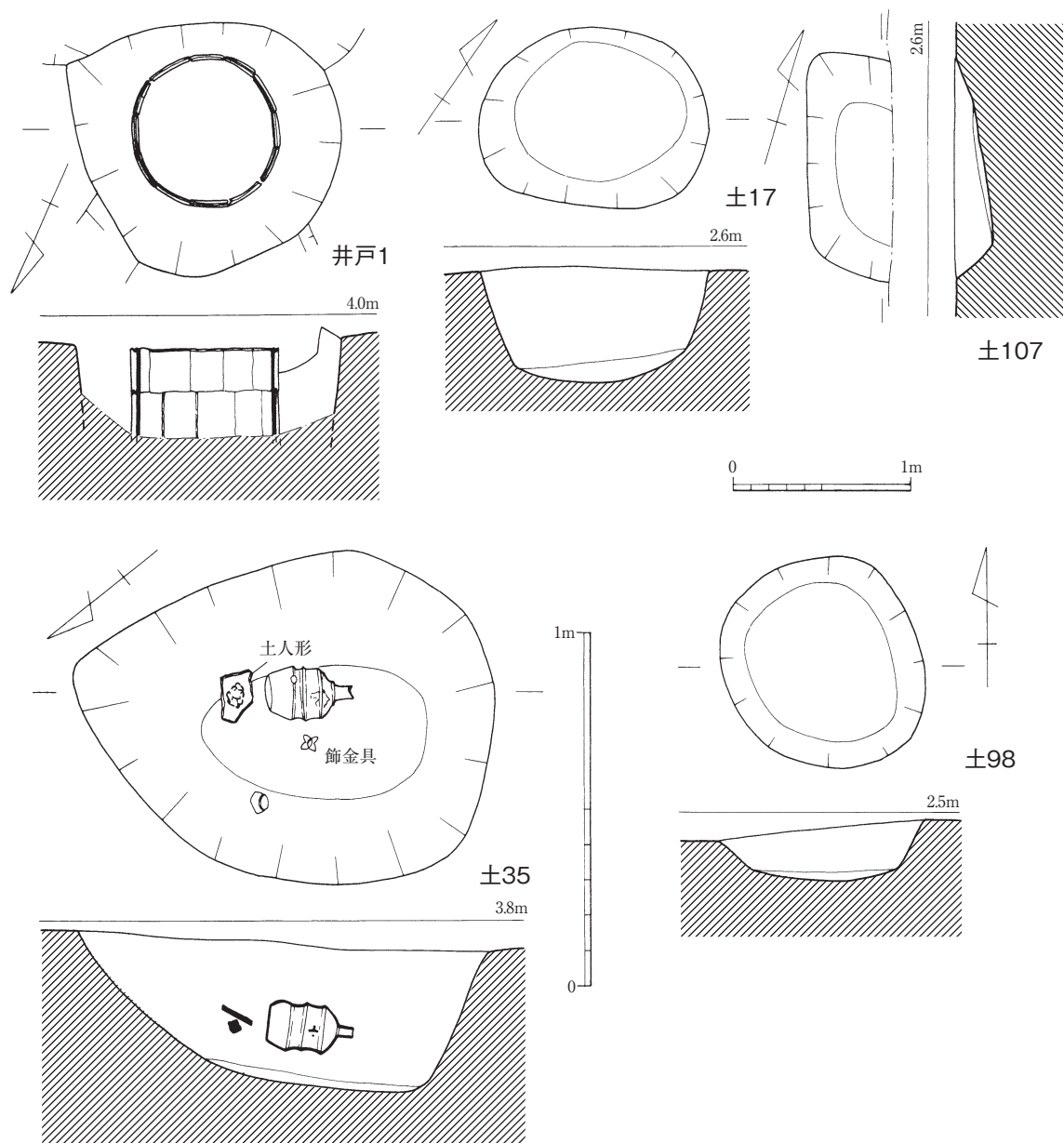
発掘区の中央部北壁際に位置する。平面プランは楕円形を呈する。規模は長軸長1.30m、短軸長1.00m、深さ0.64mを測る。埋土は淡茶褐色砂。

型作りの土製人形が3個体出土した。

35号土坑 (図版19、第116図)

発掘区の中央部、やや北寄りに位置する。平面プランは卵形を呈する。規模は長軸長1.20m、短軸長0.94m、深さ0.42mを測る。底面は北東から南西に向けて緩く傾斜している。底面より10cmほど浮いた状態で長軸方向に沿って横たわった状態で壺が出土した。口縁部は欠失していた。壺の底側(北東側)には10cm四方の平瓦が据えられ、その下部には、頭部を南に向けた型作りの土製人形が埋置されていた。また、これと同レベルの壺の北西側の土坑の中央にあたる部分から四弁の銅製飾り金具が出土した。埋土は上層が炭混じりの黒色土で、下層は黒茶色砂である。遺構の切り込み面は古墳時代の遺構面の上面を覆う黄茶色土。

98号土坑 (第116図)



第116図 近世以降の井戸・土坑実測図 (1/40・1/20)

発掘区の北東部、東壁際に位置する。平面プランは円形を呈する。規模は径1.19m、深さ0.35mを測る。埋土は茶褐色で17号土坑と同一であり、やはり型作りの土製人形が出土している。

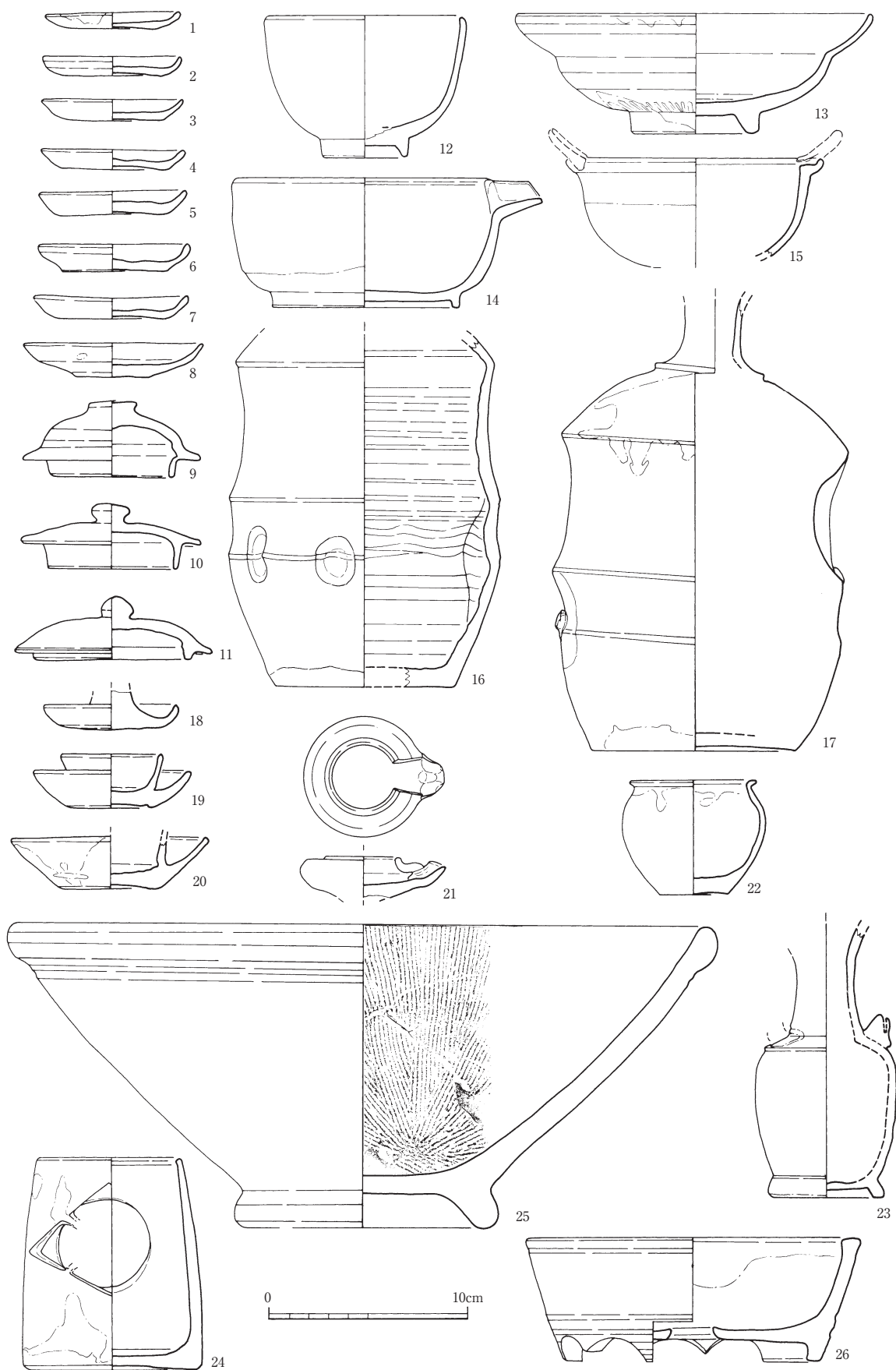
107号土坑 (第116図)

発掘区の北東部、東壁際に位置し、東側は発掘区外となる。平面プランは長方形になるものと思われる。規模は南北長1.26m、深さ0.22mを測る。

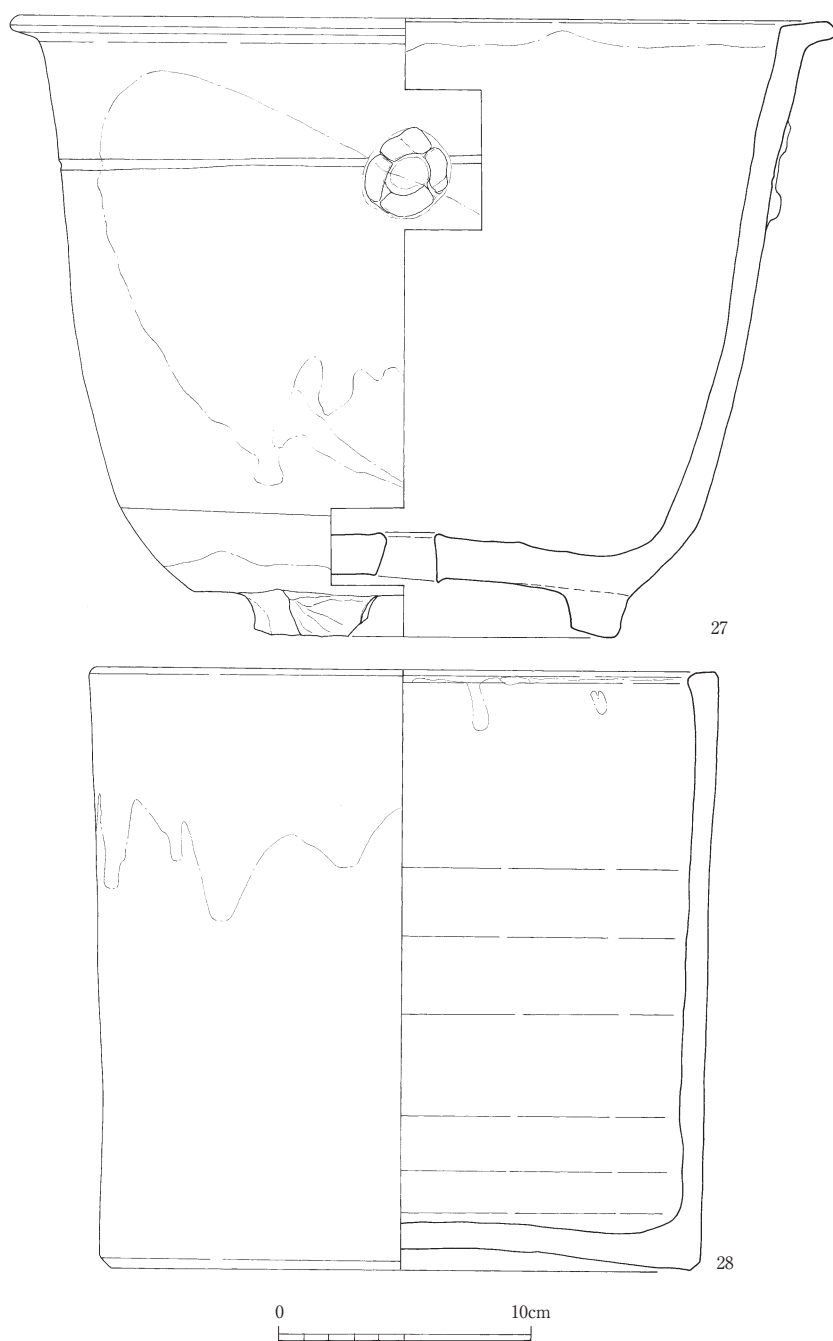
修猷館高校の前身時代の硯やインク瓶がまとめて出土した。

(3) 土師器・陶器・磁器 (図版31・32、第117～120図)

1～7は土師器小皿。2・3は底部内面がナデ。すべて糸切り。

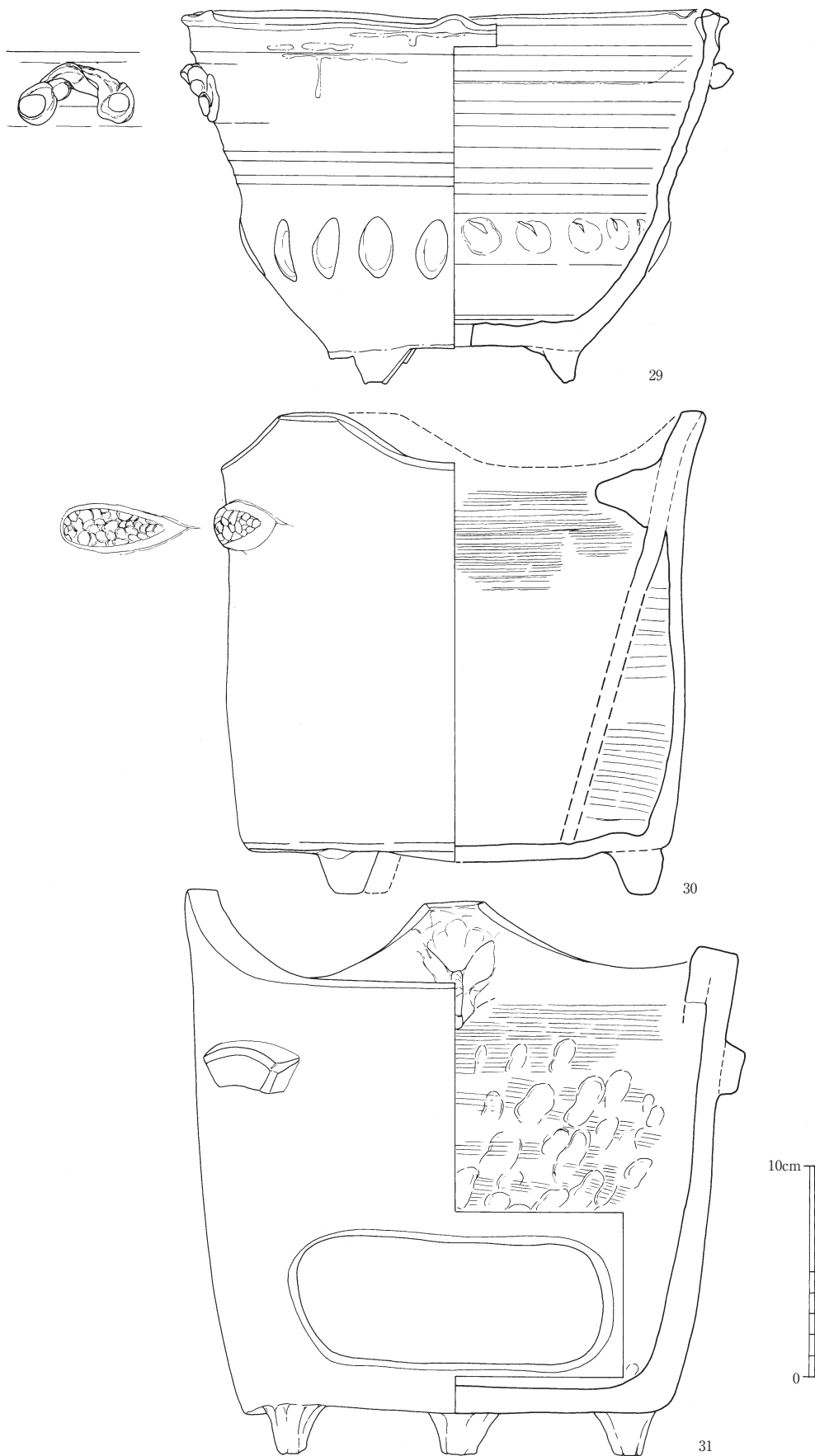


第117図 近世以降の土師器・陶器・陶磁器実測図1 (1/3)

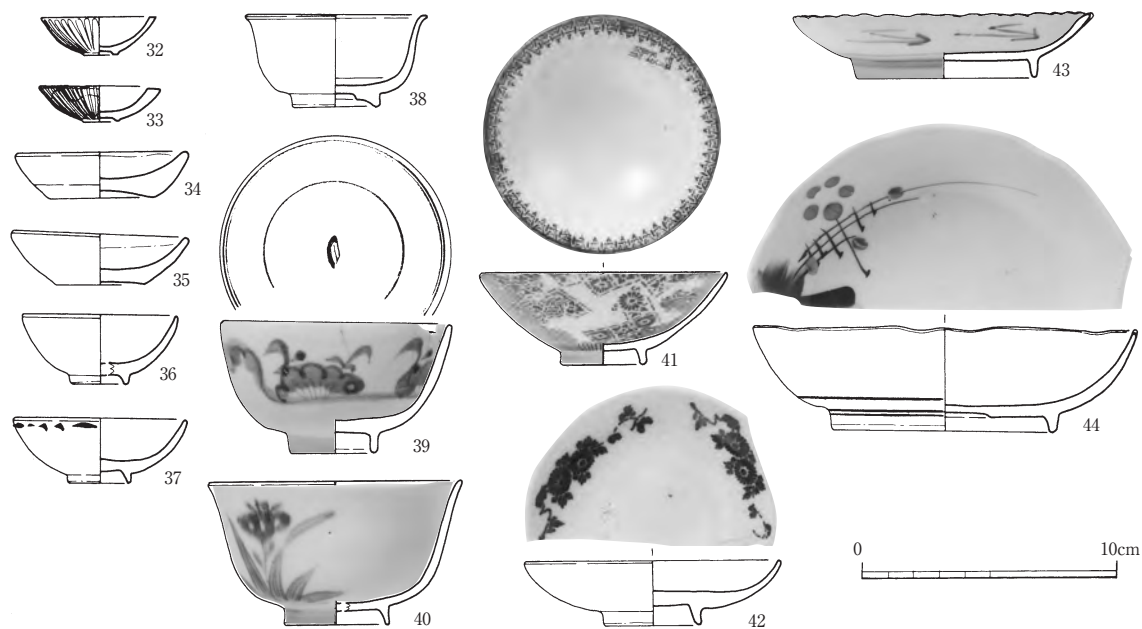


第118図 近世以降の土師器・陶器・陶磁器実測図2 (1/3)

8～31は陶器。8は黒釉の皿。底部糸切り。9～11は蓋。9は摘み部分が低平になる。10・11は宝珠摘み。内面はいずれも露胎となる。12は椀。外面に波状の文様を施す。13は体部に段を有する皿。見込みは輪状に掻き取る。14は片口。体部下半から底部にかけて露胎となる。15は受けをもつ小形の鍋。二方に把手がつくもの。16・17は高取焼の酒瓶。18は土瓶蓋で摘みを欠失する。19～20は灯明受皿。21は片口の水滴。22は小壺。底部は露胎。糸切り。23は瓶。高台畳付は露胎となる。24は香炉。対面する二方に円形と四菱の透かしを設ける。25は摺鉢。口縁端部が玉縁状になる。内面の全面に筋目が入る。底部には露跡が残る。26は植木鉢。底部に穿孔を行う。27～29は鉢。29は粘土紐を捩って成形した把手を2方につける。30・31は火鉢。



第119図 近世以降の土師器・陶器・陶磁器実測図3 (1/3)



第120図 近世以降の土師器・陶器・陶磁器実測図4 (1/3)

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	色調	器形や釉、技法の特徴	備考	登録 番号
117-1	31	土22覆土	土師器小皿	口径68、器高8	黄灰色	糸切り。	油煙付着	729
2	31	土22覆土	土師器小皿	口径70、器高10	黄灰色	糸切り。内底ナデ。		728
3	31	土22覆土	土師器小皿	口径71、器高11	黄灰色	糸切り。内底ナデ。		726
4	31	黄褐色土層	土師器小皿	口径73、器高10	黄灰色	糸切り。		877
5	31	黄褐色土層	土師器小皿	口径76、器高12	黄灰色	糸切り。		1032
6	31	土37覆土	土師器小皿	口径76、器高14	黄灰色	糸切り。		762
7	31	土108覆土	土師器小皿	口径78、器高12	黄灰色	糸切り。		912
8	31	C4区検出時	陶器皿	口径90、器高18	茶褐色	鉄釉。糸切り。		1062
9	31	土60覆土	陶器蓋	径60、器高39	明黄茶色	緑色釉。摘み部分低平。		842
10	31	土40覆土	陶器蓋	径65、器高33	茶褐色	濃緑色釉。		774
11	31	土16覆土	陶器蓋	径100、器高32	茶褐色	黒茶色釉。		717
12	31	土18覆土	陶器碗	径101、器高71	赤茶色	黄茶色釉。黄白色が交互の波状。		718
13	31	土82覆土	陶器皿	径180、器高60	褐色	黄灰色釉。見込み輪状掻き取り。		873
14	31	土36覆土	陶器片口	径132、器高65	赤褐色・灰色	外緑色釉。内明黄灰色。		759
15	31	土21覆土	陶器鍋	径129	灰色	褐色釉。環状持ち手二対。		721
16	31	土37覆土	陶器瓶	径136	赤褐色	緑灰色釉。発色悪い。下半に2対2ヶ所の窪み。		761
17	31	土35覆土	陶器瓶	径136	赤褐色	底部に目跡。竹も模した円形浮文貼付。		799

第36表 黄褐色土層・灰色砂層近世以降の遺構出土土器類観察表1

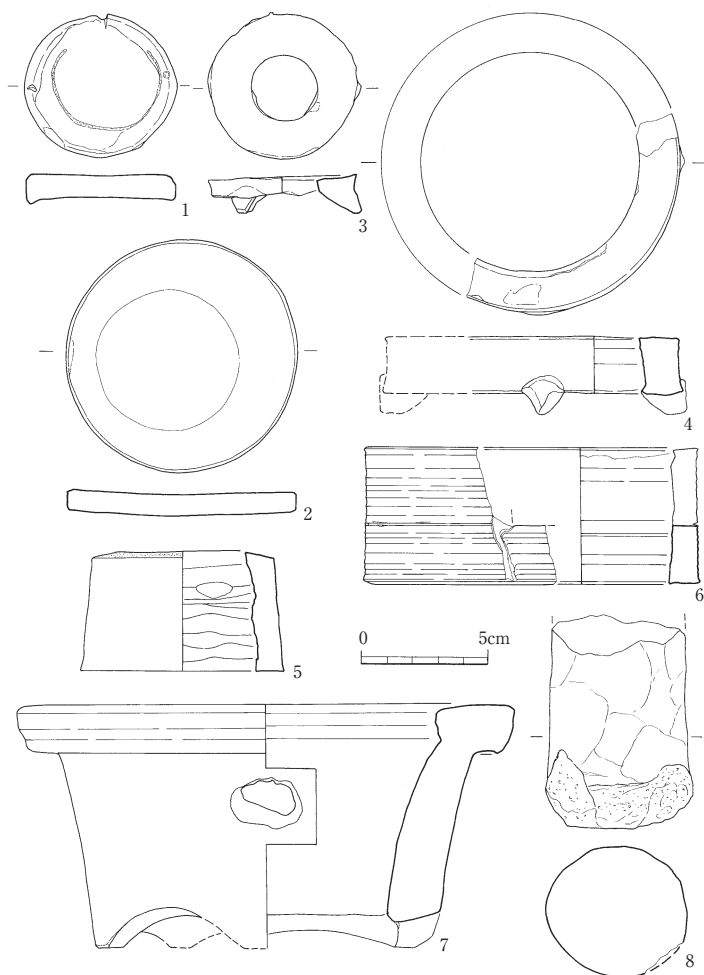
挿図 番号	図版 番号	出土 遺構等	器種	法量 (mm)	色調	器形や釉、技法の特徴	備考	登録 番号
18	31	土19覆土	陶器蓋	径66	暗茶褐色	土瓶蓋。緑みを帯びた黄釉。糸切り。		719
19	31	D6区検出時	陶器燭台灯明 皿	径80、器高27	黄褐色	受皿。灰色味を帯びた黄緑色釉。糸切り。		1094
20	31	A5区黄褐色土層	陶器燭台灯明 皿	径100	淡茶褐色	受皿。暗茶色～黒茶色。糸切り。		993
21	31	土30覆土	水滴	径63、器高20	黄褐色	緑色釉。片口。		740
22	31	土2覆土	陶器小壺	口径60、器高36	暗赤茶色	黄茶色～黒茶色。糸切り。		681
23	32	土6覆土	陶器瓶	底径58	黄橙色	灰色味を帯びた黄緑色釉。		706
24	32	土22覆土	陶器香炉	口径73、器高106	明黄褐色	茶～黒色釉。菱形と円形の対面する透かし。		723
25	32	土14覆土	陶器鉢	口径358、器高152	小豆色	摺鉢。底部に目跡。		715
26	32	土31覆土	陶器鉢	口径169、器高62	淡茶色	茶味を帯びた緑色釉。底部に穿孔。		741
118-27	32	土48覆土	陶器鉢	口径220、器高242	黄茶色	褐色釉。脚3ヶ所。		800
28	32	土73覆土	陶器鉢	口径247、器高238	淡橙褐色	灰味を帯びた黄緑色釉。底部に目跡。		861
119-29	32	土108覆土	陶器鉢	口径260、器高178	黄褐色	黒灰～茶色釉。把手2つ。脚3ヶ所。口縁端部に黄圧により隆起させた文様5ヶ所。		915
30	32	土94覆土	陶器火鉢	口径229、器高238	黄橙色	内面ハケ。		890
31	32	土60覆土	陶器火鉢	口径263、器高262	黄褐色	内面ハケ。上半部に煤。		834
120-32	32	井戸3掘方	磁器皿	口径46、器高15	白色	型押し of 紅皿。透明釉。		1113
33	32	土92覆土	磁器皿	口径48、器高14	白色	型押し of 紅皿。透明釉。		888
34	32	土79覆土	磁器皿	口径68、器高18	黄灰色	黄緑色釉。		864
35	32	土2覆土	磁器皿	口径70、器高35	暗黄褐色	黄緑色釉。煤付着。		682
36	32	土1覆土	磁器猪口	口径62、器高27	灰白色	透明釉。		673
37	32	土92覆土	磁器猪口	口径68、器高26	白色	透明釉。		887
38	32	土1覆土	磁器猪口	口径72、器高36	白色	透明釉。		672
39		土34覆土	磁器椀	口径91、器高53	白色	透明釉。口縁部内側と見込みに染め付け。		757
40		土68覆土	磁器椀	口径100、器高55	白色	透明釉。		858
41		土3覆土	磁器椀	口径98、器高36	白色	透明釉。口縁部内側に型紙摺り文。		700
42		土2覆土	磁器皿	口径101、器高55	白色	透明釉。体部内側に型紙摺りの花文。		685
43	32	土37覆土	磁器皿	口径118、器高25	白色	透明釉。		767
45		土33覆土	磁器皿	口径151、器高31	白色	青みがかった透明釉。輪花。		749

第37表 黄褐色土層・灰色砂層近世以降の遺構出土土器類観察表2

32～44は白磁。32・33は紅皿。34・35は皿で内面のみ施釉で他は露胎となる。36～38は猪口。9～41は椀。42～44は高台皿。41・42は型紙摺り。44は呉須で草花文を描く。

(4) 窯道具 (図版33、第121図)

1～4はハマ。1・2は円盤状。1は径5.9cm、厚さ1.05cmを測る。上面に径4.2cmの高台の痕跡が残る。調整は全面ナデ。色調は上面が茶褐色、底面は黒茶色を呈する。周縁部には自然釉薬が付着する。2号土坑出土。2は径9.1cm、厚さ0.9cmを測る。上面に径5.5cmの高台の痕跡



第121図 窯道具実測図 (1/3)

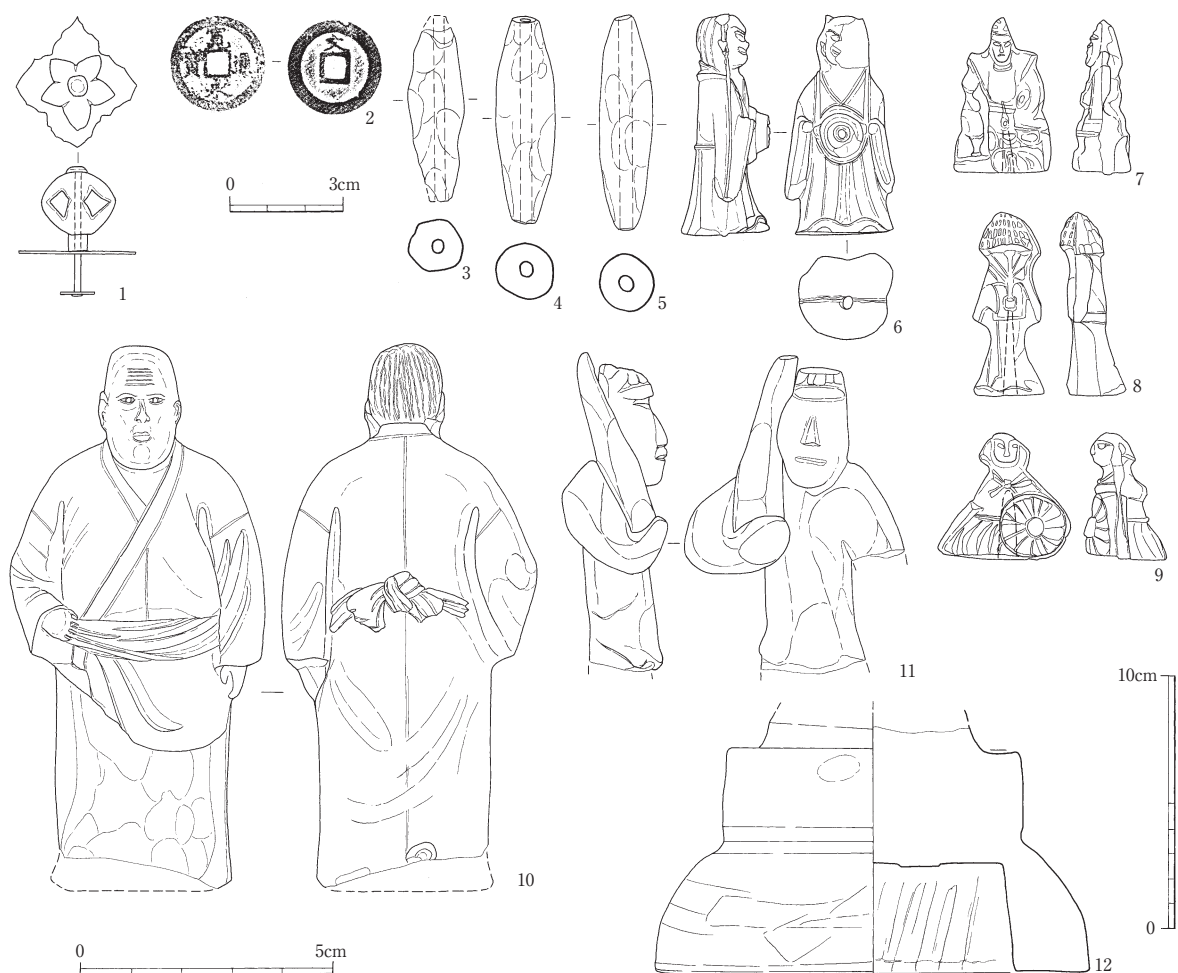
が残る。調整は表裏とも回転糸切り。周縁部はヨコナデ。色調は茶褐色を呈し、部分的に自然釉が付着する。90号土坑出土。3は中空の円盤に三足を付したものの。径5.9cmを測る。脚の接地部分には釉薬が付着する。色調は黄褐色。40号土坑出土。4は径11.6cmの低い円筒の下端4ヶ所に黄褐色のきわめて精良な粘土による脚を付したものの。調整はヨコナデ。色調は明黄褐色を呈する。発掘区南西部の黄茶色土層から出土。5～7は円筒形の窯道具。5は径8.0cm、高さ4.7cmを測る。上面は外側に向かって傾斜し、部分的に砂目が残っている。調整はヨコナデで、内面には明瞭にその痕跡が残る。色調は茶褐色を呈する。112号土坑出土。

6は径13.2cm、高さ5.3cmを測る。全体の1/4弱ほど遺存している。上半部には透かし状の切り込みが施されるが全形は窺い知れない。中位よりやや下方にはヘラ状工具の先端による沈線が回る。上面には砂目が部分的に残る。調整はヨコナデで、外面には痕跡が細かく残る。色調は明黄褐色を呈する。9号土坑出土。7はやや外反しながら開いた円筒の上端部にT字形の口縁をつけ、下端部を波形に削って脚としたもの。口縁の上端部には重ね焼きの痕跡が残り、淡緑色の自然釉が付着している。2号土坑出土。8はトチン。上部を欠失する。暗茶色の自然釉が全面にかかる。接地部分は削って平坦に仕上げられる。周辺部は溶解してガラス状になっている。2号土坑出土。

(5) 青銅製品・土製品・瓦製品 (図版33、第122図)

1は青銅製の飾金具。摘み部分は5弁の花形を呈し、側面の弁間には内湾する曲線で構成される菱形の透かしを配する。その下方にある4弁の花飾りは薄い板状。基部の留め金具は円形である。長さ2.6cm。重量は4g。35号土坑出土。2は「寛永通寶」。背面に「文」の文字が鑄られる。

3～5は土錘。3は6号溝出土。4は長さ5.5cm、径1.6cm、孔径0.3cmを測る。重量は11g。



第122図 青銅製品・銅銭・土製品・瓦製品実測図（1/2・2/3・1/3）

19号土坑出土。5は長さ5.7cm、径1.6cm、孔径0.35cmを測る。重量は10g。22号土坑出土。色調はすべて黄褐色。6～9は型作りの土製人形である。側面にははみ出した粘土を削った痕跡が、また、底面に軸棒の孔を残す。6は鬼の寒念仏。高さ4.3cm、幅2.1cm、厚さ1.7cmを測る。重量11g。35号土坑出土。7は鳥帽子を被った武者か。高さ2.6cm、幅1.9cm、厚さ1.1cmを測る。重量は5g。8は虚無僧。高さ3.6cm、幅1.4cm、厚さ1.2cmを測る。重量は4g。9は笠を持った地藏。高さ2.4cm、幅2.6cm、厚さ1.3cmを測る。重量は6g。7～9は17号土坑出土。10は西郷隆盛の博多人形。型作り。中空。前面の裾を欠く。高さ10.7cm、幅5.0cm、厚さ3.1cmを測る。色調は淡黄褐色。2号土坑出土。11は銃を持った兵士。手捏ね。発掘区中央部の黒色土層出土。重量は28g。

12は外面が燻された瓦製品。伏鉢か。胎土は精良で砂粒を少量含む。調整は上面がヨコナデ、体部下半がケズリのちナデ、内面は工具ナデ。径17.0cm、残存高10.3cmを測る。

第4章 西新町遺跡出土鉛製品の鉛同位体比測定結果

国立歴史民俗博物館・研究部 齋藤 努

1 はじめに

福岡県教育委員会所蔵の西新町遺跡出土鉛製品について、鉛同位体比測定を行った結果を報告する。

2 資料

分析を行ったのは、西新町遺跡第17次調査5号竪穴住居跡出土の鉛製品1点（重藤輝行他『西新町遺跡』Ⅶ 2006 福岡県文化財調査報告書第208集 第147図、図版53-5）である。

3 分析方法

全体の形状に影響を与えない箇所からキサゲを用いて微量の粉末を採取し、分析試料とした。試料から、高周波加熱分離法で鉛を単離して硝酸溶液とし、鉛200ng相当量の試料溶液を分取して、リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置（Finnigan MAT 262）を用いて、フィラメント温度1200℃で鉛同位体比を測定した。

4 結果

第38表に鉛同位体比測定結果を示した。

資料名	分析番号	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$
鉛製品	B9203	0.8540	2.1125	18.260	15.593	38.574

第38表 西新町遺跡出土鉛製品の鉛同位体比測定結果

馬淵・平尾は弥生時代から平安時代までの多くの青銅器についてデータを蓄積した結果、その鉛同位体比の変遷は下記のようにグループ分けできると報告している（馬淵・平尾、1982、1983、1987）。

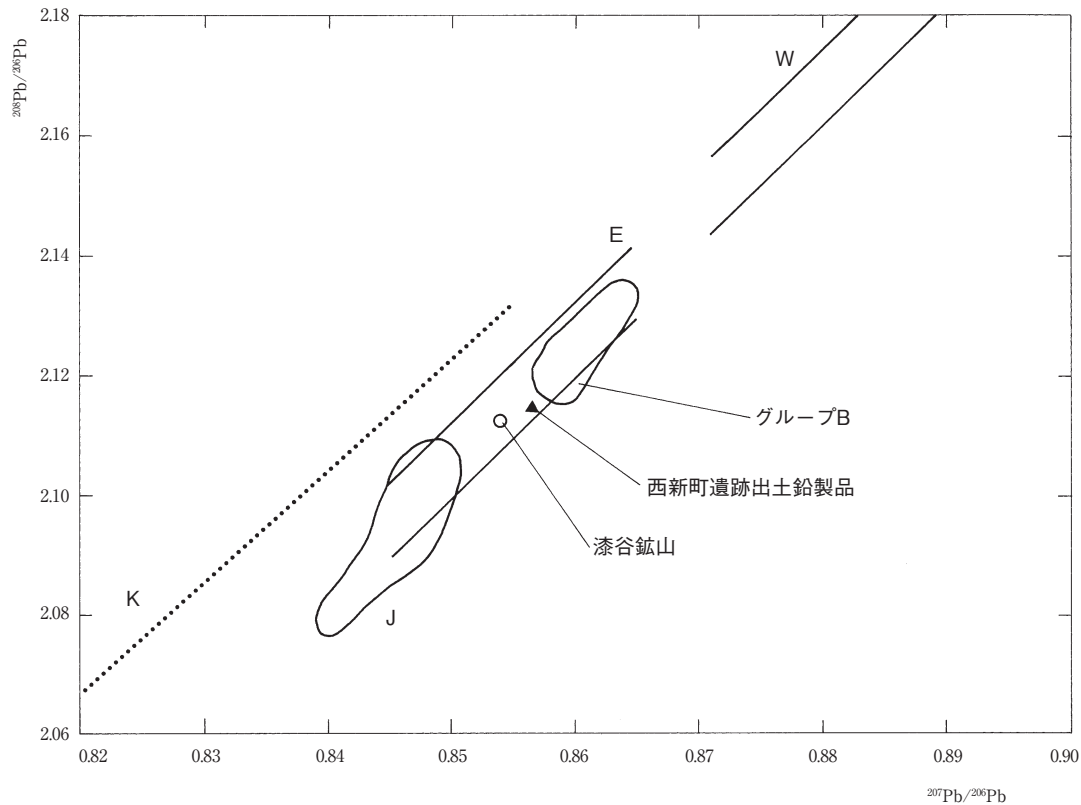
W：弥生時代に将来された前漢鏡が示す数値の領域で、華北の鉛。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。

E：後漢・三国時代の舶載鏡が示す数値の領域で、華中～華南の鉛。古墳出土の青銅鏡の大部分はここに入る。

J：日本産の鉛鉱石の領域。日本産鉛は現在までのところ、飛鳥時代以降の資料にしか見出されていない。

K：多鈕細文鏡や細形銅剣など、弥生時代に将来された朝鮮半島系遺物が位置するライン。

ただし、齋藤（2006）および齋藤・亀田（2006）による朝鮮半島嶺南地域出土の青銅製品の分析結果によると、数値の集中する2つの領域が報告されており、そのうちの「グループB」と称されるものについては、上記先行研究では「E」の範囲内にあるものの、慶尚北道大邱近郊にある漆谷鉾山のデータと比較的近いことや、そのグループに含まれる資料の大部分が4世紀以降であり、313年の楽浪郡の滅亡による銅関係技術者たちの朝鮮半島南部地域への流入の可能性や新羅の大邱地方への勢力版図の拡大と整合することから、同地域でこの時期から朝



第123図 西新町遺跡出土鉛製品の鉛同位体比測定結果（A式図）

鮮半島産の原料使用が行われた可能性についても考慮しておく必要が指摘されている。

ここで得られた数値は上述のグループBとして設定した範囲からはわずかに外れているものの、グループBよりもさらに漆谷鉱山のデータに近い数値を示しており、また同研究で分析された資料の中にはこれと近接する数値を示すものも含まれている。また年代的にも整合している。第123図は、西新町遺跡出土鉛製品の測定値を、グループBの範囲や漆谷鉱山の数値とともに示したものである。なお測定結果は、必要に応じて $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 比と $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 比の図（B式図）を併用することもあるが、ここでは $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比と $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比の関係（A式図）のみで表した。

以上の点から本資料の分析結果については、先行研究によれば中国華中～華南産原料と判定されるところであるが、近年の研究状況に鑑み、また遺跡の年代や他の出土資料などの点を考慮して考察を行うならば、朝鮮半島（南部地域）産原料である可能性も考えられる。

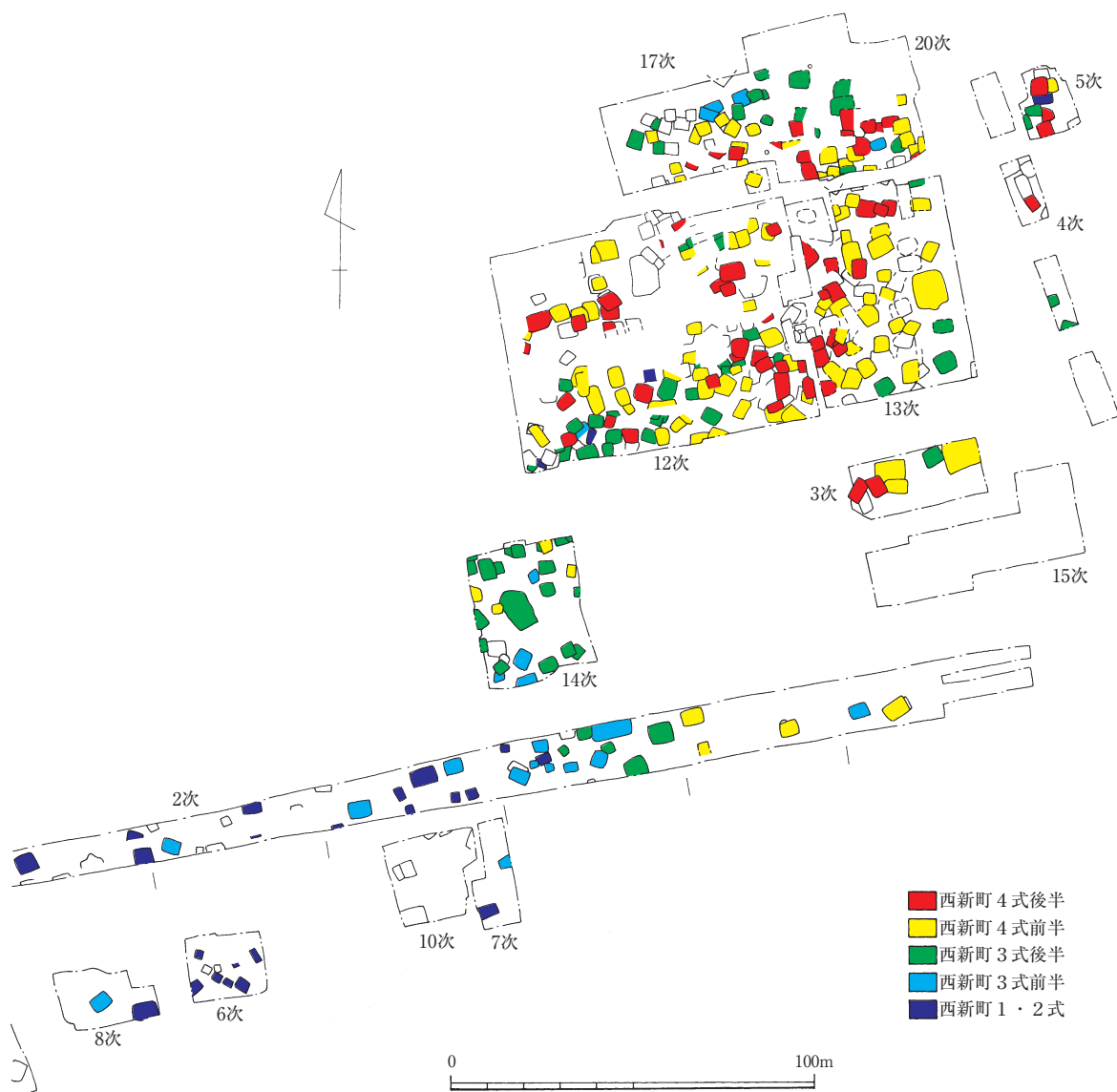
参考文献

- 齋藤努（2006）、「韓国出土資料、東大所蔵楽浪出土資料、宮内庁所蔵資料などの鉛同位体比測定結果」、『科学研究費補助金基盤研究（B）（2）「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」報告書』、pp.81-117.
- 齋藤努、亀田修一（2006）、「総括 まとめと本研究の意義」、同上、pp.313-320.
- 馬淵久夫、平尾良光（1982）、「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」、『考古学雑誌』68（1）、pp.42-62.
- 馬淵久夫、平尾良光（1983）、「鉛同位体比による漢式鏡の研究（二）」、『MUSEUM』382、pp.16-26.
- 馬淵久夫、平尾良光（1987）、「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比-青銅器との関連を中心に-」、『考古学雑誌』73（2）、pp.199-245.

第5章 まとめ

(1) 第20次調査の竪穴住居跡群について

第20次調査では古墳時代初頭～前期の竪穴住居跡を45棟確認した。これで修猷館高校の敷地内において検出された弥生時代終末～古墳時代前期の竪穴住居跡は総数364棟を数える（第3次7棟、第12次158棟、第13次86棟、第14次29棟、第17次39棟、第20次45棟）。ことに遺跡の北東部における古墳時代初頭～前期の竪穴住居跡の密集度は著しい。西新町遺跡のように都市圏に所在する大規模遺跡の集落構造がこれだけ明らかになっている例は稀有であろう。加えて、朝鮮半島系土器をはじめとした畿内・吉備・山陰・東海地域との交流を示す土器や、外来系遺物、我が国における初期段階のカマドを付設した竪穴住居跡の資料が着実に増加していることなど、学史上の重要性はますます高まっている。



第124図 西新町遺跡における竪穴住居跡変遷図 (1/2,000)

番号	炉	カマド			半島系土器	備考	時期	番号	炉	カマド			半島系土器	備考	時期
		I 類	II 類	III 類						I 類	II 類	III 類			
1	○				○	玉砥石、釣針	4 式後半	25					○		3 式後半
2							4 式前半	26							3 式後半
3								27					○	鉄斧	4 式前半
4			○			煙道	4 式後半	28			○		○	煙道	4 式後半
5				○	○		4 式後半	29							3 式後半
6	○						4 式前半	30			○?		○		4 式前半
7					○	鉄鏝	4 式前半	31							3 式後半
8								32			○		○		4 式前半
9				○?				33				○	○		4 式前半
10								34							4 式前半
11				○		鉄斧	4 式後半	35			○?				4 式後半
12	○						3 式後半	36							
13	○				○	刀子	3 式後半	37	○				○		
14			○?				4 式前半	39			○			煙道	4 式前半
15			○		○	勾玉未製品	4 式前半	41			○		○	鉄鏝	4 式前半
16	○				○			42		○?			○		4 式後半
17	○						4 式前半	43							4 式後半
18								44			○		○		
19			○		○		4 式前半	45			○		○	煙道	4 式前半
21		○						46							4 式後半
22							4 式前半	47					○		3 式前半
23			○		○	煙道	4 式後半	48			○?				
24	○						3 式後半								

第39表 第20次調査竪穴住居跡一覧表

さて、西新町遺跡の集落については、これまでの調査によってその範囲と展開の傾向が把握されつつある。まず範囲に関しては、第17次調査区北西隅と第12次調査区北西隅を結ぶラインが集落の北限と想定されていた（重藤2006）。第17次調査区に東接する今回の調査区では、竪穴住居跡が発掘区南半部に集中することに対し、北半部では極端に竪穴住居跡の分布が疎らになり、発掘区の北辺部分は空閑地となっている。こうしたことから、集落域の北縁部をこのあたりに想定してもよいのではないかと思われる。西新町遺跡の集落展開の傾向に関しては、その中心が、時期が新しくなるにしたがって南西方向から北東方向に移動しているという大まかな様相が把握されている。第124図は『西新町遺跡』Ⅶにおいて報告された竪穴住居跡変遷図に、今次調査区を取り込んだものである。第20次調査で検出した竪穴式住居跡の時期は西新町遺跡3式前半～4式後半に及ぶが、総じて西新町遺跡4式期が主体を占める。特に発掘区の南半部では3式前半期に遡る可能性がある47号竪穴住居跡が存在するものの、第20次調査区の南側に位置する第13次調査の状況と同じように4式期を中心とする分布傾向を示している。また、西側に接する第17次調査の北半部では3式期の竪穴住居跡が複数検出されていたが、第20次調査では、それらの住居跡群と連続するように12・13・24・25号竪穴住居跡などが存在し、3式後半期に属すると考えられる住居跡がひとつのブロックを形成している。なお、第20次調査区の東側に位置する第4・5次調査区では1・2式期段階からすでに集落が営まれ4式後半まで存続していることや、第13次調査区東側の空閑地の存在から、修猷館高校に東接する南北道路の東西では様相が異なることがすでに指摘されている（吉田2003）。少なくとも今回の調査の結果を概観すると、第20次調査区部分に関しては隣接する第12・13・17次調査に連続する状況を示すといえよう。

以上のように、これまでの調査成果による集落展開の傾向を追認するような状況把握にとどまった側面もあるものの、一方で、今次調査区内において集落域の北縁部と見て取れるような

状況が認められたことはひとつの成果といえる。

（２）カマド付設竪穴住居跡の展開とカマドの構造について

第20次調査で検出した竪穴住居跡45棟のうち、炉を有する事例が8棟にとどまったことに対し、カマドを付設する竪穴住居跡は20棟を数える。前者では16・17・37号竪穴住居跡などほぼ中央部に位置するものと、12・24号竪穴住居跡のようにいずれかの壁寄りに偏在するものの両者がみられる。また、27・47号竪穴住居跡など、明確に炉跡と認識できる土坑が確認できなかった遺構もある。一方、後者では、吉田東明によるカマド分類（吉田2003）のⅠ～Ⅲ類（Ⅰ類：カマド本体が住居のコーナー部に直接付設され、煙道はない、もしくは非常に短いもの、Ⅱ類：カマド燃焼部が住居跡の壁から離れた内側にあり、煙道が住居跡の隅に向かって長く伸びるもの、Ⅲ類：壁のほぼ中央部に付設されるもの。煙道はない、もしくは非常に短いもの。類型化はカマドの位置と長さによる。）にあたる形態が確認された。西新町遺跡におけるカマドの普及は3式後半期とされ、今回の調査では遅くとも4式前半期以降の竪穴住居跡にカマドが設置されるようになる。ちなみに当該遺跡でのカマドの最古例は1～2式期に属する第5次調査SC09で吉田分類のⅢ類に当たる。この事例は煙道を屋外に出すもので、壁部分を斜めにカットして煙道としている（長家1994）。

まずカマドの類別分布に関して概観する。第20次調査区のすぐ南側の第12・13次調査では、これまで西新町遺跡で確認されたカマド総数の8割ほどに当たる52棟の竪穴住居がカマドを付設している。第12・13次調査と第20次調査のカマド数を類型別に比較すると前者はⅡ類→Ⅰ類→Ⅲ類の順となり、後者ではⅡ類→Ⅲ類→Ⅰ類の順となる。また、第20次調査では第12・13次調査と比べてⅡ類の占める割合が高いことに対し、逆にⅠ類の割合が極めて低いという傾向がみられる。これまでに西新町遺跡で確認されたカマドのうち、Ⅱ類の占める割合は全体の5割に満たないが、第20次調査では7割を占めている。これは、南西方向から北東方向に向けて西新町集落の中心が移動している中で、第20次調査区の遺構群は時期的に下る4式期が大半を占めることに対応しているものとも考えられる。

さて、ここで、いわゆる「オンドル状遺構」と称されるⅡ類のカマドの一部にみられる平面形態上の特徴に触れておく。Ⅱ類に属する事例の中には煙道基礎部の整地地業が煙出し部分と推定される住居壁コーナーでは収束せず、L字形に短く南折してから収束するという特徴を持つものがある（4・30・41・44号竪穴住居跡）。これらの竪穴住居跡の煙道部については他のⅡ類の例に漏れず竪穴住居跡の北面壁に沿いながら煙出しに向かって直線的に伸び、北側の住居コーナー部分に煙出しが設えられていると考えられる。ここにあげた4例は、整地地業の範囲からみて、煙道を2辺以上の住居壁に沿ってL字型ないしはコ字型に這わせていた可能性も考えられる。しかしながら30号竪穴住居跡は別として、少なくとも検出時の所見においては、煙道が折れて壁沿いに長く伸びるのではなく、もともと屈曲後すぐに収束していた形態であった可能性があることを記しておく。

次に第20次調査で検出したカマドの構築方法について気づいた事を若干述べる。西新町遺跡は砂丘上に立地するため、竪穴住居跡の壁や床面もいわゆる海砂の状態で検出されるが、概してカマド部分は遺跡の近傍から搬入された粘性を有する土を主体的に用いている。一方で、隣接する第17次調査区1・12・37号竪穴住居跡のカマドのように構築土が砂主体となる事例も少

数存在するものの、今回の調査区においてもカマド本体部分の構築にあたって砂を構築材の主体とする例は1例のみであり、やはりいずれも粘性土が主体となる。また、袖を構築する際、粘性の違う一定の厚みを持った粘質土を数層に積み上げる例（砂質土が多く使用される層もある）や、4号竪穴住居跡の様に補強材として土器の破片を混入させるもの、カマドの崩壊土と考えられる焼土を混入させるもの、あるいは30号竪穴住居跡のようにカマド内壁の仕上げに精良な粘土を貼るものなどが見受けられる。本体部分に関してはこのようなバリエーションがあるが、その一方で本体の下部構造についてもいくつかのパターンがみられる（第125図）。

I 類：床面直上からカマド本体を構築するもの。

II 類：カマド本体の構築に先立って、床面の掘込地業を伴うもの。

a. 基礎地業の整地とカマド本体の構築に明確な工程差が認められるもの。

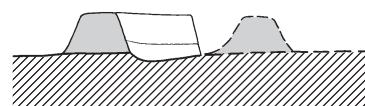
1 基礎地業の整地が単一層かそれに準じる一連の充填作業として捉えられるもの。

2 基礎地業の整地が版築状の層序を示し、分化した作業工程として捉えられるもの。

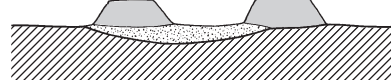
b. 基礎地業の整地とカマド本体の構築が一連の工程として行われるもの。

I 類は西新町遺跡での検出事例を含め、普及期のカマドにも最も多くみられる通有のタイプである。構築材は粘質土を主体とするものと、厚さ数cmの黄白色砂と厚さ0.5cm前後の薄い茶褐色粘質土を互層に重ねるものがそれぞれ1例認められた。I 類には11・28号竪穴住居跡がある。II a-1 類の基礎地業は、床面の掘込みを地山ないしは旧表土かと思われる黄白色～明黄灰砂、あるいはそれに若干の茶褐色が混入した砂を主体とする土で一気に埋め戻す。それほど締めきまりはない。II a-1 類には4・19・30・39・42号竪穴住居跡などがある。基礎地業を行う範囲は第125図の袖部横断面土層図に示されるように、横断面左右それぞれのカマド袖の中軸線よりもやや内側で収まる（カマド本体よりひとまわり狭い範囲）例が多いが、5・9号竪穴住居跡のようにカマド袖の外側とほぼ合致するものも見受けられる。カマド本体の構築土は粘質土を主体とする。II a-2 類の基礎地業は、床面の掘込みを埋め戻す際に厚さ3～7cmの黄白色砂と厚さ0.2～1.0cmの薄い茶褐色粘質土を互層に充填しており、II a-1 類に比べて締めきまりがある。基礎地業を行う範囲はII a-1 類と同様の状況であるが、45号竪穴住居跡例はカマド本体よりもやや大きな掘込みをもつ。また、23・28号竪穴住居跡では煙道部分にも同様の掘込みを行い、互層の整地がなされている。II a-2 類には15・21・32・33号竪穴住居跡などがある。II b 類は第20次調査では検出されていないが、カマド本体を設置する部分の掘込みを行った後、基礎と本体を一連の作業工程としてカマドを組み上げるもので、両者の土質に差異が認められない。II b 類の例として第17次調査1号竪穴住居跡などがある。以上のようなパターンがみられるものの、I 類とII 類の違い－掘込みの有無－がどのような意味を持つのか現段階では

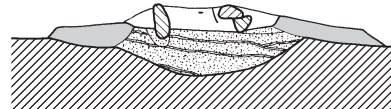
I 類 (20次・11号住居跡)



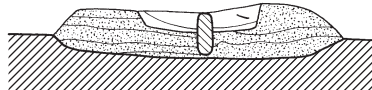
II a-1 類 (20次・39号住居跡)



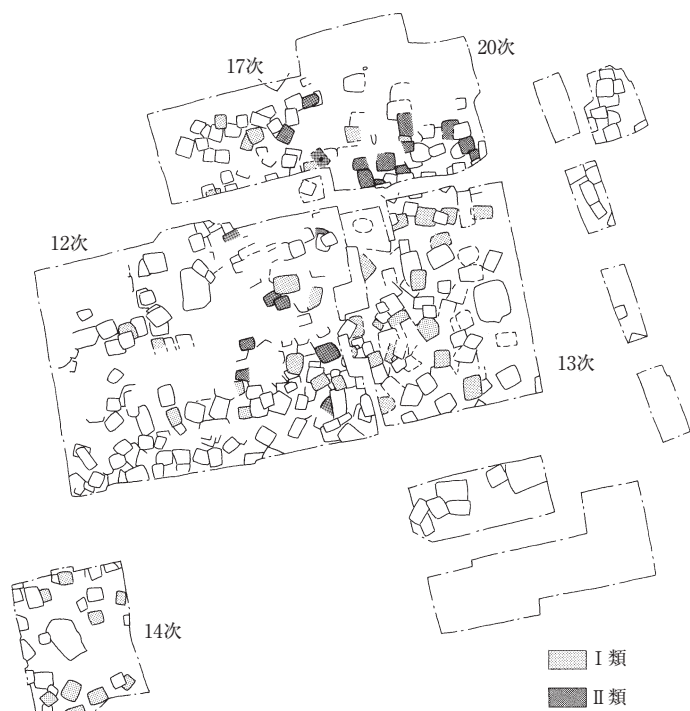
II a-2 類 (20次・32号住居跡)



II b 類 (17次・1号住居跡)

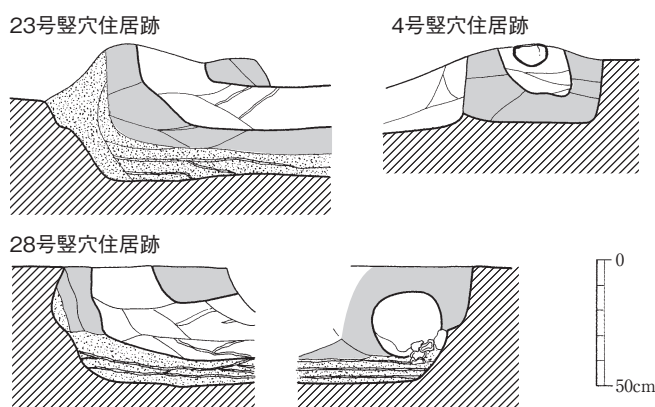


第125図 カマドの構築過程 (1/30)



第126図 カマド地業の類別分布図 (1/2,000)

面の標高も低くなる（＝湿気が多くなる）というように二つの状況を連動して捉えることもあながち否定できない。さらにはII a-1類の基礎地業のように締まりのない整地が存在することや、II a-2類の極めて薄い粘土層に如何ほどのいわゆる「掘込地業」的な効果が期待できるのかといった点を考慮するならば、あるいはI類・II類間の工法の違いに湿気を遮断する等の機能差を認めることができるのかもしれない。II類の占める割合が低い第12・13・14次調査区の中でも特にII a-2類のように丁寧な作業を行う例は極めて限られた存在のようである。第126図はI・II類二つの構築タイプについて調査区別の分布を示したものである。17次調査区では、カマドの構造が確認できる7例中2例がII類で、調査区の東半部に存在する。一方、多数を占めるI類は中央部から西半部にかけて確認されている。その南側に位置する12次調査区では19例中8例がII類で、東半部でも中央部から北東部にかけて検出されている。また、13次調査の



第127図 煙道断面図 (1/30)

にわかに判断しがたい。第20次調査区内に限っていうと、II-a-2類にみられる互層工法によって埋土が硬化した状態となる例があるし、また、28号竪穴住居跡のように明らかにカマド本体の強度を増すためにも互層工法が採られる例があることから推して、構築面を安定させるための基礎地業であると考えることが自然である。しかしながら、砂地という同じ地質条件であるにもかかわらず両者が併存し、またその分布傾向に偏りがみられる。第12・13・14次調査ではII類の占める割合が低く、逆に第20次調査ではその割合が高いという分布傾向の違いに対し、後者の立地がやや海に近づき検出

カマド19例、14次調査の9例のうちのすべてがI類となる。時期別の検討を経てはいないため、ここでは両者の平面分布に偏在傾向が見られ、それが機能差を反映している可能性も残されていることを述べておくにとどめる。

西新町遺跡のこれまでの調査では、カマドに付設する煙道が遺存している例が幾つか確認されていたが、今回の調査でもその事例を追加することとなった（4・23・28・39・45号竪穴

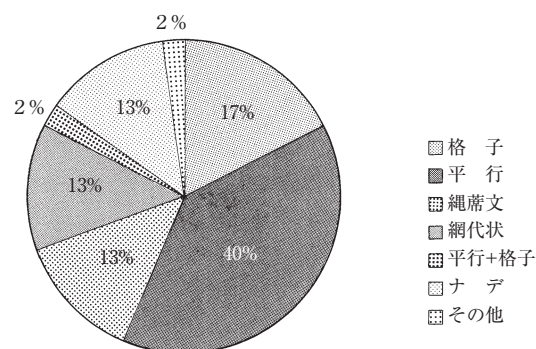
住居跡。煙道径は18～26cm)。20次調査で確認したカマド煙道は壁伝いに直線的に伸び、断面で観察できたものについてはいずれも住居跡のコーナー近くで直に立ち上がり煙出しに至る通常のタイプであるが、12次調査81号竪穴住居跡のように煙出しが緩やかに斜め上方に立ち上がる事例も稀にある。煙道の構築にあたっては、粘土ブロックを含む粘質土を主体的に用いて床直上から構築するもの(4号竪穴住居跡)と、カマド本体部分でみられたⅡa-2類と同様の地業をおこない、その後、煙道部分を巻くように粘性の強い土を貼る工程を採るものがある(23・28号竪穴住居跡)。煙道構築にみられる上記二つの構築方法のうち、19号竪穴住居跡は前者、14・32・39・41・44・45・48号竪穴住居跡は後者と考えられる。なお、4・28号竪穴住居跡のカマド煙道部分では径5～10cm前後の焼土塊を混入した粘質土を貼り込んでいる状況がみられた(図版5-1、第127図横断面煙道部右下)。

最後に支脚についてバリエーションを列挙しておく。カマドはすべて一つ掛けとみられる。支脚には1脚と2脚の二種がある。支脚設置方法については、カマド床面を掘込んで埋置するもの(19号竪穴住居跡など)、カマド本体構築時に一連の作業として埋置し掘形を持たないもの(41号竪穴住居跡)、床面に据え置いただけのもの(39号竪穴住居跡・41号竪穴住居跡右側)等がある。支脚として使用された材には、棒状の礫・角礫・タコ壺、それに高坏脚柱部の転用品がある。

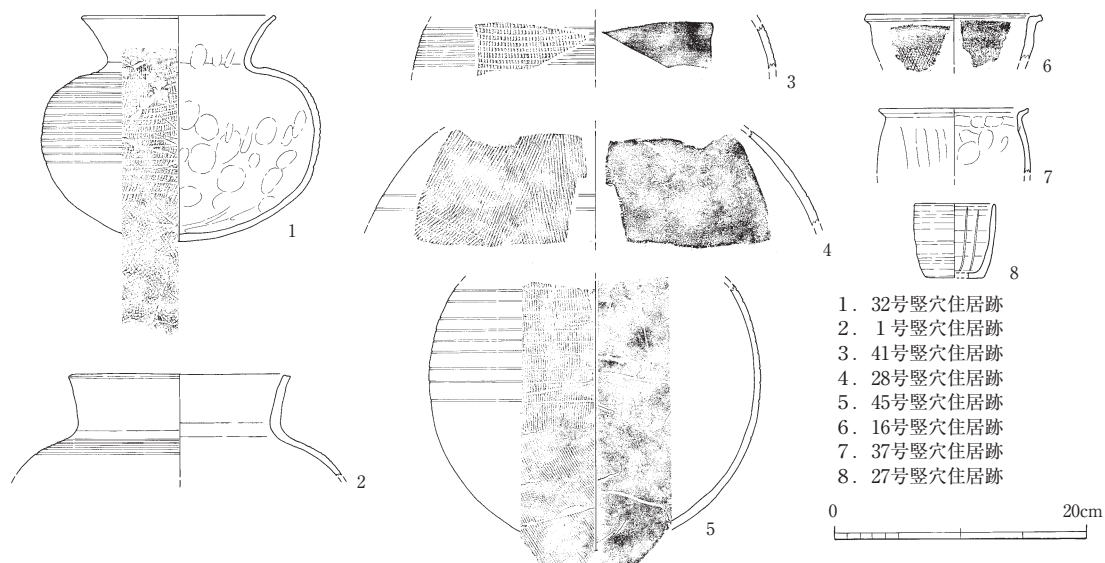
(3) 半島系土器について

第20次調査では半島系土器が計50片以上出土している(1・5・7・13・15・16・19・23・25・27・28・30・32・33・37・41・42・44・45・47号竪穴住居跡)。これまで西新町遺跡の調査で出土した半島系土器には、短頸壺・直口壺・両耳付壺・二重口縁壺・蓋・鉢・高坏・甑の各器種が認められる。また、時期的には2次調査D区1号竪穴住居跡出土両耳付壺が西新町遺跡3式前半の土器群に伴う可能性があり、そうすると最も遡る事例となる。第20次調査では47号竪穴住居跡から、外面に網代状平行タタキを施す陶質土器の小平(第102図19)が出土している。この竪穴住居跡は共伴した土師器の時期から3式前半に遡る可能性がある。また、調査区北部に位置する13号竪穴住居跡(第36図19)、25号竪穴住居跡(第55図25)出土品は伴出した土師器から3式後半に考えられ、前者は外面に格子タタキを持つ壺、後者は外面に網代状平行タタキを持つ。その他の半島系土器出土遺構はいずれも4式期に属する。なお、第128図は出土土器の外面調整のバリエーション別の比率について参考程度にグラフ化したものである。これを見ると平行タタキが40%、縄蓆文を含めると約半数を平行タタキが占めている。他に類例の少ない網代状平行タタキを施すものが6点出土している。また、壺胴部上半に平行タタキを施し、下半に格子タタキを行ってひとつの個体を叩き分ける例が32号竪穴住居跡から出土している(第129図1)。

これまでに西新町遺跡から出土した半島系土器の出自については、慶尚道、ないしは全



第128図 外面調整の比率

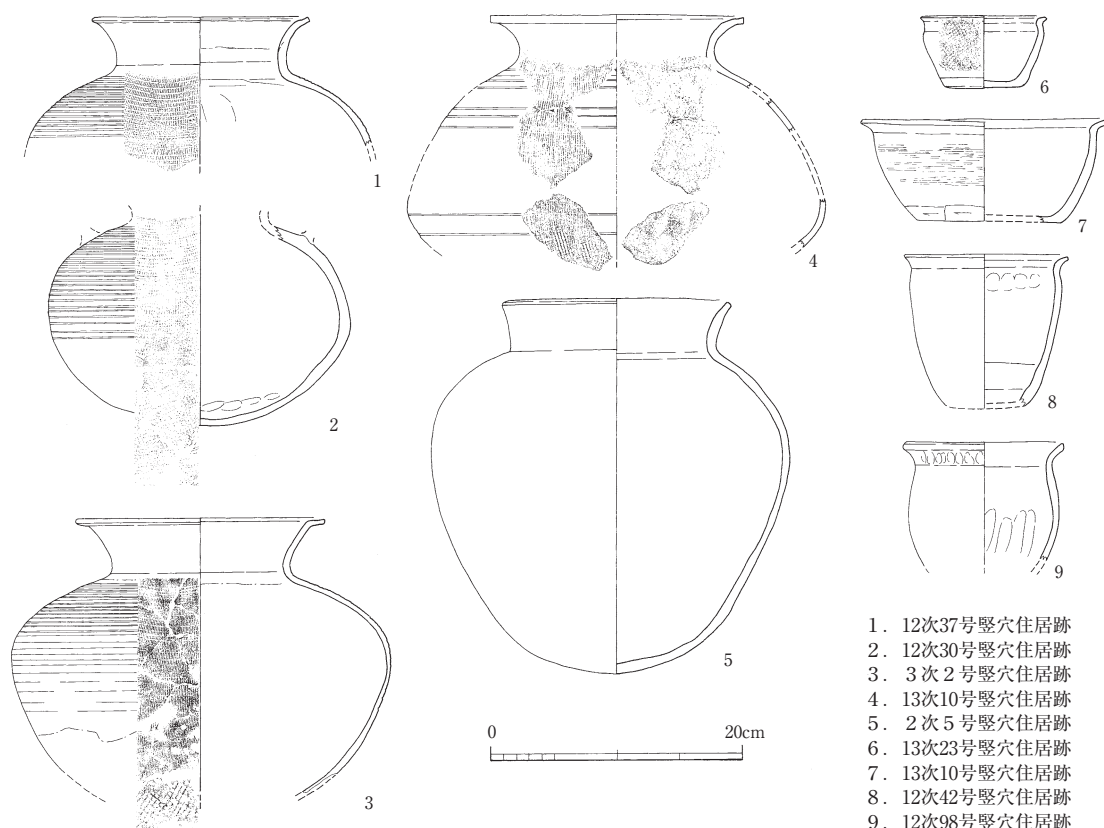


第129図 第20次調査出土半島系土器 (1/6)

羅道・忠清道に彼の地を求められるものが存在することが指摘されている。ここで、今回出土した半島系土器の出自について、先学の所見に従いつつ触れておくことにする。

第129図1は32号竪穴住居跡のカマド右袖上から出土した短頸壺で、口縁部を1/2ほど欠損しているものの他はほぼ完存している。胴部外面は上半部を平行タタキした後、沈線を密に巡らせ、胴部下半部には格子のタタキを行っている。調整は底部内面はヘラナデ、胴部内面はナデで、成形時の凹凸が著しい。この個体とは口縁部の反り方に差異があるが、器形的には第12次調査37号竪穴住居跡出土例（第130図1）が類似する。ただし焼成・胎土は第129図1が瓦質であるのに対し、陶質・堅緻である。また、口縁部は欠失しているものの、外面調整の手法のみをみると第12次調査30号竪穴住居跡例（第130図2）にも共通点がみられ、焼成・胎土はむしろこちらに近い。この他に外面調整の手法で共通する例としては3次調査2号竪穴住居跡（第130図3）・13次10号竪穴住居跡（第130図4）出土短頸壺があるが、胴部や口縁部の形状に差異がみられる。32号竪穴住居跡出土例の類似品としてあげられる各器種に共通する、外反する口縁（慶尚道・全羅道に多い）、胴部のタタキに見られる原体工具の使い分け（全羅道・忠清道に多く慶尚道に少ない）という特徴（寺井2001）をみると、当該資料については全羅地域を含む百済系の可能性が高い。第129図2（1号竪穴住居跡出土）は口縁部が僅かに外反しながら短く直口する壺で、口縁の形状に限れば2次調査5号竪穴住居跡の長胴瓦質無文壺（第130図5）にも似る。この土器は武末純一氏によって全羅道地域を含めた百済系であるという指摘がなされている（武末2000）。図示はしていないが、全羅北道竹幕洞遺跡出土品に類例を求めることができ、器形的にも第130図2のような扁球形を呈するものであろう。口縁部が直立気味の形状をもつ事例は忠清道に多いことを含め、1号竪穴住居跡出土例は忠清道～全羅道に由来するものと考えておきたい。

第129図6は16号竪穴住居跡から出土した。小形の浅い平底鉢と考えられる。口縁は強く外反し、端部は強めの丁寧なヨコナデによりシャープな面をなす。軟質で土師器に近く、器壁は厚い。調整は外面が細かい格子タタキ、内面はナデ。器形的には13次調査10号竪穴住居跡出土



第130図 西新町遺跡出土半島系土器 (1/6)

例（第130図7）のような形になろうか。この例も口縁端部にシャープな面をなすが体部の調整はヨコナデである。第129図7も小形平底鉢で、37号竪穴住居跡から出土した。軟質。調整は外面が板ナデ後ナデ、内面はナデで成形時の指頭圧痕が顕著に残る。12次調査42・98号竪穴住居跡出土品（第130図8・9）に類例があり、やはり全羅道に由来するものか。第129図8は27号竪穴住居跡から出土したコップ形の小平底鉢である。陶質。胎土は精良で砂粒をほとんど含んでいない。西新町遺跡では、軟質で外反する口縁を持つ平底鉢は出土しているものの、この例のように陶質で直口するタイプの類例が見あたらない。

なお、今回の調査で出土した半島系土器の外面調整には格子・平行・縄席・網代状平行タタキの4種のタタキ痕跡が認められたが、このうち網代状平行タタキはこれまでにあまり類例がなく、第13次調査で出土している程度である。半島における類例調査を行ってはいないが、全羅南道金坪遺跡出土例を含め、それほど多くは出土していないようである。今回の調査区からは小片ではあるが6点が出土している。

（4）出土土器について

今回の調査でも古墳時代初頭から前期に至る多量の土器が出土している。これらの出土土器群には前代以来の伝統的な在地土器も当然含まれるが、その主流となるのは畿内及び山陰に系譜を辿ることができる土器群である。また、吉備系や東海系と考えられるものも散見される。なお、竪穴住居跡出土資料に関しては、調査時にその切り合い関係の判断を一部誤ったものもあり、そうした資料については他住居の遺物が混在してしまう結果となっている。

山陰系土器としては大形二重口縁壺・二重口縁壺・脚付二重口縁壺・中形二重口縁壺・小形丸底二重口縁壺・高坏・脚付鉢・大形二重口縁鉢・二重口縁鉢・鼓形器台がある。このうち、二重口縁壺・大形二重口縁鉢・鼓形器台は畿内系を遙かに凌駕し、器種構成上の主要な部分を担っている。次に出土量が多い畿内系土器には直口壺・二重口縁壺・中形直口壺・小形丸底壺・甕・高坏・外反口縁鉢・直口鉢・二重口縁鉢・脚付鉢・小形器台がある。甕は大半が布留系であり、第五様式系・庄内系も僅かに出土している。また、近江系と考えられる個体もある。畿内系では甕・直口壺・小形丸底壺・外反口縁鉢・小形器台の各器種が構成上の主流となっている。これらのいわゆる外来系土器に対し、在地土器は直口壺や甕・器台・甗等の限られた器種しかなく、またその占める割合も極めて低い。以上の器種の他には集落の生業に直接関わるタコ壺が大半の竪穴住居跡から出土しており、殊に47号竪穴住居跡のピット及び屋内土坑からは多くの完形品が出土した。また、36・40号竪穴住居跡からは製塩土器も出土している。

(5) その他の遺物について

上記に述べた各項目は、いずれも西新町遺跡の性格を特徴づける対国内外各地域との交易活動を含めた「交流」を顕著に示しているが、今回の調査では西新町集落の生業に関連する遺物も出土している。

まず、漁労に関する遺物としてタコ壺を挙げることができる。タコ壺は1・3・7・13・16・21・23・24・27・33・35・37・39・41・42・45・47号の各竪穴住居跡から出土し、なかでも47号竪穴住居跡には屋内土坑を中心として完形品が纏まって残されていた。1・15号竪穴住居跡からは石錘が出土しており、石錘の存在や他調査区の状況からみても漁労が集落における中心的な生業の一つであった事がわかる。また、製塩土器も存在し(16・36・48号竪穴住居跡)、漁労とともに地理的環境を生かした塩作りを行っているものの、その出土量の少なさからは自給的な位置づけにとどまるものであらうと考えられる。この他、第12調査ではガラス小玉・勾玉鑄型、石製玉未製品・原石、第13次調査出土ガラス小玉鑄型が出土しており、西新町集落に玉類の生産工房が存在したことが知れる。今回の調査区においても勾玉未製品(15号竪穴住居跡)と玉砥石(1号竪穴住居跡)が出土しており、生産範囲が比較的広範に及んでいたことも想定できる。さらに、鉄器の所有がこの集落においては決して特異な事例ではないという状況や、板状鉄斧の存在(第5次調査)、韃羽口の出土(第12次調査)等を考え合わせると、やはり鉄器生産も行われていたことが想定される。

以上のように、西新町集落では漁労や、外来系土器の流入状況から垣間見ることのできる交易を中心として、装飾品や鉄器の生産など様々な生業が存在していたことは明らかであり、ここで生活が行われていた往事の都市的な営みを容易に思い浮かべることができる。

【参考文献】

- 重藤輝行2007「西新町遺跡17次調査の遺構と遺物」『西新町遺跡』Ⅶ 福岡県教育委員会
武末純一2000「北部九州の百済系土器-4・5世紀を中心に-」『福岡大学総合研究所報』第240号
寺井誠2002「古墳出現前後の韓半島系土器」『3・4世紀日韓土器の諸問題』釜山考古学研究会・庄内式土器研究会・古代学研究会
長家伸1994『西新町遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集 福岡市教育委員会
吉田東明2003「カマドについて」『西新町遺跡』Ⅴ 福岡県教育委員会

第6章 おわりに

福岡県教育委員会は1984年に高校改築に伴う第3次調査に着手して以来、事業に先立って発掘調査を都合7回実施してきた。このような中、今年度の調査を実施した第22次調査をもって一連の発掘調査は完了することとなる。その結果、民間開発に伴う福岡市教育委員会が実施する発掘調査成果と併せ、集落の様相が明らかになってきた。西新町遺跡の重要性については今更言及する必要はないものの、検出された遺構・出土遺物とも我が国の歴史の解明のためには欠かせない第一級の遺跡と位置づけることができる。あたかも、歴史的な、あるいは現在の福岡県における活発な地域間交流・対外交流の象徴的存在であるように感じられる。

今回行った西新町遺跡第20次調査は高校の敷地内という普及活動の格好の場所であったにもかかわらず、十分な対応ができなかったこと、さらには担当者の力量のなさから遺跡に見合うだけの十分な調査・報告・考察ができなかったこと等、反省すべき点は多い。

消失した遺跡を代弁する本報告書が活用されることはもとより、今回の調査によって出土した遺物や調査成果が少しでも多くの方々の目に触れることによって、地域住民が主体的に文化財を守り伝えていくことの一端を担うことを期待します。

図 版



1. 西区下層遺構全景
(南東から・空中撮影)



2. 西区上層遺構南半
(北東から)



3. 西区上層遺構北半
(東から)



1. 西区上層遺構全景
(南から)



2. 東区上層遺構全景
(南西から)



3. 東区下層遺構全景
(南西から)



1. 1～3号竪穴住居跡
(西から)



2. 1号竪穴住居跡
(南西から)



3. 4・5・7号竪穴住居跡
(南西から)



1. 4号竪穴住居跡カマド全景
(南から)



2. 4号竪穴住居跡カマド
(南から)



3. 4号竪穴住居跡カマド煙道
(南西から)

1. 4号竪穴住居跡カマド煙道
(東から)



2. 5号竪穴住居跡カマド
(東から)



3. 11・12号竪穴住居跡
(南西から)





1. 13号竪穴住居跡
(南から)



2. 13号竪穴住居跡集石
(南東から)



3. 14号竪穴住居跡カマド下層
(南西から)



1. 15～18号竪穴住居跡
(南西から)



2. 19号竪穴住居跡カマド
(南西から)



3. 19号竪穴住居跡カマド
(南西から・断ち割り後)



1. 21・28・46・48号
竪穴住居跡（北西から）



2. 23号竪穴住居跡カマド
（南から）

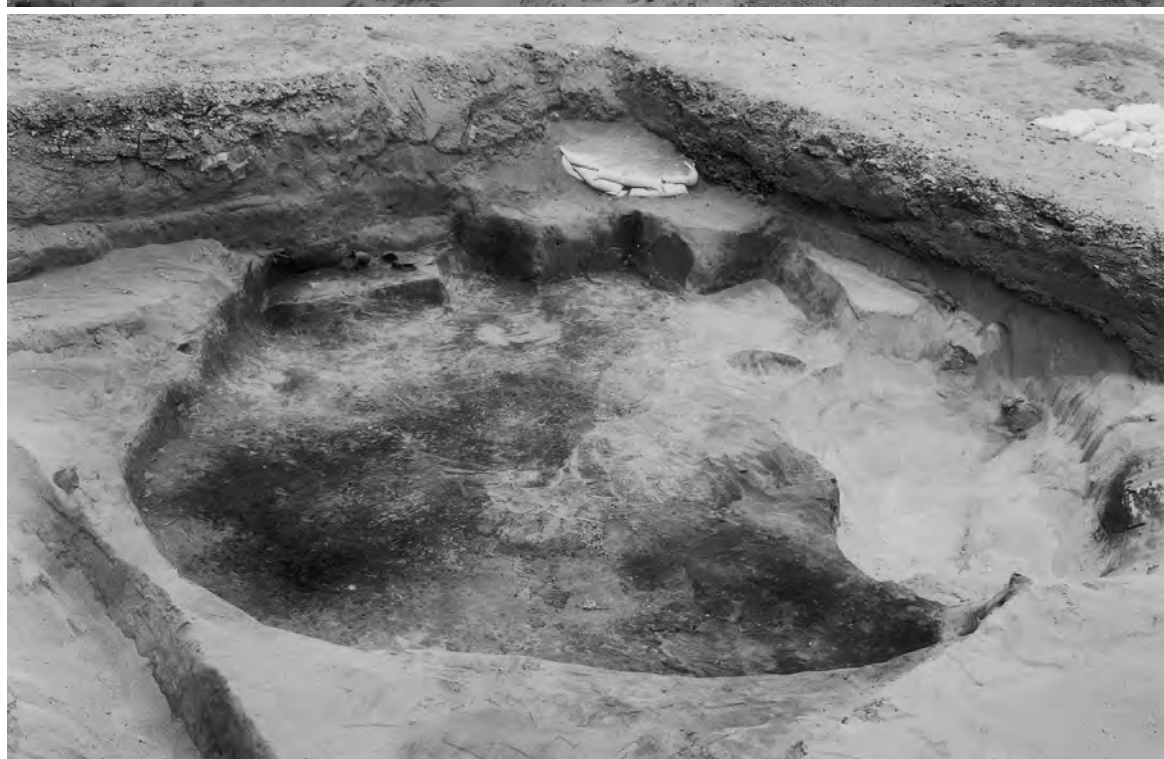


3. 23号竪穴住居跡カマド
煙道断ち割り状況
（北東から）

1. 23～25号竪穴住居跡
(南東から)



2. 27号竪穴住居跡
(南東から)



3. 27号竪穴住居跡遺物
出土状況 (北から)





1. 28号竪穴住居跡カマド
(南から)



2. 28号竪穴住居跡カマド
(南から・完掘後)



3. 28号竪穴住居跡カマド煙道
(南から)

1. 16・29・30号竪穴住居跡
(南から)



2. 29号竪穴住居跡
遺物出土状況
(北西から)



3. 30号竪穴住居跡カマド
(南西から)





1. 32・33号竪穴住居跡
(南から)



2. 32号竪穴住居跡カマド
(南から)



3. 32号竪穴住居跡カマド
(南から)

1. 33号竪穴住居跡カマド
(東から)



2. 34号竪穴住居跡
(東から)



3. 35号竪穴住居跡カマド
(北東から)





1. 東区の住居跡群
(東から)



2. 36・37号竪穴住居跡
(南東から)



3. 39号竪穴住居跡
(南から)



1. 41・42号竪穴住居跡
(南東から)



2. 41号竪穴住居跡カマド
(南から)



3. 42号竪穴住居跡
(南から)



1. 東区の住居跡群2
(南西から)



2. 44・46・48号竪穴住居跡
(西から)



3. 44号竪穴住居跡集石
(北から)



1. 45号竪穴住居跡
(南から)



2. 45号竪穴住居跡カマド
(南から)



3. 45号竪穴住居跡カマド
煙道断面 (東から)



1. 47号竪穴住居跡
(南から)



2. 47号竪穴住居跡内
土坑1遺物出土状況
(南から)



3. 53号土坑
(東から)



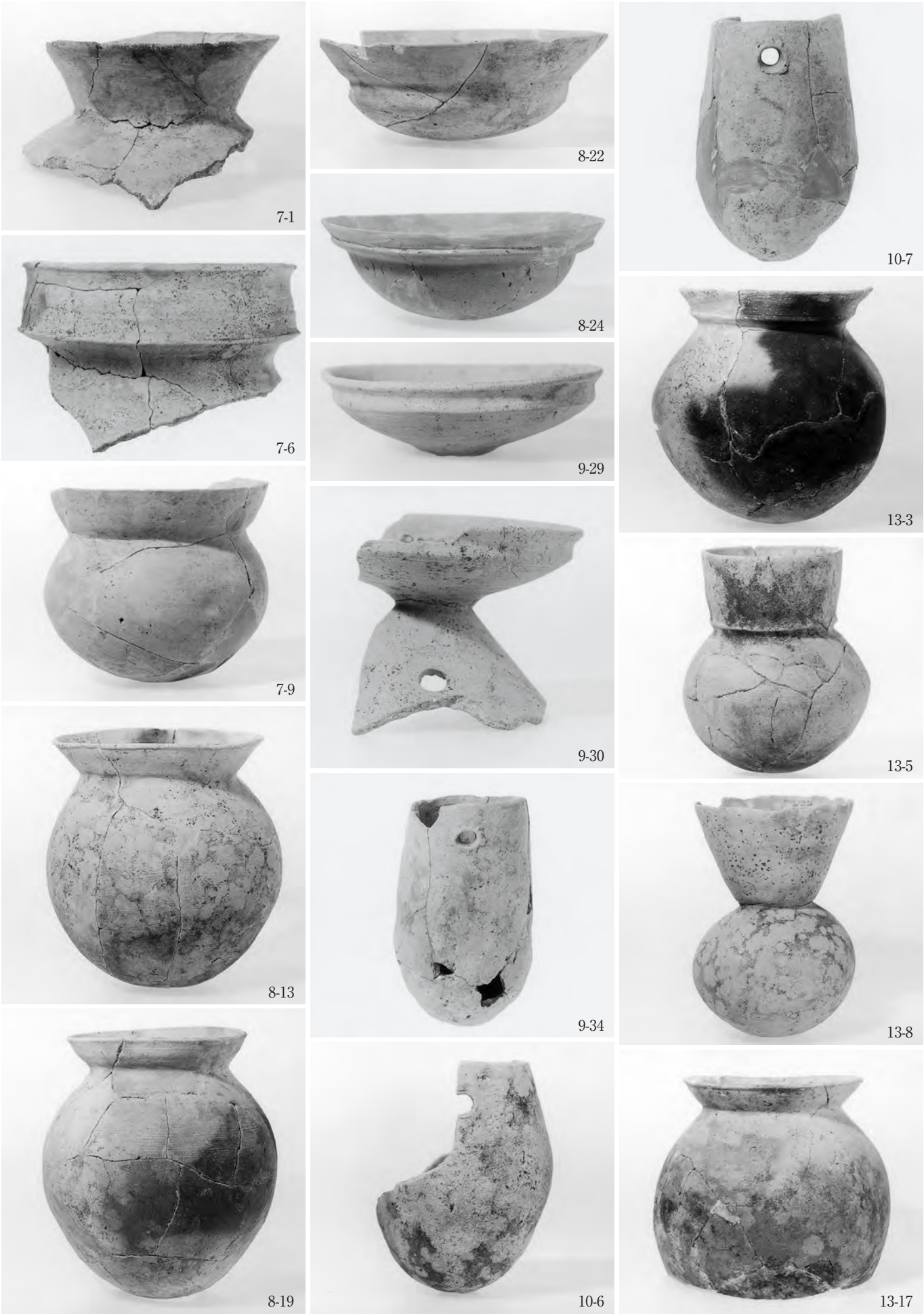
1. 4号井戸（東から）



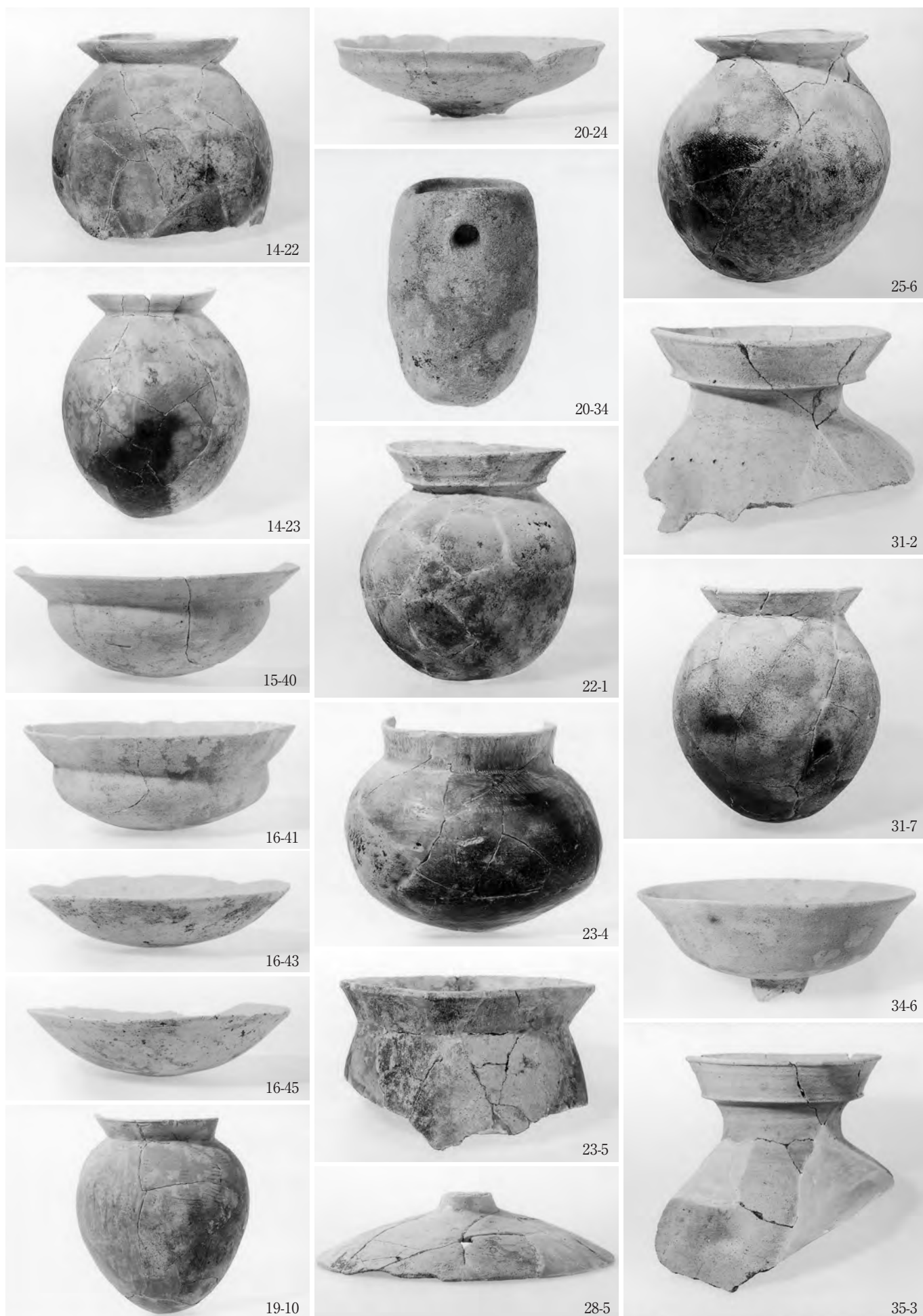
2. 35号土坑（北西から）



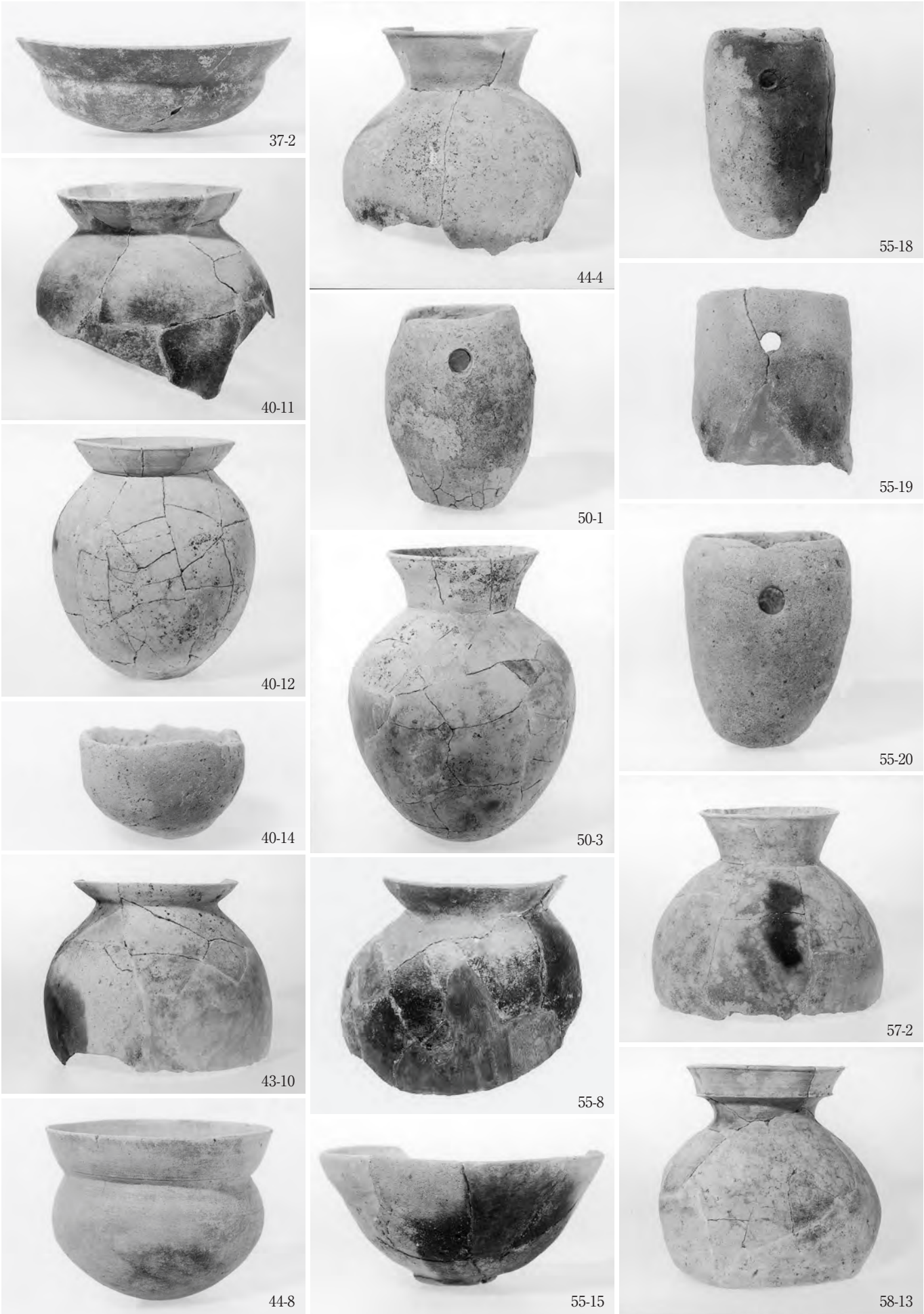
3. 35号土坑遺物出土状況
（西から）



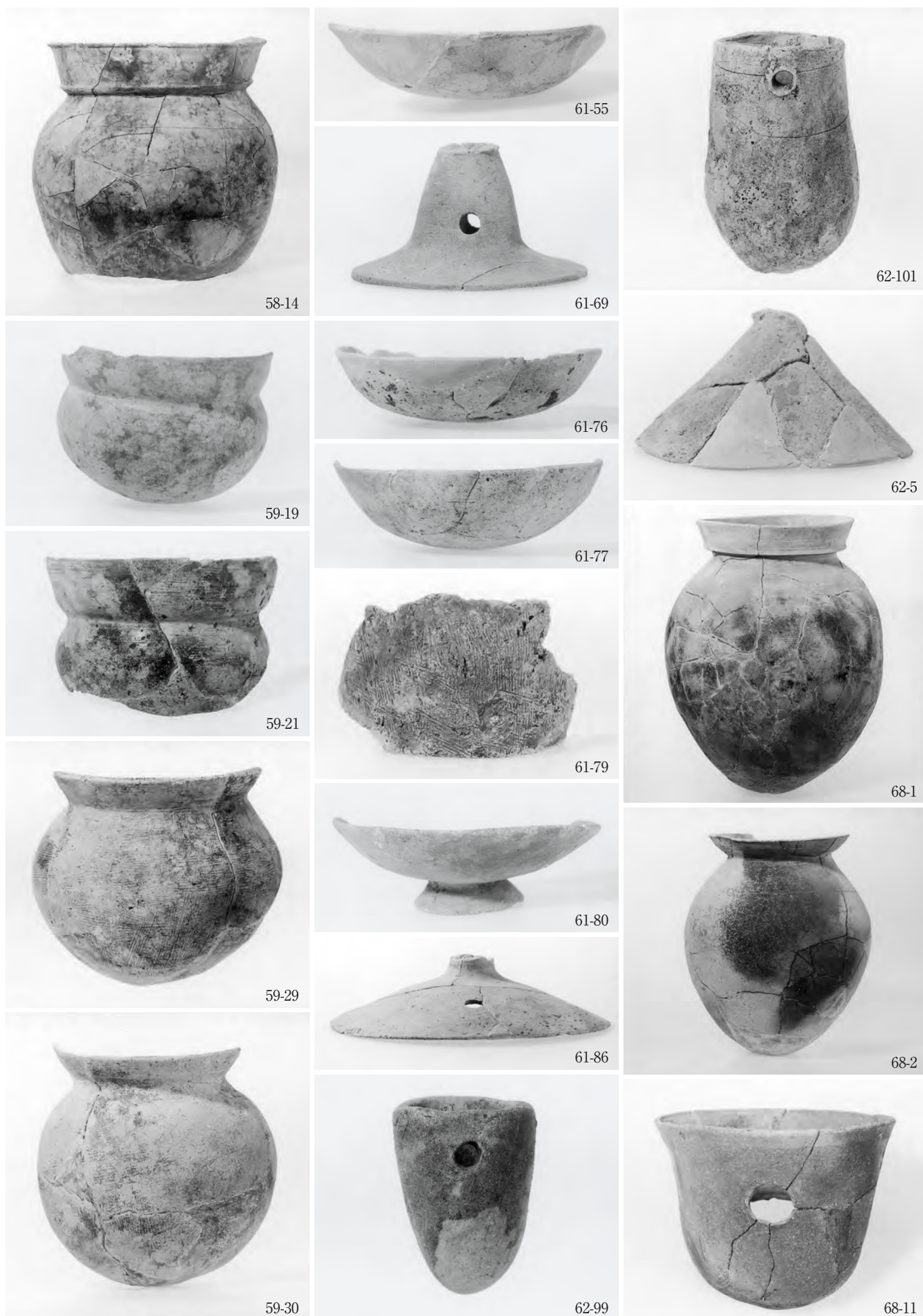
1~3号竖穴住居跡出土土器、4号竖穴住居跡出土土器 1



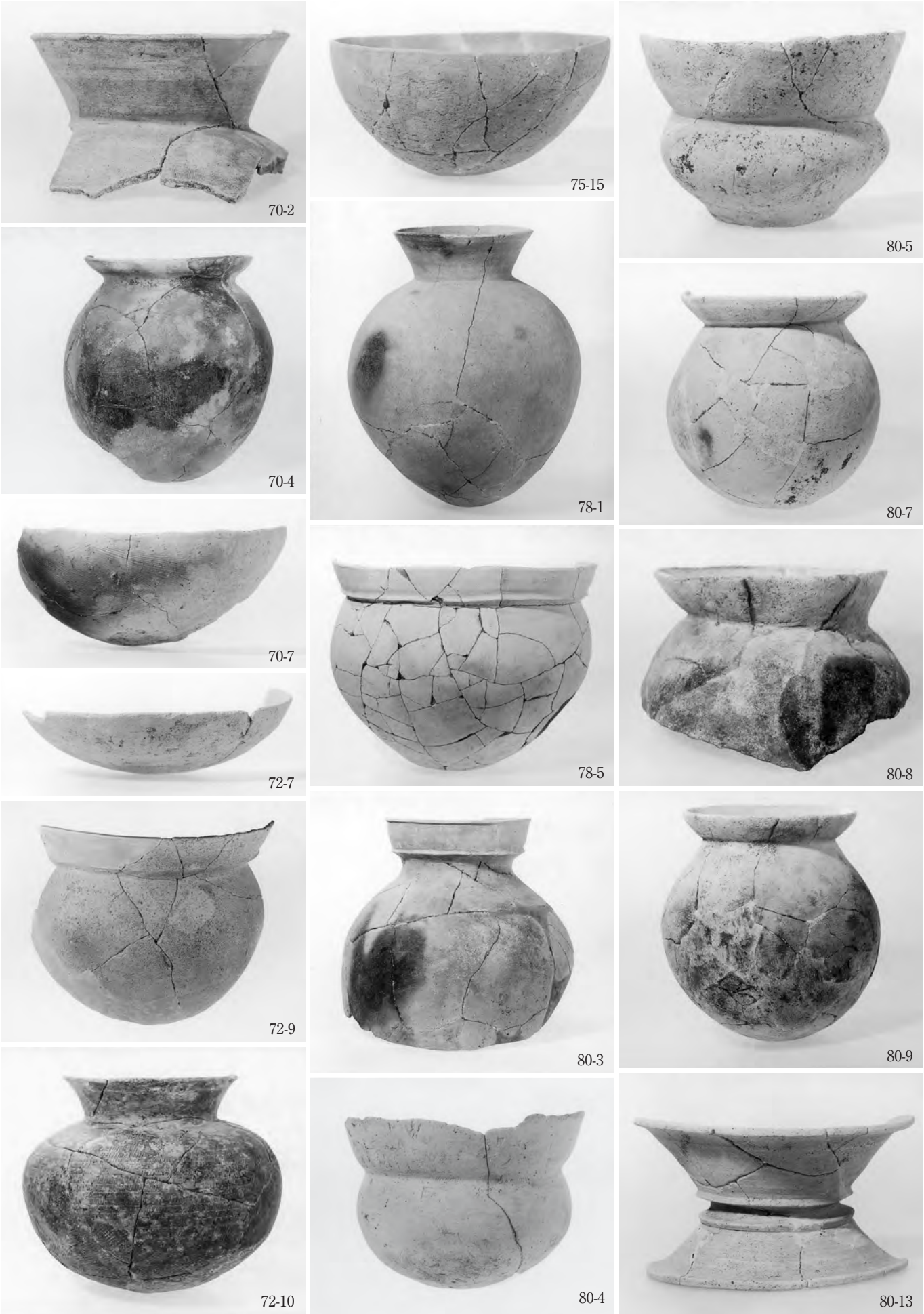
4号竖穴住居跡出土土器 2、5~8・11~13号竖穴住居跡出土土器



14~17・21・22・24号竖穴住居跡出土土器、27号竖穴住居跡出土土器 1



27号竖穴住居跡出土土器 2、28~30号竖穴住居跡出土土器



31~34号竖穴住居跡出土土器、35号竖穴住居跡出土土器 1



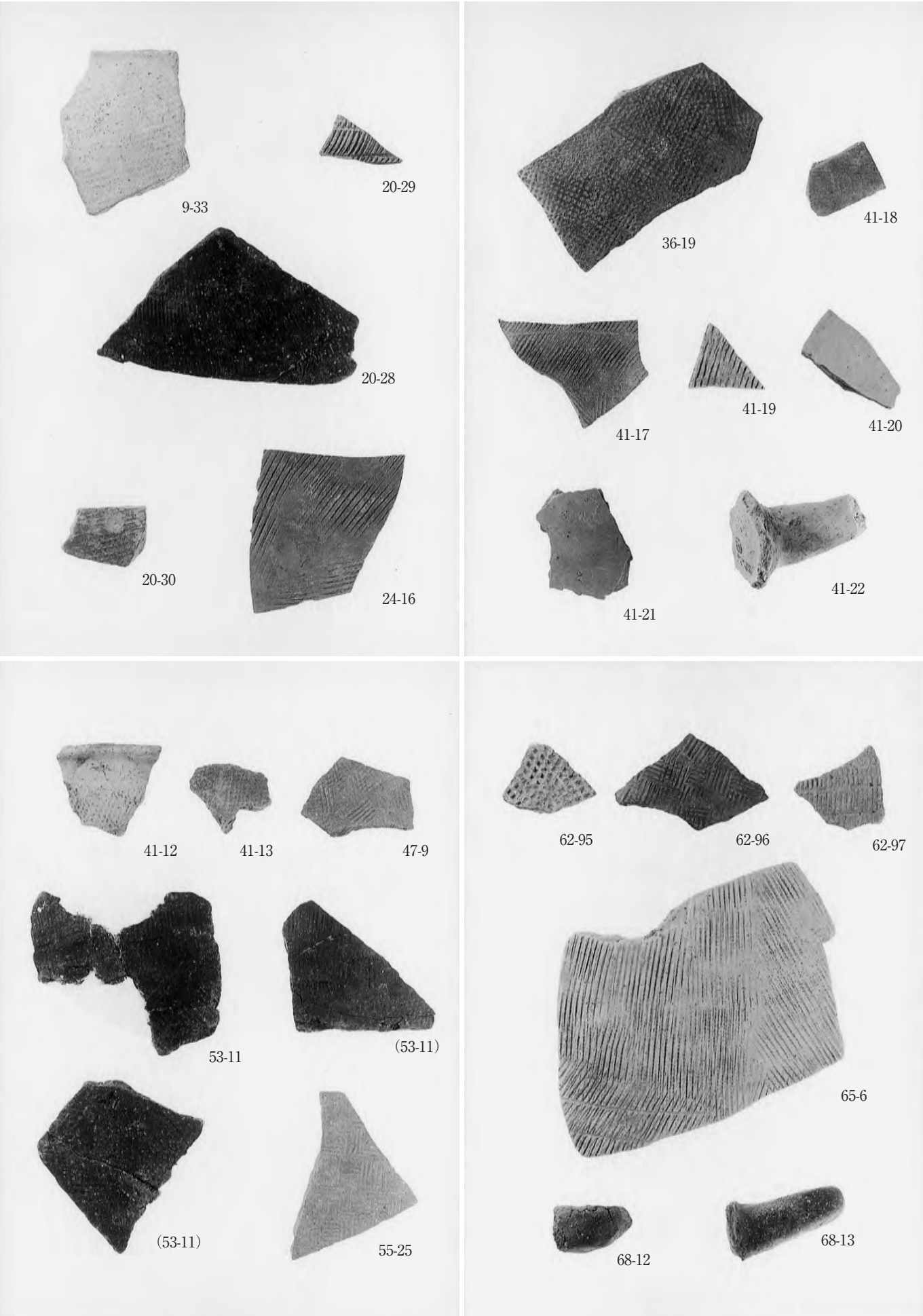
35号竖穴住居跡出土土器 2、39・41・42・44~46号竖穴住居跡出土土器、47号竖穴住居跡出土土器 1



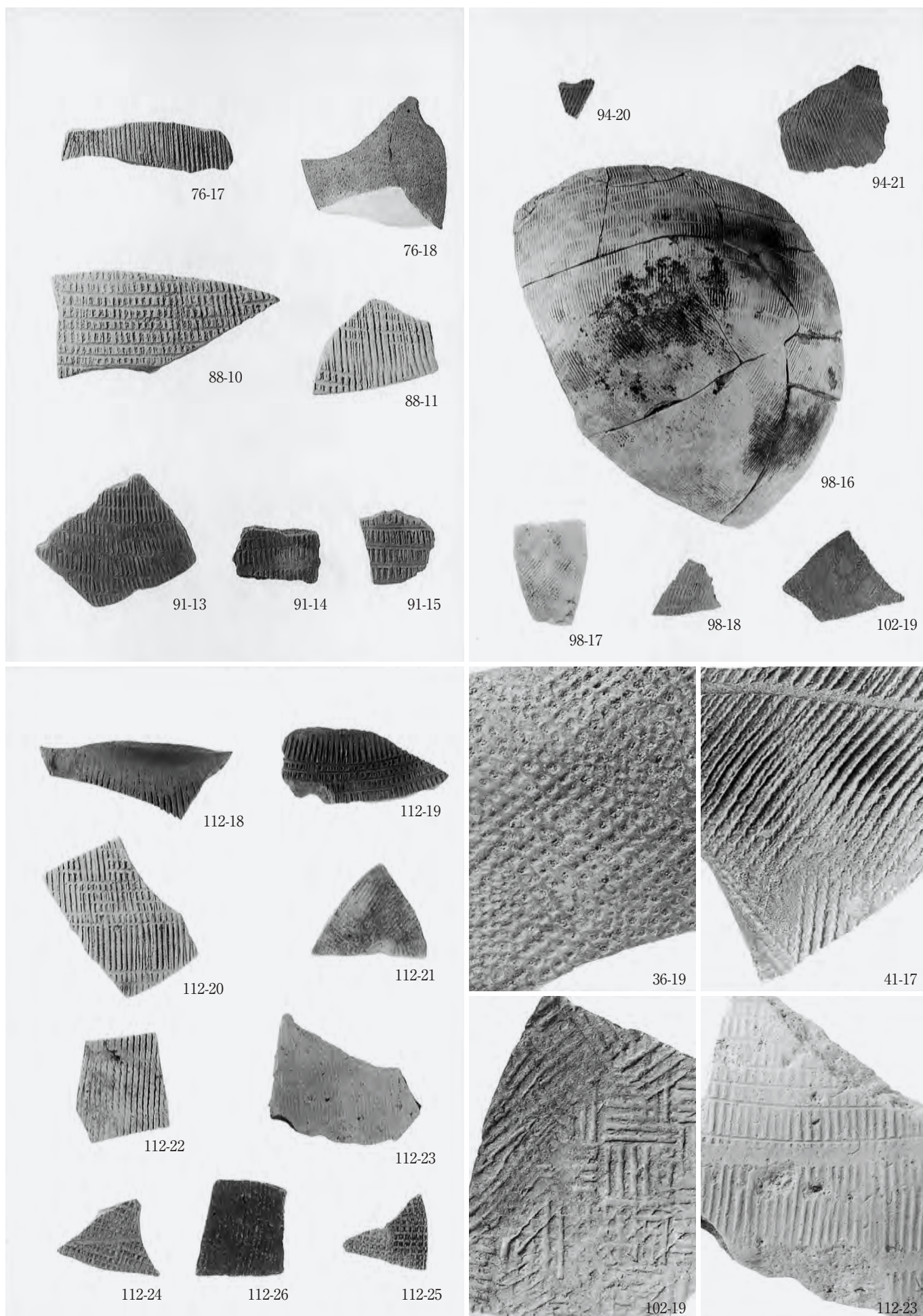
47号竖穴住居跡出土土器 2、53~56号土坑出土土器



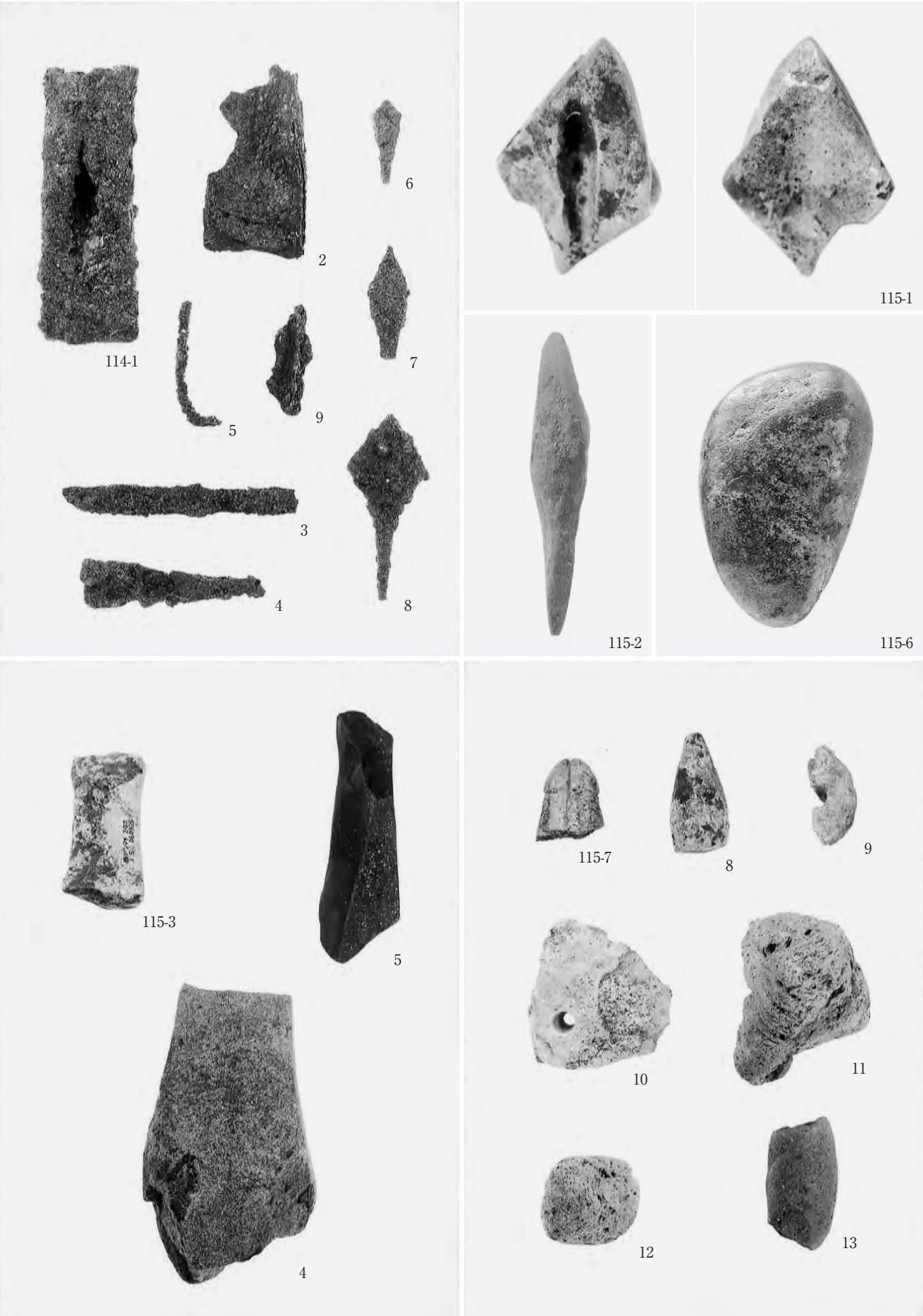
57・113号土坑出土土器、その他遺構・層位等出土土器



竖穴住居跡出土朝鮮半島系土器



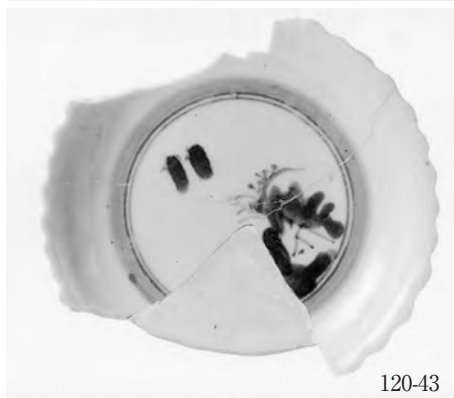
竪穴住居跡・その他の遺構出土朝鮮半島系土器



古墳時代の鉄器・石器・土製品



近世以降の土師器・陶器





近世以降の窯道具・青銅製品・土製品・瓦製品等

報告書抄録

ふりがな	にしじんまちいせき							
書名	西新町遺跡Ⅷ							
副書名	県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告書 7							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第218集							
編著者名	吉村靖徳 齋藤努							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園 7 番 7 号							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしじんまち い せき 西新町遺跡第20次	ふくおか し 福岡市 さ わ ら く に し じ ん 早良区西新 6-1-10	401307	20240	33° 34' 50"	130° 21' 30"	20060802 { 20061213	1,850	学 校 (県立修猷館 高等学校 改築)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
西新町遺跡第20次	集落跡	古墳時代 前期	竪穴住居跡45棟	土師器・鉄器・石器				
		近世	土坑	陶磁器・瓦・窯道具・土人形				
要約：早良平野北西部に位置する西新町遺跡は古砂丘上に集落・墓地が営まれている。集落域は東西800m、南北300mほどで、修猷館高校改築事業に伴う古墳時代の竪穴住居跡の総数は364棟を数える。今回の発掘調査では、45棟の古墳時代の竪穴式住居跡のうち、壁に沿って延びる煙道を持つタイプのカマドを含む最古期のカマド付設住居が20棟確認された。その他、韓半島系土器、畿内系・山陰系・東海系土器など、対外交流を物語る遺物が多数出土した。								

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年号 19	登録番号 10

西新町遺跡Ⅷ

福岡県文化財調査報告書 第218集

平成20年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 有限会社 北九州カーボン印刷

〒803-0835 北九州市小倉北区井堀3丁目6-9



付図1 西新町遺跡第20次調査遺構配置図（近世～現代）（1/200）



付図2 西新町遺跡第20次調査遺構配置図（古墳時代）（1/200）